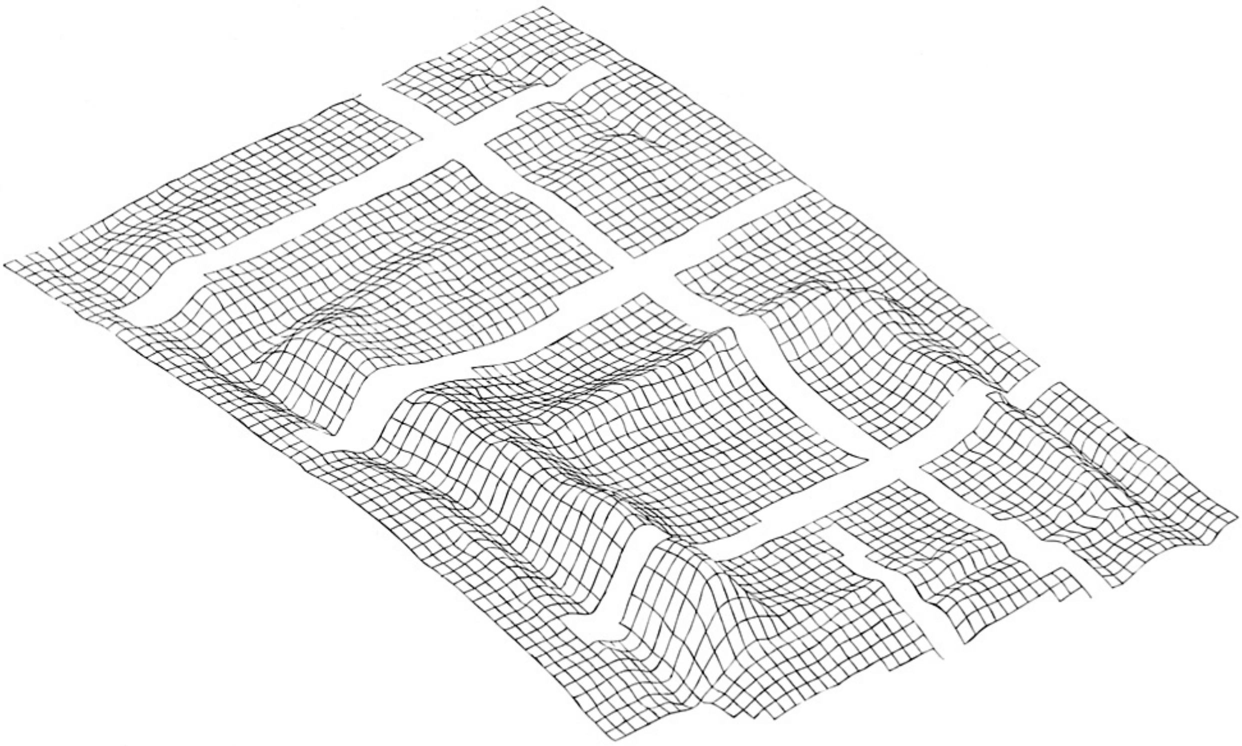
江南町埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

寺内遺跡範囲確認調査関連報告書



２００２

埼玉県大里郡江南町教育委員会

寺内遺跡第１次範囲確認調査区（1996年３月21日撮影）

寺内遺跡第２次範囲確認調査区（1997年３月12日撮影）

寺内遺跡第３次範囲確認調査区（1998年12月４日撮影）

天神遺跡第２次調査区（2000年５月10日撮影）

序

緑豊かな江南町は遺跡の町でもあります。北部の荒川に潤された肥沃な水田地帯、南部の赤松や雑木に覆われた緩やかな丘陵地帯は、古代の人々の目から見ても、居を構えるには最適の地と見えたに違いありません。

特に丘陵の南面の林は、冬の北風を吸収し、現在でも、桃源郷のような雑木林は所々に見られます。

そのような中で、江南町埋蔵文化財調査報告書は、沢山の方々のご協力をいただいて、第13集の発行に至りました。既刊の発掘調査報告書と同様、今後の遺跡調査研究に大きく寄与できるものと自負しております。

厳しい情勢の昨今、スタッフ、予算とも決して十分とはいえない中での作業でしたので、若干の歯がゆさを感じる方もあるかもしれませんが、教育委員会といたしましては可能な限りの努力を注ぎました。

ゴルフ場建設に伴って発掘された寺内廃寺跡は、当時の新聞紙上等を賑わせました。東西570m、南北200mと、古代地方寺院としては最大級のもので、出土した「花寺」と墨書された土器など、夢とロマンをかき立てられるであろう多くの遺跡が、関係者のご尽力により、今も保存されております。

この調査報告書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただいた関係各位、埼玉県教育局文化財保護課、ほかたくさんの方々に厚くお礼申し上げ、本書が遺跡研究、遺跡保護の郷土資料として広く活用されますことを願っております。

平成14年3月吉日

江南町教育委員会

教育長　岡　部　弘　行

例　　　言

1　本書は、平成７・８・９・11・12年度に実施した、埼玉県大里郡江南町大字板井地内に所在する、寺内遺跡・中島遺跡・天神遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、「町内遺跡発掘調査」事業として、平成７・８・９・12年度は、寺内古代寺院跡の範囲確認調査を目的として、平成11年度は、個人住宅建設に伴う記録保存を目的として行われたものである。

3　調査にかかる費用は、国（文化庁）・埼玉県・江南町の負担による。

4　発掘調査および整理作業の期間は次のとおりである。

発掘調査期間	寺内遺跡（第１次範囲確認調査）	平成８年２月６日から３月29日
	中島遺跡（第２次範囲確認調査）	平成９年２月３日から３月31日
	中島遺跡（第３次範囲確認調査）	平成10年11月２日から12月22日
	天神遺跡第２次調査	平成12年４月27日から５月10日
	寺内遺跡（第４次範囲確認調査）	平成13年２月13日から３月27日
整理期間	平成13年６月１日より平成14年３月20日	

5　本書の作成は、森田が編集を担当し、第Ⅳ章第２節を新井が、その他を森田が執筆した。

6　遺構・遺物の写真撮影は、森田が行った。

7　調査区の地形測量は、中央航業株式会社に委託した。

8　地下レーダー探査・火山灰の同定分析は、応用地質株式会社に委託した。

9　出土遺物・資料は、江南町教育委員会で保管している。

10　調査から報告書に至る過程で、以下の方々並びに各機関のご教示・ご協力を頂いた。厚くお礼申し上げます。

大谷則一　大脇　潔　須田　勉　高橋一夫　野中　仁　昼間孝志　柳田敏司

大里郡文化財担当者会　埼玉県教育局文化財保護課　埼玉県埋蔵文化財センター　応用地質株式会社

東京航業株式会社　中央航業株式会社

凡　　例

1．本書に記載した挿図の縮尺は、原則として以下の通りである。

・遺構　住居跡・竪穴状遺構1/60、土壙1/20、溝1/60、井戸1/20

・遺物　縄文土器1/3、石器1/3、須恵器・土師器1/3、板石塔婆1/4

上記以外のものについては、それぞれの挿図中に凡例を付した。

2．挿図の方位は、地図上の北を指す。

3．水糸レベルは、海抜高度（m）を示す。

4．土器断面の、スクリーントーンは胎土中への繊維混入を、黒塗りは須恵器を示す。

5．石器の実測図中において、▲は磨面の範囲を、△は敲打の範囲を示す。

6．土器の色調については、「土色計ＳＣＲ－１」で測定した、土壌マンセル値を併記している。

発掘調査・整理作業の組織

1．発掘調査の組織

・1996年度（寺内遺跡第１次範囲確認調査）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部　進

　　　　教育次長　橋本安行

　　　　主　　任　新井　端

　　　　主　　事　森田安彦

発掘調査担当者　新井　端　森田安彦

発掘調査参加者　新井キヨ　上杉和助　大島君江　大島よし　大塚宏子　梶　一夫　佐藤幸男
田中きの　寺山岩雄　寺山千代　橋本フデ子　樋村暁治　水野キヨ　矢島福太郎
山崎トヨ子　山田たつ

・1997年度（寺内遺跡第２次範囲確認調査）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部　進

　　　　教育次長　橋本安行

　　　　主　　任　森田安彦

　　　　主 事 補　吉田正人

発掘調査担当者　森田安彦

発掘調査参加者　新井キヨ　上杉和助　大島君江　大島よし　梶　一夫　白嶋　卓　田中きの
寺山岩雄　寺山千代　寺山正子　永井智教　樋村暁治　水野キヨ　桃薗正志
矢島福太郎　山崎トヨ子

・1998年度（寺内遺跡第３次範囲確認調査）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部　進

　　　　教育次長　安藤喬司

　　　　主　　任　森田安彦

　　　　主 事 補　吉田正人

発掘調査担当者　　森田安彦

発掘調査参加者　　上杉和助　大島君江　大島よし　大塚宏子　梶　一夫　田中きの　寺山岩雄

　　　　　　　　　寺山千代　寺山正子　永井智教　橋本仲子　水野キヨ　水野三平　水野ふじ

・2000年度（天神遺跡第２次調査）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部　進

　　　　教育次長　安藤喬司

　　　　主　　任　森田安彦

発掘調査担当者　　森田安彦

発掘調査参加者　　大塚宏子　岡田クニ　岡田担定　梶　一夫　田中きの

・2000年度（第４次寺内遺跡範囲確認調査）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部弘行

　　　　教育次長　安藤喬司

　　　　主　　任　森田安彦

発掘調査担当者　　森田安彦

発掘調査参加者　　上杉和助　大塚宏子　杉田君香　田中きの　田中節子　桃薗正志　山田健介

２．報告書刊行事業の組織（2001年度）

主体者　江南町

事務局　教 育 長　岡部弘行

　　　　教育次長　大久保光司

　　　　主　　任　森田安彦

整理作業担当者　　森田安彦

整理作業参加者　　小沢三春　志村モト子　永井智教　福島和子　桃薗正志

目　　次

○巻頭写真　○序文　○例言　○凡例　○目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過と方法

第１節　発掘調査の経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の地理的環境 …… 6
第２節　周辺の歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　寺内遺跡第１次範囲確認調査
(1)　遺跡概観 …… 18
(2)　遺構とその出土遺物 …… 21
(3)　包含層出土遺物 …… 26
第２節　中島遺跡（寺内遺跡第２次範囲確認調査）
(1)　遺跡概観 …… 32
(2)　遺構とその出土遺物 …… 35
(3)　包含層出土遺物 …… 40
第３節　中島遺跡（寺内遺跡第３次範囲確認調査）
(1)　遺跡概観 …… 41
(2)　遺構とその出土遺物 …… 41
(3)　包含層出土遺物 …… 61
第４節　天神遺跡第２次調査
(1)　遺跡概観 …… 65
(2)　遺構とその出土遺物 …… 65
第５節　寺内遺跡第４次範囲確認調査
(1)　調査地区概観 …… 74
(2)　遺構 …… 76

第Ⅳ章　後論

第１節　寺内古代寺院跡の範囲について …… 81
第２節　武蔵寺内廃寺の空間構成について …… 87

第Ⅴ章　付編

第１節　寺内遺跡大溝・地下レーダー探査 …… 96
第２節　寺内遺跡検出火山灰分析 …… 125

○引用・参考文献　○写真図版　○報告書抄録

図版・表・写真図版目次

［図　版］

第１図　遺跡の範囲と発掘調査区 ……………………4
第２図　埼玉県の地形 …………………………………6
第３図　江南町の地形 …………………………………7
第４図　周辺の遺跡と地形 ……………………………9
第５図　旧石器・縄文時代の遺跡 ……………………15
第６図　弥生・古墳時代の遺跡 ………………………15
第７図　奈良・平安時代の遺跡 ………………………16
第８図　中・近世の遺跡 ………………………………16
第９図　寺内遺跡の範囲と発掘調査区 ………………18
第10図　寺内遺跡第１次範囲確認調査第１・２調査区全体図 ………………………………………19
第11図　第１～３号溝平・断面図 ……………………21
第12図　第１・２号溝セクション図 …………………22
第13図　第１・２号ピット平・断面図 ………………24
第14図　第２調査区溝平・断面図 ……………………25
第15図　第３調査区平・断面図 ………………………27
第16図　第３調査区包含層出土遺物（１） ……29
第17図　第３調査区包含層出土遺物（２） ……30
第18図　第３調査区包含層出土遺物（３） ……31
第19図　中島遺跡の範囲と調査区位置図 ………32
第20図　寺内遺跡第２次範囲確認調査全体図 …33
第21図　第１～５号溝平・断面図 ……………………37
第22図　第６号溝平・断面図 …………………………39
第23図　出土遺物 ………………………………………40
第24図　第１号住居跡 …………………………………42
第25図　寺内遺跡第３次範囲確認調査全体図 …43
第26図　第２号住居跡 …………………………………45
第27図　第３号住居跡 …………………………………46
第28図　第４号住居跡 …………………………………47
第29図　第１．２号竪穴状遺構平・断面図 ………48
第30図　第４トレンチ北側土塁平・断面図 ……49
第31図　第６トレンチ北側土塁平・断面図 ……50
第32図　第７トレンチ北側土塁平・断面図 ……51
第33図　第４トレンチ南側土塁平・断面図 ……52
第34図　第７トレンチ平・断面図 ……………………53
第35図　第５トレンチ土塁平・断面図 ……………54
第36図　板石塔婆 ………………………………………55
第37図　第５トレンチ土塁平・断面図 ……………56
第38図　第８トレンチ土塁平・断面図 ……………57
第39図　第１号溝平断面図 ……………………………59
第40図　第２・３トレンチ平・断面図 ……………60
第41図　第１号井戸平・断面図 ………………………61
第42図　包含層出土遺物（１） …………………………62
第43図　包含層出土遺物（２） …………………………63
第44図　包含層出土遺物（３） …………………………64
第45図　天神遺跡の範囲と調査区の位置 ………66
第46図　天神遺跡第２次調査区全体図 ……………67
第47図　第１号住居跡平・断面図 ……………………69
第48図　第１号住居跡遺物分布図 ……………………70
第49図　第１号住居跡カマド平・断面図 …………71
第50図　第１号住居跡出土遺物 ………………………71
第51図　第１号溝・第１号土壙平・断面図 ……72
第52図　寺内遺跡第４次範囲確認調査トレンチ配置図 …………………………………………75
第53図　第１号溝平・断面図 …………………………76
第54図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第１トレンチ全体図 ………………………………………77
第55図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第２・３トレンチ全体図 …………………………………77
第56図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第４トレンチ全体図 ………………………………………79
第57図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第５トレンチ全体図 ………………………………………79
第58図　寺内遺跡関連発掘調査位置図 ……………82
第59図　明治期の地形図（迅速図） …………………87
第60図　寺内廃寺周辺の地形 …………………………89
第61図　武蔵国分寺の地割 ……………………………90
第62図　寺内廃寺の地割 ………………………………90
第63図　武蔵国分寺参道口遺構 ………………………91

第64図　額田寺伽藍並条里図より「冠木門」……92
第65図　地下レーダー測定方法　……………………96
第66図　調査地案内図　……………………………97
第67図　調査範囲一覧　……………………………98
第68図　地下レーダーシステム　…………………99
第69図　サーマルプリンタによる記録方式　……99
第70図　プロファイル測定 ………………………100
第71図　ワイドアングル測定 ……………………101
第72図　測線配置および遺構推定図（Ａ地区）…105
第73図　測線配置および遺構推定図（Ｂ地区）…106
第74図　測線配置および遺構推定図（Ｃ地区）…107
第75図　測線配置および遺構推定図（Ｄ地区）…108
第76図　測線配置および遺構推定図（Ｅ地区）…109
第77図　測線配置および遺構推定図（Ｆ地区）…110
第78図　代表的な地下レーダー記録（Ａ地区）…113
第79図　代表的な地下レーダー記録（Ｂ地区）…113
第80図　代表的な地下レーダー記録（Ｃ地区）…115
第81図　代表的な地下レーダー記録（Ｃ地区）…115
第82図　代表的な地下レーダー記録（Ｄ地区）…117
第83図　代表的な地下レーダー記録（Ｅ地区）…117
第84図　キャパシタ電極の原理 …………………119
第85図　相向型電極配置の模式図 ………………120
第86図　システムの概略図 ………………………121
第87図　解析のフローチャート …………………123
第88図　電気探査（比抵抗映像法）結果―比抵抗分布図― ………………………………………124
第89図　試料採取地点位置図（１） ……………126
第90図　試料採取地点位置図（２） ……………126
第91図　火山ガラスの形態分類 …………………127
第92図　寺内遺跡における堆積物中の鉱物組成 …130
第93図　火山ガラスの屈折率とそのタイプ ……133
第94図　堆積物中の鉱物類 ………………………135

［表］

第１表　遺跡地名表 ………………………………17
第２表　地下レーダー探査装置仕様 ……………100
第３表　測線一覧表 ………………………………102
第４表　使用機器の一覧表 ………………………122
第５表　重鉱物と軽鉱物の分類 …………………127
第６表　RIMS86のシステム構成 …………………128
第７表　堆積物の鉱物分析結果一覧 ……………131
第８表　火山ガラスの屈折率測定 ………………132

［写真図版］

巻頭カラー１：寺内遺跡第１・２次範囲確認調査航空写真
巻頭カラー２：寺内遺跡第３次・天神遺跡第２次調査航空写真

図版１　航空写真（寺内遺跡第１・２次範囲確認調査）
図版２　作業風景（寺内遺跡・中島遺跡）
寺内遺跡第１次範囲確認調査
図版３　第１・２調査区（第１号溝・第２号ピット・作業風景）
図版４　第１号溝（完掘状況・木杭）
図版５　第１号溝土層堆積状況
図版６　第３調査区（航空写真・完掘状況）
寺内遺跡第２次範囲確認調査（中島遺跡第１次調査）
図版７　調査区完掘状況
図版８　第１～５号溝・作業風景
図版９　溝跡（第１・２・６号溝）
寺内遺跡第３次範囲確認調査（中島遺跡第２次調査）

図版10　作業風景・土塁確認状況
図版11　第１・２号住居跡
図版12　土塁・堀跡
図版13　竪穴状遺構・井戸・遺物出土状況
天神遺跡第２次調査
図版14　航空写真（調査区・第１号住居跡）
図版15　第１号住居跡（完掘状況・遺物出土状況）
図版16　第１号溝・作業風景
図版17　地下レーダー探査作業状況
出土遺物
図版18　寺内遺跡第１次範囲確認調査出土遺物
図版19　寺内遺跡第１・２・３次範囲確認調査出土遺物
図版20　寺内遺跡第３次範囲確認調査出土遺物
図版21　寺内遺跡第３次範囲確認調査・天神遺跡第２次調査出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過と方法

第1節　発掘調査の経緯

寺内古代寺院跡

　1991年から1992年にかけて、ゴルフ場の開発にともない、江南町大字板井・柴地区にかけて所在する、古代寺院跡「寺内古代寺院跡」の調査が、江南町教育委員会および江南町遺跡調査会によっておこなわれた。

　調査の結果、この寺院跡は、東辺約170m、西辺約200m、北辺約570mの溝（上面幅6m、深さ1.2m）に区画された、国分寺に匹敵する非常に大規模な寺院跡であることが確認された。この区画された区域の中には、基壇を持つ建物跡が４箇所、その東側に「東院」の墨書土器が出土した集落跡（住居跡約50軒）、幅10mほどで両側に各１mほどの側溝をもつ道路跡などが確認され、寺院の存続年代は、出土した遺物から、８世紀半ばから10世紀の半ばまでのおよそ200年間と推定された。

　調査終了後、この遺跡の重要性に理解が得られ、基壇建物を中心とするほとんどの部分は、ゴルフ場の残存緑地として、現状保存することができた。

　また、1998年２月には、土地所有者の同意を得て、とりあえず、寺院の中心基壇建物跡部分の約１万㎡を、町の史跡として指定するに至っている。

寺内廃寺調査指導委員会

　このような経緯の中、1994年２月に郷土の貴重な文化遺産である「寺内古代寺院跡」の調査・保存および活用を図るため、遺跡の構造・規模・保存状況等を正確に把握し、また遺跡の適切な保存活用方法を検討するため、「寺内廃寺調査指導委員会」が設置された。

組　織（1994年２月時点）

委員長	柳田敏司	埼玉県県民部県史編さん室
委　員	大脇　潔	奈良国立文化財研究所
	須田　勉	国士舘大学　文学部考古学研究室
	高橋一夫	（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
事務局	江南町教育委員会	

第１回会議

　1994年２月17日江南町勤労センター会議室で、第１回の寺内廃寺調査指導委員会会議開催。委員に委嘱状を交付し、次の基本方針を決定。

1. 寺院の南側の区画の有無を確認し、寺院の広がりを確定する。
2. 寺院内の建物の種類・構造・時期変遷を把握する。
3. 寺院の内部構造の把握をおこなう。
4. 周辺地の関係施設の確認をおこなう。

　とりあえず、来年度より、予算がついた時点で、１の寺院の南側の区画の有無を確認する調査にかかることで合意。

第２回会議　1995年12月15日第２回寺内廃寺調査指導委員会会議開催。次の事項を決定。

１．開発等周辺環境の変化に対応するため、早急に遺跡範囲を確定する。

２．寺院跡の南地区の範囲を確定するための調査を、南辺西側・参道部分・東側で実施する。

３．今年度は、参道推定ライン上の現状水田部分を調査区とし、参道の方位と寺院跡伽藍主軸との差を確認する。

４．調査は、１月から３月頃にかけて行い、調査中に委員の視察を行う。

現地周辺を踏査し、今までの出土遺物を検討する。

第２節　発掘調査の経過

第１次範囲確認調査　第２回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、1996年２月６日から３月29日にかけて、第１次の範囲確認調査を実施（第１図）。３調査地点、調査面積約600㎡。

第1．２調査地点で､参道の側溝と推定される溝跡を確認。第１調査地点の参道推定上でピット確認。第３調査地点で、不明瞭ながら、土手状の参道部と推定される高まりを確認。第１調査地点の溝跡覆土中および第３調査地点地表下60㎝で火山灰を検出。

第３～５回会議　1996年２月20日、３月19日、３月26日第３～５回寺内廃寺調査指導委員会会議開催。現地調査を視察し、次の事項を確認。

１．第１．２調地点の溝は、参道の側溝と認識できる。
２．溝の時期決定に火山灰の分析をする必要があるので、サンプリングすること。
３．第１調査地点参道上のピットは門跡の可能性が高いが、確認するには、東側の調査が必要である。
４．第３調査地点の土手状の高まりは不明瞭であるが、参道として、谷地形部を埋める地業として認められる可能性が高い。
５．今後も、寺地の範囲を確定する方向で調査が必要であり、第１調査地点で確認されたピットを門跡とし、これに取り付く東西溝を南限として確定するには、東南区・西南区の調査を行う必要がある。

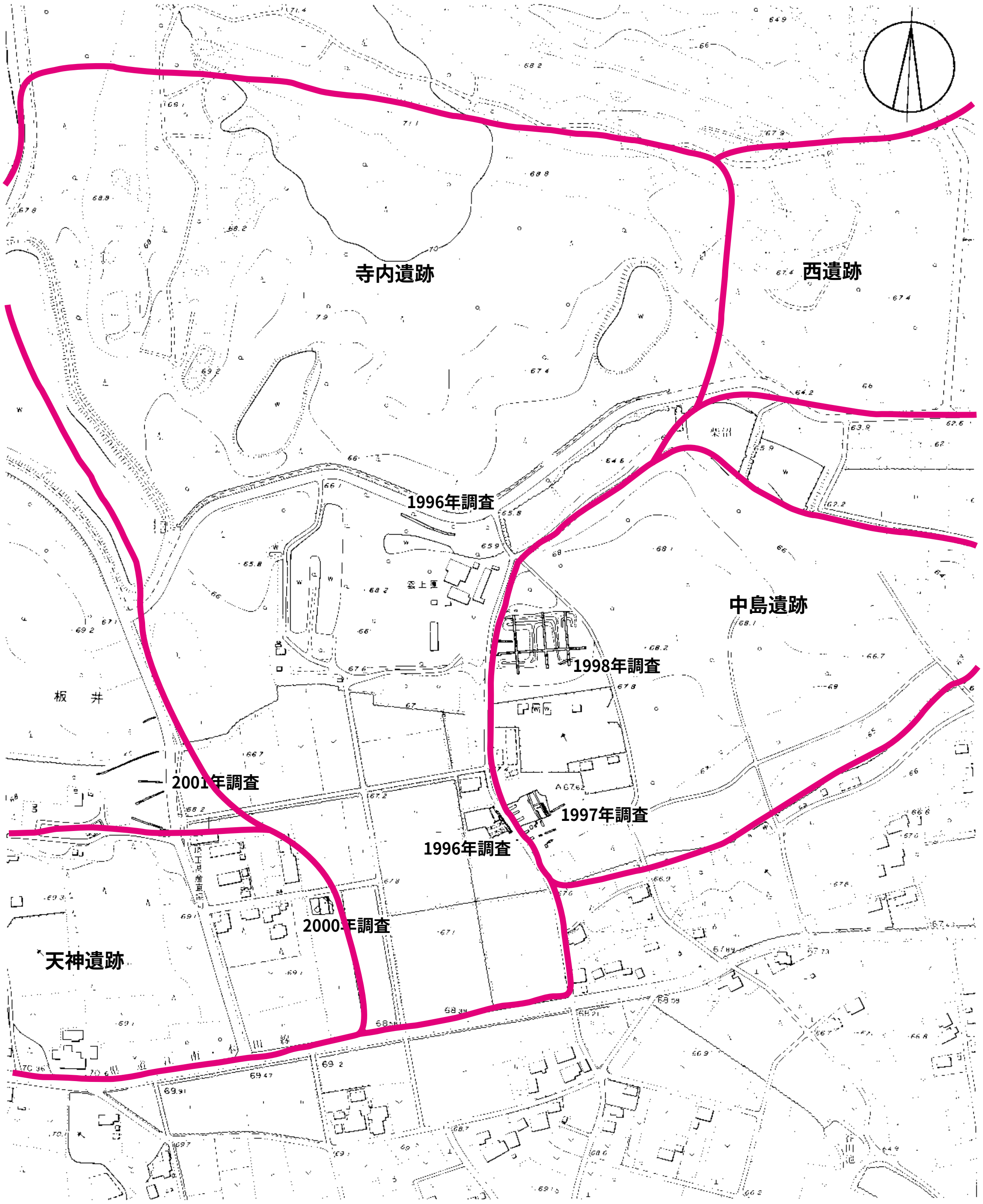
遺跡の範囲変更　第１次範囲確認調査の結果、遺構が確認されたため、1996年５月７日、寺内遺跡の範囲の変更増補を行う。

第２次範囲確認調査　第５回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、1997年２月３日から３月31日にかけて、第２次範囲確認調査を中島遺跡内で実施（第１図）。調査に至る事務は、1997年３月27日付江教704号で、埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。調査面積約1000㎡。

昨年の、第１次調査で確認した参道側溝の東側部分を確認。さらに、約20mほど東の地点でこの溝に並行する溝２条を確認。寺院地の南限を示すと推定される東西方向の溝は確認されず。また、門跡と推定された参道上の東側のピットは、現道下にあたり、確認できず。

第６回会議　1997年３月13日第６回寺内廃寺調査指導委員会開催。現地調査を視察。

１．今回確認された溝は、昨年度確認された道路面と側溝と平行し、形態からも一連の遺構と判断される。
２．昨年度確認された門跡の可能性が想定されたピットは、今回現道下にあたり確認することができなかったが、推定地付近で道路幅の減少が西側同様に認められたことから、その可能性は残るものと考えられる。
３．今回確認された溝２条は、方向、形態より判断して、参道と側溝の可能性もある。時期を違えて参道が付けかえられた可能性もある。
４．昨年度確認された寺院地の南限を示す可能性のある東西溝は確認されなかった。寺院地を区画する溝は、寺跡前面の湿地帯を越えている可能性は低いのではないか。
５．今回確認された２組の溝が、はたしてほんとうに参道であるのかさらに確認する必



第１図　遺跡の範囲と発掘調査区（1/5,000）

要がある。

6．今回新たに確認された溝の延長部分を確認する必要がある。また、この溝の北側延長付近に残る土塁について、溝との関係および構築時期について調査する必要がある。

7．寺院地を画する溝が、寺跡の前面の湿地帯を越えて存在するのかを確認する必要がある。地下レーダー探査等を行い、溝が確認された地点でトレンチを設定して確認する方法も有効である。

地下レーダー探査　1997年６月、第６回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、寺院地を区画する溝の推定地（東・西・南側）の地下レーダー探査を応用地質株式会社に委託して行う。６調査地区。探査測線延長1,492m。

第３次範囲確認調査　第６回寺内廃寺調査指導委員会の指摘をうけて、1998年11月２日から12月22日にかけて、第３次範囲確認調査を中島遺跡内で実施（第１図）。調査に至る事務は、1998年10月26日付江教第1,230号で埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。調査面積約600m。

土塁とその外側の堀跡を中心にトレンチ調査を実施。土塁と堀は中世のものと判明。西側の堀に切られて、第２次範囲確認調査で確認された側溝の延長と推定される溝跡を確認。また、平安時代の住居跡３軒を確認。寺跡の前面にも同時期の集落がひろがっていることを確認。

第７回会議　1998年12月16日第7回寺内廃寺調査指導委員会開催。現地調査を視察。

1. 土塁と堀は中世の館跡に属するもので、寺跡との直接的な関係は無い。
2. 調査区の西端で確認された溝跡は、第２次調査で確認した溝の延長と推定される。
3. 今後は、西側の寺院地区画溝が、どこまで延びているのか確認する必要がある。

現地視察後、寺内廃寺跡の西隣りで調査が行われている、川本町の百済木遺跡（8世紀初頭の柵列で囲まれた豪族居館跡）の発掘現場を視察。

天神遺跡第２次調査　寺内廃寺跡の前面の田で、個人住宅新築が計画され、教育委員会に埋蔵文化財の照会がある。試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、2000年４月27日から５月10日にかけて、天神遺跡第２次発掘調査を実施（第１図）。調査に至る事務は、2000年４月17日付江教第894号で埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、文化庁からの指示は、2000年４月27日付教文第３－69号で通知があった。調査面積約200㎡。古墳時代鬼高期の住居跡１軒、平安時代の溝跡１条を確認。

第４次範囲確認調査　第７回寺内遺跡調査指導委員会の指摘を受けて、2001年２月13日から３月27日にかけて、第４次範囲確認調査を寺内遺跡内で実施（第１図）。調査に至る事務は、2001年１月17日付江教第101号で埋蔵文化財発掘調査通知を提出。調査面積約500㎡。調査の結果、寺院地を画する西側の溝は確認されず、西側の区画溝は寺内廃寺前面の湿地帯を越えては延びていない可能性が高いことを確認。

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の地理的環境

江南町の地形　江南町は、埼玉県北西部の荒川中流域右岸に位置している（第２図）。江南町の地形は、南側を東流する和田川以南の丘陵部（比企丘陵）、中央部を荒川右岸の中位段丘である江南台地、北部を部分的に下位段丘の残る荒川の沖積地の３つの地形に区分することができる（第３図）。

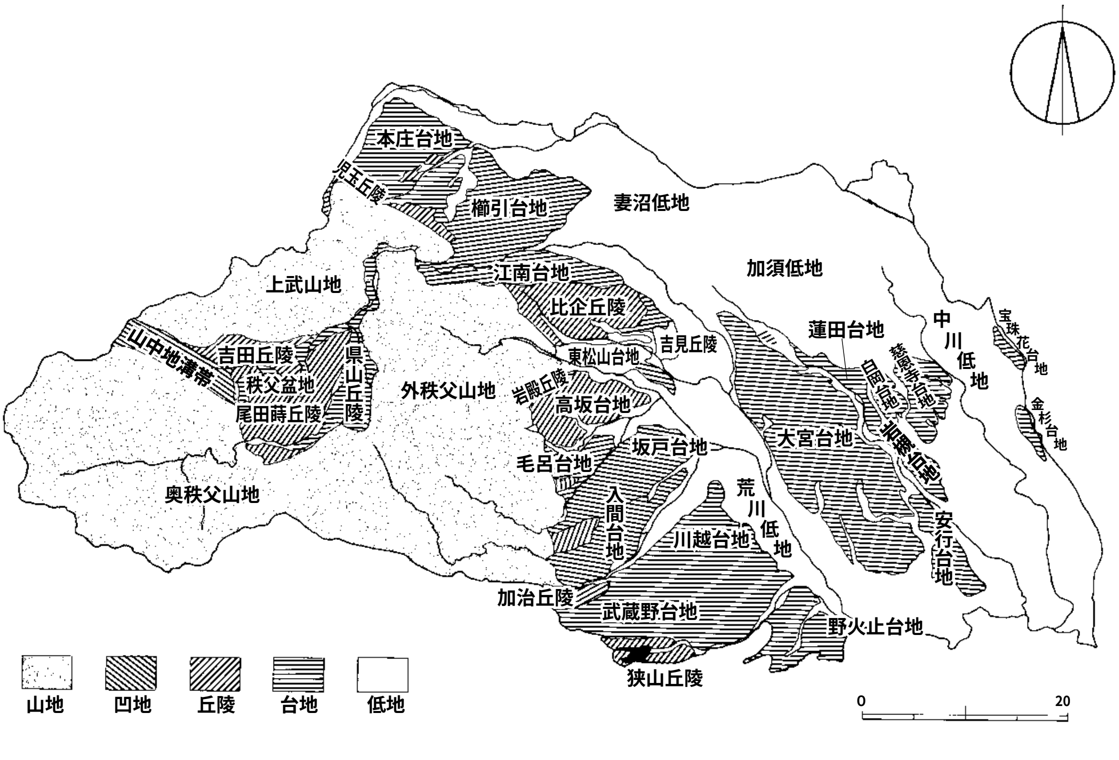
比企丘陵　比企丘陵は、外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。丘陵内では、高根山（標高105m）、二宮山（標高132m）、大立山（標高113m）など標高100m前後の山が、丘陵の西半分の地域に散在して突出した地形をつくるが、全体的には100m以下の丘陵地形をつくっている。

丘陵内部には、市野川・滑川およびその支流による開析が進み、広い谷底と小谷が発達している。この開析谷は、北西～南東あるいは南北の方向性をもつものが多く、これらの谷頭は丘陵の北側に極端に片寄り、分水嶺は丘陵の北縁近くに偏在している。

このため、丘陵北縁を東流する和田川の支谷は、未発達となっている。

江南町域においては、高根山から派生する丘陵と、滑川町和泉地区から派生する二つの尾根筋があり、嵐山町とは西側の谷を流れる滑川で区分されている。

本丘陵は、地質的には新生代第３紀層に相当し、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩等の互層



第２図　埼玉県の地形

で構成されている。層序は、下位より、前期中新世に属する七郷層(凝灰岩質で緑色変質が特徴。層厚830m以上)、中期中新世に属する小園層（粗粒砂岩を主体とし、礫岩・泥岩・凝灰岩を伴う。層厚300m。)、荒川層（砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚350m)、土塩層（砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚350m)、後期中新世に属する楊井層（礫岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m）となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している（比企団体研究グループ：1991)。

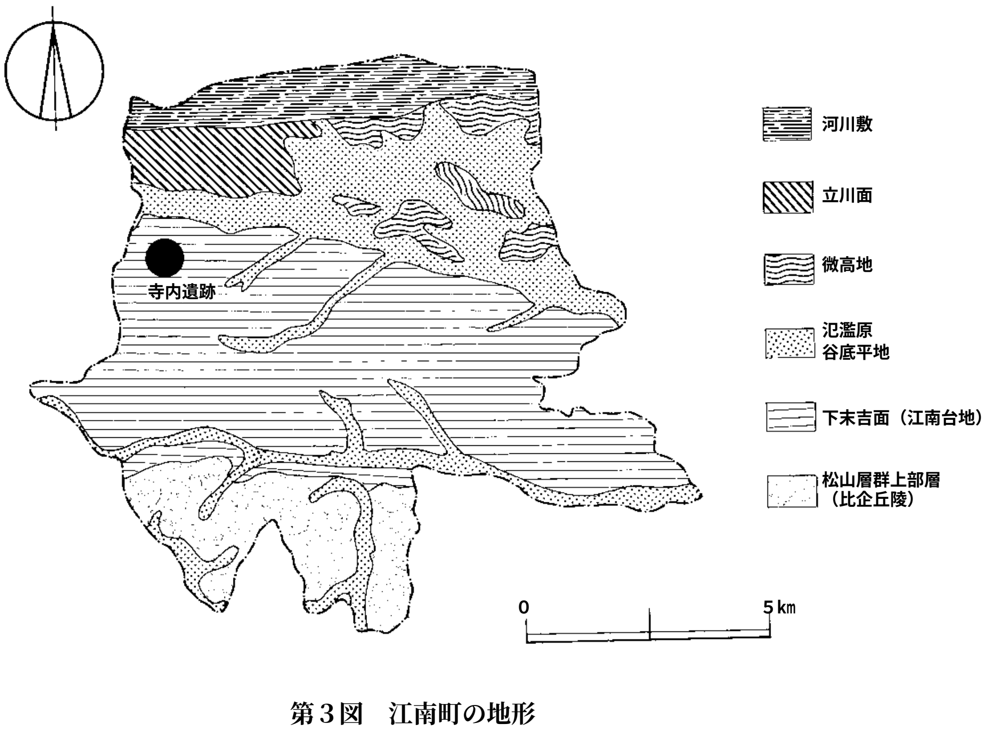
なお、滑川町福田周辺から産出される「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、江南町小江川周辺から産出される「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺地に分布する多くの古墳の石室構築材として利用されている。

江南台地

江南台地は、寄居町金尾付近より江南町を経て、大里村に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は台地の基盤となる荒川中位段丘の発達した第三紀層上に秩父古生層を起源とする砂礫層（８～20m）の上に、川本粘土層とされる灰白色の粘土層（２～５m)、下部を新期ローム層に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比される大里ローム層と称されているローム層（1～２m）が堆積し、表層に腐植土がのっている。

台地の海抜高度は、上流の寄居町木持付近で140m、川本町上本田付近で80m、台地末端にあたる熊谷市原新田付近で45mとなり、下流方向にしだいに低くなっている。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10～15m程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。

台地上には平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部お



第３図　江南町の地形

よび開口部には溜池が築かれている。

荒川沖積地

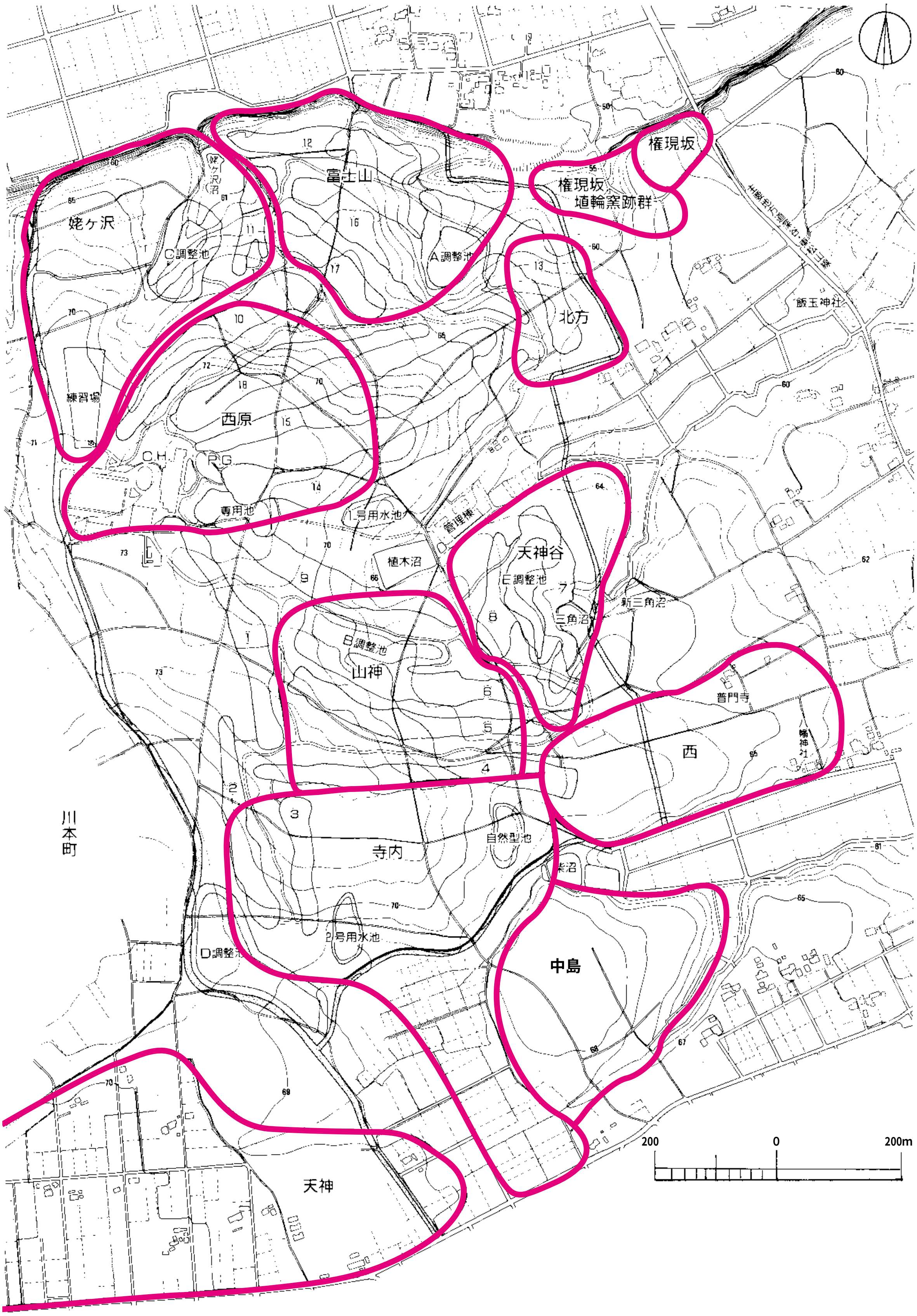
沖積地は荒川の氾濫原で、台地下部を東流する和田吉野川以北に広がり、部分的に下位段丘は、川本町畠山から江南町三本付近まで見られ、これより下流では沖積地へ埋没していると考えられている。

沖積地との比高差は１m前後で、段丘礫層で構成されており、ローム層に被覆されていない。沖積地は、現在土地改良が行われ、穀倉地帯となっており、その中に自然堤防状の微高地が点在し、集落が存在している。標高46m〜34m、荒川との比高差９〜12mを測る（第３図)。

遺跡の立地

今回の調査対象地となった寺内遺跡・中島遺跡・天神遺跡は、江南台地の北縁から1.8km程内部に入り込んだ地点で、南側に緩やかに傾斜する地点に立地している。

寺内遺跡の南側には東西方向に埋没谷が入り込み、中島遺跡・天神遺跡と地形的に分離される。中島遺跡の南西から西側および北側にはこの埋没谷が周りこんでおり、遺跡名（小字名）のとおり、周囲からは島状に残された地形となっている（第４図)。



第４図　周辺の遺跡と地形

第２節　周辺の歴史的環境

和田吉野川流域

寺内遺跡を中心とする今回の調査地点は、江南台地の南縁を平行して東流する和田吉野川右岸に属していることから、本流域を中心として周辺の歴史的環境を時代別に概観することとする。

本流域右岸は、荒川の沖積地に臨む江南台地の北縁や、台地の奥深くまでいく筋も入り込んでいる浅い開析谷や、これから枝分かれした谷に沿って、旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。

一方、本流域左岸は、江南町の全面積の５分の２を占める広い地域であるが、荒川の氾濫原が中心のため、遺跡は自然堤防上の微高地に僅かに確認されている。旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡は現在のところほとんど確認されていない。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、江南台地がローム層の堆積状況が武蔵野台地などに比べると非常に薄く、石器群の変遷や層序との関係が未だ不明な点が多いのが現状である。

現時点で本流域に最初に人の足跡が確認される事例は、立正大学構内に位置する鹿嶋遺跡（立正大学：1995）で、ナイフ形石器３点をはじめとする22点の石器が出土している。年代的には２万２千年以前にまで遡る可能性が考えられている。

開析谷最奥部に位置する千代遺跡群（千代遺跡群発掘調査会:1996）の発掘調査では、寺内遺跡で黒曜石製の尖頭器、山神遺跡では黒曜石製の尖頭器、西原遺跡で、尖頭器・石錐・彫刻刀形石器が出土している。このほか、萩山遺跡・上前原遺跡・向原遺跡・天神遺跡で、尖頭器･ナイフ形石器などが採取されている。このうち、萩山遺跡で細石刃、向原遺跡で細石刃石核や細石刃が採取されている。

また、隣の川本町では、北方系細石刃を出土した白草遺跡（川口：1993）がある（第５図）。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、江南台地の特徴として、早期前半と中期後半に遺跡数の増加が認められる。

草創期　萩山遺跡では、縄文時代草創期の有舌尖頭器が採取されており、瓜形文土器の出土が確認されている。

また、川本町では、四反歩遺跡（金子：1993）で槍先形尖頭器が、上本田遺跡の西側では有舌尖頭器が採取されている。

早　期　早期前半では、萩山遺跡で撚糸文期の住居跡が20軒ほど発掘調査されており県内でも最大規模の該期の集落跡となっている。また、鹿嶋遺跡（野村：1990）・南方遺跡でも住居跡が調査されており、原谷遺跡では撚糸文土器・押形文土器とともに、逆三角形を呈した土製品が発見されている（江南町：1995）。

川本町では、四反歩遺跡で早期前半の住居跡７軒が調査されていいる。姥ヶ沢遺跡・寺内遺跡・上前原遺跡でも、撚糸文土器が出土しており、江南台地が早期前半の集落の立地に適していたことがうかがえる。

この他、貝殻沈線文系土器群が、姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡・北方遺跡・寺内遺跡などで僅かに確認されている。

早期後半では、北方遺跡で、野島式を中心とした竪穴状遺構や炉穴が確認されており、姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡・権現坂遺跡・寺内遺跡・山神遺跡・西原遺跡で僅かながら条痕文系土器群が確認されている（千代遺跡群発掘調査会：1996）。

前　期　前期の遺跡は少なく、遺構は富士山遺跡で諸磯式期の住居跡３軒が、川本町の竹ノ花遺跡（利根川：1991）、円阿弥遺跡（利根川：1991）、権現堂遺跡（村松：1991）では、諸磯ａ式期の小規模集落が確認されている。

姥ヶ沢遺跡・権現坂遺跡では、花積下層式土器・関山式土器が少量ながら確認されており、十三菩提式土器が僅かに西原遺跡で確認されている。

本流域左岸においては、唯一、微高地上に位置する川本町山ノ腰遺跡（村松：1991）で黒浜式から諸磯Ｃ式土器の包含層が確認されている。

中　期　中期前半は、遺構の確認された遺跡は少なく、富士山遺跡・南方遺跡で、勝坂式期の住居跡が確認されている。上前原遺跡（新井：1988）では、五領ヶ台式土器が僅かに確認されている。

中期も後半になると遺跡の数は増え、特に西原遺跡では加曾利Ｅ式期後半の住居跡52軒が確認され、大規模な集落が形成されていたことが確認されている。また、この西原遺跡では、石鏃の製作跡が確認されており、土偶・土製垂飾り・三角擣形土製品・石棒・石錘などが出土している。

また、川本町の船山遺跡（塩野：1980）では、勝坂式から加曾利Ｅ式期の集落が、上本田遺跡（村松：2000）では、勝坂式期後半から加曾利Ｅ式期の住居跡68軒が環状に巡る事が確認されており、本流域の拠点的集落であることが推測されている。

この他、権現坂遺跡・富士山遺跡・寺内遺跡・上前原遺跡などで、加曾利Ｅ式期の住居跡が確認されている。

後　期　後期になると遺跡数は減少し、後期前半の堀之内式期の小規模集落が、姥ヶ沢遺跡、萩山遺跡、川本町の四反歩遺跡、山ノ腰遺跡で確認されている。

また、屋外埋甕が宮下遺跡で１基、萩山遺跡で３基、土壙が姥ヶ沢遺跡で１基、富士山遺跡で２基確認されているが、いずれも遺跡は小規模なものである。

晩　期　堀之内式土器に続く後期に属する土器や、晩期の土器を出土する遺跡は、本流域では今のところ確認されていない（第５図）。

弥生時代

弥生時代の遺跡は全般的に少なく、川本町の畠山館跡（村松：1999）で前期末の再葬墓が単独で発見されているが、集落跡は未確認である。

中期では、鹿嶋遺跡からは、円形の土壙が１基確認されており、緑泥片岩製の有孔磨製石鏃が1点出土している。土器は出土していないが、その形態により中期後半に属することが推定されている（松原：1995）。

集落として確認されている遺跡は、後期の姥ヶ沢遺跡（新井：1983、千代遺跡群発掘調査会：1998）と富士山遺跡、川本町の焼谷遺跡（村松：1991）、白草遺跡（礒崎：

1992)、荷鞍ヶ谷戸遺跡（村松：1994）で確認されており、該期の集落が比較的集中する傾向がみられる。

姥ヶ沢遺跡は後期中葉から後葉にかけての吉ヶ谷式土器を主体とする住居跡９軒が調査されている。富士山遺跡は後期後葉から終末に位置づけられる樽式土器と吉ヶ谷式土器を出土する住居跡８軒が調査されている。両遺跡は直線距離で600mほど離れているが、ともに集落の一部が検出されただけであり、近接して大規模な集落が形成されていたものと考えらる（第６図）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、集落跡・古墳群・生産遺跡など数多く確認されており、本格的に、本流域が土地開発されるようになる。

集　落　本流域右岸の集落跡は、前期の五領式期の住居が確認された、姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡・行人塚遺跡などがある。行人塚遺跡の住居跡からは、小鍛冶関連遺物の羽口・鉄滓・台石・たたき石が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認される重要な事例となっている。また、前期の集落に伴う墓制の方形周溝墓が確認された、行人塚遺跡・原谷遺跡がある。

また、川本町の円阿弥遺跡では、和泉期の集落跡が、鬼高式期の集落が、宮下遺跡・天神遺跡、川本町の権現堂遺跡・畠山遺跡で確認されている。

本流域左岸の集落跡は、大林遺跡・新屋敷遺跡・宮前遺跡が確認されている。宮前遺跡からは、土師器などに混じって埴輪が採取されており、権現坂埴輪窯跡群が南面しており、埴輪搬出のための集積地の可能性も考えられる。

古墳群　本流域右岸の古墳群は、姥ヶ沢古墳群・上前原古墳群・静簡院古墳群・天神山古墳群などが確認されている。姥ヶ沢古墳群は、埴輪が確認されている古墳もあり、６世紀代の古墳群と考えられる。上前原古墳群は、５基以上の円墳で構成された古墳群で、発掘調査は行われていないが、埴輪が採取されておらず、主体部に横穴式の石室をもつものと推定されることから、７世紀代の古墳群と考えられる。静簡院古墳群は、現在１基の円墳が残存し、横穴式石室の一部が露出している。発掘調査は行われていないが、埴輪が採取されないところから、７世紀代の古墳群と考えられる。天神山古墳群は、荒川の沖積地を見下ろす天神山の頂に築造された円墳を中心に天神山遺跡と中原遺跡にまたがり６基の円墳が確認されている。発掘調査は行われていないが、この古墳群からは、埴輪や須恵器片が採取されており、６世紀代の古墳群と考えられる。

本流域左岸の古墳群は、川本町の鹿島古墳群から続く新田裏古墳群が確認されており、４基の円墳が確認されている。川本町では、往時は100基以上の古墳が存在したと言われる川本町鹿島古墳群・塚原古墳群・箱崎古墳群（村松：1992）が分布している。

生産遺跡　台地崖線部の斜面および台地上の平坦地を利用した埴輪窯跡群が２箇所確認されている。姥ヶ沢埴輪製作遺跡（千代遺跡群発掘調査会：1998）は、上幅８～10mの幅狭い開析谷に面する斜面に８基の埴輪窯が２段に重複して構築されていることが確認されている。また、権現坂埴輪窯跡群（千代遺跡群発掘調査会:1998）は、姥ヶ沢遺跡の東側800mほどの所に位置し、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に埴輪窯が並んで造られてい

る。平坦地には、工房跡と考えられる竪穴や、粘土の採掘坑も発見されている。これら２箇所の埴輪窯は、６世紀後半段階に操業が始まり、６世紀代後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していた。特に権現坂埴輪窯跡群では高さ70㎝を越す大形の円筒埴輪が作られており、埼玉古墳群への供給もおこなわれていた可能性が考えられる（第６図）。

奈良・平安時代

本流域右岸の遺跡では、奈良・平安時代の遺跡は、富士山遺跡・権現坂遺跡・宮下遺跡・天神谷遺跡・西遺跡・山神遺跡・萩山遺跡・鹿嶋遺跡・下新田遺跡・天神遺跡・中島遺跡・西原遺跡で集落跡が確認されている。

宮下遺跡からは多量の鉄滓・羽口が検出されており、付近に鍛冶炉が存在していることが推定される（新井：1985）。また、天神谷遺跡からは、須恵器の窯が１基検出されている（千代遺跡群発掘調査会：1993）。萩山遺跡からは、住居跡は１軒のみの検出であるが、人骨の入れられた須恵器の蔵骨器が見つかっている。

また、この時代本地域において最も注目される遺跡として寺内遺跡が挙げられる。

平安期の古代寺院跡で、寺院の周囲を外界と区切る大溝が、北辺で570m、東辺で170m、西辺で200m程確認されており、伽藍内には基壇をもつ建物跡が４基確認され、伽藍の東側には50軒以上の住居跡が確認された集落をかかえ、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。西遺跡・中島遺跡・天神遺跡は寺院の外側に広がる同時期の集落跡であることが確認されている。寺院の活動時期は、８世紀後半から10世紀半ばの時期で、最盛期は９世紀後半と捉えられている（江南町：1995）。

また、この寺内遺跡に隣接する川本町の百済木遺跡では、８世紀初頭に位置づけられる豪族居宅跡と考えられる遺構が、川本町教育委員会によって調査されている。柵列による区画内に、大型掘立柱建物と大型竪穴住居跡が配されており、古代男衾郡の成立を推定する上で重要な位置を占めるものと考えられている（村松：2000）。

本流域左岸の遺跡は、新田裏遺跡で、８世紀から10世紀におよぶ集落跡が調査されている（江南町：1995）。川本町では、畠山遺跡（村松：1999）・川端遺跡（村松：1993）で集落跡が確認されている（第７図）。

中　世

本流域右岸の遺跡は、宗教・信仰にかかわる遺跡として、富士山遺跡・天神谷塚群・萩山遺跡・元八幡遺跡・金胎寺跡・神力寺跡・能万寺跡・鹿嶋遺跡・天神遺跡、川本町では、万願寺跡が確認されている。天神谷塚群では、十三塚の一部と考えられる４基の塚群が確認されており、13世紀の常滑の甕片が採取されている（千代遺跡群発掘調査会：1993）。また、鹿嶋遺跡では、土壙墓が確認されており、人骨の一部、銅環、数珠、銭貨が出土している（立正大学：1983）。万願寺遺跡では、２重の堀に囲まれた墓域・地下式壙・竪穴住居跡・土壙群などが確認されている。

館跡として深谷上杉氏との関係が伝承されている上杉館跡・成沢館跡、谷縁館跡（中島遺跡内）が確認されている。上杉館跡は、東西250m、南北200mの範囲内に土塁・堀跡が確認されている。一部発掘調査が行われており、礎石をともなう館跡・井戸跡が検出され、渡来銭・陶磁器片が出土している（江南町：1995）。

また、川本町では、畠山館跡（村松：1999）・本田館跡（今井：1985）が確認されている。畠山館跡は、５次に渡る調査が行われており、石組墓からなる墓域や、館を画する薬研堀、大形五輪塔・石組井戸などが確認され、鎌倉時代から室町時代にかけての代表的な平地式の中世館と認識されている。本田館跡は、畠山重忠の主従と伝えられる本田二郎親常に由来すると伝えられ、東西125m、南北150mの長方形を呈する、堀と２重の土塁で構成された方形館と推定されている。

この他、中世の竪穴住居跡と推定される遺構が、谷縁館跡内で確認されており、寄居町では、赤浜天神沢遺跡（小林：1997）で、鎌倉街道上道と推定される道路遺構が確認されている。

本流域左岸の遺跡は、中世墳墓が新田裏遺跡・宿遺跡、川本町鹿島遺跡（駒宮：1972）・舟山遺跡（塩野：1980）で確認されている。新田裏遺跡は、火葬骨が埋葬され、これに板碑が伴った墳墓であり（塩野：1972）、宿遺跡では、集石墓が12基発掘調査されている。舟山遺跡は、多数の扁平河原礫とともに古瀬戸梅瓶の蔵骨器及び板碑が出土しており、鹿島遺跡からは、東西16m、南北13m、高さ1.3mの塚の頂部から、配石を伴う板碑群が発見されている。台石が整然と並べられ、台石下に伴う土壙からは、火葬骨が出土している。

館跡としては、現在その形跡の確認できない堀ノ内館跡、北側に堀と土塁が残る三本館跡、東と北側に堀と土塁が残る平山館跡が確認されている（第８図）。

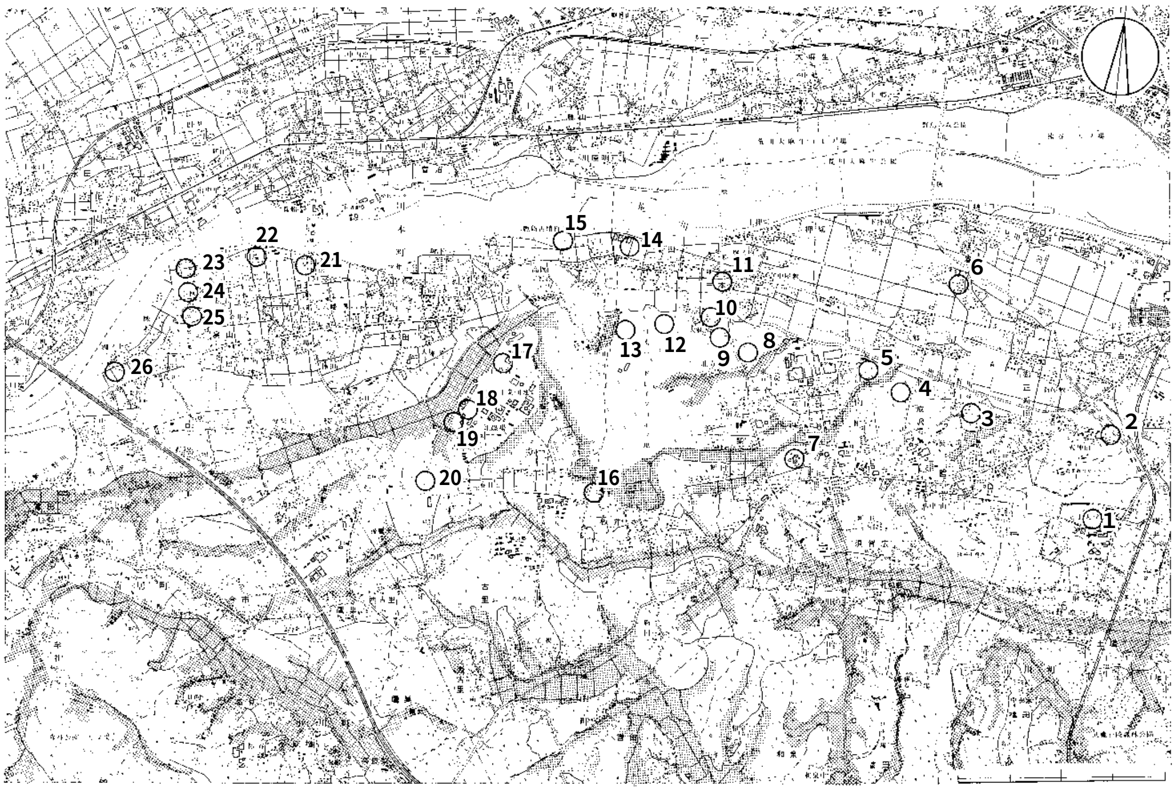
近　世

本流域右岸の江戸時代の遺跡は、権現坂塚群、行人塚塚群、山神塚などが確認されている。権現坂塚群は、1964年の分布調査で、東西120m、南北50mの範囲に12基ほどの分布が確認されていたもので、1989年に２基の塚が調査されている（江南町：1995）。山神塚は、山神祭祀にかかわるもので、山神遺跡内に１基確認されている。

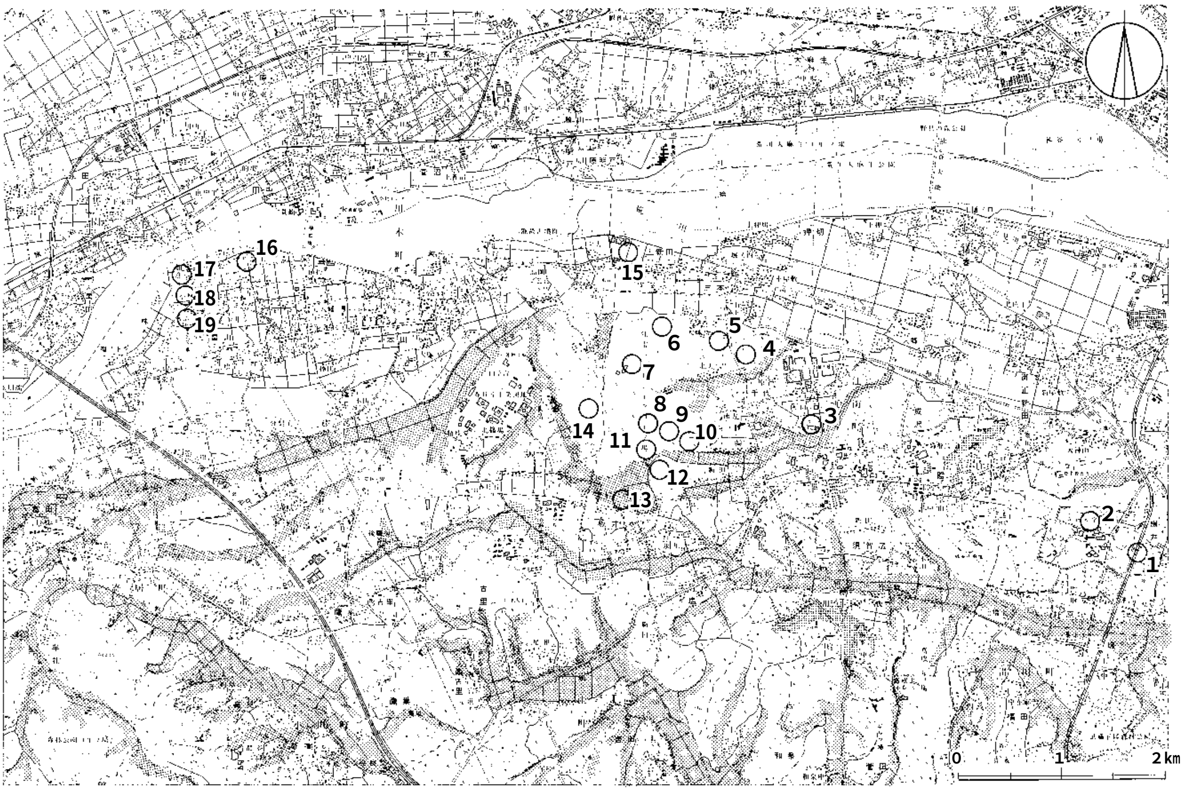
また、この山神遺跡内では、江戸期の家屋跡と推定される区画溝と井戸跡が検出されており、常滑の陶器片が採取されている（千代遺跡群発掘調査会：1993）。

本流域左岸の江戸時代の遺跡は、新屋敷遺跡のみが確認されており、発掘調査は行われていないが、陶磁器類が採取されている（第８図）。

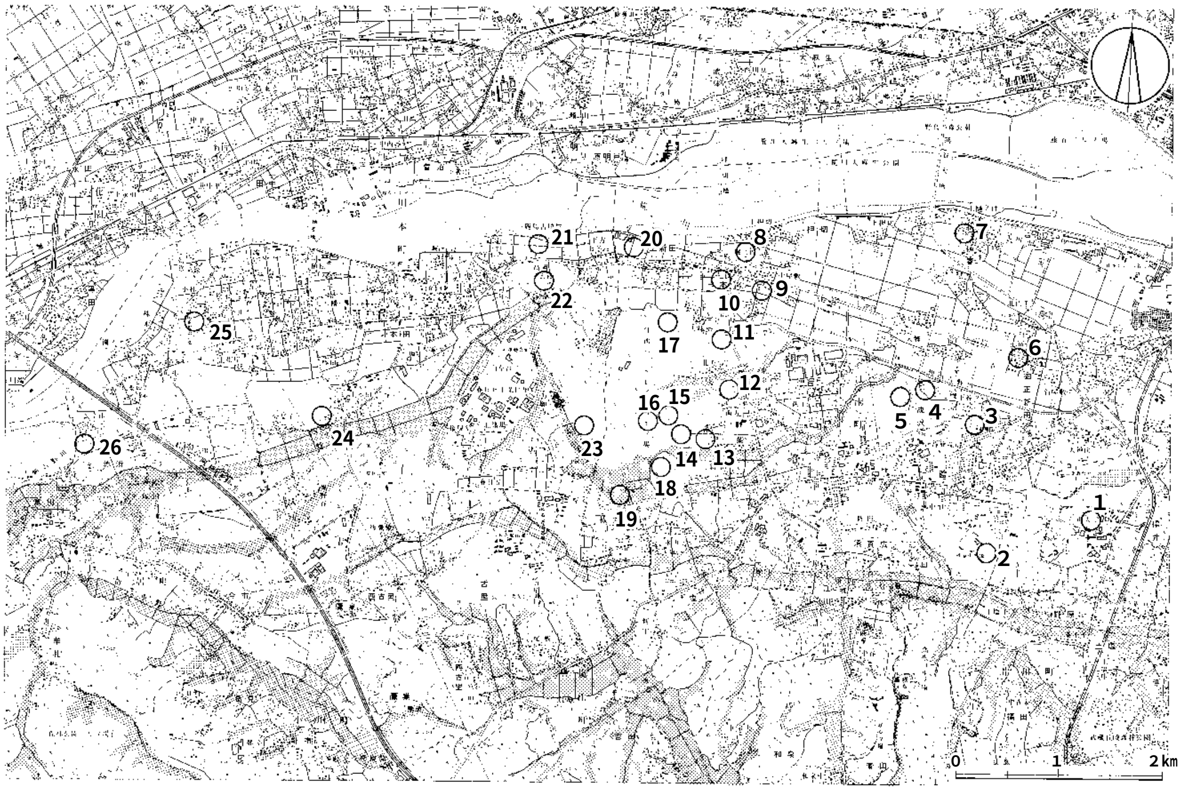
第５図　旧石器・縄文時代の遺跡



第６図　弥生・古墳時代の遺跡



第７図　奈良・平安時代の遺跡



第８図　中・近世の遺跡

第1表　遺跡地名表

<旧石器・縄文時代>

1	鹿嶋遺跡	9	北方遺跡	17	山ノ腰遺跡
2	向原遺跡	10	富士山遺跡	18	白草遺跡
3	上前原遺跡	11	姥ヶ沢遺跡	19	四反歩遺跡
4	萩山遺跡	12	西原遺跡	20	円阿弥遺跡
5	原谷遺跡	13	山神遺跡	21	権現堂遺跡
6	宮下遺跡	14	寺内遺跡	22	上本田遺跡
7	南方遺跡	15	天神遺跡		
8	権現坂遺跡	16	船山遺跡		

<弥生・古墳時代>

1	鹿嶋遺跡	10	大林遺跡	19	権現堂遺跡
2	天神古墳群	11	新屋敷遺跡	20	焼谷遺跡
3	静簡院古墳群	12	富士山遺跡	21	塚原古墳群
4	行人塚古墳群	13	姥ヶ沢遺跡	22	川端遺跡
5	上前原古墳群	14	新田裏古墳群	23	如意遺跡
6	宮前遺跡	15	鹿島古墳群	24	如意南遺跡
7	原谷遺跡	16	天神遺跡	25	畠山遺跡
8	宮下遺跡	17	白草遺跡	26	箱崎古墳群
9	権現坂遺跡	18	円阿弥遺跡		

<奈良・平安時代>

1	下新田遺跡	8	山神遺跡	15	新田裏遺跡
2	鹿嶋遺跡	9	天神谷遺跡	16	川端遺跡
3	萩山遺跡	10	西遺跡	17	如意遺跡
4	宮下遺跡	11	寺内遺跡	18	如意南遺跡
5	権現坂遺跡	12	中島遺跡	19	畠山遺跡
6	富士山遺跡	13	天神遺跡		
7	西原遺跡	14	百済木遺跡		

<中世・近世>

1	鹿嶋遺跡	10	新屋敷遺跡	19	天神遺跡
2	能万寺跡	11	権現坂塚群	20	新田裏遺跡
3	静簡院館跡	12	上杉館跡	21	鹿島塚群
4	神力寺跡	13	金胎寺跡	22	船山墳墓群
5	行人塚塚群	14	元八幡神社跡	23	万願寺跡
6	宿遺跡	15	天神谷塚群	24	本田館跡
7	平山館跡	16	山神塚	25	畠山館跡
8	堀ノ内館跡	17	富士山遺跡	26	赤浜天神沢遺跡
9	三本館跡	18	谷縁館跡		

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　寺内遺跡第１次範囲確認調査

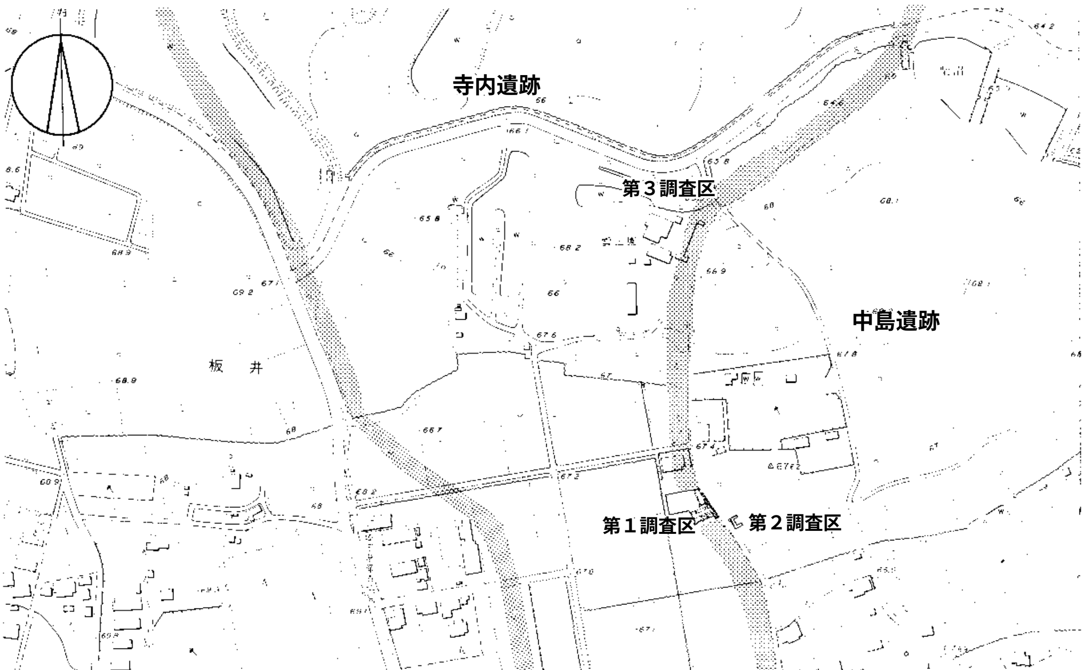
（1）　遺跡概観

本遺跡は、1995年12月15日第２回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、寺内古代寺院跡の南限を確定するために、1996年２月６日より３月29日にかけて、３調査地区約600㎡の調査が実施された（第９図）。寺内古代寺院跡の一番南側の基壇建物跡（推定中門）より、南東方向に300m程の地点である。

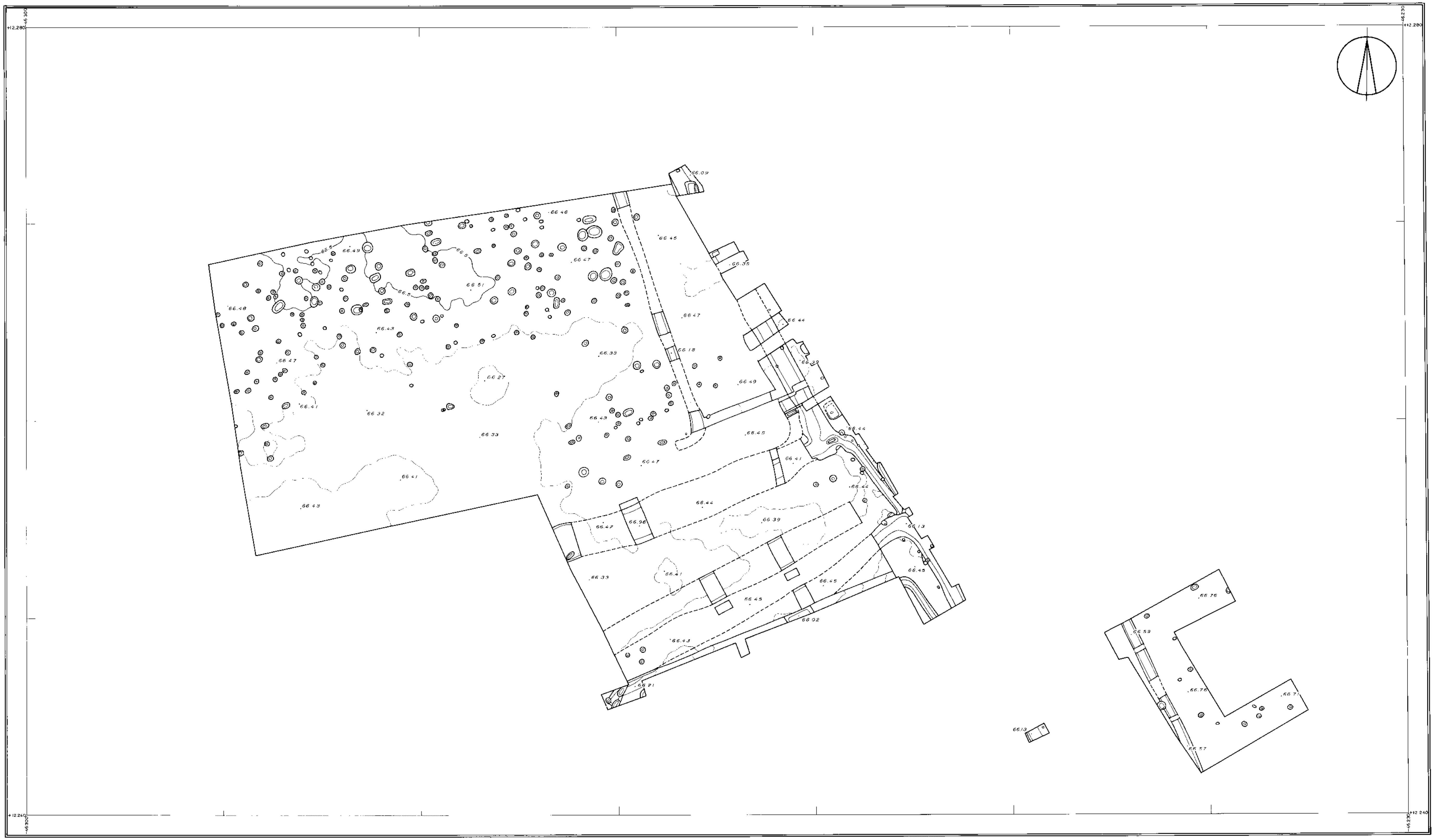
地形的には、ほぼ平坦であるが、第３調査地区の北側に東西方向に走る、ゴルフ場の外周道路付近を境として、ローム層の堆積が認められず、埋没谷へと移行しており、東側も、第１調査区と第２調査区の間を走る道路を境として、その西側にはローム層の堆積は認められない。中島遺跡の北側と南側を東方向より侵入する埋没谷が、第１・３調査区付近で急速にその幅を広げ、合流する地形となっている。

第１調査区

第１調査区では、参道の側溝と推定される溝と、この溝に取り付く２本の溝を確認している。また、側溝際の参道部分と推定される箇所より、方形を呈するピットが２箇所確認されている。遺物は、寺院跡と離れるため非常に少なく、側溝の底部より、砥石が、第２号ピットの壙底付近より瓦片が出土しており、包含層より、土師器・須恵器片が少量出土しているにすぎない（第10図）。



第９図　寺内遺跡の範囲と発掘調査区（1/5,000）



第10図　寺内遺跡第１次範囲確認調査第１・２調査区全体図（1/200）

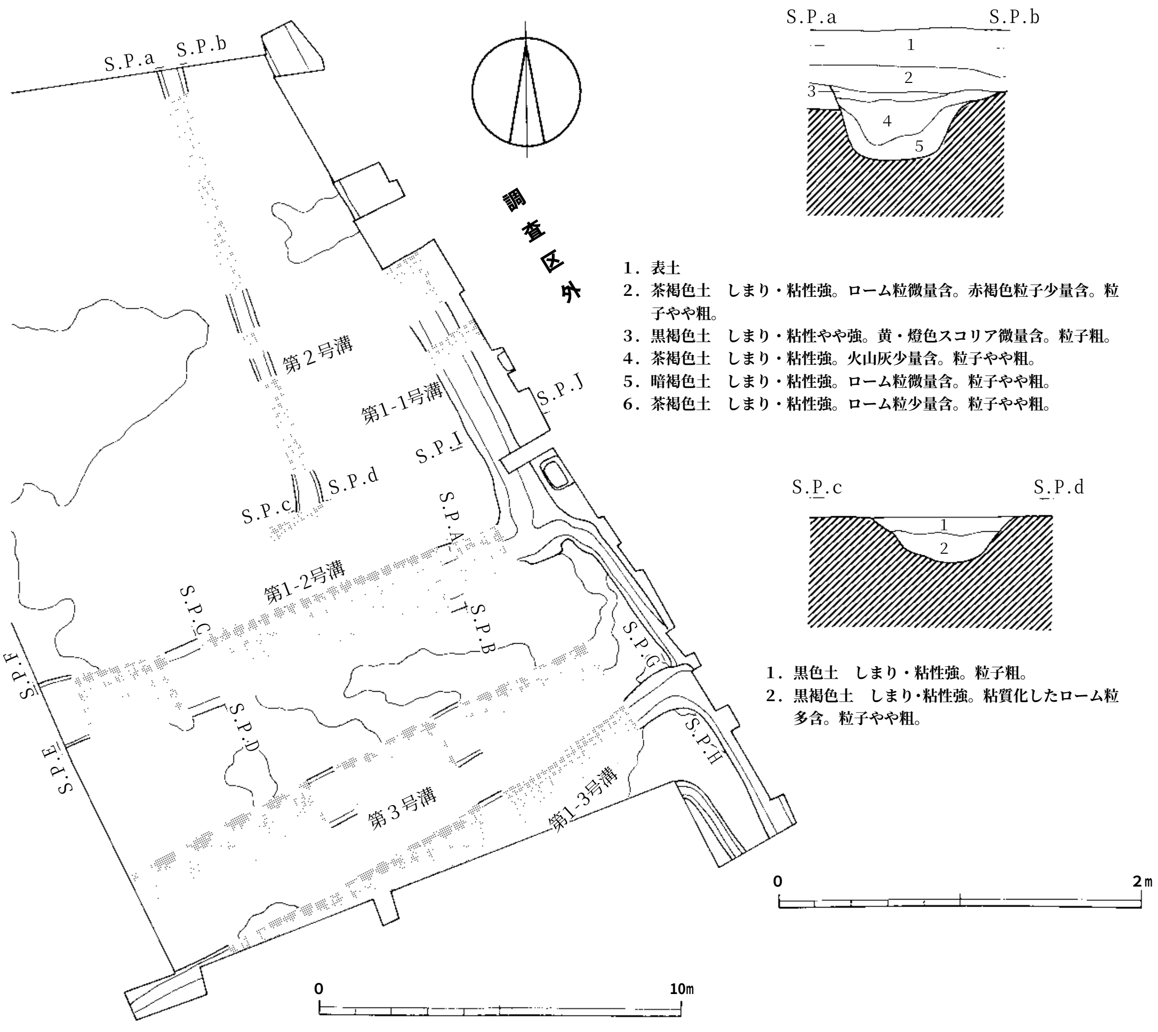
第２調査区　第２調査区は、第1調査区で確認された側溝の対となる東側の側溝を確認するために設定したもので、溝1条とピットを確認している。遺物は、土師器・須恵器の小片が包含層より僅かに出土しているにすぎない（第10図）。

第３調査区　第３調査区は、ゴルフ場の外周道路で確認された、幅10mの道路跡（推定参道）の確認を目的として設定されたトレンチである。外周道路部分で確認されたような明確な道路跡は確認できなかったが、幅12mで基盤層の高まりが確認されており、道路跡の可能性が推測される。側溝は確認できなかった。遺物は、墨書土器1点を含む土師器・須恵器片、瓦片などが少量出土している。また、縄文時代後期堀ノ内式土器が３個体廃棄された状態で確認されている（第15図）。

(2)　遺構とその出土遺物

第１調査区

第１号溝
（第11・12図）　［位置］第１調査区の東端で、現道に平行するように南東─北西溝方向の溝（溝１－１）、および、この溝にほぼ垂直に取り付く２条の溝（溝１－２・３）が確認されている。



第11図　第１～３号溝平・断面図

（図版３・４）

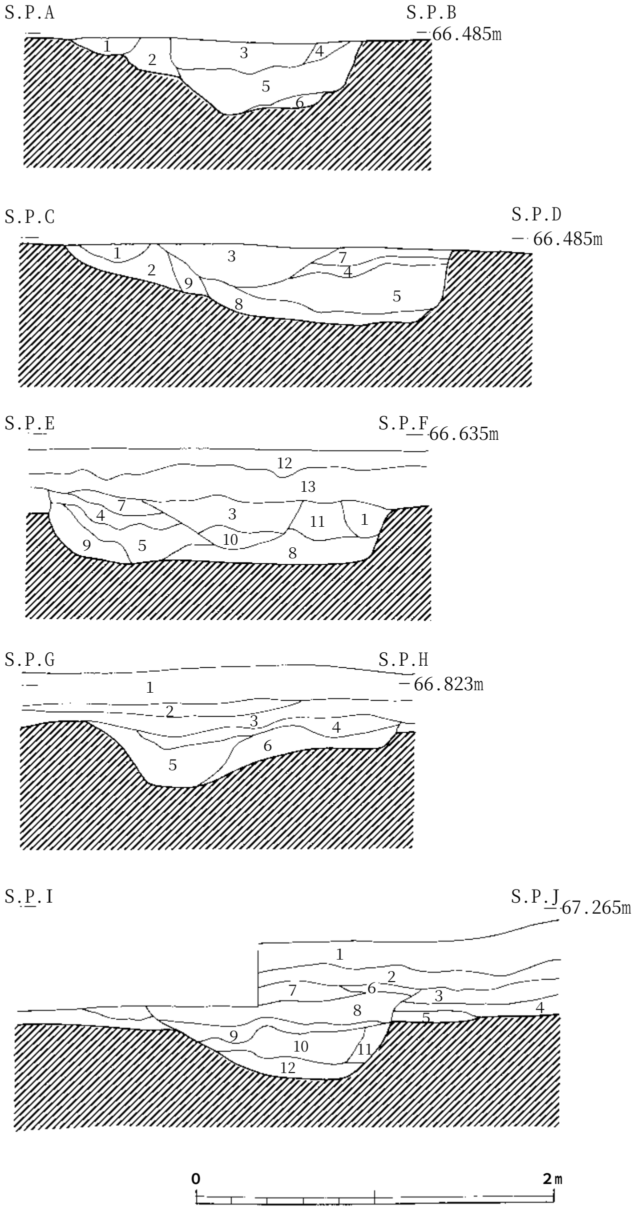
［形状］溝１－１：長さ26.2mを測り、溝１－２が取り付く地点で屈曲し、幅・深さはその規模を縮小している。溝１－２の取り付く北側で幅120cm・深さ31cm、南側で幅54cm・深さ28cm を測る。

溝１－2:確認面で平面形を確認し、3箇所トレンチを入れて確認している。長さ15.1m、幅216～190cm・深さ42～32cm を測る。

溝１－3:確認面で平面形を確認し、2箇所トレンチを入れて確認している。長さ17.4cm、幅174cm、深さ35cm を測る。

［覆土］溝１－1:第12図⑤。14層に分層され、第６層～12層が溝覆土。溝の掘り込みは第２層の耕作土直下から確認されている。第９層に火山灰様の砂粒を微量含むが不明瞭である。

溝１－２：第12図①②③。①は、溝１－１に取り付く手前のセクション。6層に分層され、第４層に火山灰を多く含むが、後から掘り込まれたと推測される第３層により切



1．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。赤褐色粒子少量含。粒子やや粗。
2．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム・粘土粒やや多含。粒子やや粗。
3．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量、赤褐色粒子少量含。粒子やや粗。
4．黒褐色土　しまり・粘性強。火山灰多含。ローム粒・赤褐色粒子少量含。粒子粗。
5．黒褐色土　火山灰・赤褐色粒子微量含。粒子粗。
6．黄色粘土層　しまり・粘性強。黒色土少量含。
7．黒褐色土　しまり・粘性強。赤褐色粒子微量含。粒子粗。
8．黒茶褐色土　しまり・粘性強。ローム・粘土粒やや多含。粒子粗。
9．黒褐色土　しまり・粘性強。炭化粒・赤褐色粒子微量含。粒子粗。
10．黒色土　しまりやや弱・粘性強。粒子やや粗。
11．暗褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや細。
12．茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。耕作土。
13．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。耕作土。

1．表土
2．暗褐色土　しまり強、粘性やや弱。白･燈色粒子微量含。粒子やや粗。
3．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。
4．黒色土　しまりやや強、粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量・火山灰微量含。粒子やや粗。
6．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

1．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。耕作土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。耕作土。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒ブロック状に少量含。粒子やや粗。
4．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや細。
5．黄茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや細。
6．黒褐色土　しまりやや弱、粘性強。粒子粗。
7．茶褐色土　しまり・粘性強。赤褐色粒子微量含。粒子やや粗。
8．黒褐色土　しまり・粘性強。赤褐色粒子多量含。粒子粗。
9．暗褐色土　しまり・粘性強。火山灰部分的に含。粒子やや粗。
10．黒色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11．黒褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
12．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム・粘土粒多含。粒子やや粗。
13．黒褐色土　しまり･粘性強。ローム･ロームブロック多量含。粒子粗。
14．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

第12図　第１・２号溝セクション図

られている。②は、８層に分層される。第３層が後から掘り込まれた溝の覆土と推定され、火山灰を含む第４層および第５・７層を切っている。③は、調査区西壁のセクション。12層に分層され、第１～11層が溝覆土。第４層に火山灰を多く含む。第３・10層は、後から掘り込まれた溝の覆土と推測され、第４・５・７・11層がこれにより切られている。

溝１－３：第12図④。６層に分層され、第４～６層が溝覆土。

［杭列］溝１－２が溝１－１に取り付く箇所で、３本の杭列が確認されている（第13図・図版４）。直径５㎝程の丸杭である。

［遺物］覆土中より、土師器・須恵器の小片が少量出土しているが、図示するには至らなかった。溝１－１と溝１－２が重なる溝の溝底より、半折した砥石が１点出土している（第17図15）。長さ7.1㎝、幅3.1㎝、厚さ2.4㎝を測り、重量80.4gを量る。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、平安時代に属するものと推測される。ただし、溝の掘りなおしが行われているようであり、中世以降も引き続き利用されていた可能性がある。

第２号溝
（第11図）

［位置］第１－１号溝の西側約４ｍの距離で平行する。

［形状］長さ13ｍを測り、北側は第１調査区外へと延びる。南側は、溝１－２と平行するよう西側に折れているが、その延長部は、不明瞭である。４箇所トレンチを入れ、北端で幅72㎝、深さ32㎝を測り、南へ向かって掘り込みは浅くなり、南端のトレンチでは深さ23㎝となっている。

［覆土］北端のトレンチでは、５層に分層され、第３層から第５層が溝の覆土で、耕作土である第２層直下より掘込まれている。南端のトレンチでは、２層に分層されている。

［遺物］覆土中より遺物の出土は確認されなかった。

［時期］覆土中より遺物の出土が無く、時期不明であるが、溝１－１・２に平行することから、時期的にも関連する可能性が指摘できる。また、火山灰が微量確認されており、同定されれば帰属時期が推定できるものと考えられる。

第３号溝
（第11図）

［位置］溝１－２と１－３に挟まれる位置に平行して確認されている。

［形状］長さ14.2ｍを測り、西側は第１調査区外へと延びる。東側は、不明瞭であるが、溝１－１には取り付かない。２箇所でトレンチを入れ、幅1.6ｍ、深さ10㎝を測る。

［覆土］暗褐色土の単一土層で、確認面が低すぎたためか分層することができない。

［遺物］覆土中より遺物の出土は確認されなかった。

［時期］覆土中より遺物の出土が無く、時期不明であるが、溝１－２・３に平行することから、時期的にも関連する可能性が指摘できる。

第１号ピット
（第13図）

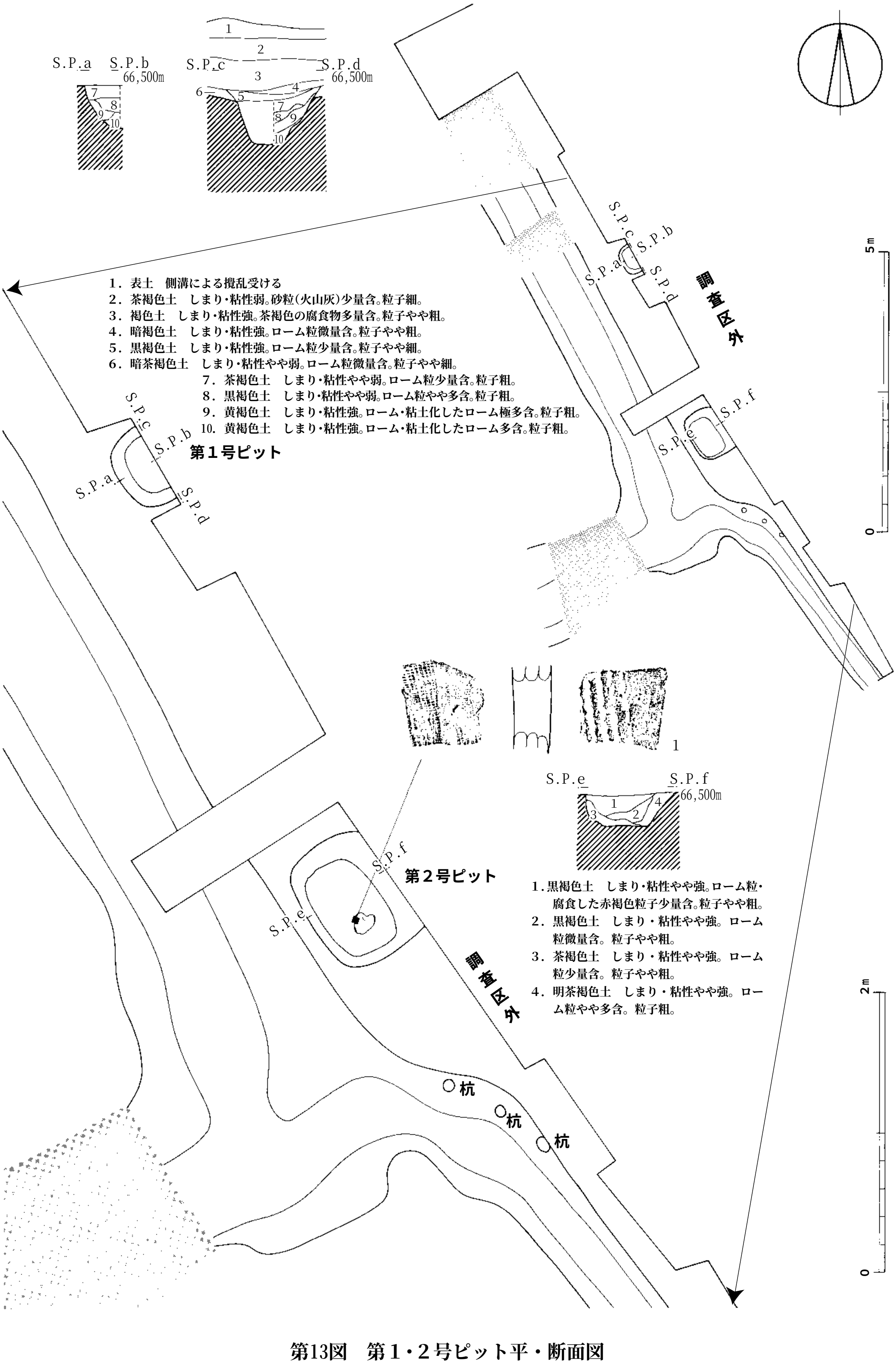
［位置］第１調査区東端、第１－１号溝の東側に確認されている。

［形状］東半分が第１調査区外にかかり平面形状は不明。49㎝×（29㎝）で、深さ34㎝を測る。

［覆土］４層に分層される。

［遺物］覆土中より遺物の出土は確認されなかった。

［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明。



第13図　第１・２号ピット平・断面図

第２号ピット
（第13図・図版３）

［位置］第１調査区東端、第１－１号溝の東側に確認されている。第１号ピットの南約2.6mの距離を測る。

［形状］東側一部が第１調査区外にかかるものの、長径96㎝×短径70㎝×深さ23㎝を測る。

［覆土］４層に分層される。

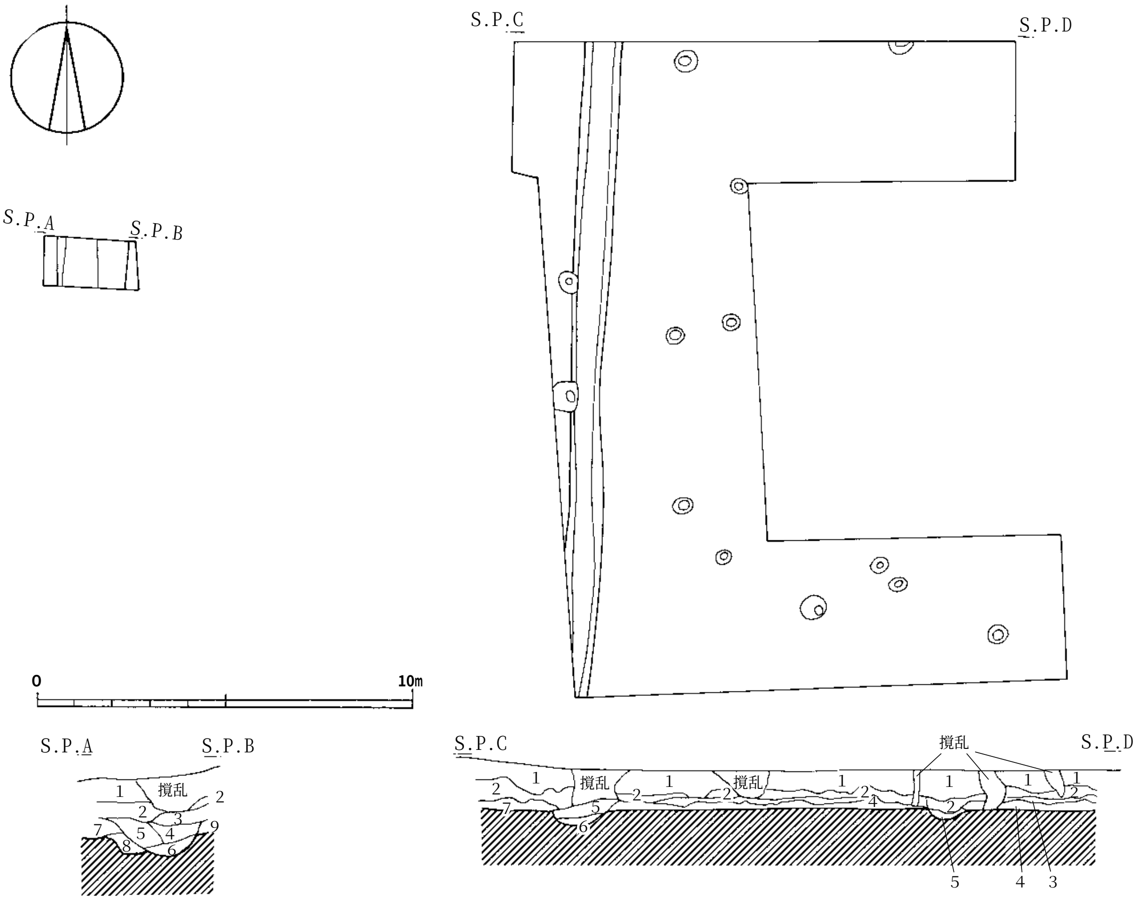
［遺物］壙底付近より、瓦小片１（第13図１）と、拳大の円礫１が出土している。

［時期］壙底付近より出土した瓦より判断して平安時代に属するものと推測される。

第２調査区

第４号溝
（第14図・図版３）

［位置］第１調査区の南東約10mの地点に調査区を設定し、第１号溝と平行する側溝を確認している。



1．表土
2．暗褐色土　しまり強、粘性やや弱。白・燈色粒子微量含。粒子やや粗。
3．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。
4．黒色土　しまりやや強、粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量・火山灰微量含。粒子やや粗。
6．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

1．茶褐色土　しまり・粘性強。耕作土。粒子粗。
2．暗茶褐色土　しまり・粘性強。黄・燈色スコリア微量含。粒子粗。
3．黒褐色土　しまり・粘性強。赤褐色粒子微量含。粒子粗。
4．暗茶褐色土　しまり・粘性強。赤褐色粒子微量含。粒子粗。
5．黒褐色土　しまり・粘性強。粒子粗。
6．黒色土　しまりやや強、粘性強。ローム粒微量含。
7．黒褐色土　しまり・粘性強。黄・燈色スコリア微量含。粒子粗。
8．黒褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子粗。

第14図　第２調査区溝平・断面図

［形状］第２調査区内で17.3mほぼ直線で確認し、南北方向とも調査区外に延びている。幅110㎝、深さ32㎝を測る。
［覆土］調査区北壁で２層に分層される。
［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。
［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明。

第１号溝
（第14図）

［位置］第２調査区の現道を挟んで西側､第１調査区で検出された第１号溝の延長部分にトレンチを設定し､両側溝に挟まれる部分（推定参道跡）の幅（5.9m）を確認している。
［形状］幅1.7m、深さ38㎝を測る。
［覆土］第４層から第６層の３層に分層される。
［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。
［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明であるが、第１調査区第１号溝の延長にあたることから、同一遺構と考えられる。

第３調査区

　第３調査区は、ゴルフ場の外周道路で確認された参道跡と推定される道路跡を検出する目的で設置された、長さ35.6m程のトレンチである（第15図)。
　トレンチ設置箇所は、既に埋没谷へと移行しており、ローム層の堆積は認められず、大変軟弱な地盤であった。土層は６層に分層され、第３層に多量の火山灰を層状に検出している。第５層からは、土師器･須恵器片が少量出土しており、「十」と墨書された須恵器蓋も出土している。また、第６層とその下層の黄褐色粘土層の境目付近より、縄文時代後期堀ノ内式土器が数個体廃棄された状態で確認されている。

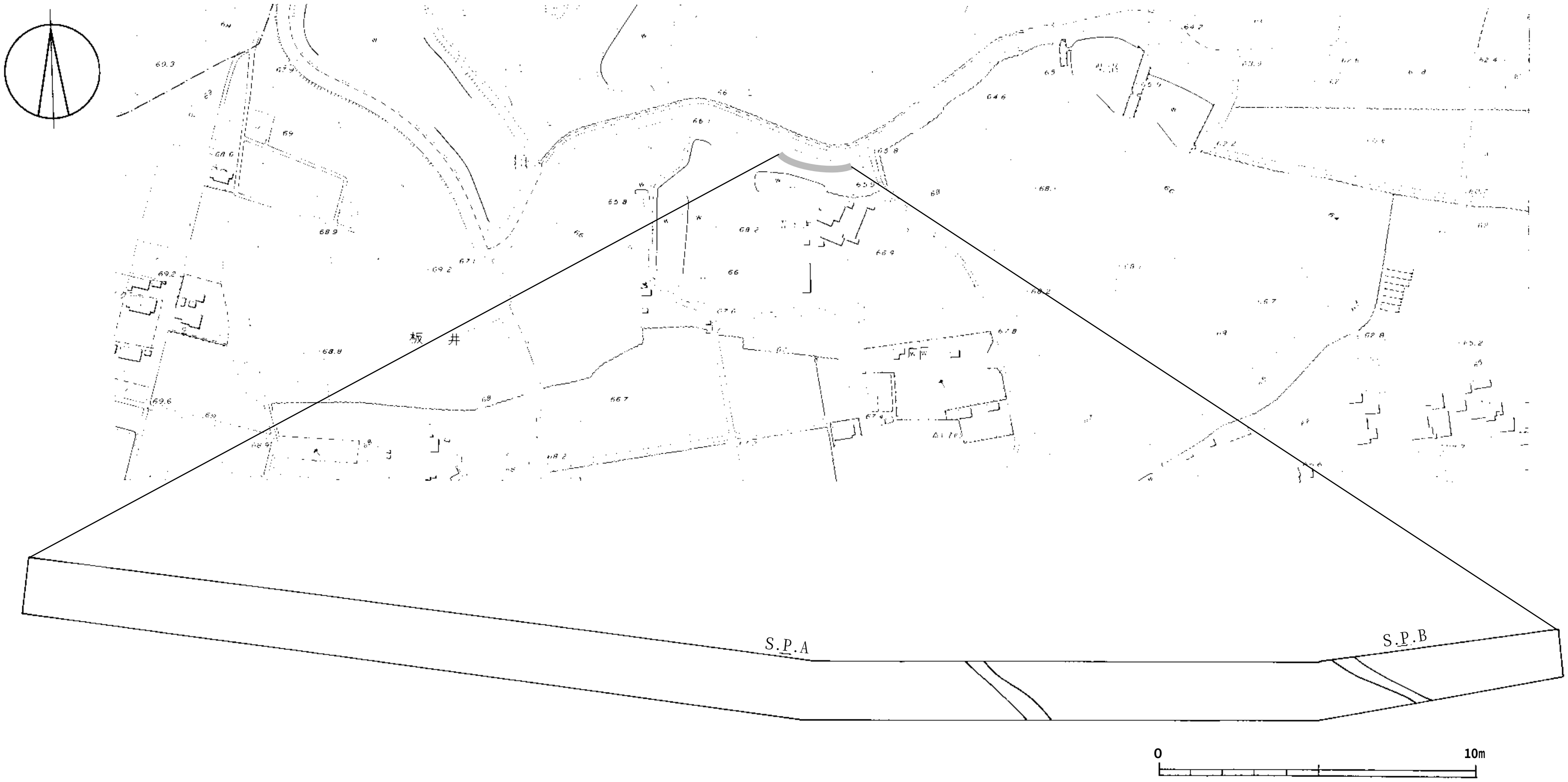
道路状遺構
（第15図･図版６）

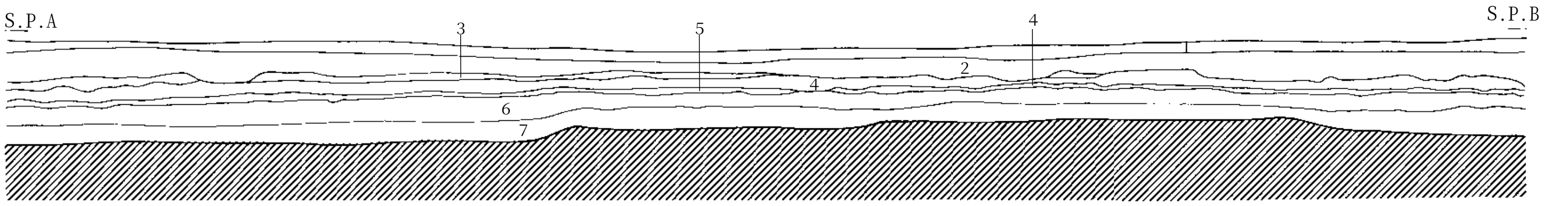
　明確な道路状の遺構は確認されていない。
　ただし、トレンチ東端より７m程の地点より、第６層下の黄褐色粘土層が上面幅11mの台形状に盛り上がる事が確認されている。
　この、盛り上がり部で２箇所、深堀調査を実施したところ、第６層下、西端で30㎝、中央で50㎝程の厚さで黄褐色粘土層が堆積し、さらに下層には青灰色粘土層が自然堆積していた。したがって、この盛り上がりは、人為的な盛土による構築物ではなく自然堆積による盛り上がりである事が確認されている。
　しかし、ゴルフ場の外周道路で確認された道路遺構のちょうど延長にあたり、その幅がほぼ一致する事、上面がほぼ平らであり断面台形状を呈する事など、完全な自然堆積による盛り上がりでは不自然な点などもある。これらの事を考慮するなら、自然地形を利用した粘土層の削り出しによる道路遺構の可能性も指摘できよう。

（3）包含層出土遺物

縄文時代
（第16図･図版18）

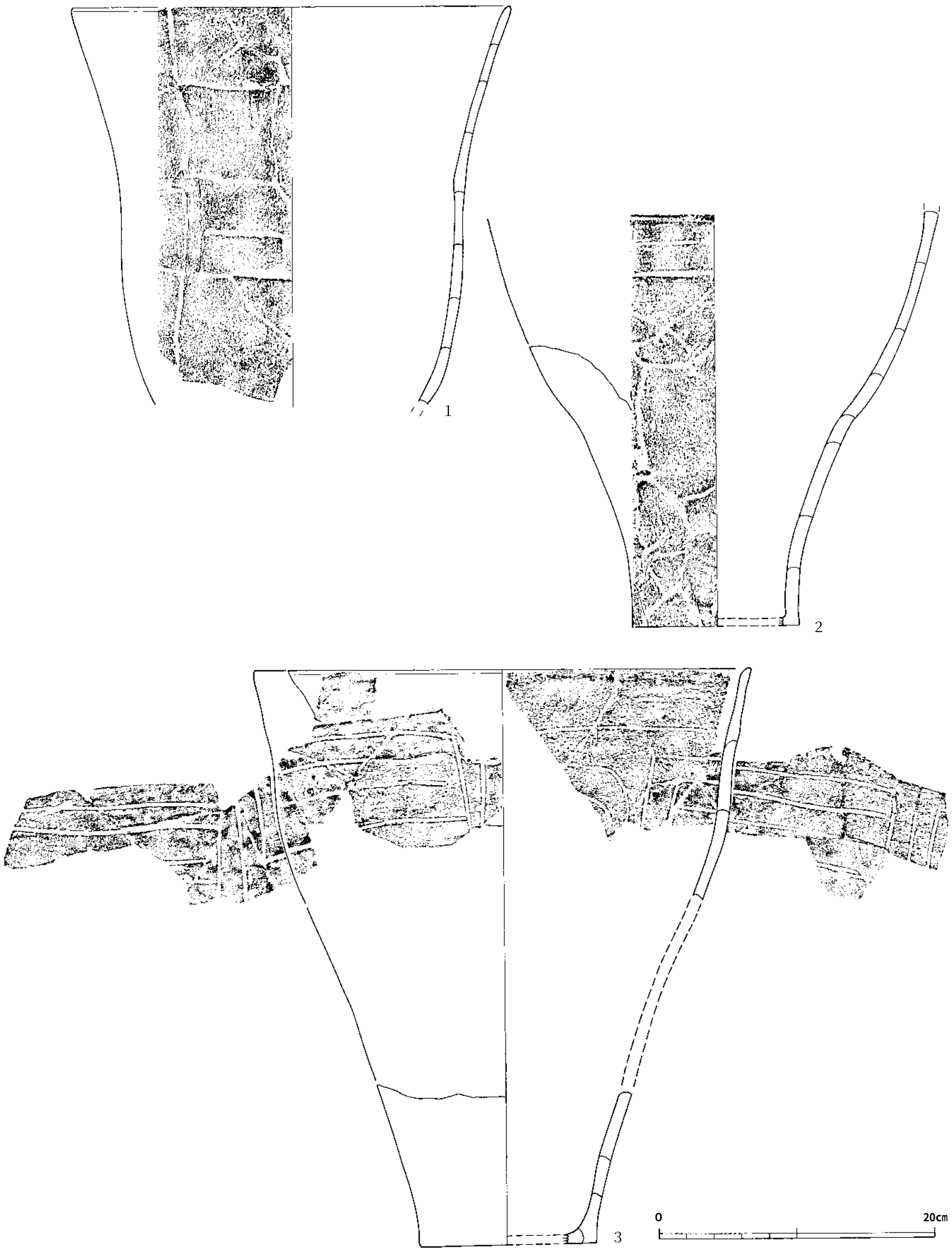
　第16図１～３は、第３調査区で、第６層と下層の黄褐色粘土層の境より、廃棄されたように３個体潰れた状態で検出された、後期堀之内式土器である。１は、無文の深鉢形土器。1/3程残存。推定口径32.0㎝、残存器高28.8㎝を測る。色調は、茶褐色土（7.5YR5/3)。２は、口縁部を欠損する。現状器高31.1㎝、底径10.8㎝を測る。口縁部に文様帯を有し、



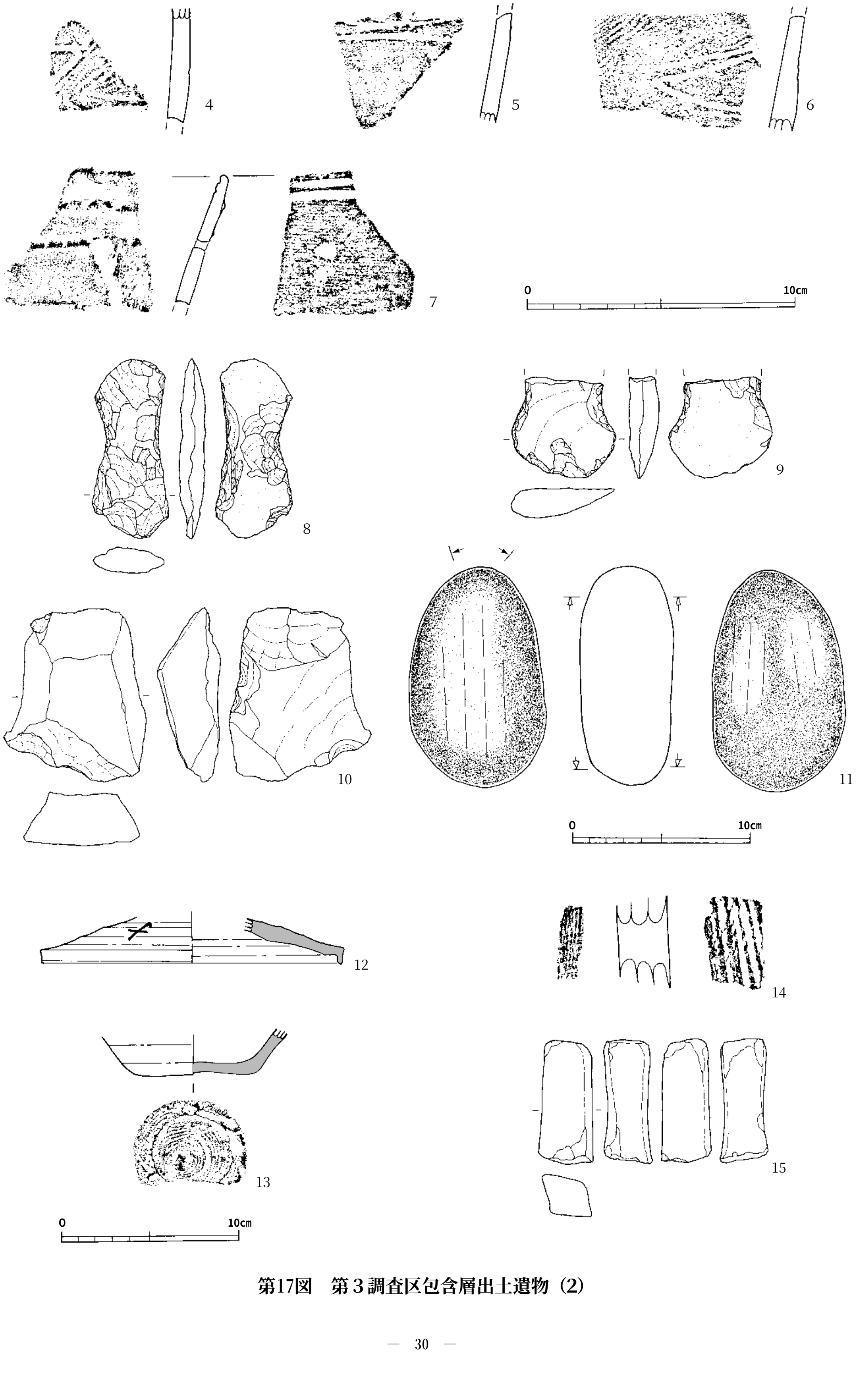


1．表土
2．黒褐色土　しまり・粘性強。火山灰やや多含。粒子粗。
3．茶褐色土　しまり·粘性強。火山灰多含。腐食した樹根多量含。粒子粗。
4．暗褐色土　しまり・粘性強。火山灰少量含。粒子粗。
5．黒色土　しまり強、粘性やや弱。火山灰多含。粒子粗。
6．黒褐色土　しまり・粘性強。腐食した樹根少量含。粒子やや粗。
7．黒褐色土　しまり・粘性強。腐食した樹根少量含。粒子やや粗。

第15図　第３調査区平・断面図



第16図　第３調査区包含層出土遺物（1）



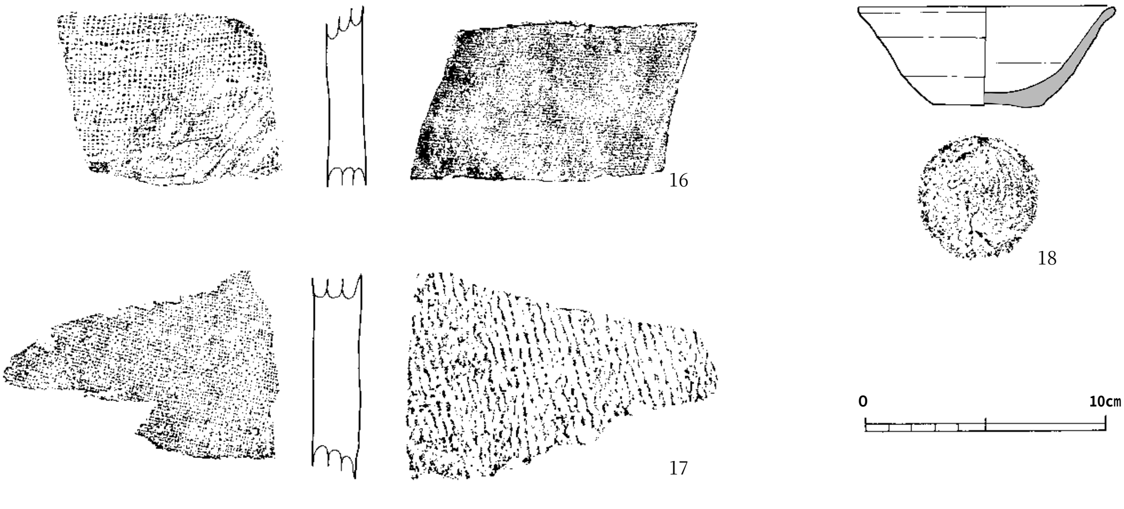
第17図　第３調査区包含層出土遺物（2）

横位に３本の平行沈線が施文されている。胴部は無文となる。色調は、茶褐色（7.5YR5/3)。３は、胴部を欠損する。推定口径36.0cm、推定器高37.0cm、底径12.8cm を測る。口縁部に文様帯を有し、沈線で窓枠状の文様を施文している。色調は、茶褐色（7.5YR5/3)。第17図４は、地文に細いＬＲ単節縄文を施文し、沈線で重三角文を施文している。５は、地文に細いＬＲ単節縄文を施文し、２条の沈線が横位に施文されている。６は、細いＬＲ単節縄文を施文し、沈線で三角形様の文様を施文している。７は、口縁部片で、補修孔が１箇所認められる。口縁下に２条の沈線を貼付し刻みを加えている。口唇部内側には２条の沈線が施文されている。

第17図８～11は、第３調査区の第６層から出土した石器。８は、Ａ面に自然面を残した分銅形打製石斧の完形品。長さ10.1cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm を測り、重量74.6gを量る。側縁部は、複数の剥離により比較的急角度に調整されている。砂岩製。９は、分銅形打製石斧の半欠品。現存長さ5.7cm、幅5.9cm、厚さ1.2cm を測り、重量61.8gを量る。Ａ面に自然面を多く残しており、調整は粗い。砂岩製。10は、撥形打製石斧の未製品と思われる。長さ9.8cm、幅8.0cm、厚さ3.1cm を測り、重量281.8gを量る。ほとんど荒割り状態にあり、自然面を多く残す。断面も厚い。緑泥岩製。11は、閃緑岩製の磨石。長さ12.4cm、幅7.5cm、厚み5.2cm を測り、重量685gを量る。ＡＢ面に磨面、先端部に敲打痕を残す。

平安時代
（第17・18図・図版18・19）

第17・18図12～14．16～18は、第３調査区第５層より出土している。12は、須恵器蓋で、「十」字の墨書が認められる。この墨書の他にも墨書がなされているが判読不明である（図版19)。色調は明灰色（2.5Y4/1)。また、裏面に墨の付着が認められ、転用硯として利用されていた可能性がある。胎土に、海綿骨針が認められ、焼成良好。14・16・17は、布目瓦片。色調は、いずれも暗灰色（2.5Y4/1)。18は、約3/5残存する須恵器の坏。器高4.2cm、口径10.5cm、底径4.9cm を測る。口唇部がやや外反し、底部に回転糸切り痕を残す。焼成やや不良で、胎土に白色粒子をやや多く含む。色調は、明黄灰褐色（10YR5/2)。



第18図　第３調査区包含層出土遺物（3）

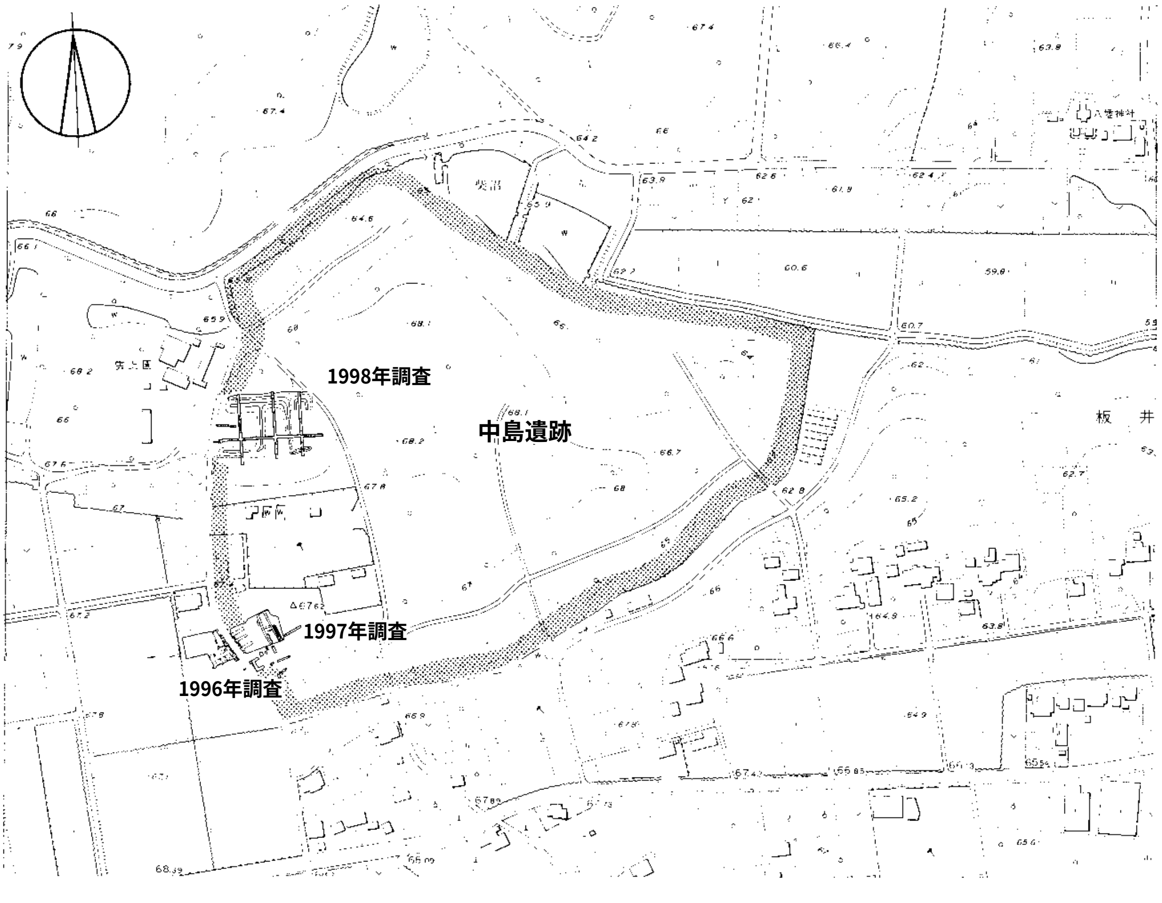
第２節　中島遺跡（寺内遺跡第２次範囲確認調査）

（1）遺跡概観

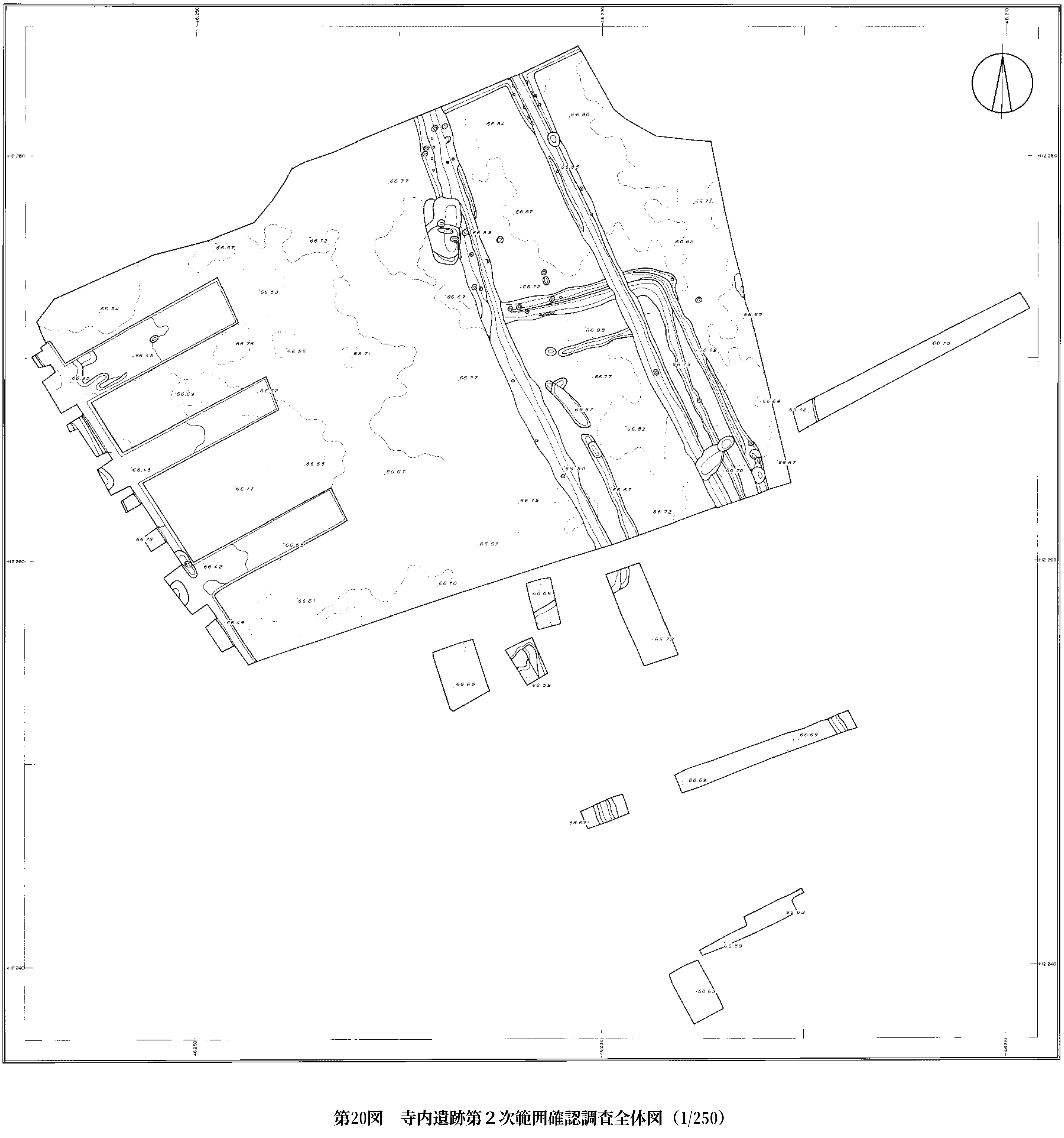
本遺跡は、1996年２月から３月にかけて行われた、第３～５回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、第１次範囲確認調査の第１調査区で確認された道路跡の側溝と推定される溝と対になる東側の溝および、東西方向の寺院地南限の溝を検出するために、1997年２月３日より３月31日にかけて、約1,000㎡の調査を実施した（第19図）。

地形的には、ほぼ平坦で、遺跡の北側に位置する柴沼を谷頭とする埋没谷と、さらに西へ延びる埋没谷によって寺内遺跡と画されている。東・南側も柴沼下の埋没谷より分岐する谷によって画され、西側は、柴沼より西へ延びる埋没谷が急速にその幅を広げており、遺跡名（小字名）となっている「中島」とおりの景観を呈している。

第２次確認調査　調査区西端で、第１次範囲確認調査の第１調査区で確認された、第１号溝と平行する溝を確認した。現道と一部重なるが、第１次調査の第２調査区で確認された第４号溝と規模・方向が一致することから、同一遺構と推定される。また、この溝のさらに東方約20mの距離で２条の平行する溝も確認されている。遺物は非常に少ないものの、覆土中より、平安時代の土師器・須恵器片が出土しており、時期的前後関係は判断できないが、道路跡の可能性も考えられる（第20図）。



第19図　中島遺跡の範囲と調査区位置図（1/5,000）



第20図　寺内遺跡第２次範囲確認調査全体図（1/250）

また、第１次範囲確認調査の第１調査区で確認された、第２号溝に対応する、東西方向の溝は確認されず、第１号溝の内側（東側）で確認された第1・２号ピットに対応するものは、調査区外の現道下にあたりその有無を確認することはできていない。

(2) 遺構とその出土遺物

第１号溝
(第21図・図版８・９)

［位置］調査区の東側で、第２号溝と平行するように確認されている。第５号溝と重複し、切られている（第21図⑥⑦）。

［形状］長さ23.4mを測り、南北方向とも調査区外へ延びている。尚、この溝の延長線上の調査区南側約26mの地点で畑の根切溝があり、溝の延長部付近を掘り下げたが、確認できなかった。途中で途切れているか、方向を変えている可能性がある。幅は、北端で153㎝、南端で92㎝ を測り、その幅を減じている。深さは、南端で46㎝、断面は、西側が緩やかに立ち上がる鍋底状を呈している。

［覆土］第21図③。第５号溝との間に風倒木と思われる攪乱を受け（第５層)、全体的に乱れている。第７～13層が覆土。第7. 8. 10層に焼土を微量に含む。

［遺物］覆土中より、数点の土師器・須恵器片が出土しているが、図化するには至らなかった。

［時期］覆土中より数点の平安時代の遺物が出土しているが、時期決定の明確な根拠となり得ず、不明。北側でやや間隔が狭まるものの、第２号溝との関連が想定できる。

第２号溝
(第21図・図版８・９)

［位置］調査区の東側で、第１号溝と平行するように確認されている。第3・5号溝が重複し、切られている（第21図④⑤）。

［形状］長さ23.4mを測り、南北方向とも調査区外へ延びている。尚、この第１号溝と同様に、調査区南約26mの地点の畑の根切溝で、この溝の延長を確認している。幅は、北端で171㎝、南端で82㎝を測る。深さは、南端で51㎝を測り、断面は箱薬研型を呈している。

［覆土］第21図②。南端の調査区壁で、８層に分層される。

［遺物］覆土中より数点の平安時代の土師器・須恵器片が出土している。第23図３は、唯一図化できた、溝底付近より出土した小形の甕の胴部下半の須恵器片。焼成は良好で、胎土に海綿骨針を含む。色調は、明灰色（2.5Y4/1)。

［時期］覆土中より出土した遺物が少なく、時期決定の明確な根拠となり得ないが、第23図３の遺物より判断して、平安時代に属するものと推定される。

尚、第１号溝と第２号溝の間隔は、北端で約４m、南端で約5.5mを測り、道路跡の可能性もあるが、表土が浅いためか、この溝の間を路面とする痕跡は確認されていない。

第３号溝
(第21図・図版８)

［位置］調査区の東、第1・２号溝に挟まれて検出されている。

［形状］確認面が低かったため途切れているが、本来は「L字」方に曲がる溝である。長さは、調査区南端より10m程北に延び、東側へ折れ５m程で第２号溝に当たっており、その先は不明である。幅は、南端で72㎝、折れた東西方向の溝で50㎝を測る。深さは35㎝を測り、断面「V字」状に近い形を呈する。

［覆土］第21図③。南端の調査区壁で、４層に分層される。風倒木（第５層）を切って溝が掘られている。
［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。
［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明。覆土の状態から、比較的新しい時期のものと推測される。

第４号溝
（第21図・図版８）

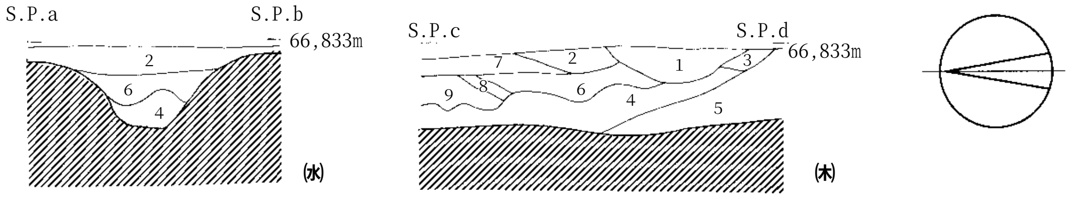
［位置］調査区の東、第２・５号溝に挟まれて検出されている。第２・５号溝と重複し、切って溝が掘られている（第21図⑤）。
［形状］確認面が低かったため途切れているが、本来は「L」字形に曲がる溝である。
長さは、調査区南端より７m程北へ延び、西へ折れ８m程で途切れている。幅は、南端で38㎝、折れた東西方向の溝で76㎝ を測る。深さは15㎝ を測り、断面は、緩やかな鍋底状を呈している。
［覆土］第21図①④⑤。南端の調査区壁で3層に分層される。覆土は、第３～５層。また、第２号溝と重複するセクション(⑤)では、第１層が該当し、第５号溝の覆土である第２層および、第２号溝のセクションである第３・４・６層を切って、溝が掘られている。
［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。
［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明。覆土の状態から、比較的新しい時期のものと推測される。

第５号溝
（第21図・図版８）

［位置］調査区の東、第４号溝に平行して検出されている。第１・２・４号溝と重複し、第１・２号溝を切り（第21図⑤⑥)、第４号溝に切られている（第21図⑤）
［形状］長さは、調査区南端より12.4m程北へ延び、西へ折れ8.5m程で第1号溝に当たり、その先は不明である。幅は、南端で71㎝、西へ折れた東西方向の溝で106㎝ を測る。深さは、14㎝ を測り、断面は鍋底形を呈す。
［覆土］第21図①⑤⑥。南端の調査区壁で２層に分層される。また、第２・４号溝と重複するセクション（⑤）では、第２層が該当し、第４号溝の覆土である第１層に切られ、第２号溝の覆土である第６・７層を切って溝が掘られている。また、第１号溝と重複するセクション（⑥）では、第1層が該当し、第１号溝の覆土である第２層を切って溝が掘られている。
［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。
［時期］覆土中より遺物の出土が無く時期不明。覆土の状態から、比較的新しい時期のものと推測される。

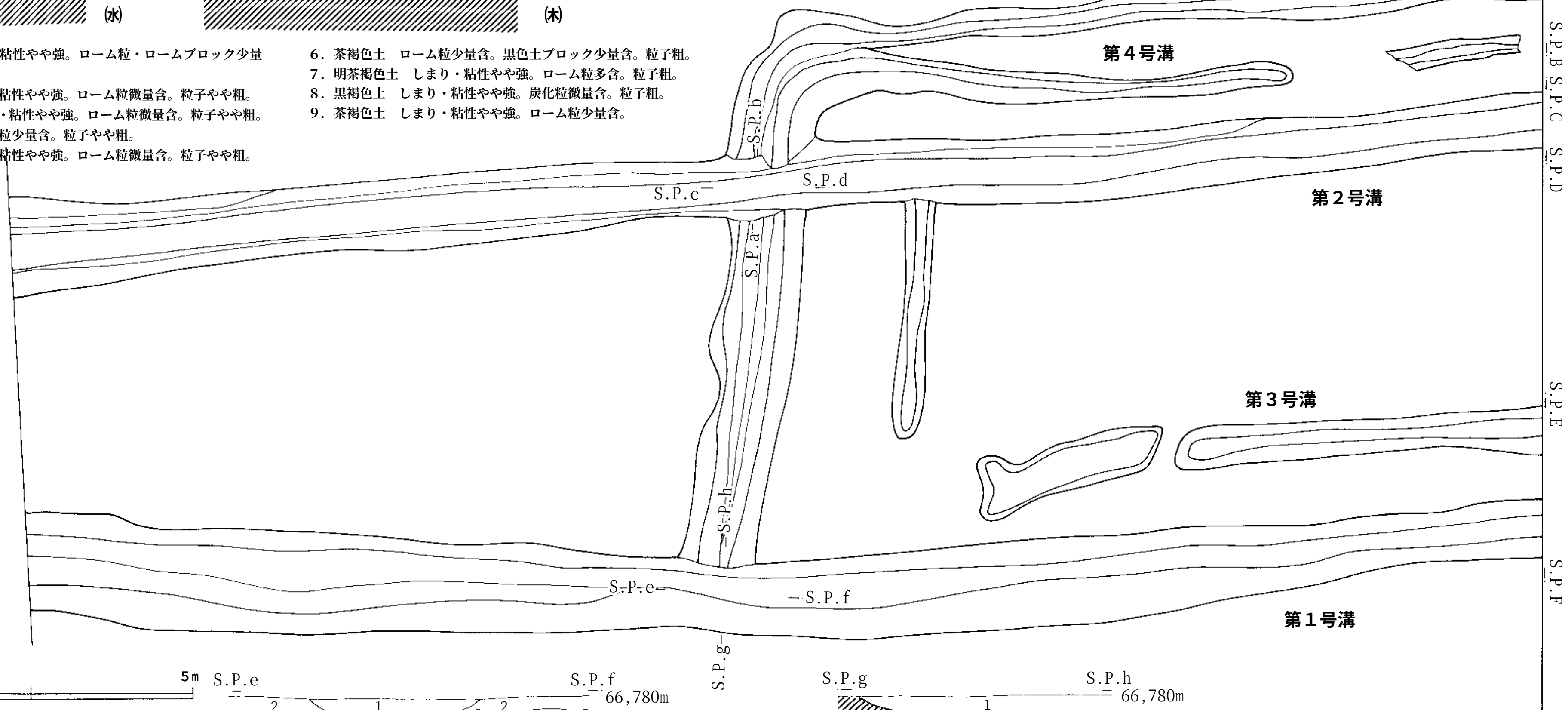
第６号溝
（第22図・図版９）

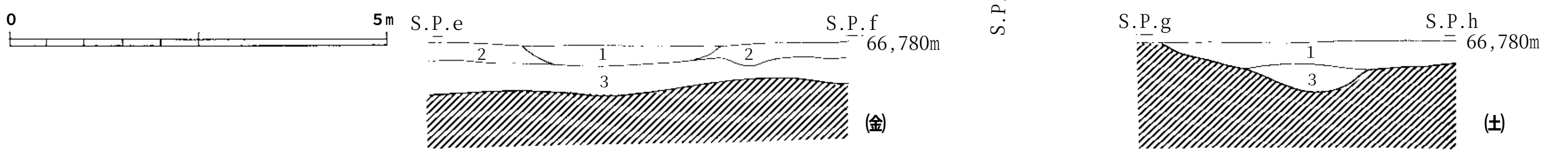
［位置］調査区の西端で、第１次範囲確認調査で確認された第１号溝に平行して確認されており、第1次調査第２調査区で確認された溝の延長にあたり、同一遺構と考えられる。
［形状］現道部に重なっており、調査区内で確認された長さは19m程である。地形的に西の埋没谷へと徐々に傾斜する地点にあたり、溝の掘込みが、ローム層面に及ばず、黒色土中に留まるため、中央部分のみその形状を確認し、他の部分はセクションで確認し



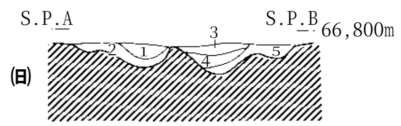
1．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子粗。
2．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3．黒茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
4．暗黄褐色土　ローム粒少量含。粒子やや粗。
5．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。

6．茶褐色土　ローム粒少量含。黒色土ブロック少量含。粒子粗。
7．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
8．黒褐色土　しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。

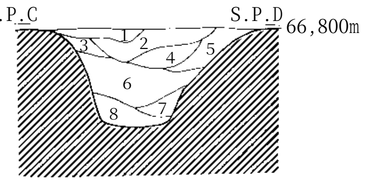




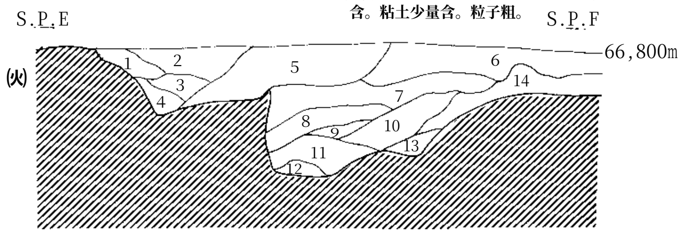
1．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや細。
2．黒茶褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや細。
3．黒茶褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや細。



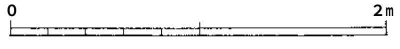
1．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや細。
2．黄茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多ブロック状に含。粒子粗。
3．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや細。
4．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒やや多ブロック状に含。粒子粗。



1. 黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
2. 明黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
3. 黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子粗。
4. 黒茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含、褐色土ブロック状に含。粒子粗。
5. 茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。黒色土ブロック状に含。粒子粗。
6. 茶褐色土　しまり・粘性やや強。黒色土・褐色土ブロック状に含。粒子粗。
7. 黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒やや多含。粒子粗。
8. 黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多含。粘土少量含。粒子粗。



1．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
3．褐色土　しまり・粘性やや強。粒子あらい。
4．明褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
5．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム・ロームブロックやや多含。粒子やや粗。
6．茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・焼土微量含。粒子やや粗。
8．褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・焼土微量含。粒子やや粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性強。粒子やや粗。
10. 明茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・焼土少量含。粒子やや粗。
11. 暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
12. 黄白色土　しまり・粘性強。粘質ローム粒多含。粒子やや粗。
13. 黄茶褐色土　しまり・粘性強。ローム・粘土粒やや多含。
14. 褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒ブロック状少量含。粒子やや粗。



第21図　第１～５号溝平・断面図

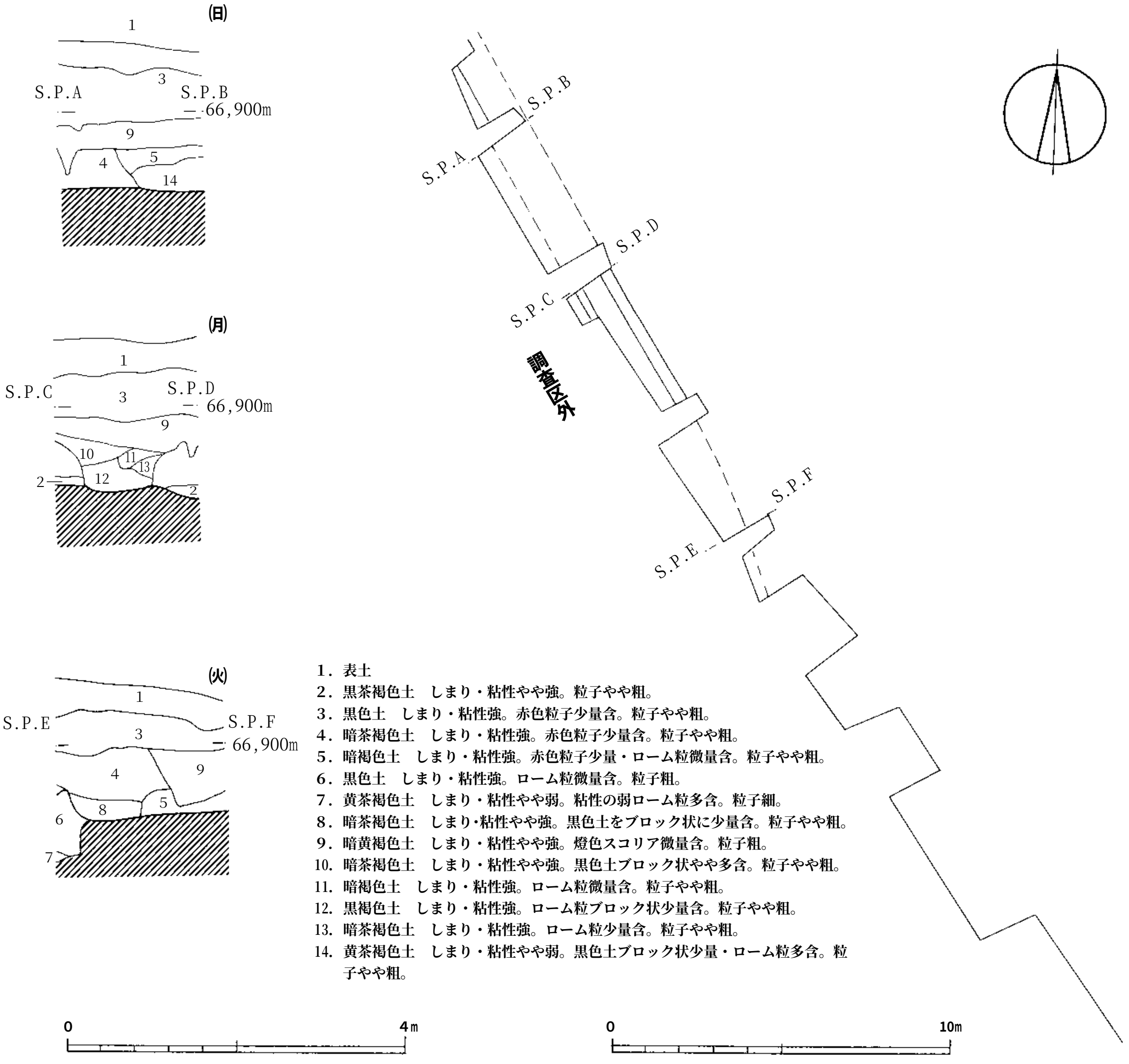
ている。南へ向かうほど、ローム層への掘り込みは深くなっている。幅は、1.2m、深さ57㎝を測り、断面は箱薬研形を呈している。

［覆土］第22図①②③。①は、第５・14層が溝の覆土。②は、第10～13層が溝の覆土。③は、調査区外にかかるが、第６・７層が溝の覆土。

［遺物］覆土中より遺物の出土は認められなかった。

［時期］覆土中より遺物の出土が無く、時期を決定する明確な根拠に欠ける。第１次範囲調査で確認された第１号溝に平行することから､関連する時期に属すると推定される。

尚、第１次確認調査で確認された第１号溝との距離は､６mである。



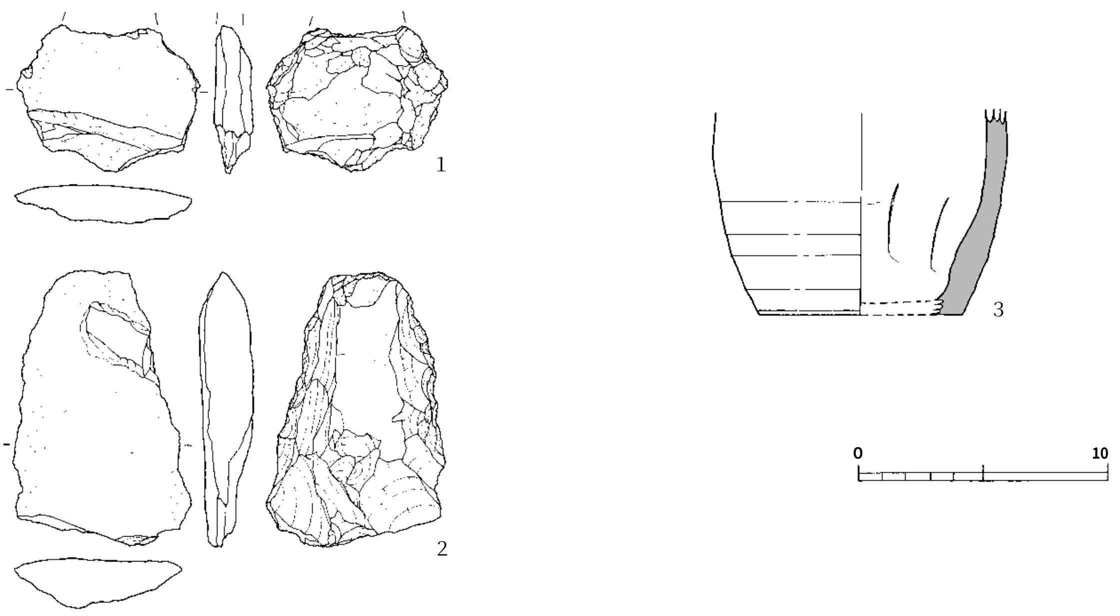
第22図　第６号溝平・断面図

(3) 包含層出土遺物

調査区内からは、平安時代に属する土師器・須恵器、近世陶磁器類の小片がわずかに出土しているが、図示するには至らなかった。この他、縄文時代の石器および剥片類がわずかであるが出土している。

縄文時代
(第23図・図版19)

第23図１は、上半部を欠く、流紋岩製の分銅形打製石斧。Ａ面に自然面を多く残し、側縁部の調整は粗い。長さ6.0㎝、幅7.4㎝、厚さ1.6㎝を測り、重量78.3gを量る。２は、緑泥岩製の撥形打製石斧の完形品。Ａ面は礫面をそのまま残している。側縁部は、急角度に調整されている。長さ11.1㎝、幅7.2㎝、厚さ2.2㎝を測り、重量190.2gを量る。



第23図　出土遺物

第３節　中島遺跡（寺内遺跡第３次範囲確認調査）

(1) 遺跡概観

本遺跡は、1997年３月に行われた第６回寺内廃寺調査指導委員会の指摘を受けて、寺内廃寺跡の基壇建物跡の中軸線と平行している土塁の、寺跡との関係を調査するために行われた。調査期間は、1998年11月２日から12月22日にかけてトレンチ調査約600㎡ を実施した。

今回調査対象となった土塁は、谷縁（やべり）館跡とされるが、詳細は明らかになっていない。1988年に江南町教育委員会によって土塁の概略測量が行われている（1995：江南町)。現況で、北辺に土塁と堀が確認されており、この北辺の土塁から南側へ、２条の土塁が40mの間隔をおいて延び、西側は80m延びて西に折れ内郭を巡るが、西辺は道路で切られている。東辺土塁の延長は、現状での認識は困難である。尚、東側の林道を挟んだ南東方向約100mの地点にも土塁と堀を確認しており、館跡の規模は、さらに広がるものと推定され、現状での、館跡の全容は不明である。

トレンチ配置
(第25図)

・第１トレンチ―土塁の南側に、寺内遺跡第２次範囲確認調査で確認された溝の延長を確認するために、東西方向に12m設定。

・第２・３トレンチ―土塁の南西方向の現道部の西側に、第１範囲確認調査第１調査区および第３調査区で確認された溝の延長を確認するために、東西方向に16m設定。

・第４トレンチ―南北方向に北側土塁（土塁１）・南側土塁（土塁２）に直行するように長さ48m設定。

・第５トレンチ―第４トレンチに直行し、北側土塁（土塁１）から延びる２条の土塁（土塁３・４）に直行するように、東西方向に長さ75m設定。

・第６トレンチ―北側土塁から延びる２条の土塁（土塁３・４）の間に平行するように南北方向に46m設定。

・第７トレンチ―北側土塁（土塁１）から南へ延びる東側の土塁（土塁３）の東側に平行するように45m設定。

・第８トレンチ―西側の土塁（土塁５）または堀の検出を目的として、第４トレンチに平行するように東西方向に14m設定。

(2) 遺構とその出土遺物

住居跡
第１号住居跡
(第24図・図版11)

〔位置〕第７トレンチ。 第２号住居跡の北西に位置する。

〔規模〕2.9m×？　全形はトレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、北側で36.5㎝、南側で39.9㎝。カマド・柱穴は確認されていない。

〔層位〕３層に分層され、自然堆積を示す。第８層は、ややしまりのある貼床。

〔遺物〕覆土中より、土師器・須恵器片が少量出土しており、床面直上より第25図1・2が出土している。

１は、須恵器の高台付椀。残存率90%。口径13.8㎝、底径7.0㎝、器高6.0㎝を測る。胎土に径２㎜程の白色砂粒を含む。色調は淡灰色（2.5Y5/2）で、焼成は堅緻。2は、土師器坏。残存率90%。口径13.0㎝、底径7.5㎝、器高3.4㎝ を測る。体部上半はナデ、下半

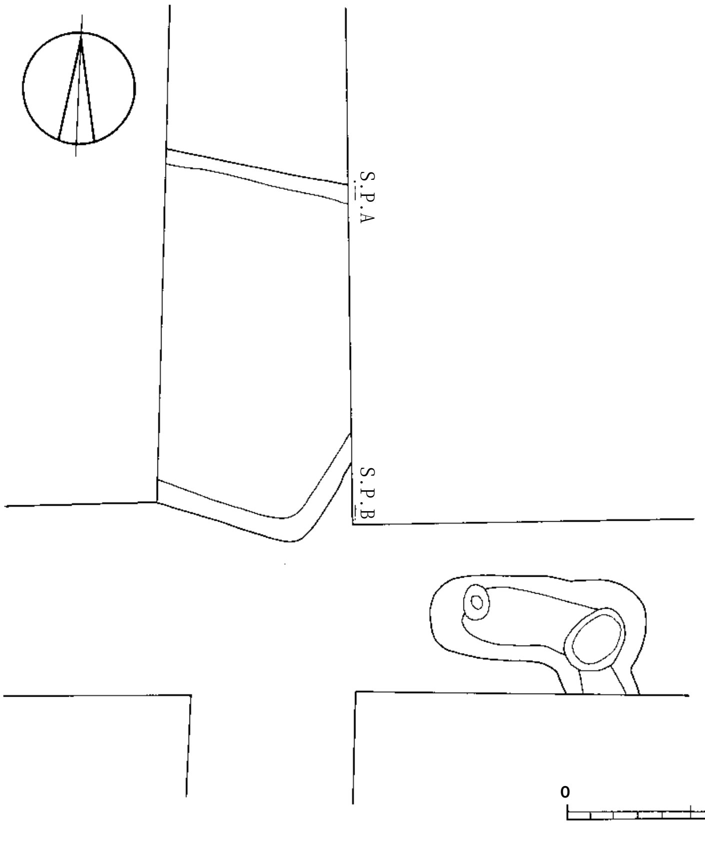
は指頭による押圧成形を施している。口唇部に細かい刻み目が加えられている。色調は淡橙色（7.7YR5/2）で、焼成はやや軟。

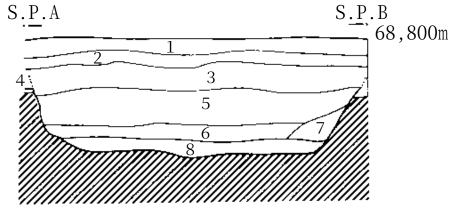
第２号住居跡
（第26図・図版11）

〔位置〕第５トレンチ。

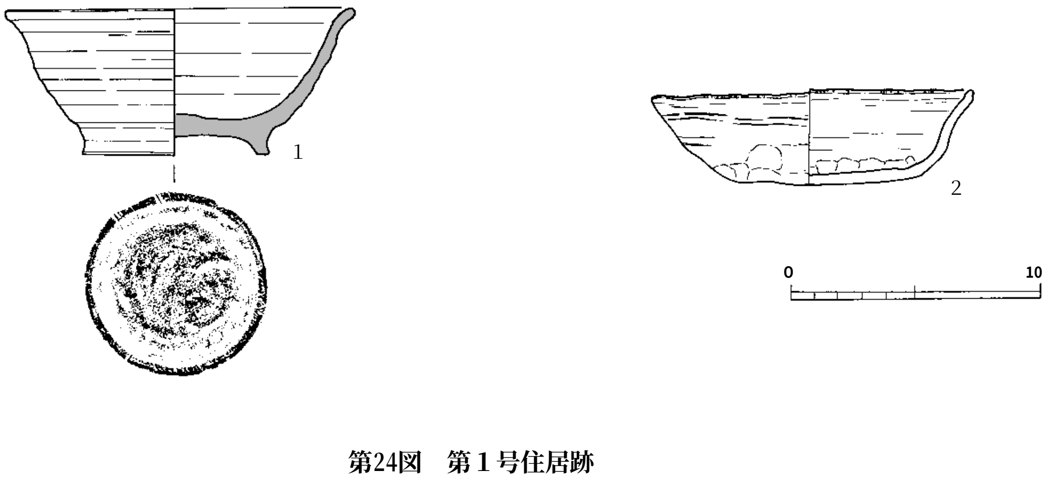
〔規模〕4.6m×？　全体は、トレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、東側で22.2㎝、西側で26.4㎝。カマド・柱穴は確認されていない。

〔層位〕８層に分層され、自然堆積を示す。第12層が、ややしまりのある貼床で、床面直上の、第９・10・11層に焼土を多く含む層があり、焼失住居の可能性がある。

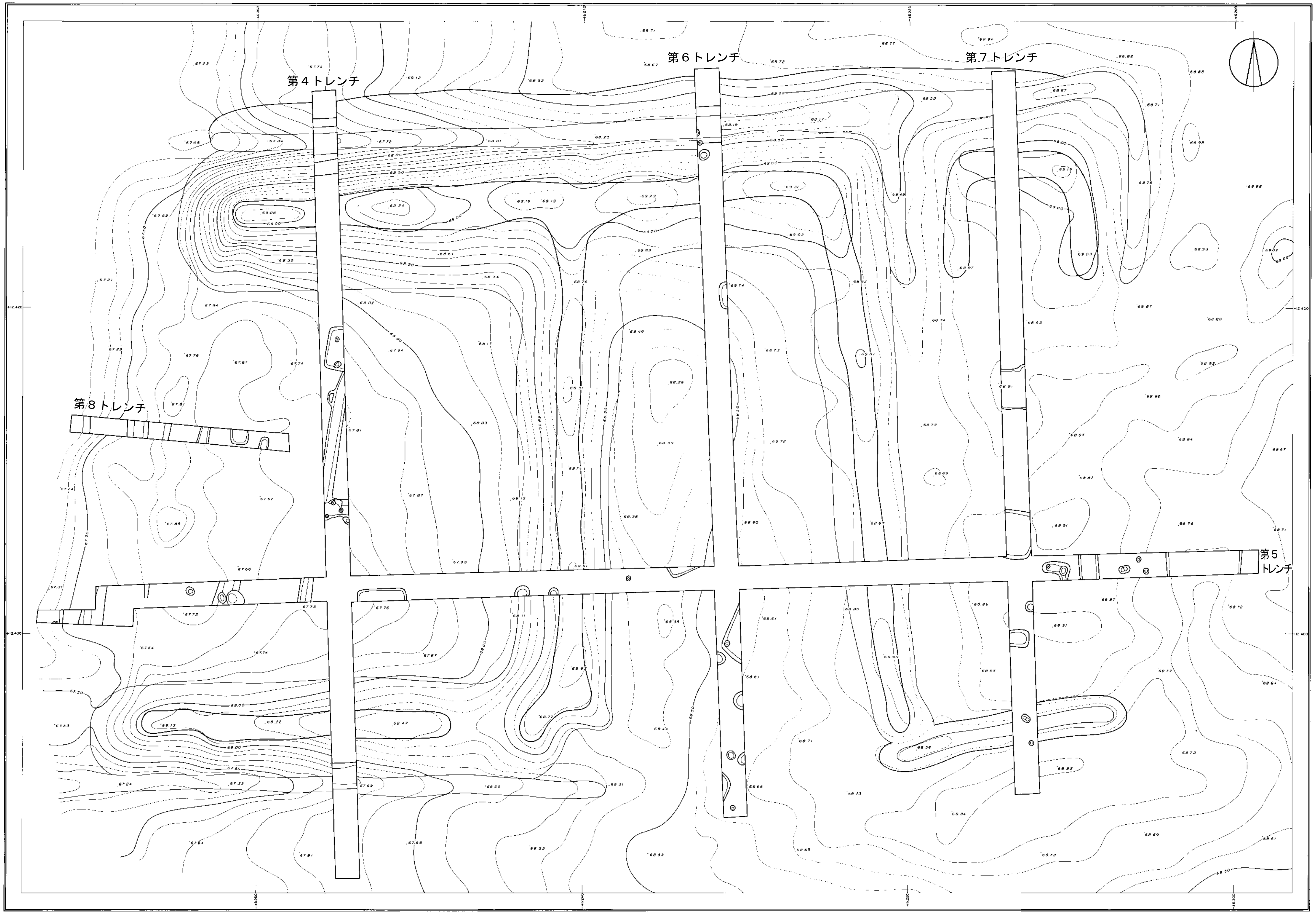




1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒子・炭化粒微量含。粒子やや粗。
6．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
7．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
8．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。



第24図　第１号住居跡



第25図　寺内遺跡第３次範囲確認調査全体図（1/250）

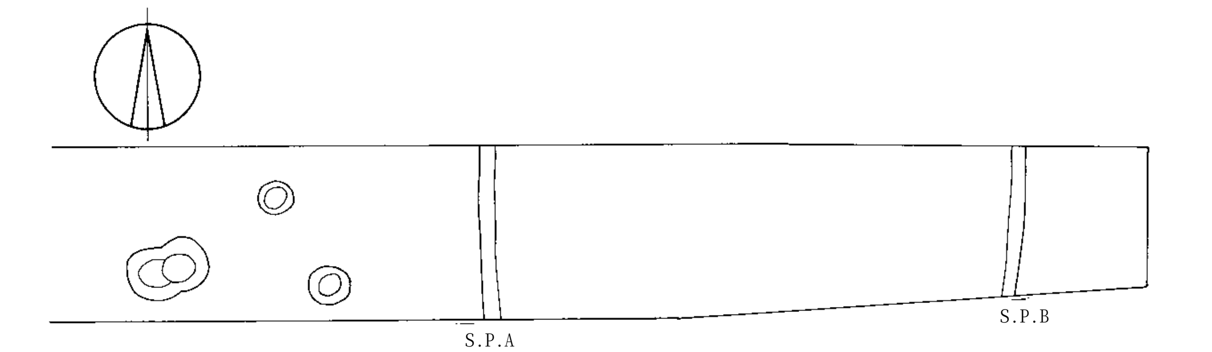
〔遺物〕覆土中より、土師器・須恵器の小片が少量出土しており、床面直上より、第26図１～３が出土している。

１は、完形の須恵器坏。口径16.9cm、底径6.5cm、器高3.9cm を測る。胎土に、径２mm前後の白色砂粒を多く含む。色調は淡灰色（2.5Y4/2）で、焼成は堅緻。２は、須恵器皿。残存率80％。口径14.5cm、底径6.0cm、器高1.3cm を測る。胎土に径２mm 前後の白色砂粒を多く含む。色調は淡燈色（10YR5/4）で、焼成はやや軟。３は、須恵器皿。残存率90％。口径14.0cm、底径7.0cm、器高2.5cm を測る。胎土に、径２mm 前後の砂粒を多く含む。色調は、淡灰色（5Y5/2）で、焼成は堅緻。

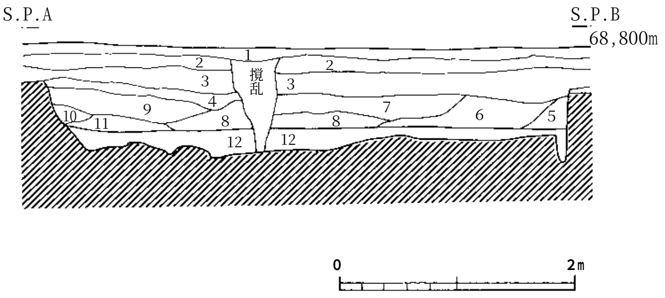
第３号住居跡
（第27図）

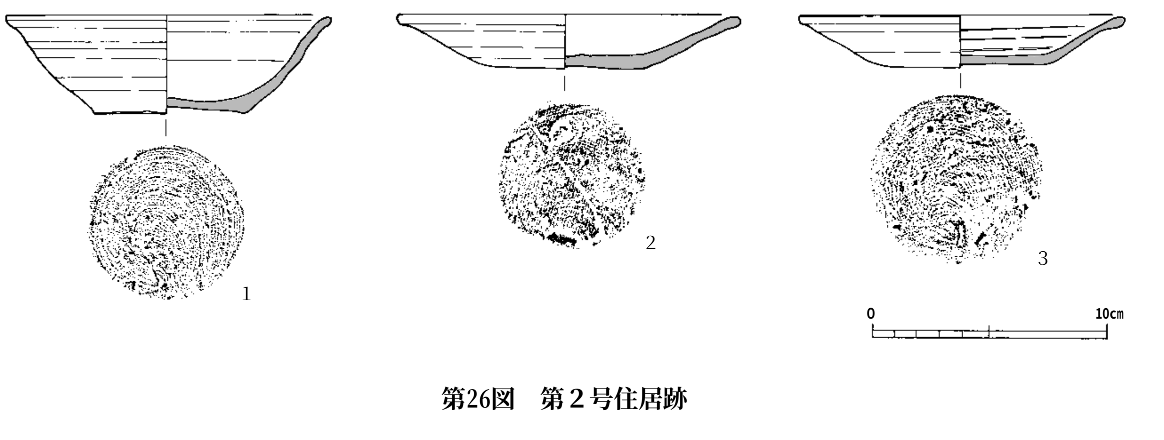
〔位置〕第７トレンチ。

〔規模〕2.5m×？　全体は、トレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、北側で14.0cm、南側で14.5cm。北側に、掘り込みの浅いカマドが確認されている。柱穴は確認されていない。



1．表土
2．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。
3．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。粒子やや粗。
4．暗黄茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
7．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子やや粗。
8．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック微量含。粒子やや粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック・焼土・炭化粒微量含。粒子やや粗。
10．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土・炭化粒微量含。粒子やや粗。
11．茶褐色土　しまり・粘性やや強。焼土やや多、炭化粒微量含。粒子やや粗。
12．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロックやや多含。粒子やや粗。





第26図　第２号住居跡

〔層位〕３層に分層され、自然堆積を示す。貼床は確認されず、軟質な床面となっている。

〔遺物〕覆土中より、土師器・須恵器の小片が出土しており、床面直上より、第27図１が出土している。

　１は、須恵器高台付椀。残存率40%。推定口径15.3cm、底径6.8cm、器高7.5cmを測る。胎土に径２mm程の白色砂粒を含む。色調は淡灰色（2.5Y5/2）で、焼成はやや軟。

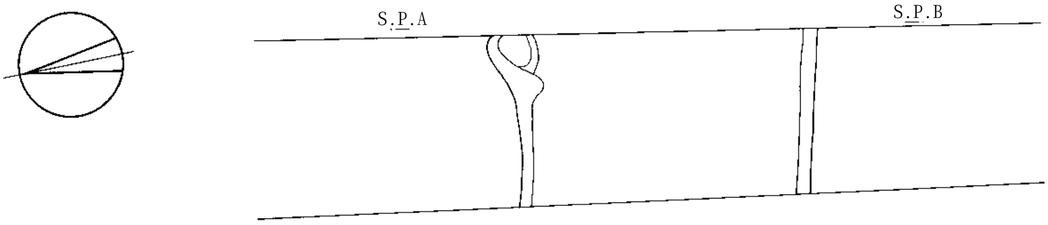
第４号住居跡
（第28図）

〔位置〕第６トレンチ。

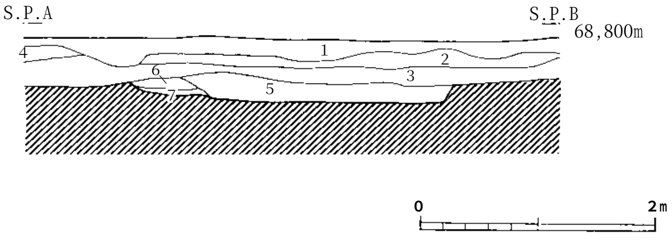
〔規模〕全形は、トレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、南側で51.9cm、西側で34.4cm。南西隅のピットは床面からの深さ36.8cmを測る。
カマドは確認されていない。

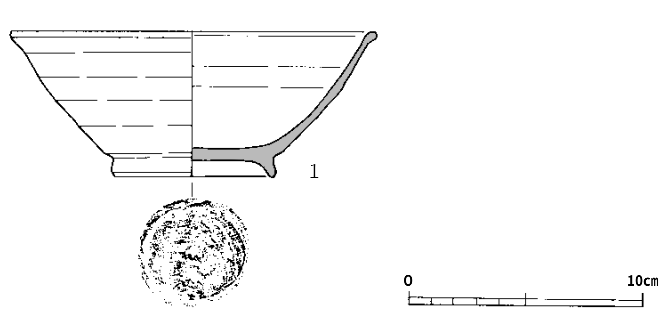
〔層位〕５層に分層され、自然堆積を示す。第８層が貼床。

〔遺物〕覆土中より、土師器・須恵器の小片が少量出土しているが、図示するには至らなかった。



1．表土
2．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。
3．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。粒子やや粗。
4．暗黄茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5．褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。焼土粒・ロームブロック微量含。粒子粗。
7．黄褐色土　しまり・粘性やや粗。焼土粒少量含。粒子やや粗。





第27図　第３号住居跡

竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構
(第29図・図版13)

〔位置〕第４トレンチ。

〔規模〕2.5m×？　全形はトレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、北側で27.0㎝、西側で25.2㎝。北側のピットは床面からの深さ48.0㎝、南側のピット33.3㎝を測る。カマドは確認されていない。第１号溝と重複するが、前後関係は不明。

〔層位〕８層に分層され、自然堆積を示す。貼床は確認されていない。

〔遺物〕覆土中より、遺物の出土は無い。

〔所見〕明確な時期決定の根拠に欠けるが、覆土の状態から、平安時代の住居ではなく、中世の住居跡の可能性が考えられるため、竪穴状遺構として報告する。

第２号竪穴状遺構
(第29図・図版13)

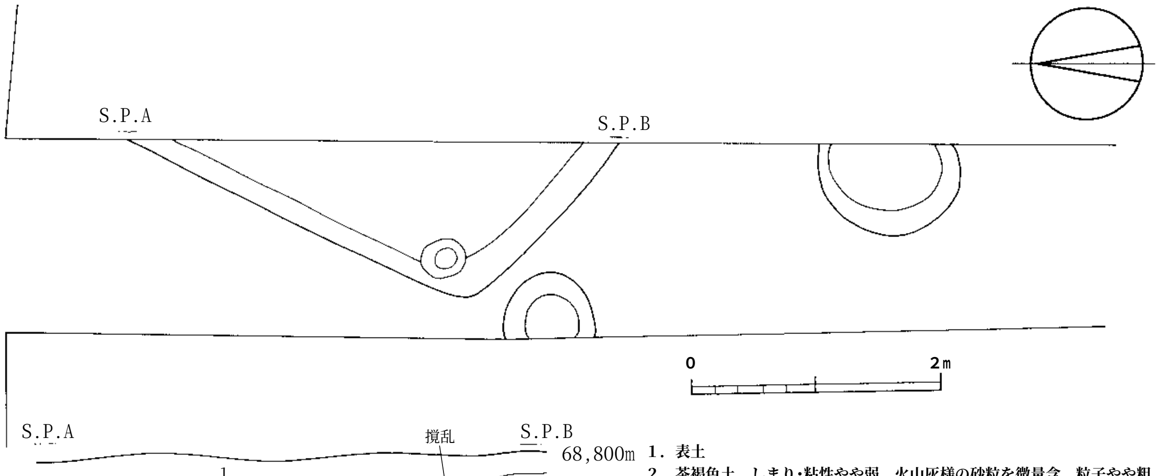
〔位置〕第５トレンチ。

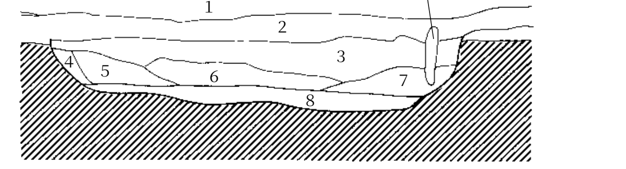
〔規模〕2.5m×？　全形は、トレンチ外にかかり規模・形状は不明。掘込みの深さは、東側で32.6㎝、西側で31.1㎝。貼床は確認されず、やや軟質な床面となっている。カマド・ピットは確認されていない。

〔層位〕２層に分層され、東側からの自然堆積を示す。

〔遺物〕覆土中より遺物の出土は確認は無い。

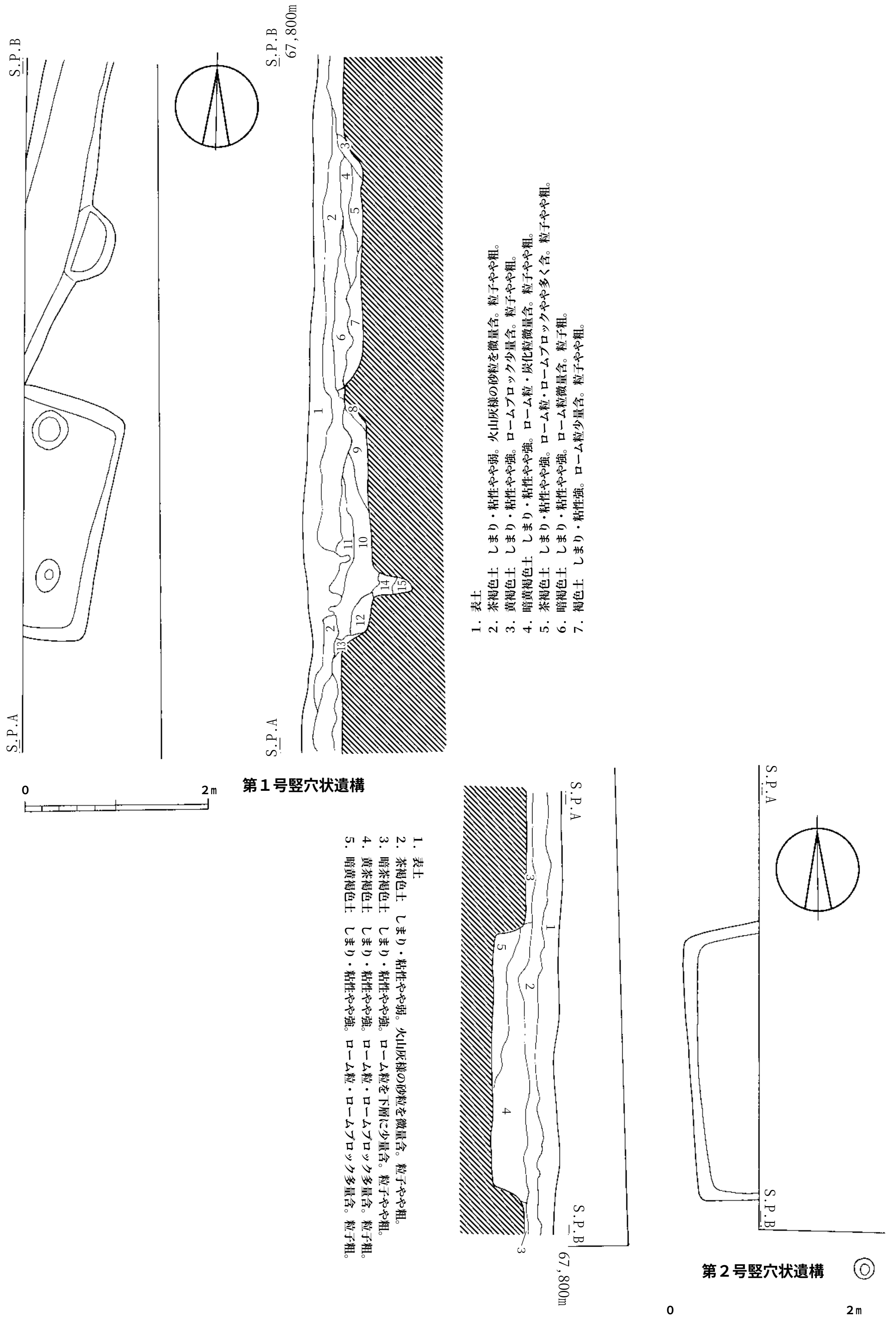
〔所見〕明確な時期決定の根拠に欠けるが、覆土の状態から、平安時代の住居ではなく、中世の住居跡の可能性が考えられるため、竪穴状遺構として報告する。





1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黒褐色土　しまり強、粘性やや弱。ローム粒・ロームブロック・焼土微量含。粒子やや粗。
5．褐色土　しまり強、粘性やや弱。ローム・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
6．暗黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロック多量含。粒子粗。
7．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
8．暗黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多量含。粒子粗。

第28図　第４号住居跡

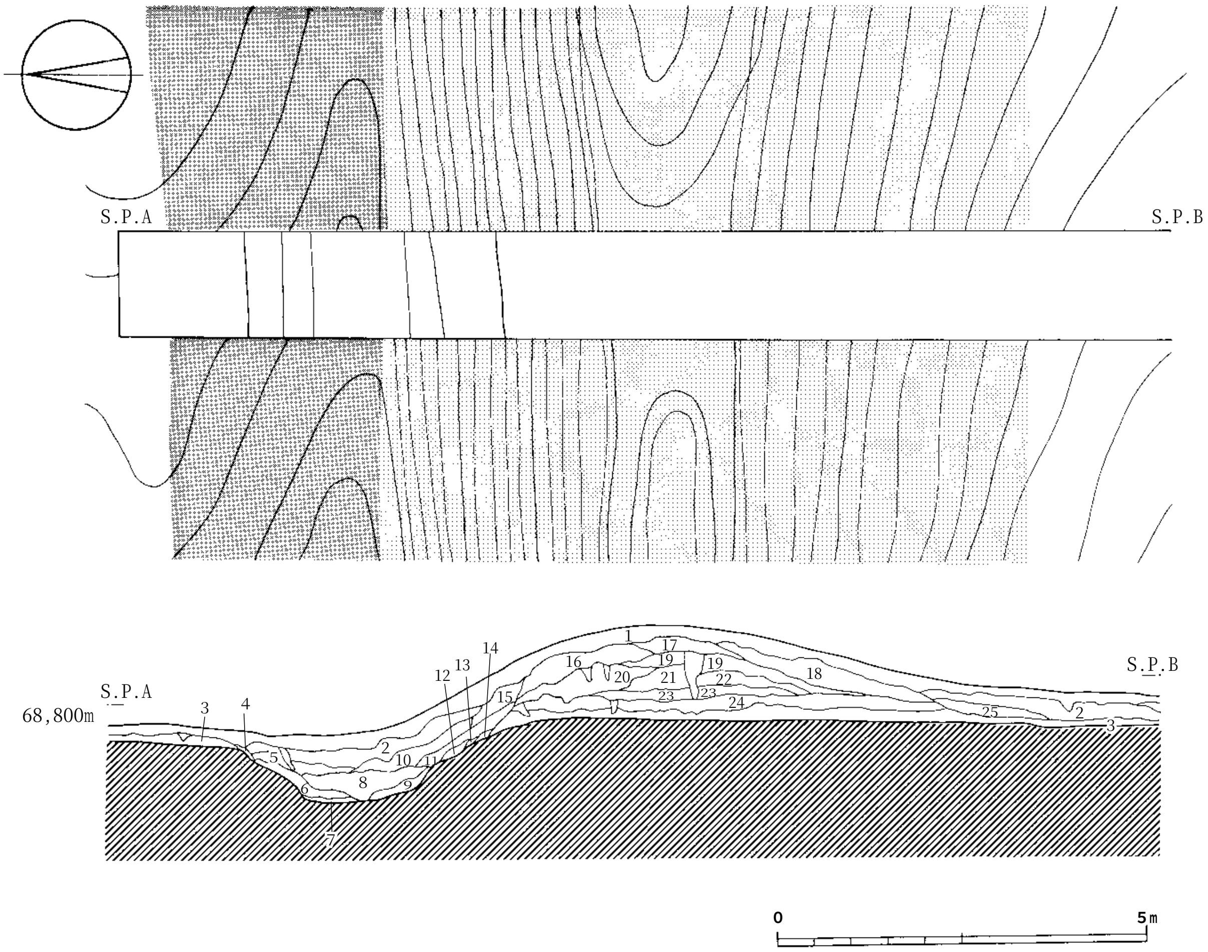


第29図　第１．２号竪穴状遺構平・断面図

土塁・堀
土塁1
(第30～32図)
(図版12)

土塁1は、北辺の土塁で、東西方向に62m程確認されている。幅は、西側で7.2m、東側で7.1m、高さは、西側で1.23m、東側で0.9mを測り、東に向かうにつれ、高さを減じ、東端は不明となっている。また、この土塁の北側には現状でも堀跡が確認でき、第4トレンチで上面幅5.2m、第7トレンチで2.3mの、断面箱薬研形を呈する堀跡を確認している。

・第4トレンチ（第30図・図版12）第24層が旧表土。第16～23・25層が土塁盛土。



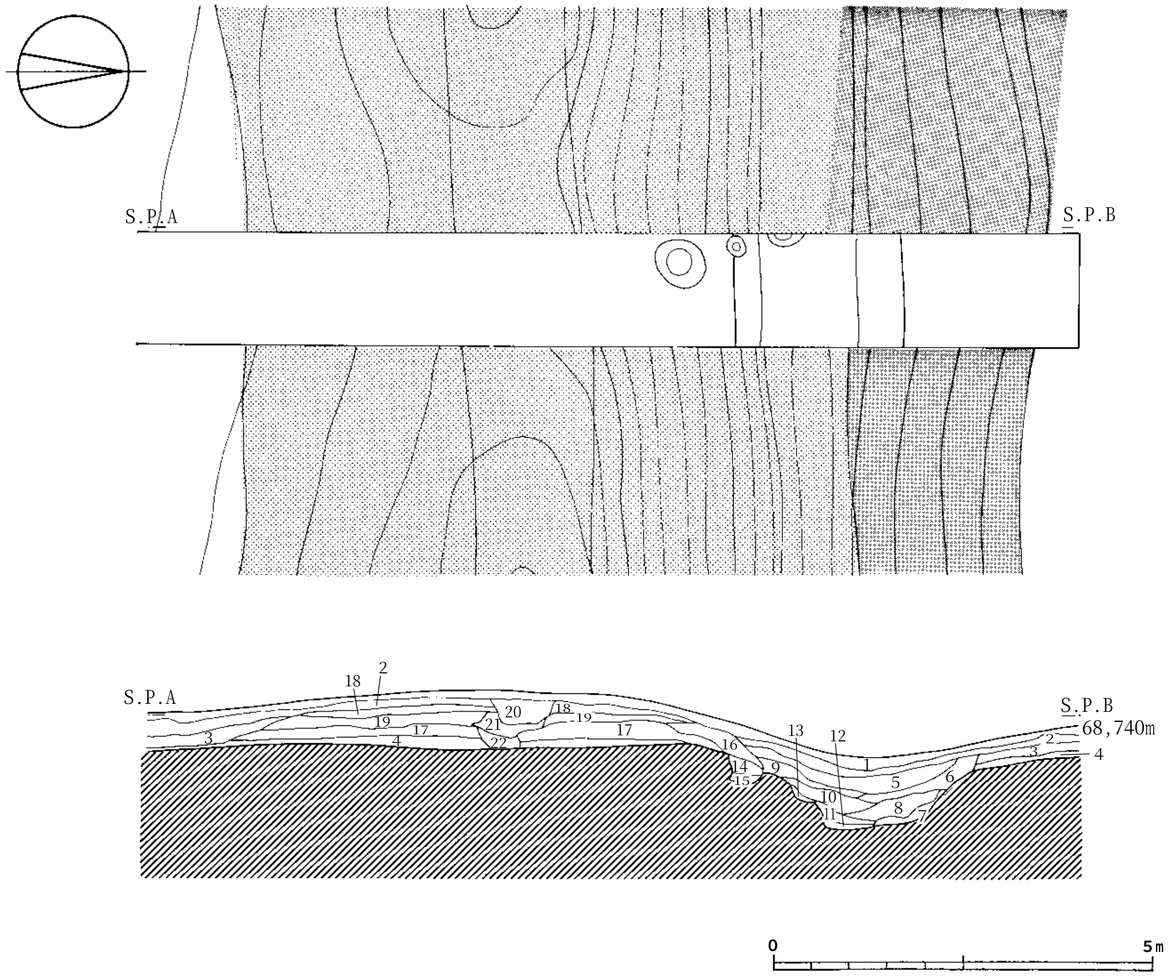
1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
6．黄茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒多量含。粒子やや粗。
7．暗褐色土　しまり・粘性やや弱。炭化粒微量含。粒子やや粗。
8．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや細。
9．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
10．暗褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
12．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
13．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
14．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
15．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。
16．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子粗。
17．褐色土　しまり・粘性強。ロームブロック少量含。粒子粗。
18．暗褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。
19．暗褐色土　しまり・粘性強。ロームブロック少量含。粒子粗。
20．黄茶褐色土　しまり。粘性強。ローム粒多量、ロームブロック少量含。粒子粗。
21．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロックよりなる層。粒子粗。
22．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多量含。粒子粗。
23．明茶褐色土　ローム粒多量含。ロームブロック少量含。粒子粗。
24．黒褐色土　しまり・粘性強。旧表土。粒子やや粗。
25．暗褐色土　しまり・粘性強。下層にローム粒やや多含。粒子やや粗。

第30図　第4トレンチ北側土塁平・断面図

第５～15層が堀覆土。土塁は、幅7.2m、高さ1.23mを測る。堀は、上面幅で5.2m、底面で1.2mを測り、断面は箱薬研形が少し丸くなった形状を呈している。

・第６トレンチ（第31図・図版12）第17層が旧表土。第16・18・19・21層が土塁盛土。第５～12層が堀覆土。第13層は、炭化粒が多く含まれており、古墳時代五領期の土器が出土していることから、該期の住居跡が存在した可能性がある。土塁は、幅7.1m、高さ0.9mを測る。堀は、上面幅で2.3m、底面で1.2mを測り、断面は箱薬研形を呈している。

・第７トレンチ（第32図）第４層がソフトローム層で、黒色土の旧表土は確認されていない。第５・６層が土塁盛土。また、現状で、土塁の北側でやや落ち込みが確認されるも



1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
6．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
7．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土粒やや多含。粒子やや粗。
8．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、焼土粒微量含。粒子やや粗。
9．明褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子粗。
10. 茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多量含。粒子粗。
11. 暗黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子粗。
12. 暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック多量含。粒子粗。
13. 黒褐色土　しまり・粘性やや弱。炭化粒やや多含。粒子細。
14. 暗褐色土　しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子やや粗。
15. 黄褐色土　しまり粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
16. 茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
17. 黒褐色土　しまり・粘性強。旧表土。粒子やや粗。
18. 明茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。
19. 褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒・ロームブロックやや多含。粒子粗。
20. 明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
21. 黄茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多、ロームブロック少量含。粒子やや粗。
22. 黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロックやや多含。粒子粗。

第31図　第６トレンチ北側土塁平・断面図

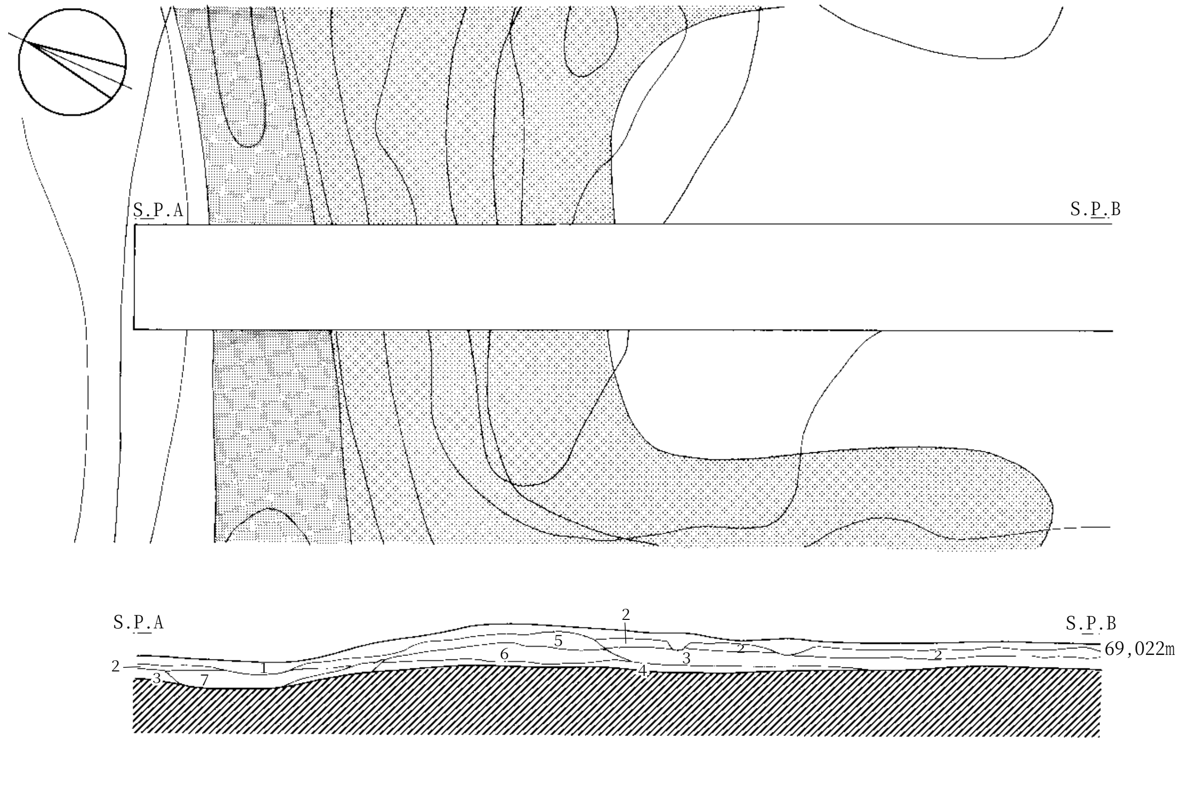
のの、堀の掘り込みはほとんど確認されず、第７層が覆土に該当する。土塁は、幅3.9m、高さ0.6mを測る。堀は、上面幅で1.6mを測り、断面は浅い鍋底状を呈している。

土塁２
（第33・34図）

土塁２は、南辺の土塁で、東西方向に33m程確認されている。幅は5.2m、高さは0.98mを測り、東側は、土塁１より延びる南北方向の土塁３に取り付いている。また、この土塁の南側には現状でも堀跡が34m程確認でき、第４トレンチで上面幅1.65mの、断面箱薬研形を呈する堀跡を確認している。また、この堀跡の東側延長部分（第７トレンチ付近）で、現状で堀状の窪みが認められるが、トレンチ調査では掘り込みは確認されていない。

・第４トレンチ（第33図・図版12）第13層が旧表土。第12・13・15・16層が土塁盛土。第５～11層が堀覆土。土塁は、幅5.2m、高さ0.98mを測る。堀は、上面幅で1.65m、底面で1.0mを測り、断面は箱薬研形を呈している。この、堀跡の溝底付近より、内耳土鍋が出土している（第44図20）。

20は、口径33.7㎝、底径21.7㎝、器高17.8㎝ を測る。色調は、淡灰色（7.5Y6/1）で、



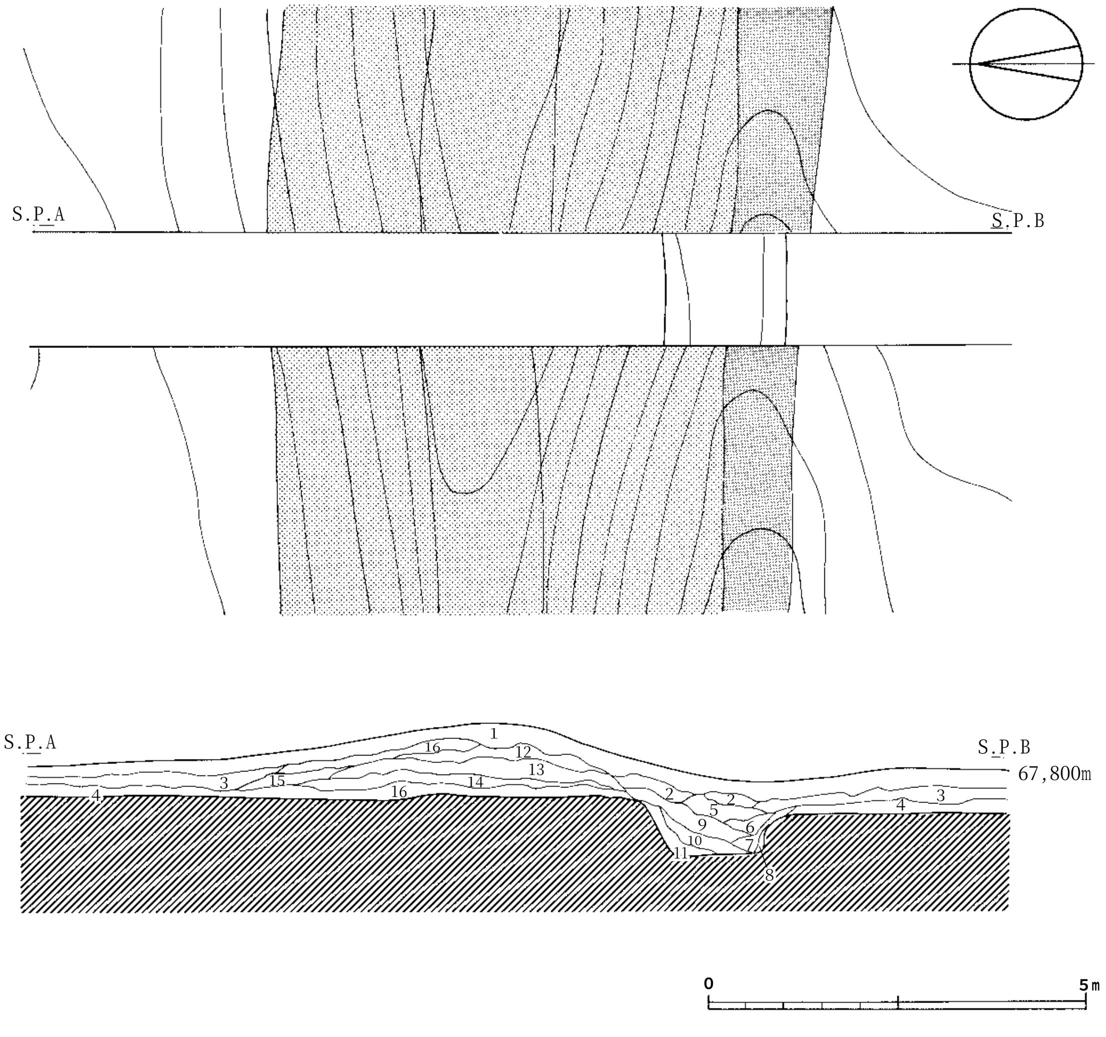
1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。
6．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7．暗褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒多含。粒子やや粗。

第32図　第７トレンチ北側土塁平・断面図

焼成はやや軟。平底で、内面に明瞭な段を形成する。内耳は付かない。体部下半に、被熱および「スス」「オコゲ」状の付着物が認められるが、底面には認められない。底部と体部の接合部外面には指頭圧痕が部分的に認められる。堀跡に伴う唯一の遺物で、器壁が薄手で、体部が直線的である点、平底である点など、その特徴から、15世紀後半の所産と推定される。

・第７トレンチ（第34図）現状で、土塁１より延びる南北方向の土塁４に取り付くように、幅2.1m、長さ15.5mの堀状の落ち込みが確認されたため、トレンチを設定した。

しかし、堀の掘り込みは確認されず、土塁の痕跡も確認できなかった。尚、この窪地の下層よりピットが３基確認されている。深さはいずれも20㎝程であり、時期不明である。



1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
6．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7．黒褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロック微量含。粒子粗。
8．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
10．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
12．黄茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒をブロック状に多量含。粒子やや粗。
13．黒褐色土　しまり・粘性強。旧表土。炭化粒微量含。粒子やや粗。
14．暗茶褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層への漸移層。粒子やや粗。
15．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
16．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。

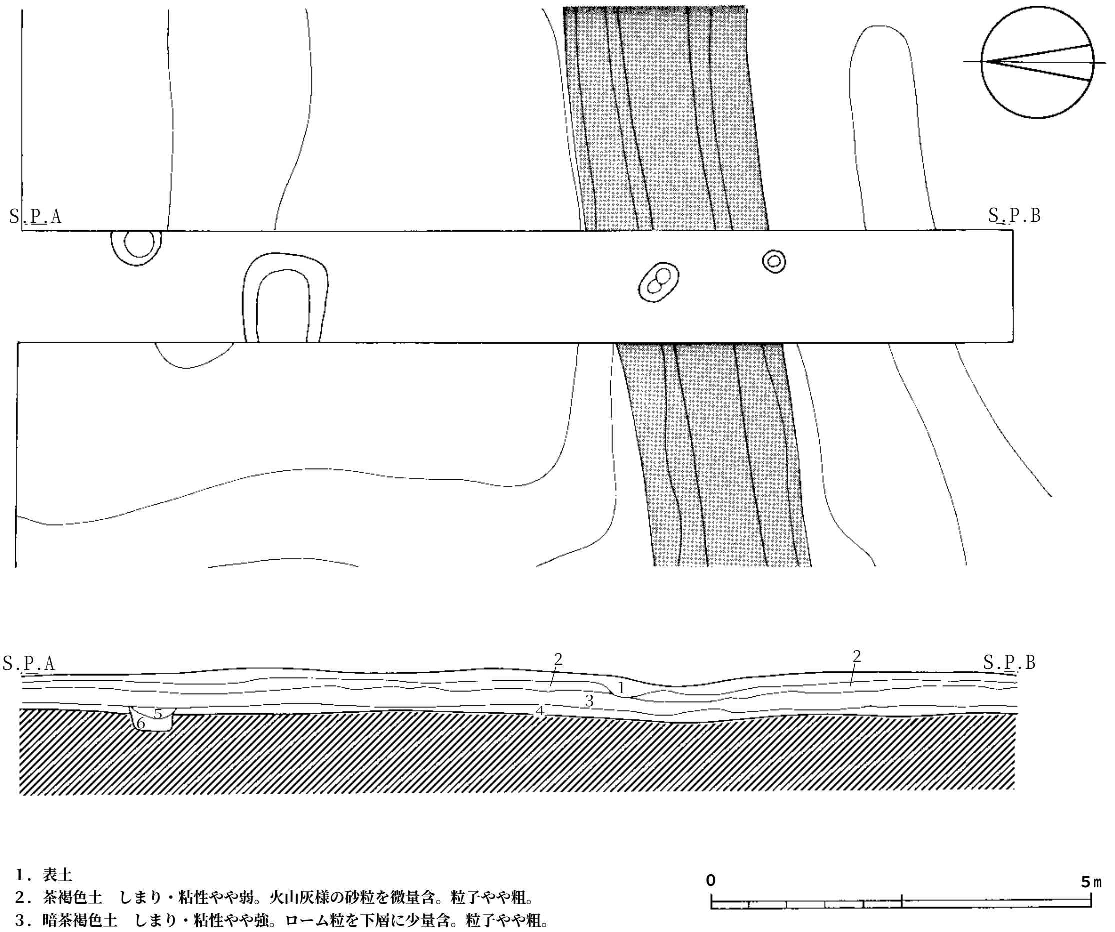
第33図　第４トレンチ南側土塁平・断面図

土塁３
（第35図・図版13）

　土塁３は、土塁１と２に取り付く南北方向の土塁で、32m程確認されている。幅は12m、高さは1.1mを測る。

・第５トレンチ（第35図・図版13）第４層がソフトローム層。黒色土の旧表土は確認されていない。第５～11・13・14層が土塁盛土。この土塁下より、ピットが２基検出されているが、本土塁に伴うものではない。また、第11層下層より、板石塔婆が３基出土している（第36図１・２）。

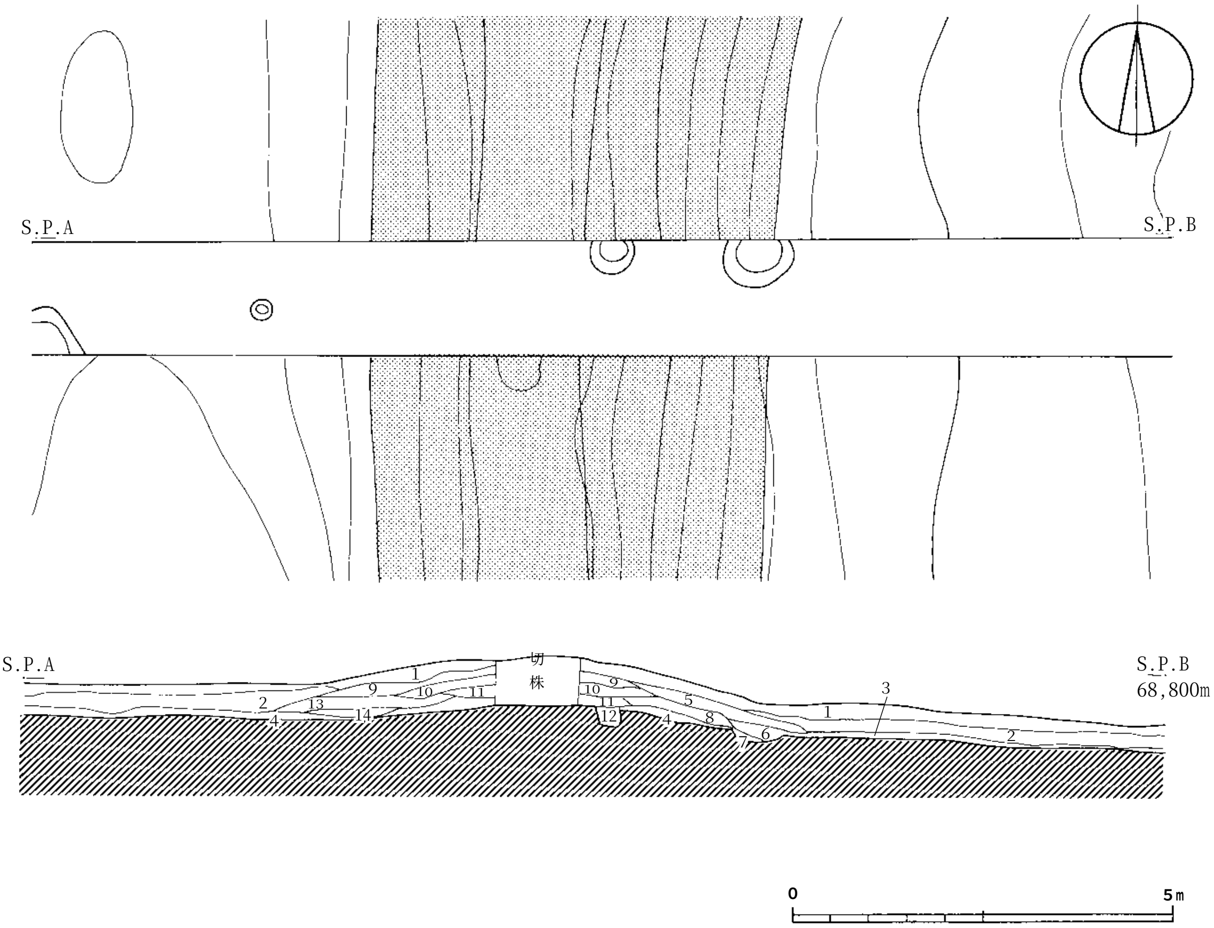
　１は、左1/3および脚部を欠損する。残存高49㎝、厚み2.3㎝ を測る。阿弥陀如来の一尊種子で、「文明十八年六月」（1486年）の紀年銘が刻まれている。裏面には、工具痕は確認されない。２は、頭部のみの残存。残存高30㎝、幅24.5㎝、厚み3.4㎝を測る。阿弥陀如来の一尊種子。裏面に、工具痕を残す。この他、９㎝ 程の板石塔婆の破片が１点出土しているが、図示するには至らなかった。これらの板石塔婆は、意識的かどうかは不明であるが、本土塁の構築に際し、盛土中に入り込んだものと推定される。



１．表土
２．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
３．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
４．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
５．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
６．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子粗。

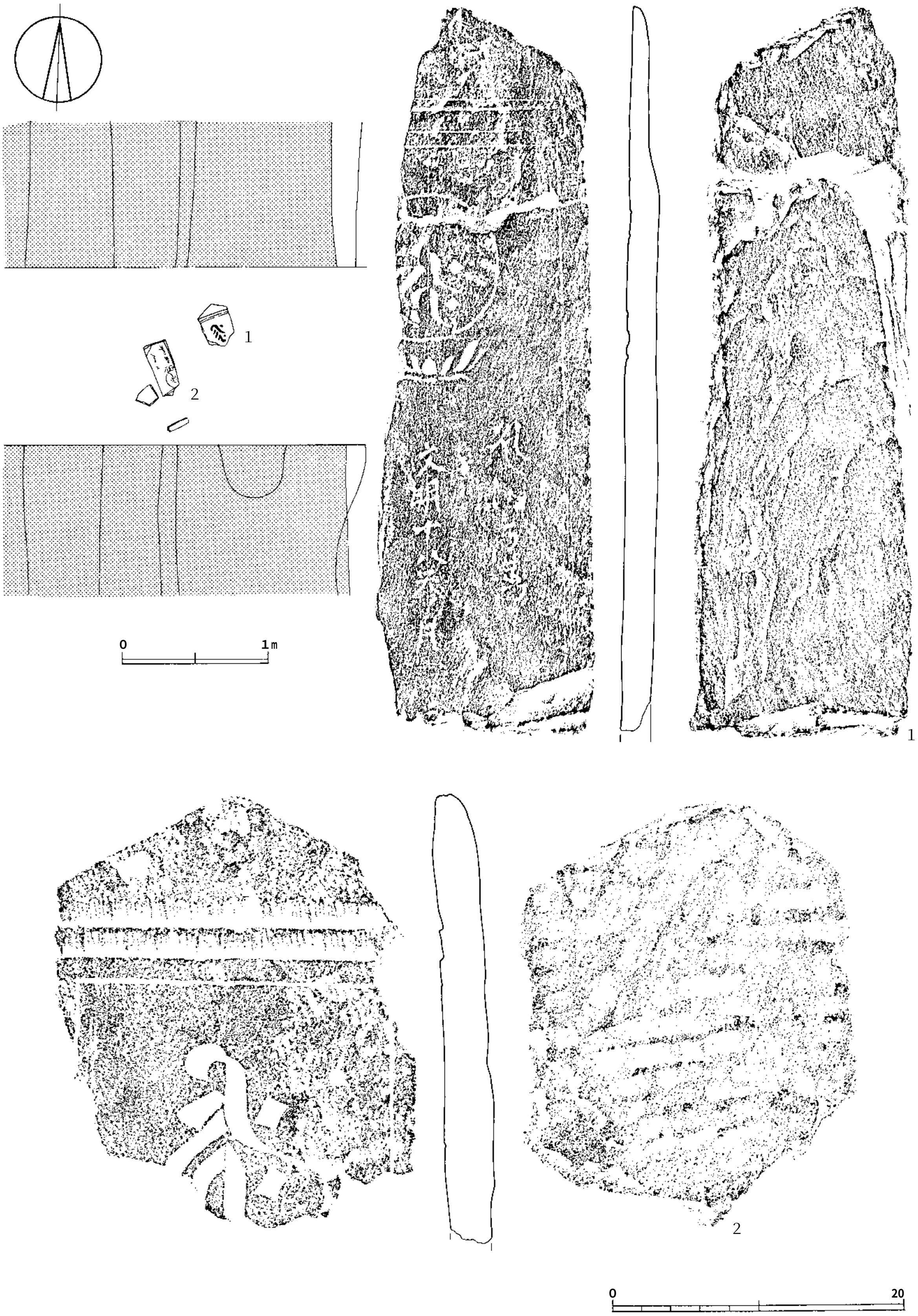
第34図　第７トレンチ平・断面図

土塁４　土塁４は、土塁３の東側に平行するもので、土塁１より南北方向の土塁で、32ｍ程確認されている。北側は、土塁１に取り付き、幅３ｍ、高さ１ｍ程を測るが、南へ向かうにしたがい、その高さを減じ、第５トレンチ付近では、現状で30㎝程の盛り上がりしか確認できず、第５トレンチでは、盛土を確認することができなかった。



１．表土
２．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
３．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
４．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
５．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒少量含。粒子やや粗。
６．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
７．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多く含。粒子やや粗。
８．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
９．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
10．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
12．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
13．暗褐色土　しまり・粘性強い。ローム粒微量含。粒子やや粗。
14．暗褐色土　しまり・粘性強い。ロームブロック少量含。

第35図　第５トレンチ土塁平・断面図

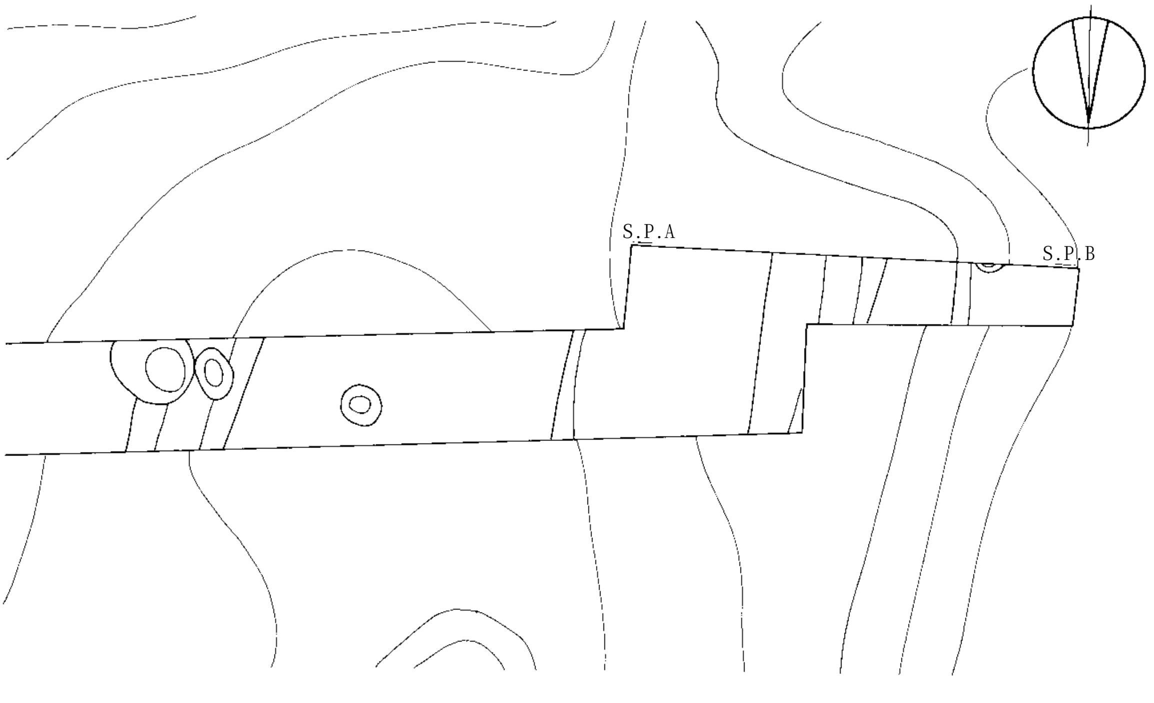


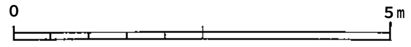
第36図　板石塔婆

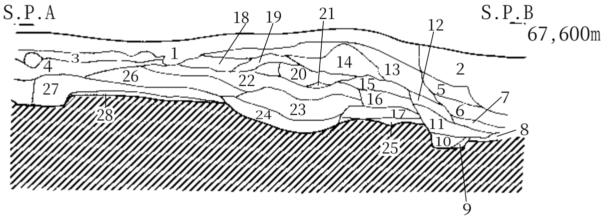
土塁５
（第37・38図）1

　西辺の土塁を確認するため、第５トレンチの西端を延長し、第８トレンチを設定しており、現状では確認できないものの、土塁の痕跡および堀跡の一部を確認している。

・第５トレンチ（第37図）現状では、土塁の盛土は確認できないものの、本トレンチ西端で、埋没した土塁の痕跡を確認している。第14〜26層が土塁の盛土と推定される。しまりが全体的に強く、ロームブロックを含んでいることから、人為的に盛り上げたものと判断される。幅は4.5m、高さはローム面より1.1mを測る。第９〜12層は、堀跡の覆土と推定される。西側の立ち上がりは、現道の砕石による攪乱を受け不明であるが、溝底幅で42㎝ を測る。尚、この土塁の下に、幅1.6m程の浅い鍋底形の溝が検出されている。セクションでは、土塁と一体の施設と捉えられ、地形的に下がる西側では、北側の土塁とその高さを揃えるには、かなりの高さが必要であることから、崩落防止等の土塁





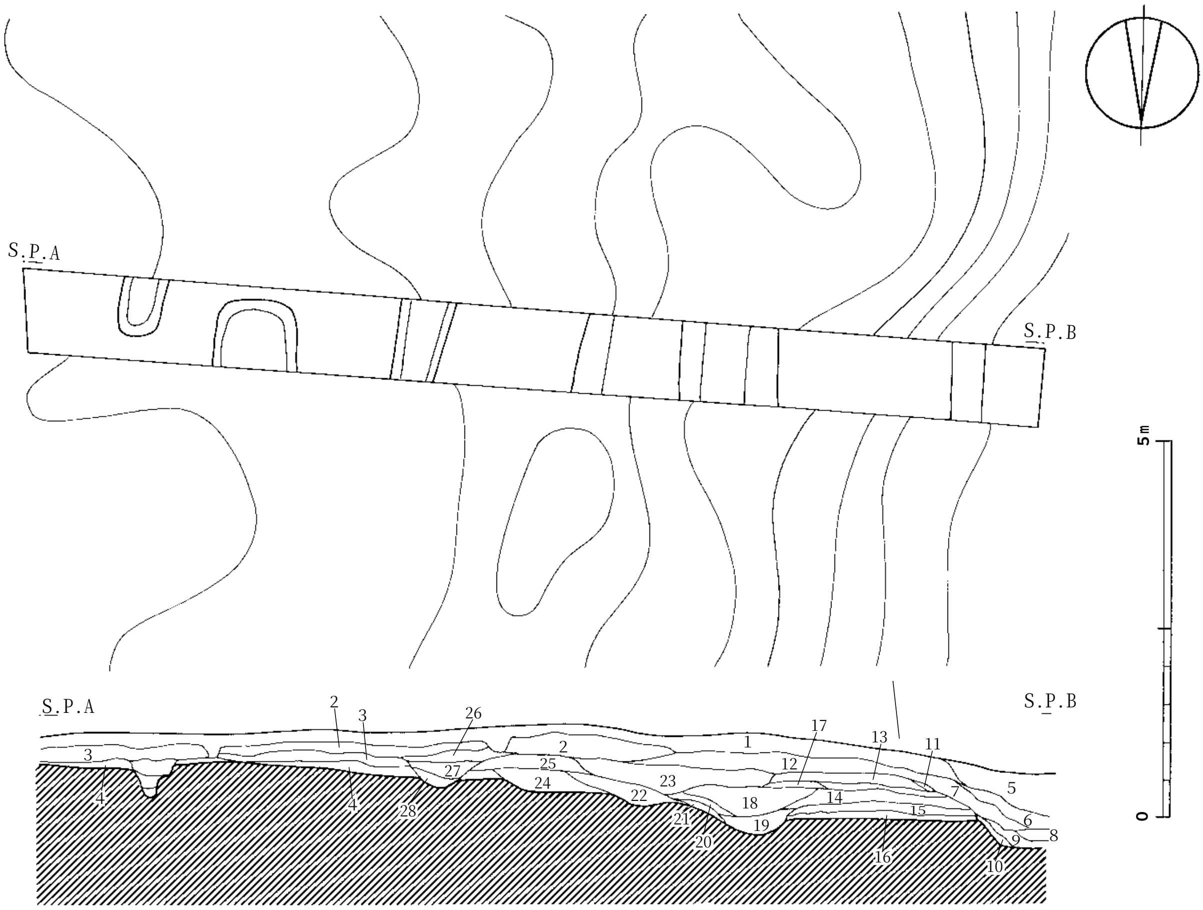


1．表土
2．砕石　（道路）
3．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
4．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
5．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
6．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7．明褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
8．暗褐色土　しまり・粘性強。粘質化進。粒子粗。
9．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
10．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
11．明褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。ロームブロック微量含。粒子粗。
12．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
13．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
14．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロックからなる。粒子粗。
15．茶褐色土　しまり・粘性やや粗。粒子ややあらい。
16．暗茶褐色土　しまり・粘性やや粗。ローム粒微量含。
17．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
18．明褐色土　しまり・粘性やや粗。ローム粒少量、ロームブロック微量含。粒子粗。
19．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多、ロームブロック少量含。粒子粗。
20．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒ブロック状に少量含。粒子粗。
21．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロックやや多含。粒子粗。
22．茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
23．茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子粗。
24．茶褐色土　茶褐色土　しまり。粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
25．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒、ロームブロック多量含。粒子やや粗。
26．茶褐色土　しまり・粘性やや粗。ローム粒微量含。粒子やや粗。
27．黒褐色土　しまり強、粘性弱。砂質化したローム層。粒子細。

第37図　第５トレンチ土塁平・断面図

構築上の下部施設とも推定される。

・第８トレンチ（第38図）第５トレンチ同様、現状では土塁の盛土は確認できないが、土塁および堀跡の一部を確認している。第11～21層が土塁の盛土と推定される。しまりが全体的に強く、ロームブロックを含んでいることから、人為的に盛り上げたものと判断される。尚、第22～25層も土塁の盛土の可能性もあるが、現状では判断できなかった。幅は4.2m、高さはローム面より0.89mを測る。第８～９層は、堀跡の覆土と推定される。西側の立ち上がりは、現道下にあたり未確認である。第５トレンチ同様に、この土塁の下に幅1.3m程の浅い鍋底形を呈する溝が検出されている。セクションでも、土塁と同一



1．表土
2．砕石（道路）
3．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
4．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
5．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
6．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
7．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
8．褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
9．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。火山灰微量含。粒子やや粗。
10．暗茶褐色土　しまり・粘性やや弱。砂質化したローム粒少量含。粒子やや粗。
11．明茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
12．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
13．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
14．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
15．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
16．黄褐色土　しまり強、粘性やや弱。ロームブロックを貼付した様な層。粒子粗。
17．黄褐色土　しまり・粘性強。ローム・ロームブロック多含。粒子粗。
18．暗茶褐色土　ローム粒微量含。粒子やや粗。
19．暗褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
20．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
21．明褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
22．黒褐色土　しまり・粘性強。ローム粒微量含。
23．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
24．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
25．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
26．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
27．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子粗。
28．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多く含。粒子やや粗。

第38図　第８トレンチ土塁平・断面図

の施設と捉えられ、同様の機能が想定される。

溝

第１号溝
（第39図・図版12）

［位置］第１トレンチの東端から第５トレンチを横断し、第４トレンチ東壁まで、33.5m程を確認している。

［規模］長さ33.5m、幅0.9m、深さ0.9mを測り、断面は箱薬研形を呈している。

［覆土］第39図①②。①は、第5トレンチの南壁で確認されたもので、第５～９層が溝の覆土。②は、第3トレンチ北側壁のセクションで、第17～20層が溝の覆土。

［遺物］覆土中より遺物の出土は無い。

［時期］遺物の出土が無く、時期決定の根拠に欠けるが、土塁２と重複しこれを切っていないことから、土塁構築の時期よりも古い時期の溝と推定される。

［所見］規模・形態的には、寺内遺跡第２次範囲確認調査で確認された第２号溝に類似するが、方向がやや異なっており、この溝が方向を変えている可能性もあるが、現状では判断できない。

第２号溝
（第40図）

［位置］第２トレンチで確認されている。

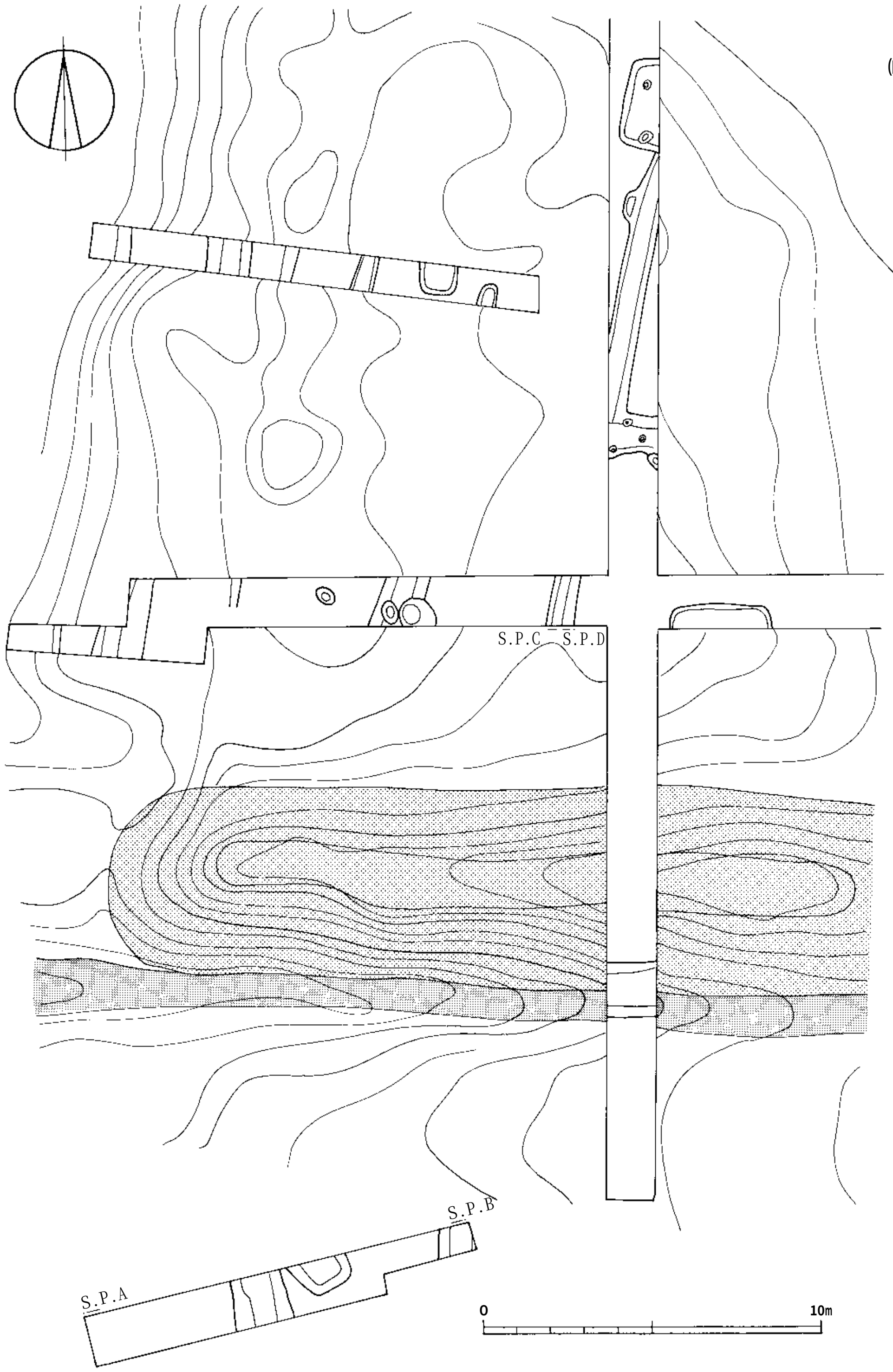
［規模］トレンチ幅で確認されているため、現状で確認された長さは1.2mである。幅1.6mを測り、深さは、黒色土中より掘り込まれており確定できないが、確認面より0.28mを測る。断面は、箱薬研形を呈する。

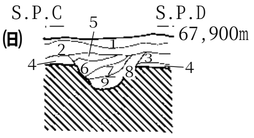
［覆土］現道部付近より埋没谷に移行しており、ローム層の堆積は認められない。第８～10層が溝の覆土。尚、この第２・３トレンチセクションの第５層（第３層と第６層の間）で火山灰層を検出している。寺内遺跡第１次範囲確認調査第３調査区で確認された火山灰と同様であり、天明３年に噴火した浅間Ａ火山灰に比定されるものと推定される。

［遺物］覆土中より遺物の出土は認められない。

［時期］遺物の出土が無く、時期決定の根拠に欠ける。

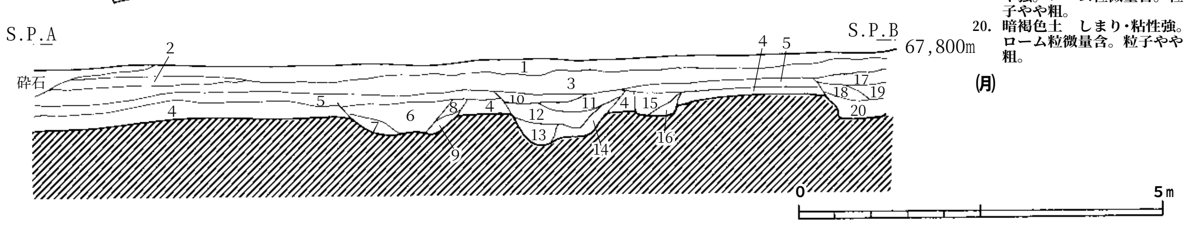
［所見］形態・立地・方角的には、寺内遺跡第２次範囲確認調査で確認された第６号溝に一致している。また、外周道路で確認された道路跡の側溝に向かっており、同一の遺構の可能性もある。





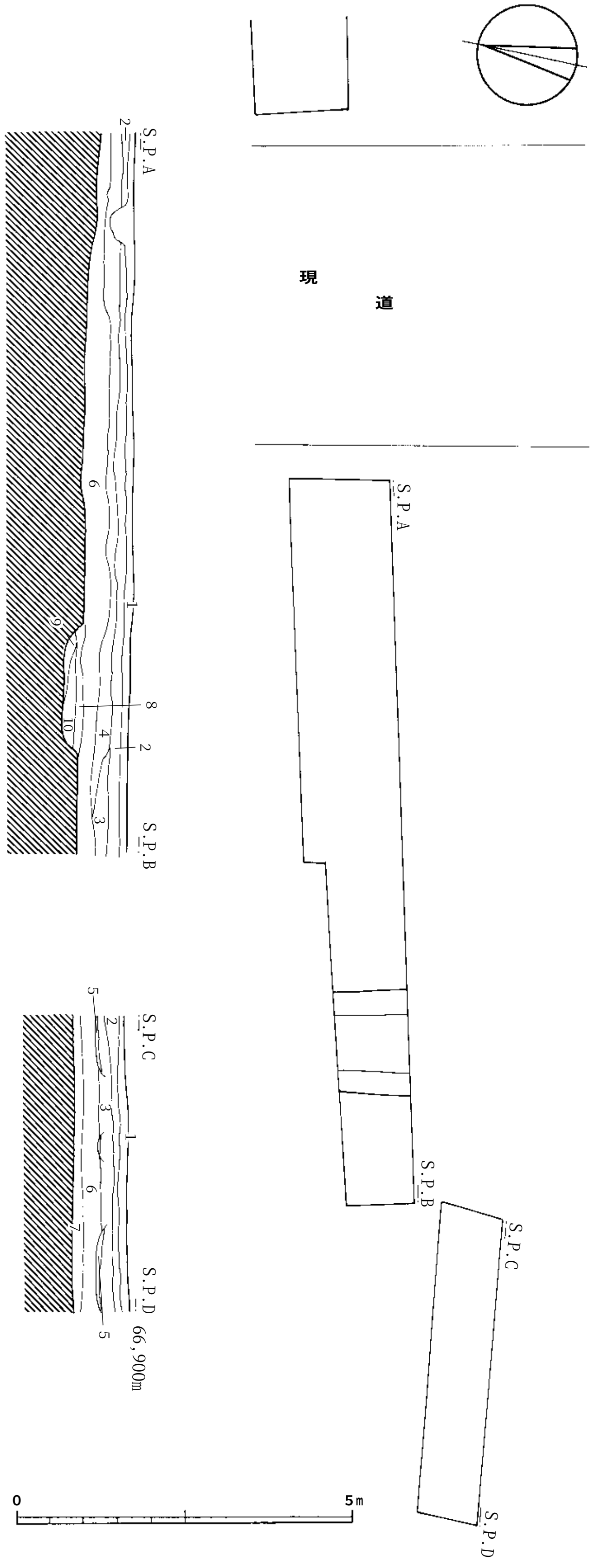
1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり･粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。ローム粒微量含。粒子やや細。
6．黒褐色土　しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子やや細。
7．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多。粒子やや粗。
8．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ロームブロック少量含。粒子粗。
9．明褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロックやや多含。粒子やや粗。

1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり･粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや細。
6．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・炭化粒微量含。粒子やや細。
7．黄褐色土　しまりやや強、粘性弱。砂質化したローム粒多量含。粒子やや細。
8．明茶褐色土　しまり・粘性やや弱。砂質化したローム粒少量含。粒子やや細。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒少量含。粒子やや細。
10．黒褐色土　しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子やや粗。
11．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
12．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
13．黒褐色土　しまり･粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
14．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
15．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子やや粗。
16．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・ロームブロック微量含。粒子やや粗。
17．暗褐色土　しまり・粘性やや強。炭化粒微量含。粒子やや粗。
18．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
19．黒褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
20．暗褐色土　しまり･粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。



第39図　第１号溝平・断面図

1．表土
2．暗灰褐色土　しまり・粘性弱。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまりやや弱、粘性強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
4．茶褐色土　　しまりやや弱、粘性強。ローム粒多量含。粒子やや粗。
5．灰褐色砂層　テフラ純層。
6．暗褐色土　　しまり弱、粘性強。粒子やや粗。
7．暗灰褐色土　しまり・粘性強。部分的に鉄分の凝集が認められる。
8．暗褐色土　　しまり弱、粘性強。粒子やや粗。
9．黒茶褐色土　　しまり、粘性強。粒子粗。
10．黒褐色土　　しまり、粘性強。粒子やや粗。



第40図　第２・３トレンチ平・断面図

井戸

第１号井戸　［位置］第５トレンチ。

（第41図・図版13）　［規模］直径３mの円形を呈し、深さ2.9mを測る。

［覆土］第８〜14層が井戸の覆土。第14層の下部より出水が認められる。

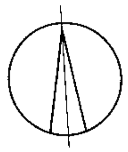
［遺物］井戸の底付近より、径30㎝程の亜円礫が３点出土している他は、遺物の出土は認められない。

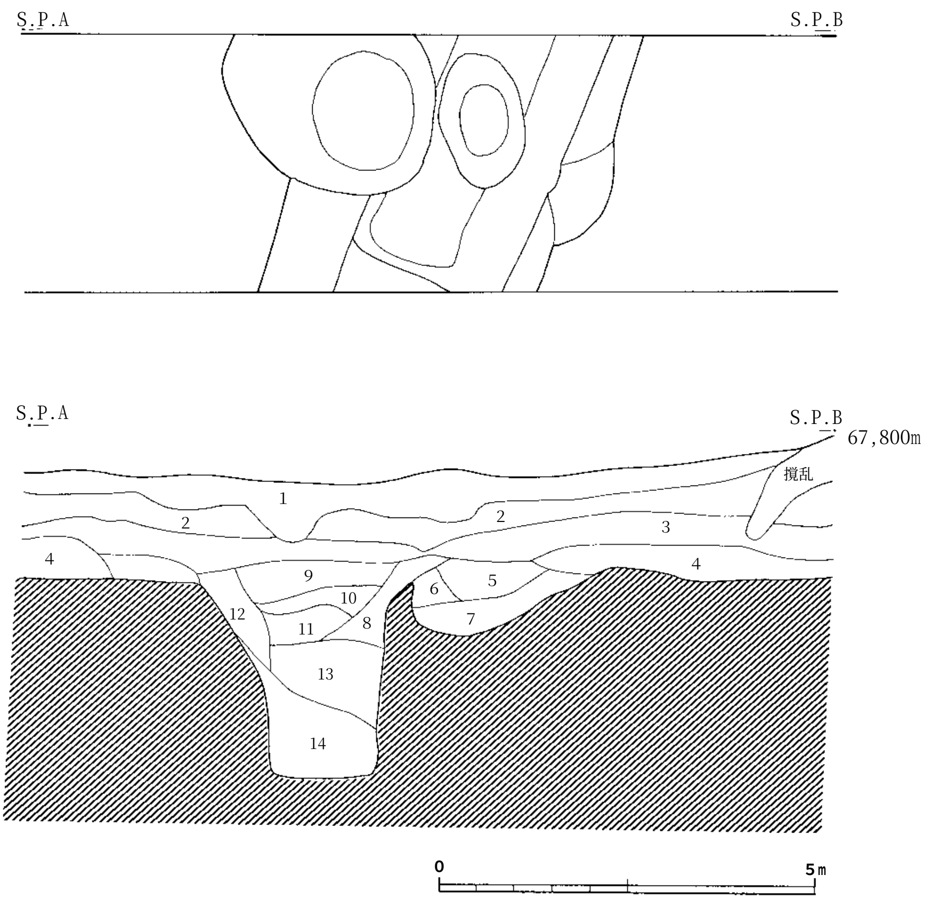
［時期］時期決定の根拠となる遺物の出土は無い。覆土の状態から推定すると中世に属するものと推定され、本館跡に伴う施設と推定される。

（3）包含層出土遺物

縄文時代
（第42・43図）
（図版20）

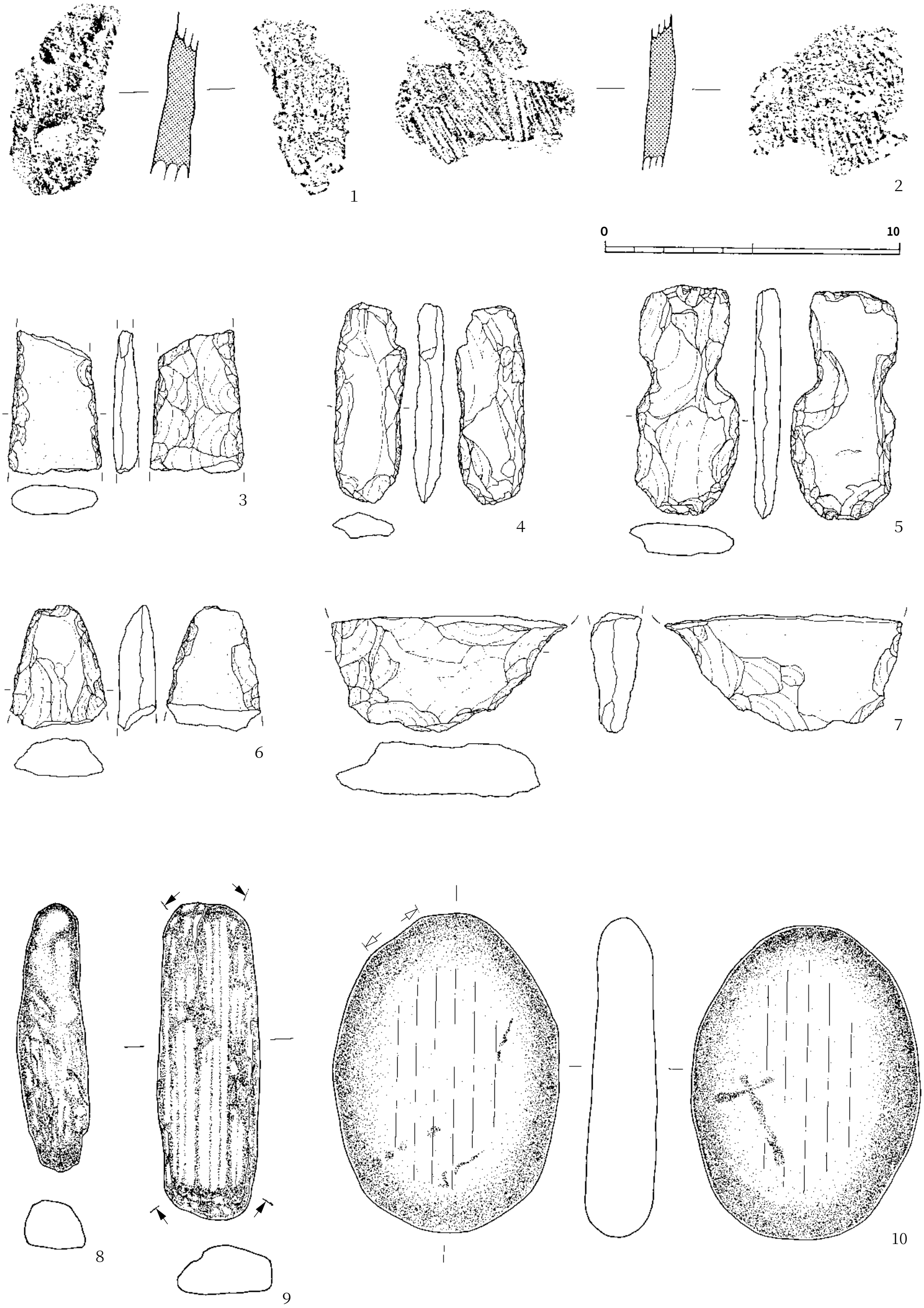
第42図１・２は、縄文時代早期後半の条痕文系土器。表裏面に粗い条痕を施している。胎土に繊維を多量に含む。３は、砂岩製の撥形打製石斧。上下端を欠く。A面に自然面を多く残す。現存長7.5㎝、幅4.9㎝、厚さ1.4㎝ を測り、重量64.9ｇを量る。４は、流紋岩製の短冊形打製石斧。完形品。A面に自然面を多く残すが、側縁部は全面調整が施される。長さ10.3㎝、幅3.7㎝、厚さ1.5㎝を測り、重量68.0ｇを量る。５は、流紋岩製の分銅形打製石斧。完形品。A面に自然面を残す。側縁は、ほぼ全面に調整が施されてい





1．表土
2．茶褐色土　しまり・粘性やや弱。火山灰様の砂粒を微量含。粒子やや粗。
3．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒を下層に少量含。粒子やや粗。
4．黄褐色土　しまり・粘性強。ソフトローム層。
5．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
6．明茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや細。
7．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
8．明茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒少量含。粒子やや細。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。
10．暗褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
11．褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
12．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
13．暗褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
14．明茶褐色土　しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗。下部より出水。

第41図　第１号井戸平・断面図

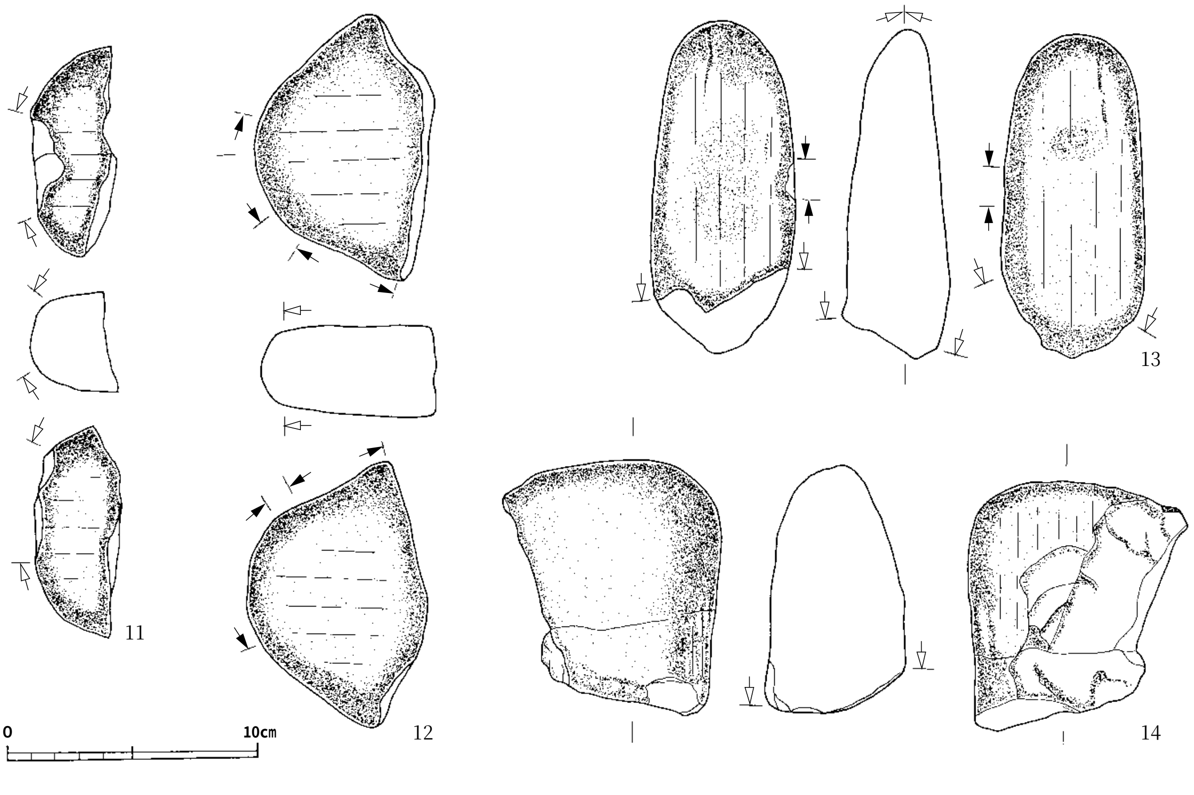


第42図　包含層出土遺物（1）

る。長さ12.5cm、幅5.3cm、厚さ1.6cm を測り、重量126.8ｇを量る。６は、緑泥岩製の撥形打製石斧。下半分を欠く。A面に自然面を多く残す。側縁部は、急角度に調整が施されている。現存長6.4cm、幅5.0cm、厚さ2.0cm を測り、重量72.0ｇを量る。７は、砂岩製の大形の分銅形打製石斧の半欠品。A面に自然面を多く残す。側縁部は急角度に調整されるが、全体的にやや不明瞭。残存長5.6cm、幅12.1cm、厚さ2.3cm を測り、重量193.4ｇを量る。８・９は、棒状礫器。８は、長さ13.9cm、幅3.5cm、厚み2.5cm を測り、重量240ｇを量る。特に使用痕は確認されない。９は、長さ16.4cm、幅5.2cm、厚み2.6cm を測り、重量300ｇを量る。両端部に敲打痕が認められる。10～14は、磨石。10は、砂岩製で、完形品。ＡＢ面に磨面が、側縁の一部に敲打痕が認められる。長さ16.4cm、幅11.4cm、厚さ3.5cm を測り、重量980ｇを量る。第43図13は、砂岩製で下端部を欠く。ＡＢ面に磨面および敲打による窪みが、側縁部に敲打痕が認められる。現存長13.4cm、幅5.8cm、厚さ4.2cm を測り、重量375ｇを量る。

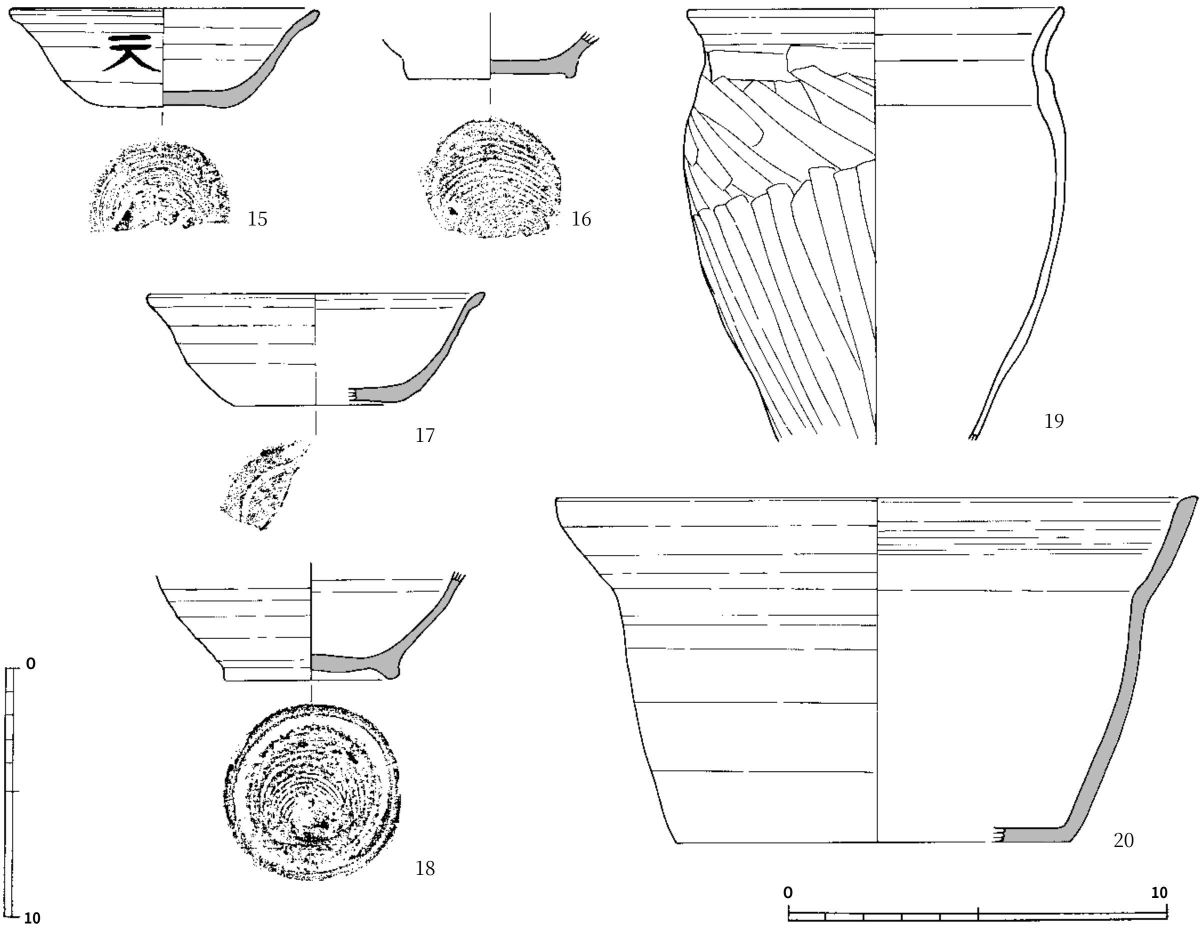
平安時代
（第44図・図版21）

第44図15は、第３トレンチより出土した須恵器坏の墨書土器。1/2残存。推定口径12.4 cm、底径5.4cm、器高3.8cm を測る。色調は淡灰色（2.5Y6/2）で、焼成はやや軟。体部側面に正位で「天」の文字が墨書されている。16は、第５トレンチより出土した、須恵器の高台付椀の体部下半。底径6.8cm を測る。色調は淡灰色（2.5Y5/2）で、焼成は堅緻。胎土に、径２㎜ 程の白色砂粒を多く含む。17は、第５トレンチより出土した須恵器の坏。1/5残存。推定口径13.4cm、推定底径2.0cm、器高3.8cm を測る。色調は淡灰色（5Y5/1）で、焼成は堅緻。胎土に、径２㎜ 程の白色砂粒を多く含む。18は、第５トレンチより出



第43図　包含層出土遺物（2）

土した須恵器坏の体部下半。底径7.2cm を測る。色調は淡灰色（2.5Y5/1）で、焼成は堅緻。胎土に径２㎜程の白色砂粒を多く含む。19は、第６トレンチより出土した土師器の甕。2/3残存。口径19.5cm、現存器高22.5cm を測る。器面調整は、外面は、口唇部から口縁部は横位のナデ、頚部および胴部はヘラケズリが施されている。色調は淡燈褐色（5YR4/4）で、焼成はやや軟。胎土に黒色粒子を多く、角閃石・白色粒子を僅かに含む。



第44図　包含層出土遺物（3）

第４節　天神遺跡第２次調査

(1) 遺跡概観

本遺跡は、江南台地上に位置し、荒川沖積地への崖線部より２㎞程台地側へ入り込んだ箇所に位置している。遺跡はほぼ平坦で、東側および北側は、埋没谷が入り込んでおり、寺内遺跡と接している。南側は、県道を挟んで桜山遺跡と接している。

発掘調査は、第１次調査として、1991年５月14日から６月14日にかけて、ゴルフ場の外周道路の建設に伴い、約1,500㎡ の発掘調査を行っており、平安時代の住居跡７軒、井戸跡１基が検出され、石製紡錘車などが出土している（1995：江南町）。

今回は、個人住宅の新築工事に伴うもので、この第１次調査地区より東へ約80mの距離を測る（第２次調査）。地形的には、寺内古代寺院跡前面に広がる埋没谷へと、東へ向かって徐々に移行しており、ソフトローム層は、いわゆる水付の状態となっている。中島遺跡とは、この埋没谷を挟んで対岸となる。調査期間は、2000年４月27日から５月10日にかけて、約200㎡ の調査を実施した（第45図）。

今回の調査地区は、既に土地改良が行われ水田として利用されていたが、意外にも土地改良は表層（表土から20㎝程）に留まり、調査区の西側のローム層を若干削平した程度で、遺構が完全に削平されずに残っていた。平安時代の集落が予想されたが、検出された遺構は、古墳時代の住居跡１軒と平安時代に属する溝１条である（第46図）。

(2) 遺構とその出土遺物

第１号住居跡
（第47～50図）
（図版15）

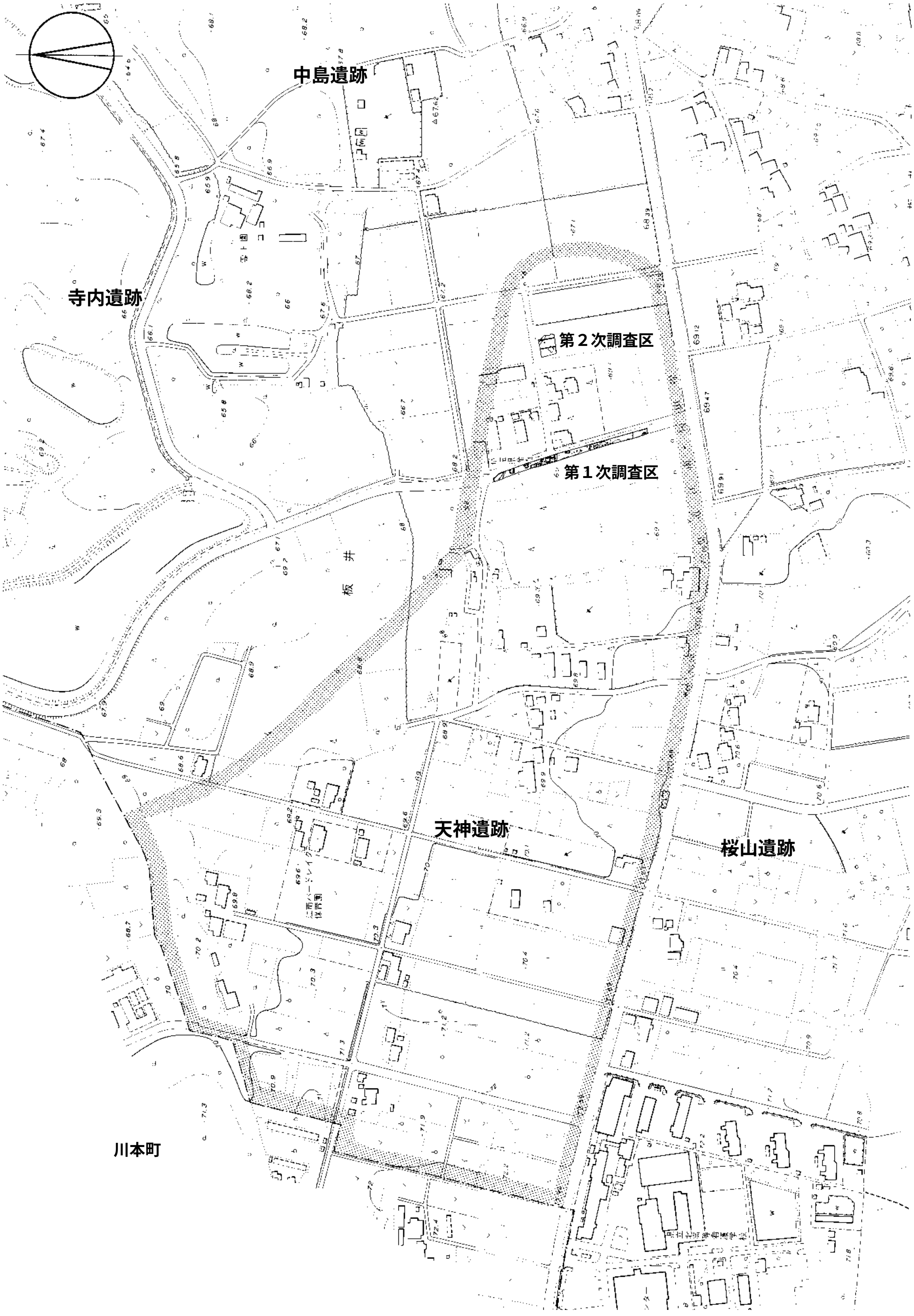
［位置］調査区の南東側。土地改良の際に埋設された暗渠排水施設が、住居の東側の一部を横切っている。

［規模］4.2×4.2mの方形を呈する。掘り込みは、南東辺で10㎝、北西辺で９㎝を測り、周溝が巡る。柱穴は４本確認されており、Ｐ１は床面より71㎝、Ｐ２は床面より72㎝、Ｐ３は床面より73㎝、Ｐ４は床面より64㎝の深さを測る。カマドの西側には貯蔵穴が確認されている。92㎝×70㎝の楕円形を呈し、深さは45㎝を測る。

［カマド］北西側、中軸線よりやや西に片寄った箇所で確認されている。土地改良により削平されているため、残存状況は良くないが、袖はローム層の削り出しである。カマド内より比較的まとまって、土師器の甕・坏などの遺物が潰れた状態で出土している（第49図）。

［遺物出土状況］第48・49図。覆土が浅いため、遺物はほとんどが床面直上の出土となっている。第50図１の土師器坏・３の甕はカマド内より潰れた状態で、２の鉢は貯蔵穴の脇より２分割された状態で出土している。他は、いずれも小片で、須恵器小片も少量含まれている。また、住居の中央付近より炭化した桃核が２点出土している。

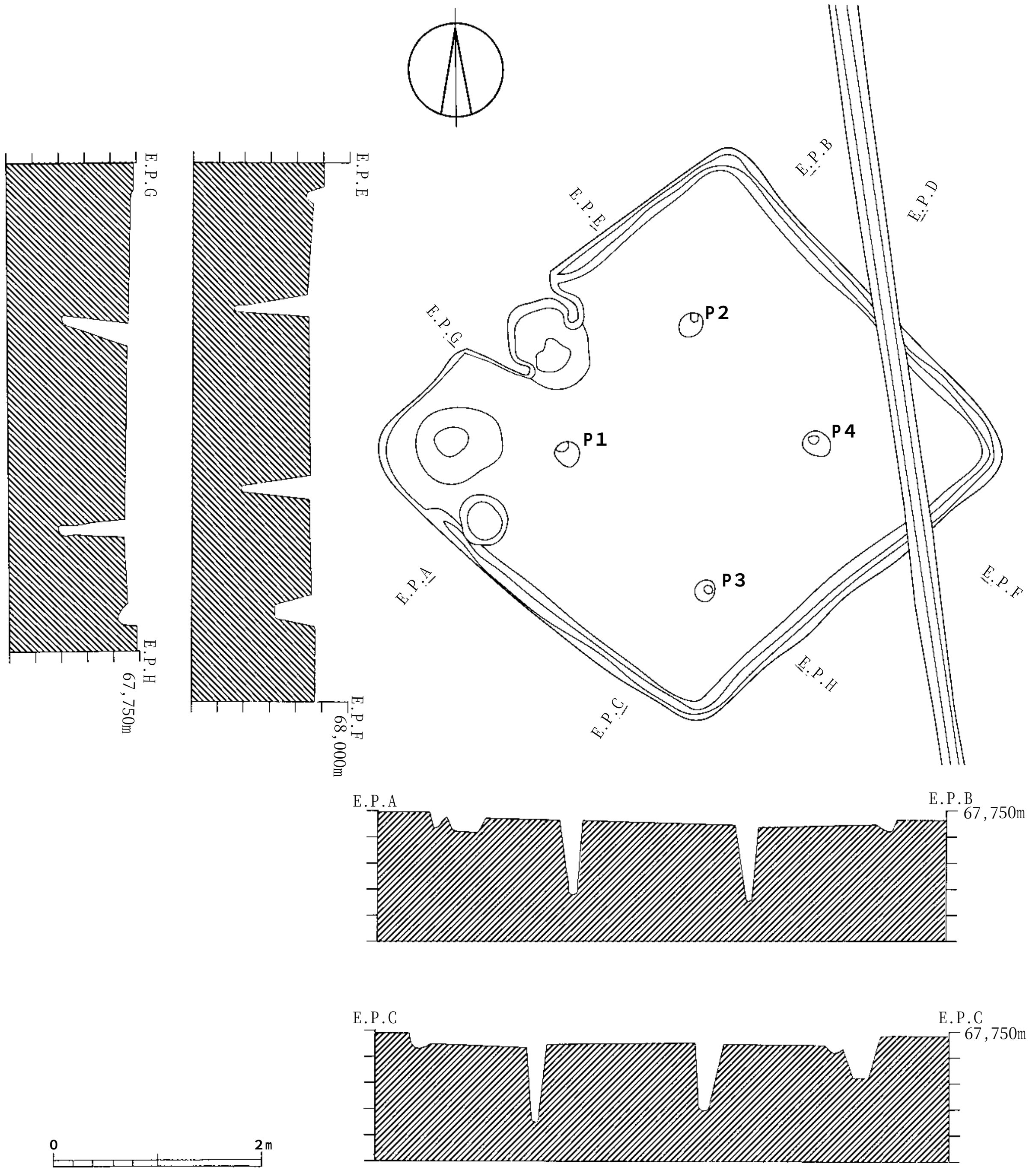
［遺物］第50図１は、カマド内に廃棄されていた、土師器の坏。残存率75%。口径13.0㎝、器高5.3㎝を測る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は外側に外反している。口縁部と底部は、明瞭な稜をもって画されており、底部は丸底を呈している。器面調整は、外面は、口唇部から口縁部にかけて横位のナデ、底部はヘラケズリである。内面は、口唇部から口縁部が横位のナデ、底部は指頭によるナデである。内外面とも液体状の黒



第45図　天神遺跡の範囲と調査区の位置（1/5,000）

第46図　天神遺跡第２次調査区全体図（1/80）

色物質の付着が認められる。胎土は、黒色粒子・角閃石が多く、赤褐色粒子・白色粒子が少量含まれている。色調は淡橙色（7.5Y4/3）で、焼成は良好。2は、貯蔵穴の脇より出土した土師器の鉢。残存率65%。口径11.2㎝、底径8.1㎝、器高11.0㎝を測る。器面調整は、外面は、口唇部から口縁部にかけて横位のナデ、胴部から底部にかけてはヘラケズリである。内面は、口唇部から口縁部にかけて横位のナデ、胴部から底部にかけて工具による横位のナデが施されている。胎土は、黒色粒子・角閃石・白色粒子が少量含まれている。色調は、淡黄橙色（2.5Y4/2）で、焼成は良好。3は、カマド内に廃棄されて



第47図　第１号住居跡平・断面図

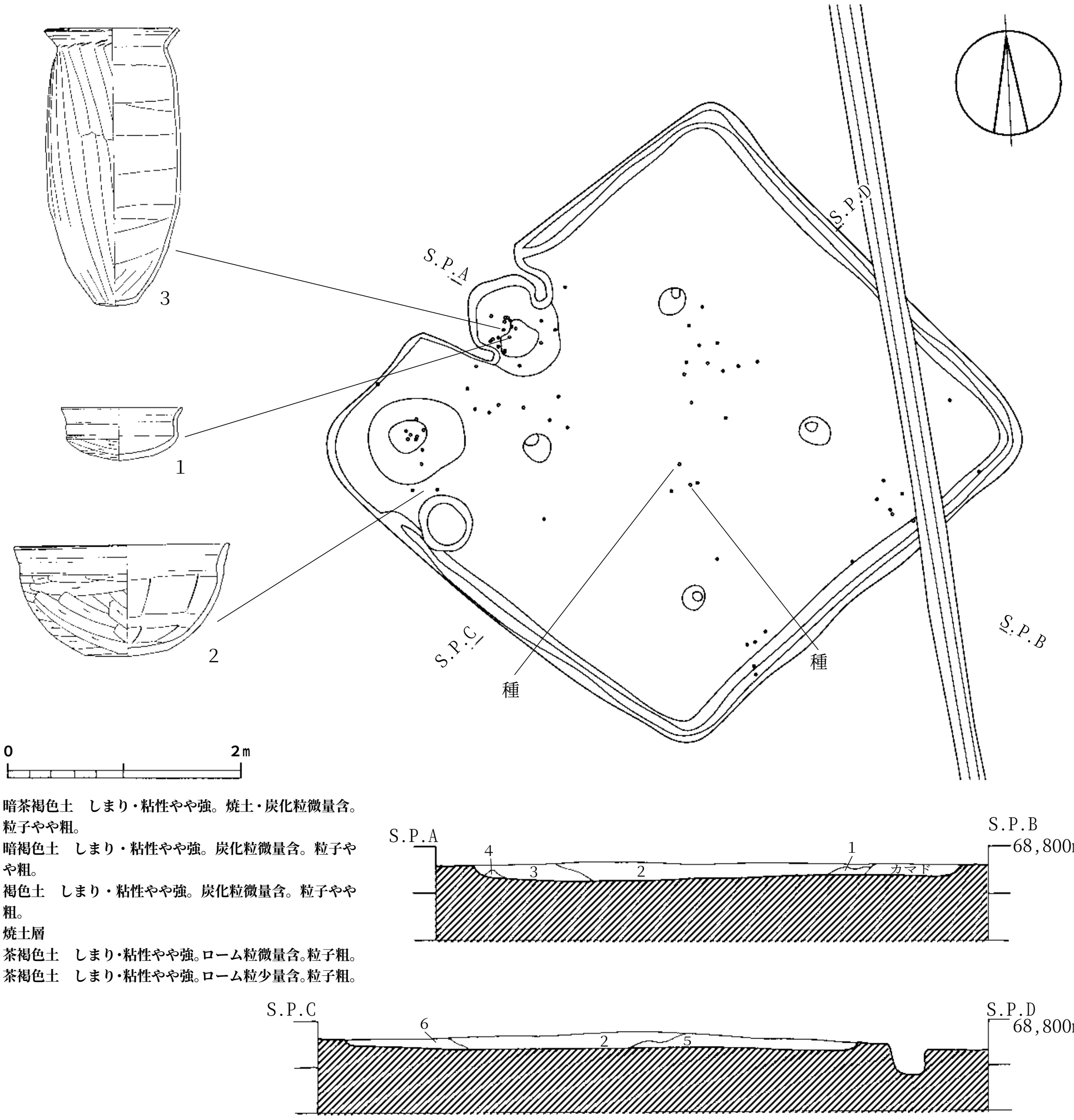
いた土師器の甕。残存率50%。口径15.8㎝、底径5.6㎝、器高36.6㎝を測る。

器面調整は、外面は口唇部から口縁部にかけて横位のナデ、胴部はヘラケズリで、内面はアタリの無い横位のナデが施されている。色調は淡黄燈色（10YR5/2）で、焼成は良好。胎土に、黒色粒子・角閃石を含む。

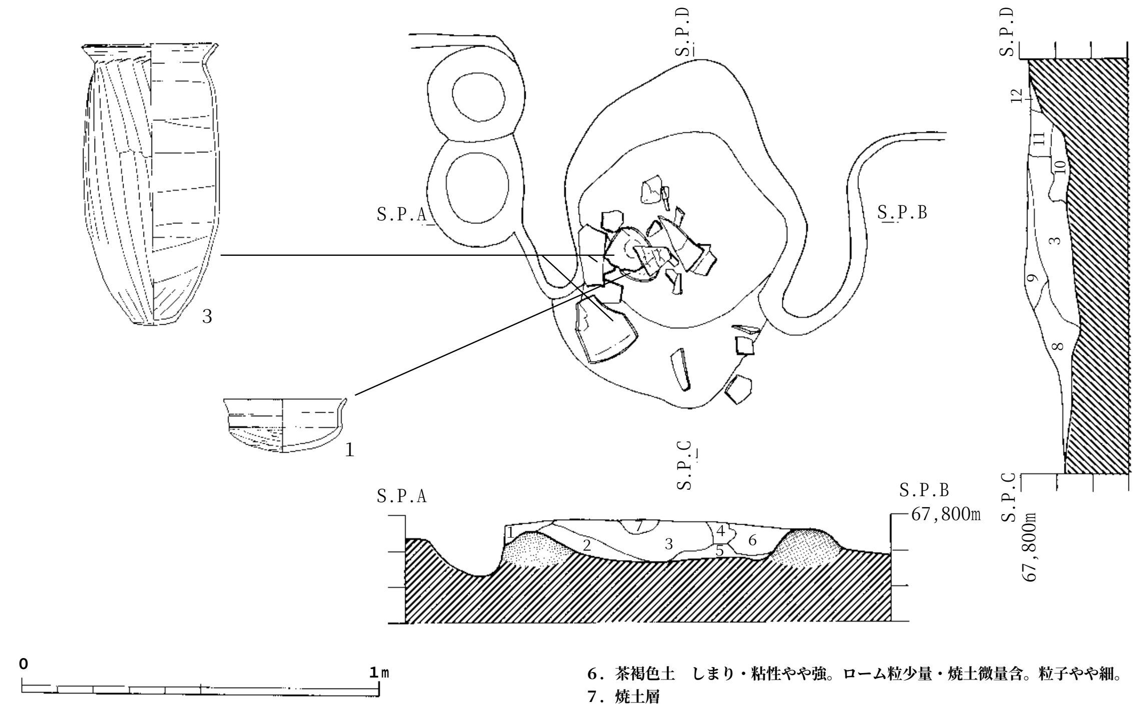
この他、炭化した桃核が２点出土している（図版15）。一つは、片面を約1/2欠損する。長軸長1.6㎝、短軸長1.4㎝を測る、小型品である。一つは、残存長１㎝程の破片となっており、計測不能である。

第１号溝
（第51図・図版16）

［位置］調査区の北東部に、北西南東方向の溝を確認している。土地改良の際に埋設された暗渠排水施設が、溝を横切っている。

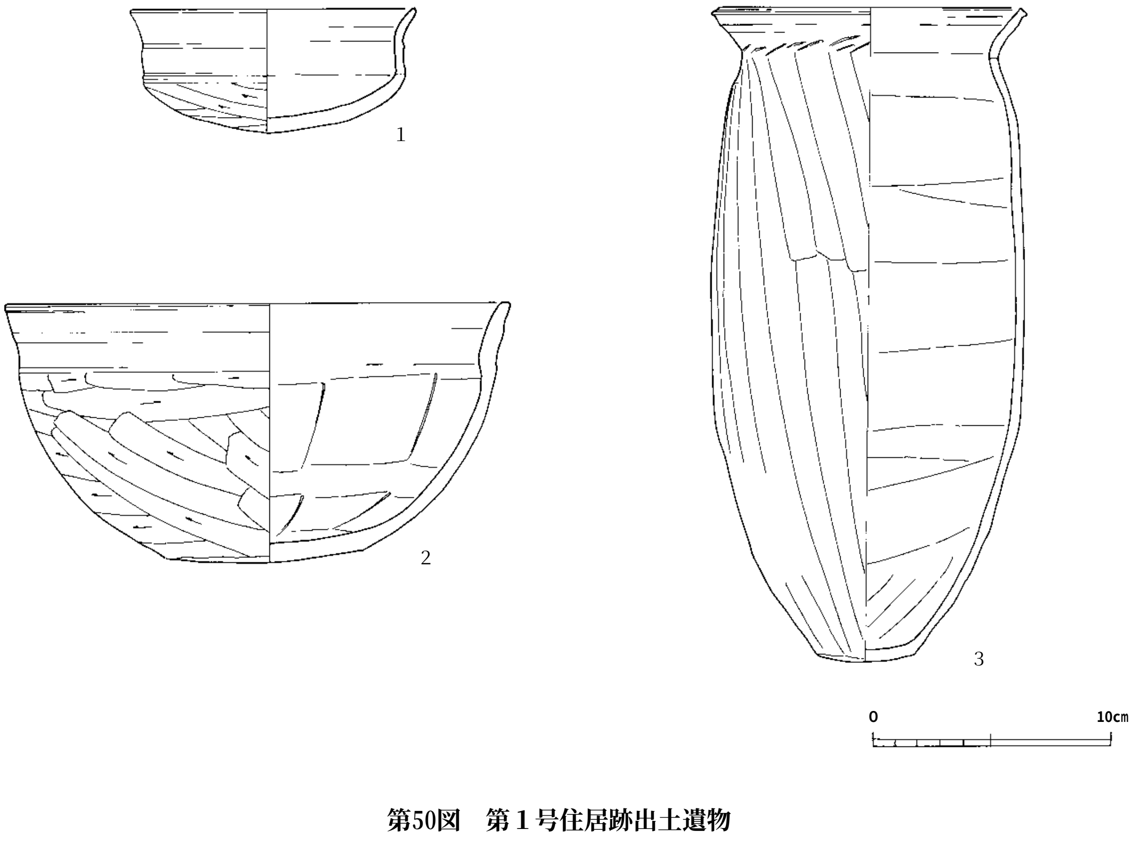


第48図　第１号住居跡遺物分布図

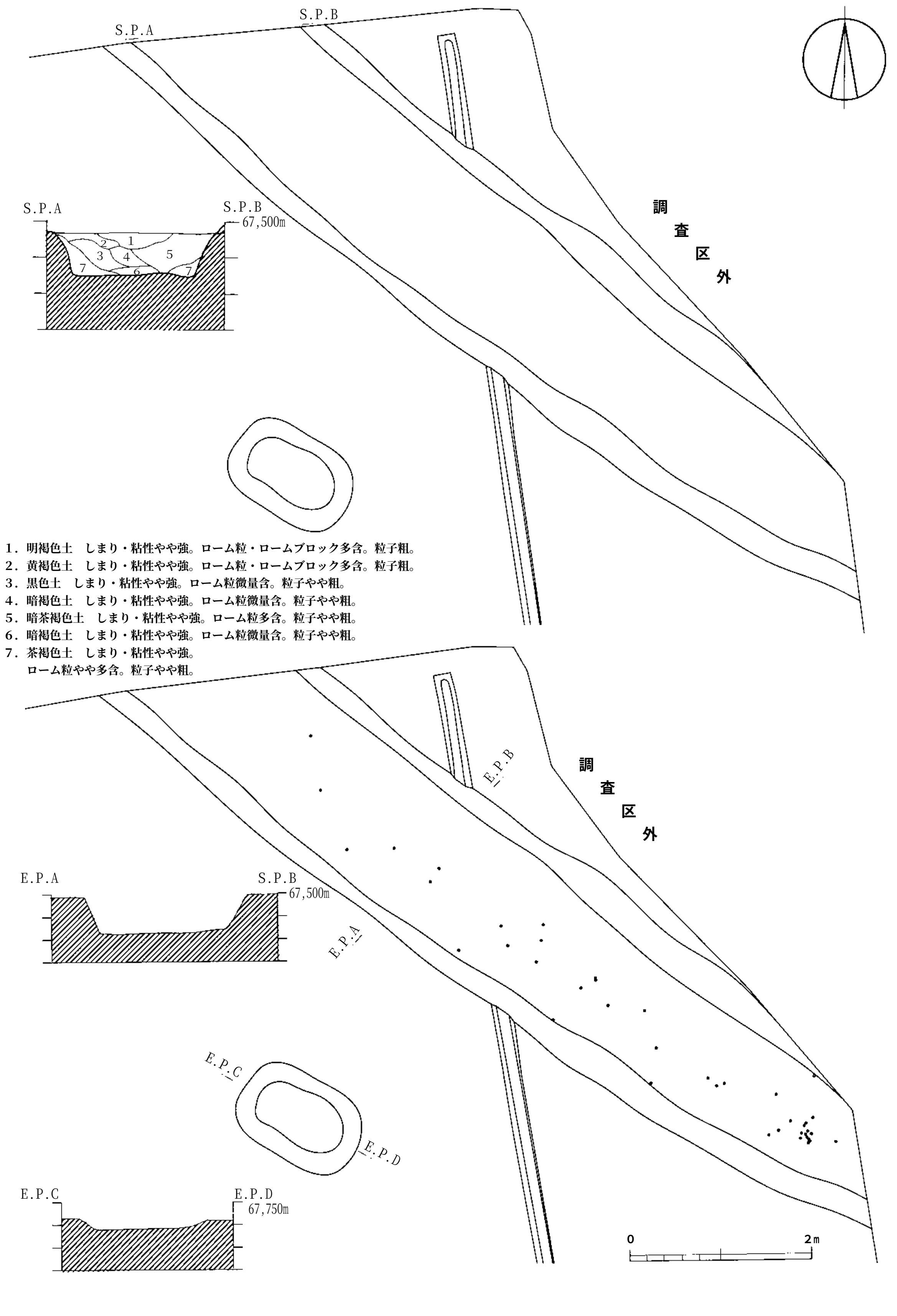


1．黒褐色土　しまり・粘性やや強。焼土・ローム粒微量含。粒子やや細。
2．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。焼土やや多含。粒子やや細。
3．明褐色土　しまり・粘性やや強。焼土微量含。粒子やや細。
4．焼土層
5．暗褐色土　しまり・粘性やや強。焼土やや多含。粒子やや細。
6．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量・焼土微量含。粒子やや細。
7．焼土層
8．黒褐色土　しまり・粘性やや強。焼土・ローム粒微量含。粒子やや細。
9．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量・焼土微量・炭化粒少量含。粒子やや細。
10．暗茶褐色土　しまり・粘性やや強。焼土少量・炭化粒微量含。粒子やや細。
11．褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土微量含。粒子やや細。
12．黄褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒・焼土微量含。粒子やや細。

第49図　第１号住居跡カマド平・断面図



第50図　第１号住居跡出土遺物



第51図　第１号溝・第１号土壙平・断面図

［規模］調査区内で確認された長さは、約12m、幅1.9m、深さ48cmを測る。断面は箱薬研形を呈する。

［覆土］７層に分層され、自然堆積を示す。

［遺物］平安時代の土師器・須恵器片が42点程出土しているが、いずれも小片で図示するには至らなかった。

［時期］覆土の状態および小片ではあるが、溝底直上より須恵器片が出土していることから、平安時代に属するものと推定される。

第１号土壙
（第51図）

［位置］第１号溝の南側、４m程の地点で確認されている。

［形状］長径1.4m、短径0.92m、深さ0.12mを測り、断面は浅い皿状を呈している。

［遺物］覆土中より遺物の出土は確認されていない。

［時期］覆土中より遺物の出土は確認されず、時期は不明。

第５節　寺内遺跡第４次範囲確認調査

（1）調査地区概観

地形　本地区は、江南台地上に位置し、荒川沖積地への崖線部より1.5㎞ 程台地側へ入り込んだ箇所に位置している。立地的には、寺内古代寺院跡の前面に広がる埋没谷が再びその幅を狭める地点に位置している。

目的　1997年６月に実施した地下レーダー探査で、Ｄ－２～４地点として調査した地点（付編第１節参照）にあたり、その結果、寺内古代寺院跡西側の区画溝の延長が想定されたことから、実際にトレンチ調査を行い、区画溝の有無を確認することを目的に行われた。

調査方法　調査は、想定される溝のラインに直行するように５本のトレンチを設定した（第52図）。重機で遺構確認面まで下げた後、人力で精査し、遺構の有無を確認している。

調査期間　2001年２月13日より３月27日にかけて調査を行い、調査面積は、約500㎡ である。

第１トレンチ（第54図）　一番南側に、長さ33m設定。地下レーダー探査Ｄ－３測定線付近（第75図参照）に位置する。遺跡としては、天神遺跡の北端に部分的に入る地点である。ソフトローム層は、やや砂質化し、いわゆる水付のローム層となっている。遺構は、トレンチ東端で、近世の溝跡1条と時期不明のピットを確認している。包含層より近世陶磁器片数点が出土している。

第２トレンチ（第55図）　第１トレンチの北側に平行して、長さ26m設定。地下レーダー探査Ｄ－２測定線付近（第75図参照）に位置する。天神遺跡隣接地となる。ソフトローム層は、やや砂質化し、いわゆる水付のローム層となっている。遺構は、時期不明のピットを確認している。遺物の出土は確認されていない。

第３トレンチ（第55図）　第２トレンチの北側に平行して、長さ20m設定。埋没谷に移行し始める地点であり、粘質化したローム層上部より湧水がみられる。遺構は、時期不明のピットが確認されているが、遺物の出土は確認されていない。

第４トレンチ（第56図）　第３トレンチの北側に平行して、長さ55m設定。埋没谷に完全に移行しており、ローム層の堆積は認められない。黒色土中より多量の湧水がみられる。遺構・遺物は、確認されていない。

第５トレンチ（第57図）　第４トレンチの北側、用水路を挟んで、長さ11m設定。地下レーダー探査Ｄ－１測定線の南側（第75図参照）に位置する。埋没谷がまだ立ち上がらず、ローム層の堆積は認められない。黒色土中より多量の湧水がみられる。遺構・遺物は確認されていない。

調査結果　地下レーダー探査で、溝跡の存在が想定された本調査地点ではあるが、実際にとトレンチ調査を実施したところ、その存在は確認することができなかった。したがって、寺内古代寺院跡の西辺の区画溝は、現状では、当地点まで延びておらず、寺内古代寺院跡前面に広がる埋没谷で途切れる可能性が高いと推定される。

第52図　寺内遺跡第４次範囲確認調査トレンチ配置図（1/5,000）

(2) 遺構

第１号溝
(第53図)

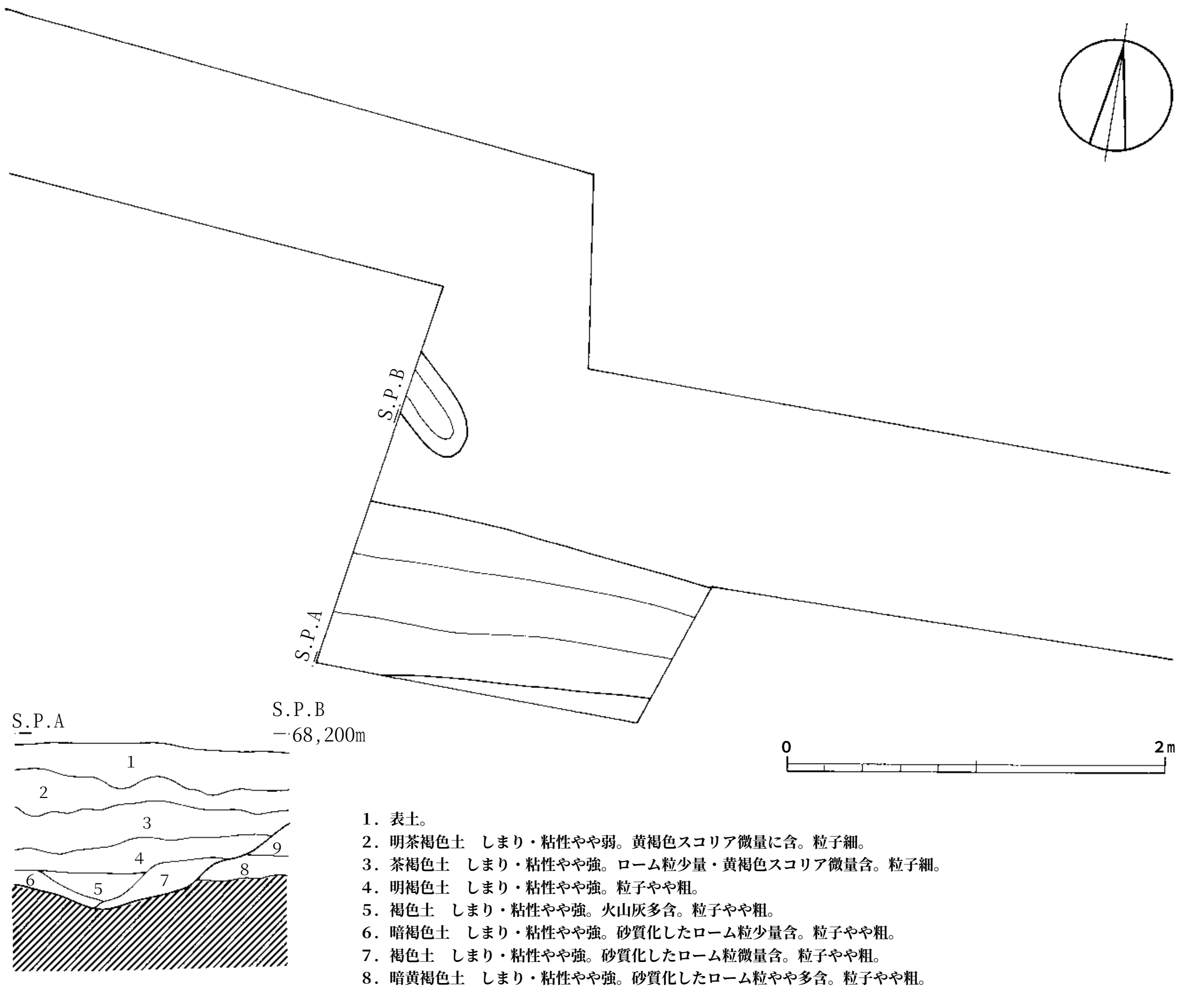
［位置］第１号トレンチ東端で、東西方向に確認されている。

［規模］トレンチ内で確認された長さは1.9m、幅0.82m、深さ42㎝を測る。断面は、鍋底状を呈す。

［覆土］第４～７層が溝の覆土で、第３層中より掘り込まれている。第５層に多量の火山灰を含んでいる。尚、この火山灰は、平成13年度事業で火山灰の同定分析を委託したところ、天明３年の浅間Aに比定された（付編第２節参照）。

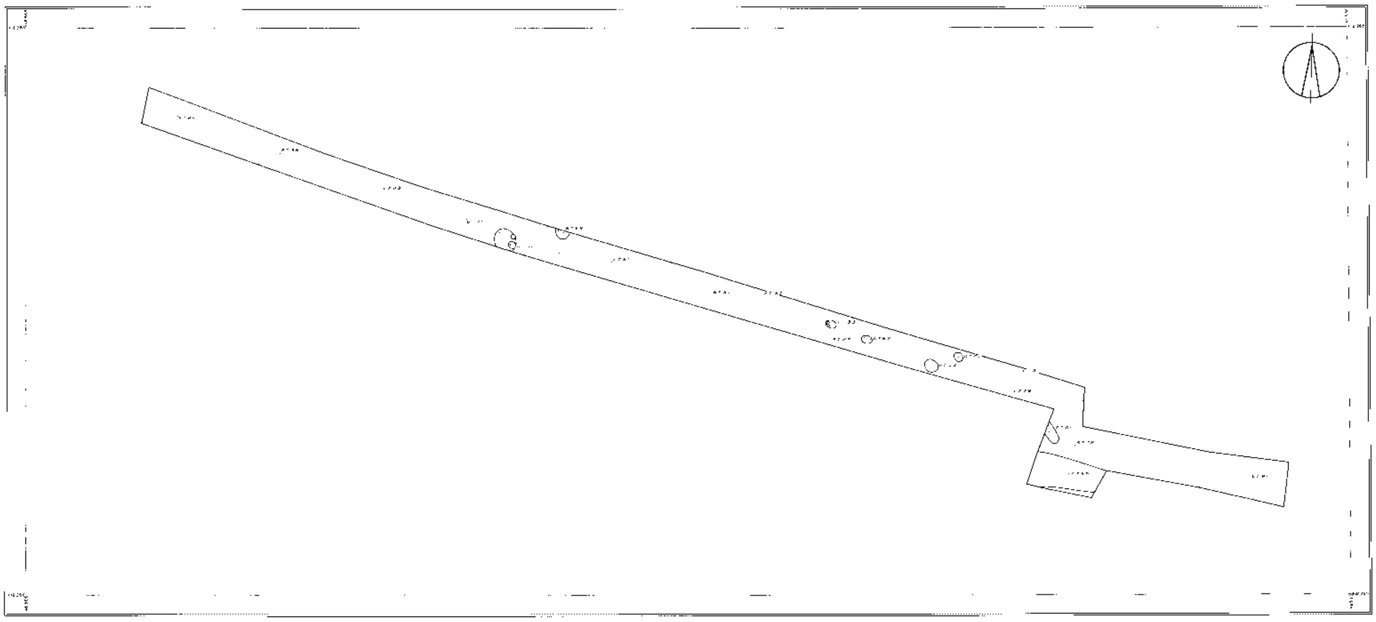
［遺物］覆土中より遺物の出土は確認されなかった。

［時期］覆土中より遺物の出土は無かったものの、火山灰の同定結果より判断して近世（江戸期）に属するものと推定される。

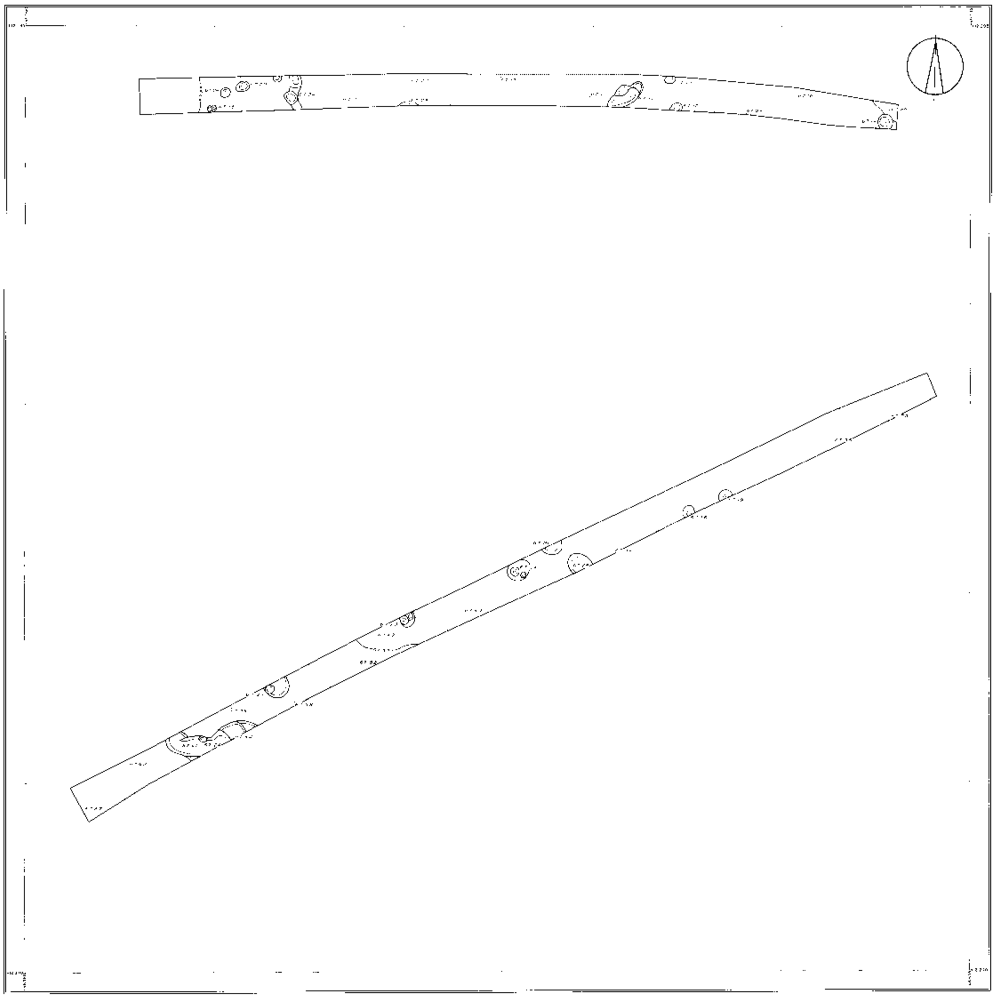


1．表土。
2．明茶褐色土　しまり・粘性やや弱。黄褐色スコリア微量に含。粒子細。
3．茶褐色土　しまり・粘性やや強。ローム粒少量・黄褐色スコリア微量含。粒子細。
4．明褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
5．褐色土　しまり・粘性やや強。火山灰多含。粒子やや粗。
6．暗褐色土　しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒少量含。粒子やや粗。
7．褐色土　しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒微量含。粒子やや粗。
8．暗黄褐色土　しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒やや多含。粒子やや粗。
9．茶褐色土　しまり・粘性やや強。粒子やや粗。

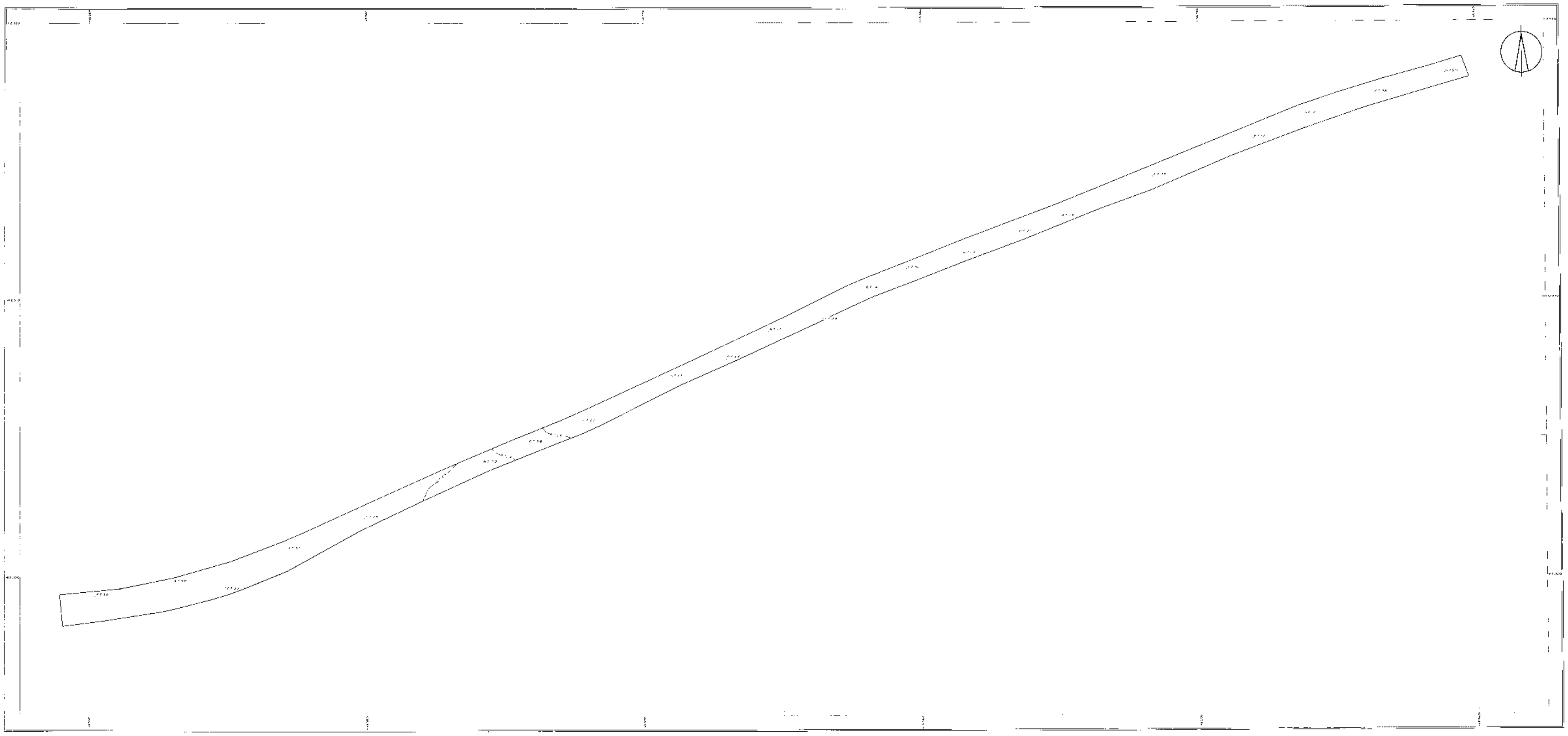
第53図　第１号溝平・断面図



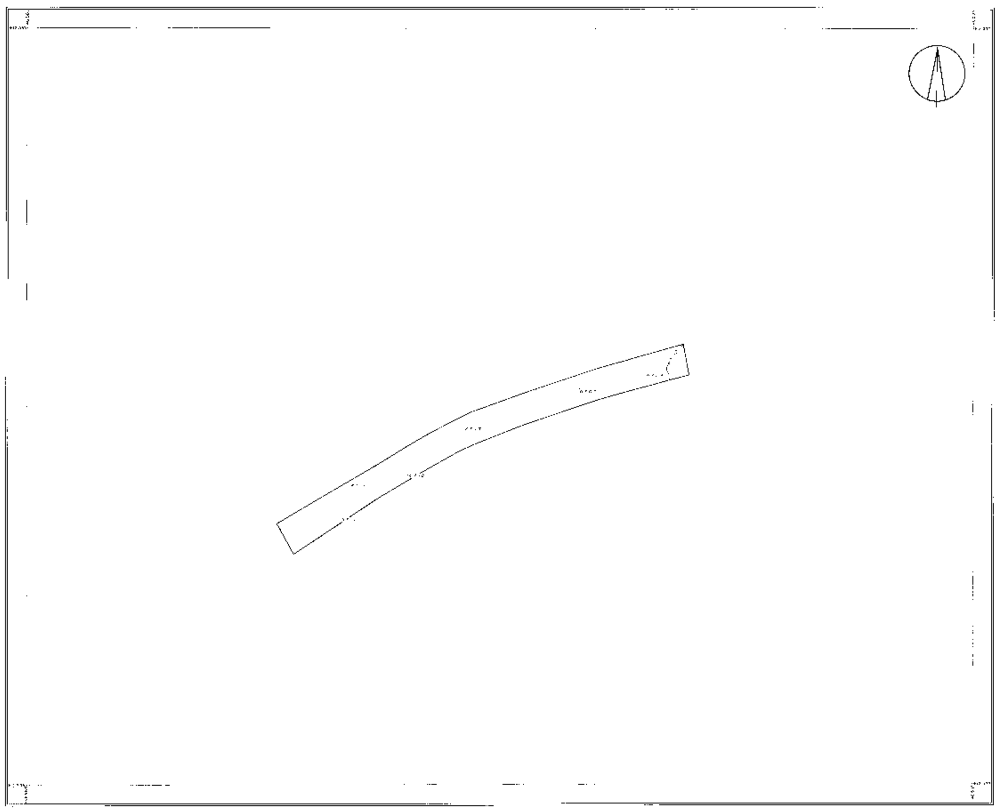
第54図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第１トレンチ全体図（1/200）



第55図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第２・３トレンチ全体図（1/200）



第56図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第４トレンチ全体図（1/200）



第57図　寺内遺跡第４次範囲確認調査第５トレンチ全体図（1/200）

第Ⅳ章　後　論

第１節　寺内古代寺院跡の範囲について

はじめに

1991年に、ゴルフ場の開発に伴う発掘調査が、江南町教育員会および江南町千代遺跡群発掘調査会により行われて以来、11年の年月が経ってしまった。1991年の調査では、寺院地を区画すると推定される大溝が、北辺で570m、西辺で200m、東辺で170mほど部分的にではあるが確認された。1992年の調査では、中心建物である、基壇建物跡の確認調査および、その東側の集落跡の調査を行っている。その後、寺院地の南限が確定しないことから、寺内廃寺調査指導委員会の指導のもと、1996年・1997年・1998年・2000年・2001年と調査が実施された。寺院地の広大な面積に対し、部分的な調査であるため、その南限を確定することは困難であるが、以下に、その調査の概要を記し、寺院地の南限についての見通しを述べ、現状でのまとめとしたい。

1991年

江南町千代遺跡群発掘調査会により、寺内遺跡・山神遺跡・西遺跡・天神遺跡にかかるゴルフコースおよび調整池・外周道路の調査が行われている（第58図）。

①５月14日から６月14日にかけて、天神遺跡第１次調査として、外周道路用地の約1,500㎡の調査が行われている。９世紀代の住居跡が７軒程確認されており、石製紡錘車２点などが出土している。

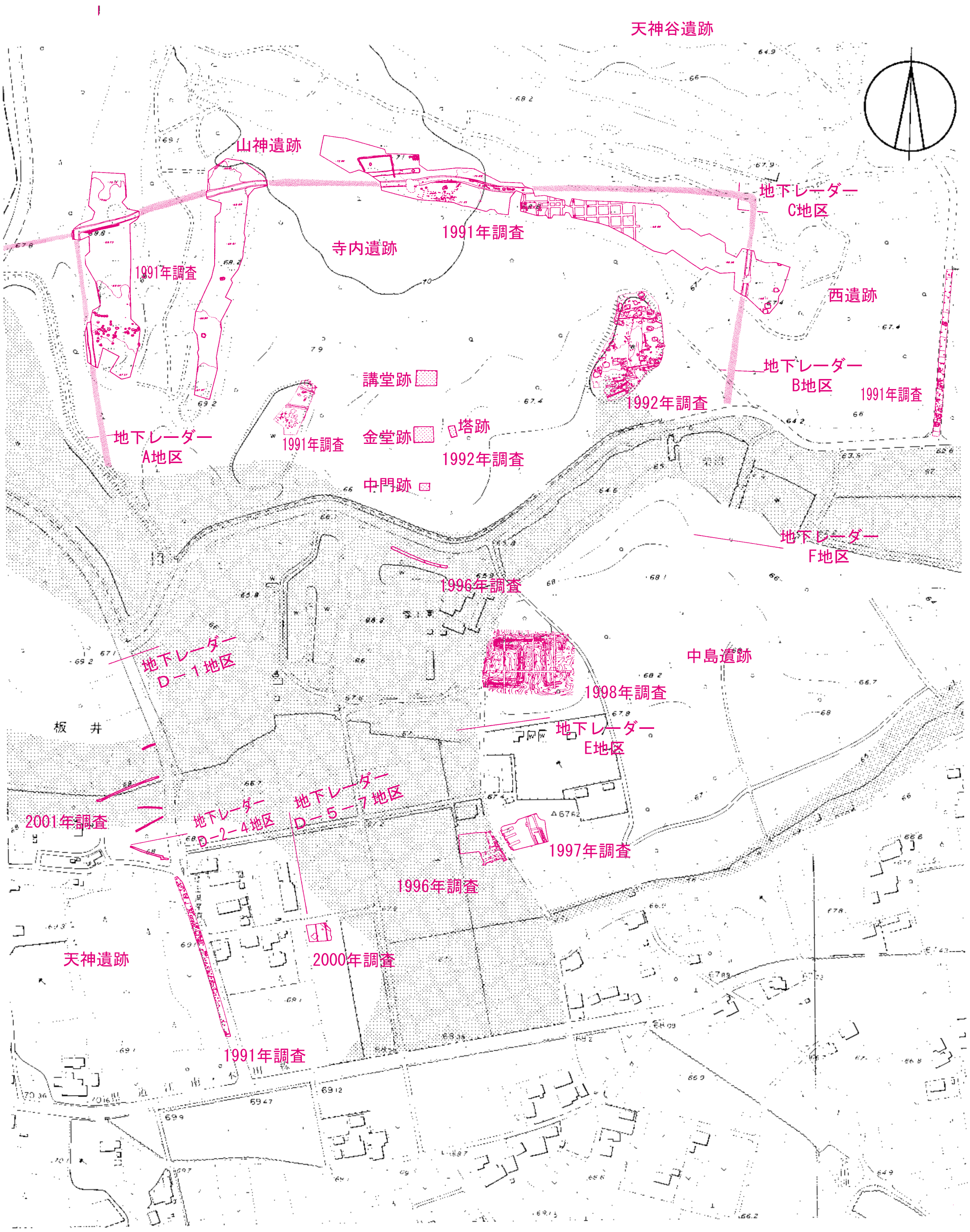
②７月22日より12月20日にかけて、山神遺跡から寺内遺跡にかかるゴルフコース３箇所、約37,600㎡の調査を行っている。一番西側の南北方向に伸びる調査区では、区画溝の北西コーナーを確認しており、さらに排水の用途が推測される小規模な溝が西方向へ続いている事を確認している。この調査区では、南側に直径１～1.3m程の円形の土壙が多数確認されているが、用途は不明である。東隣の調査区では、９世紀代の住居跡２軒を確認しており、鉄製紡錘車などが出土している。

また、山神遺跡・寺内遺跡・西遺跡にかかる東西に伸びる調査区では、基壇建物の中軸線にあたる付近で、区画溝が外側へ張出すことが確認されており、寺院地外への通路施設が存在した可能性も推定される。また、この調査区東側では、東辺の区画溝が確認されており、区画溝の東側には、西遺跡にあたるが、９世紀代の住居跡が７軒程確認されている。

③西遺跡は、この部分の他、９月10日から12月13日にかけて外周道路の調査（1,700㎡）が行われている。９世紀代の住居跡７軒が確認されており、鉄製鎌などが出土している。

④９月10日から12月20日にかけて、基壇建物跡西側の調整池において約3,500㎡の調査が行われている。９世紀代の住居跡が６軒程確認されており、「一院」と墨書された土器などが出土している。

これらの調査の結果、寺内古代寺院跡は、北辺で570m、西辺で200m、東辺で170mほどの寺院地をかかえる広大な寺院であったことが判明した。そして、寺院地の外側に当たる東側および南西方向にも隣接して同時期の集落跡が存在することが確認された。



第58図　寺内遺跡関連発掘調査位置図（1/5,000）

1992年　江南町千代遺跡群発掘調査会により寺内遺跡にかかる調整池および、江南町教育委員会により、基壇建物を中心とする発掘調査および範囲確認調査が行われている。

①1991年10月16日より1992年５月22日にかけて基壇建物跡の東側の調整池約3,700㎡の調査が行われている。９世紀から10世紀初頭にかかる住居跡53軒・掘立柱建物跡などが確認されており、「東院」「花寺」と墨書された土器・土製紡錘車・鉄製鎌・羽口・鉄滓などが出土している。

②１月20日より11月30日にかけて、基壇建物跡を中心として約3,000㎡の範囲確認調査が行われている。

一番北側の基壇建物跡は、講堂と推定され、残存していた礎石の位置から、桁行３間、梁行４間の南北に庇の付く切妻造りの建物と推定された。遺物は、瓦・釘・青銅製の八花鏡・羽口・鉄滓などが出土している。

伽藍地の中央の基壇建物跡は、金堂と推定され、残存していた礎石の位置から、桁行５間、梁行４間の四面庇付の寄棟または入母屋造りの建物と推定された。遺物は、瓦・塑像・釘などが出土している。

一番南の基壇建物跡は、中門と推定され、礎石は確認されなかったが、桁行３間、梁行２間の八脚門が推定された。遺物は、瓦・釘・塑像などが出土している。

金銅と推定された東側の基壇建物跡は塔と推定された。基壇の軸が他の基壇と比べ西側に約15度振れている。遺物は、瓦・釘などが出土している。

これらの調査の結果、寺内古代寺院は、講堂・金堂・塔などの伽藍中枢施設を持ち、「東院」などの付属施設を備えた本格的な地方寺院であったことが確認された。

1996年　寺内廃寺調査指導委員会の指導の下、中門跡と推定された基壇建物跡から南東方向に約300mの水田面で、約600㎡の寺内遺跡第１次範囲確認調査が行われた（第10図）。

調査の結果、第１調査区で、南東―北西方向の溝（第１－１号溝）とこれに直行する２条の溝（第１－２・１－３号溝）が確認されている。第１－２号溝は、掘り直しが確認されており、切られた溝の覆土で確認された火山灰は浅間Ｂ（1108年）と同定されている（第Ⅴ章第２節参照）。第１－１号溝でも火山灰が確認されているが、こちらの火山灰は、浅間Ａ（1783年）と同定されている。これらの溝は、杭列が確認されていることから、側溝および水路として機能していたものと推定され、寺内古代寺院と同時期より機能していた可能性が高い。そして、寺院廃絶後も、継続的なものかどうか不明であるが、掘り直し利用され、18世紀まで機能し続けていたと確認される。そして、第２調査区で、この第１－１号溝に並行する溝が確認されており、道路（参道）の側溝の可能性が高い。すると、第１・２号ピットは、道路上に存在したことになり、寺に向かう道路上にピットとなると、推定できるのは門となる。小片ではあるが瓦が１点、第２号ピット壙底より出土しており、瓦を載せた建物跡が存在した可能性は高い。

また、このピットを境として、第１－１号溝はその幅を狭め、東側（道路内側）へ入り込んでおり、第１－２号溝もここに合流している。この、第１－２号溝は、北・東・西辺の寺院地区画溝と比すと規模は小さいものの、この第１－２号溝が、寺田のための用水路としての機能も含め、寺院の南の何らかの区画施設であった可能性は十分推定される。

1997年　①第１次範囲確認調査で確認された、第１－１号溝と対となる東側の溝を確認するため、東側隣接地で約1,000㎡の、寺内遺跡第２次範囲確認調査が行われた。

調査の結果、第１次範囲確認調査で確認された第１－１号溝に並行する溝（第６号溝）が確認され、路盤の構造は現道に重なり確認することはできなかったが、両溝は道路の側溝と判断される。

また、第１次範囲確認調査で門跡の可能性の指摘される、第1．２号ピットに対応するピットをぜひ確認したかったが、今回の調査区では、残念ながら現道下にあたることから確認することができなかった。そして、寺院地の南の何らかの区画の可能性の指摘された東西方向の第１－２号溝は、確認されなかった。本調査区は、地形的に埋没谷から上がり、ローム層が載ることから、第1-2号溝は、寺田の灌漑等に利用した用水路であったと考えられる。

この他、第６号溝の東約20mの距離で南北方向の溝（第１・２号溝）を確認している。両溝は、断面形態が異なり、北に行くにつれその幅を減じている（第１号溝が若干東へ曲がる）。この南側に設定した両溝のトレンチでは、西側の第１号溝は検出されなくなっており、途切れている可能性が高い。しかし、覆土中より僅かではあるが、平安時代の土師器・須恵器片が出土していることから、寺内古代寺院と同時期に機能していたものである。両溝間には、特に硬化面や路盤等の敷設は認められなかったものの、前後関係は不明であるが、付け替えられた道路跡の可能性も残る。

地下レーダー　②応用地質株式会社に委託し、寺院地を区画していた溝を検出する事を目的とした地下レーダー探査を行った（第58図）。６調査地区で探査を行い、側線延長は1492mである。

A地区　寺院地西辺の区画溝の延長部に設定したもので、発掘調査で確認した地点の約40m南の地点ということもあり、明確な溝の反応が得られている。

B地区　寺院地東側の区画溝の延長部に設定した。数箇所の強い反応があり、溝のラインを確定できなかった。

C地区　寺院地北東部のコーナーにＬ次型に設定したもので、当初の予想通り本地点で、北辺の溝は南へ方向を変えていることが確認された。

D地区　Ｄ－１～３測定線は、寺内古代寺院跡の南側に広がる埋没谷を超えて、寺院地西辺の区画溝が延びているか確認するために設定され、各測定線で南北方向の溝状の反応が得られている。また、Ｄ－５～７測定線は、寺院地南辺の区画溝を確認するために、水田面に設定されたもので、東西方向の溝状の反応が得られている。この溝状の反応の得られた箇所は、1996年の寺内遺跡第１次範囲確認調査で検出された第１－２号溝の延長部にあたっている。

尚、Ｄ－１～４測定線部は、2001年に実際にトレンチ調査を行い溝の有無の確認を行っているが、東西方向に延びる第１号溝を確認したが、南北方向の溝は確認できなかった。

E地区　参道およびその側溝の確認を目的として設定されたもので、西側で、参道とその側溝らしき溝の反応が認められている。また、東側にも１条の溝状の反応が認められている。西側の部分は、1998年の寺内遺跡第３次範囲確認調査でトレンチ（第２・３トレンチ）を入れ、側溝と推定される溝跡を１条確認している。東側で確認された溝は、1997年寺

内遺跡第２次範囲確認調査で確認された第２号溝と、1997年寺内遺跡第３次範囲確認調査の第１・４・５トレンチで確認された第１号溝を結ぶものと推測される。

Ｆ地区　寺院地東側の区画溝が、埋没谷（現在は柴沼）を越えて南へ延びている可能性を確認するために設定された。２条の溝らしき落ち込みが確認されているが、両者とも地表からの深度が１～２ｍと深い位置に確認されており、大規模な造成の可能性が指摘されている。沼を掘削した際に出た排土は、当然周囲に盛土した事が想定され、その影響がレーダーに反射として影響を与えた可能性が考えられる。

1998年　寺内古代寺院跡の基壇建物跡の中軸線に並行して築かれている、南西方向に位置する土塁と、寺跡との関連を調査するため、約600㎡のトレンチ調査を、寺内遺跡第３次範囲確認調査として行っている。調査の結果、土塁は中世のものであることが判明し、寺跡との関連は否定されている。しかし、トレンチ調査ではあるが、平安時代の住居跡が４軒検出されており、参道のすぐ脇にも寺跡と同時期の集落が広がっていた事が確認された。また、「十」と墨書された土器も出土している。

この他、土塁よりも古い溝（第１号溝）が第１・４・５トレンチで確認されており、1997年の寺内遺跡第２次範囲確認調査で確認された第２号溝と、地下レーダー探査Ｅ測定線の東側で確認された溝の延長と推測される。第２・３号トレンチでは、地下レーダー探査Ｅ測定線の西側で確認された溝跡を１条確認している。埋没谷に移行しているため、ローム層の堆積が認められず、路盤状の敷設や、対となる溝は確認されなかったが、1996年の第１調査区と第３調査区で確認された参道・側溝を結ぶものと推定される。参道は、前面に広がる軟弱地盤の埋没谷を避け、ローム層の載る地盤の固い中島遺跡の西端部を通るように南東方向へ曲がっている事が確認された。

2000年　個人住宅の新築に伴う事前の調査で、寺内古代寺院跡の前面約350ｍの地点である。第１次調査が、９世紀代の集落であったことから、今回の調査区も約80ｍの距離であることから、同期の住居跡が検出されると予想されたが、検出されたのは、意外にも古墳時代の住居跡であった。しかし、北西―南東方向の溝が１条確認されている。平安時代に属するもので、幅２ｍ、深さ50㎝を測る断面は箱薬研形のしっかりした溝である（第51図）。

寺内古代寺院跡と同時期に機能していたことが推定され、区画溝の可能性も残るが、これが区画溝とすると、寺院の前面の湿地帯全部を区画する形となり、形態的に不自然な区画となる。寺田の灌漑のための排水施設であった可能性も想定される。

2001年　1997年の地下レーダー探査で、寺院地西辺の溝の可能性が指摘された、Ｄ－１～４測定線上に５本のトレンチを入れて、実際に溝が存在するか確認調査を行っている（第52図）。調査の結果、西辺の溝は確認できなかった。Ｄ－３測定線付近の第１トレンチで、東西方向の溝を確認しているが、火山灰の同定分析の結果、浅間Ａ（1783年）に比定されており（第Ｖ章第２節参照）、近世の溝であった。

まとめ

現状における寺内古代寺院跡の寺院地の区画溝は、前面の湿地帯となる埋没谷までであり、その南側へは延びていないと判断される。その規模は次のとおりである。
北辺溝－570m（1991年調査・地下レーダー探査Ｃ測定線による）
西辺溝－200m（1991年・2001年調査・地下レーダー探査Ａ・Ｄ測定線による）
東辺溝－170m（1991年調査・地下レーダー探査Ｂ・Ｃ・Ｆ測定線による）
寺院地面積－約129,000㎡（南側を埋没谷で区画した場合）
参道－前面の軟弱地盤を避け、南東方向へ曲がり、現時点で300mの距離を確認している。また、この参道上約270mの地点で、参道上に、瓦を載せたと推定される建物の痕跡（ピット）が確認されている（1996・1997・1998年調査・地下レーダーＥ測定線による）。

また、このピット付近で東西方向の溝が確認されている（1996年調査・地下レーダーＤ測定線）。西側の埋没谷部のみであり、東側には存在しないことから、寺田などの灌漑のための排水施設であった可能性が高いが、参道上の建物の脇に取り付いていることから、何らかの寺の境を意識していた可能性も考えられる。
集落－寺院地の東側（西遺跡：1991年調査）・南側（中島遺跡：1998年調査）・南西側（天神遺跡：1991年調査）には、寺跡と同時期の集落が広がっていることが確認されている。

以上が、現時点における、発掘調査の結果得られた、想定される寺内古代寺院跡の規模である。部分的な調査であり、今後さらに調査の進展具合により、新たな知見が得られる可能性はあるが、現状における認識結果を示しまとめとする。

第２節　武蔵寺内廃寺の空間構成について

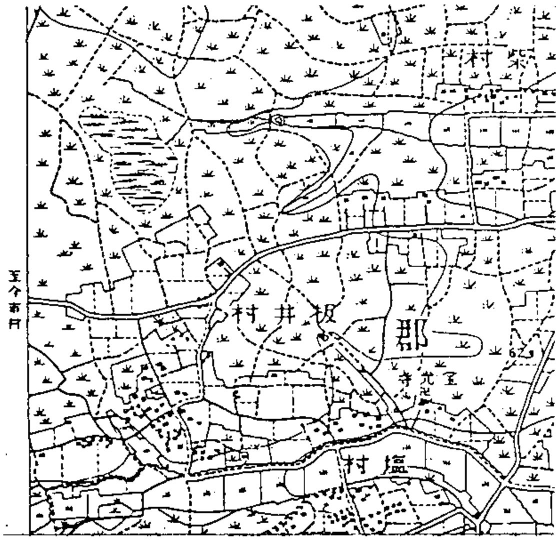
１　要　旨

地方寺院として寺院の空間構成を良好に知ることのできる寺内廃寺跡は古代男衾郡に所在した。榎津・𪀚倉・郡家・多留・川原・幡多・大山・中村の８郷中のどこに属したかいまだ不明だが、当時の男衾郡大領であり、榎津郷戸主でもあった壬生吉志福正との係わりを抜きには考えられず、その庇護の元に寺院の運営を行っていただろう。近年の大規模開発による部分的な調査から引き続く範囲確認調査の結果、寺院の空間占地の状況が次第に判明してきた。また、地形・地質的特徴に活断層の存在が予想され、その影響を考えることも必要となってきた。調査成果として、寺地の南辺区画を推定する資料が得られたこと。参道入口部を検出したこと。寺地の南面は、寺内廃寺と出雲乃伊波比神社を結んだ直線と東西に走る郡衙道を基準とした地割がみられ、一辺約130mの方格地割として認められる、この地割は寺の整備とともに施行された可能性があること。寺内廃寺の周辺には、自然村落の景観とは異なった、都市的とまではいえないが律令制度に現出されるかなり整備された空間的が広がっていたと推定されることなど、地方豪族の氏寺として寺の経営または宗教活動の実態を知る上でさらに資料的価値が高まったといえよう。本稿では寺地（寺院地）の占地状況を区画施設から推定し、周辺地（寺辺地または寺領地）の景観に触れようとするものである。

２　遺跡の立地と環境

江南台地は第三紀層を基盤とする比較的安定した地盤をしているが、寺内廃寺の載る江南町周辺は台地の南北幅が最も広くなり一般的に東へ開口する開析谷が発達している。南方前面の寺内廃寺の西端部は現在でも湧水点となっている。そして、現寺内沼を経て東方に続く狭長な谷津水田が、一方西側は川本町高岡付近から南東方向に侵入する谷がある。この方向に沿いに起伏の少ない台地面が南面から東面にかけて緩やかな段差を持ち、かつ傾斜している。

この斜面のわずかな高地を中心に伽藍が造られ、この伽藍域を取り巻くように遺構が広がっている。この地形的特色には「江南断層」とよばれる活断層の存在が大きく影響しているものと考えられる。江南断層は西へ約70度振れ、高さ３～１mのズレがあり、東方から西方に乗り上げる逆断層となっている。北西から南東方向に走行し、この線上に和田・吉野川（通称　逆川）に見られる流路の屈折、高岡の谷津、舟山に見られる段丘の突



第59図　明治時期の地形図（迅速図）

出、緩やかな段差、台地南縁に見られる南東方向の谷が行く筋も見られるなど主断層に平行した断層地形とされる。寺内付近の地形はこの断層活動により、寺内沼の谷筋の変異、寺南面での湧水地の出現などが起こったものと思われる。

江南町の野原丸山遺跡では江南断層の一つと思われる断層が発掘されている。主断層に並行するものと思われ、変位差約３mの逆断層であった。この断層活動の時期は明瞭ではないが関東地方に甚大な被害をもたらした弘仁９年（818）と元慶２年（878）に記録される大地震が起きており、弘仁９年の地震は北関東を中心とするもので、寺内廃寺の存続期間中でもあり九世紀半ばに再建整備を行っていることを考えると、再建の理由の一つに地震よる被害も想定されよう。但し､遺構での明確な確認はまだされていない。

周辺部の人工的地形改変の痕跡を見てみよう。南側は寺院敷地と南方の開析谷を挟んで中島の台地が広がる、この間は谷斜面部が残されておらず、台地縁を切り取ったように水田が造られている。また、東院地区の南面寺内沼との間は斜面部を平坦地にするため盛土造成している。流域下の小字「堂の下」の開墾された谷津田を考えると造寺活動とともに溜池の掘削を行っているのではないだろうか。東院部分の整地層は沼の掘削よる排土を利用したものであろう。寺内沼は上沼・下沼に分れ、その中堤が寺地の東辺区画溝の延長線上に乗ることや、沼の造営・管理を考えると豪族層の関与とともに、氏寺の寺領に沼を含ませ、用水の用益権を握っていたとも想定されよう。

遺跡内の溝や低地部分では火山灰層が頻繁に確認される。分析の詳細は報告編を参照されたいが、火山灰の年代から遺構の時期・変遷を見ると、榛名山産出のHr－FPから浅間山産出のAs－A, As－Bが検出された。とくにAs－Bは天仁元年（1108）の噴出年代が押さえられており、遺跡の年代を推定する示標になる。南門前の参道跡は盛土のうえ土橋状に構築され、西側の低地では浅間山噴出のAS－B・AS－A火山灰が堆積しており、南面の低地面には当時から滞水あるいは湿地状をしていたと推定される。小字地名は「ヤダリ、ヤダレ」といい湿地を示す地名とされる。

明治22年刊行の迅速図では湿地として描かれている。その後、第二次大戦時までに耕地化が進み、現在は池となっている。ここからの排水は現在でも寺内沼に流下させている。寺の存続期でもこの水路は設置されていたものと思われ、寺への参道は部分的に橋が掛けられていただろう。寺の創建当初、寺前面からの排水処理と溜池の構築、斜面部の盛土による平坦地化は造寺による造成にだけでなく、生産環境の整備をも意図して、同時に行っていたと考えられる。現在の中島から寺内に通ずる町道も土橋状で時期不詳だか人為的な構築であり、山林に至る主要な道として後世まで使われている。

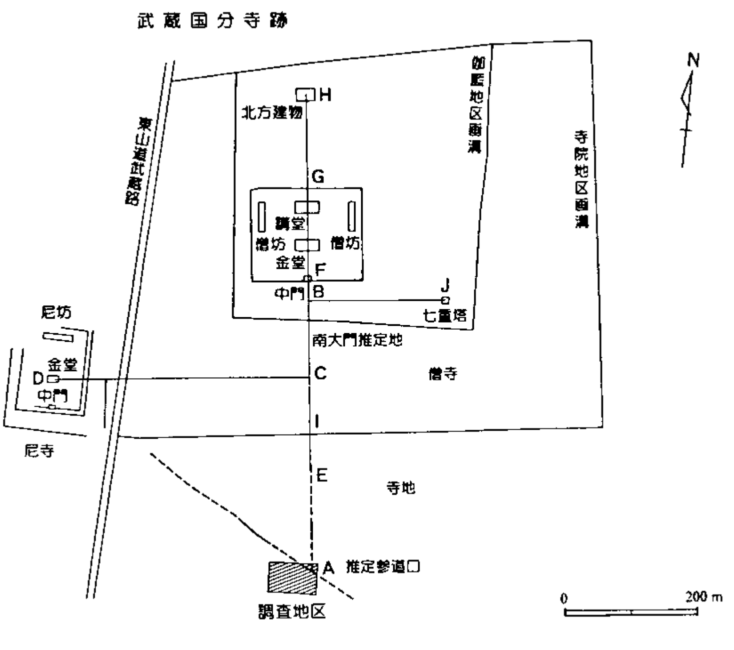
迅速図や旧公図・土地改良前の航空写真など参考資料より寺前面の地形を見ると一定の区画が残存しているように見える，このような方格線は畦畔、溝、道など現実の地割から類推した。作業としては第60図により区画の明瞭なＡ３, Ａ４, Ｂ３, Ｂ４の方格地割を起こした。前面の湧水地（Ａ１区画）を残し東西２区画、南北４～５区画の方格地割がみてとれる。もっとも東側の畦畔延長（南北線A）は、南門前から伸びる参道の線上に乗っており、この延長線上には延喜式内社といわれる古代男衾郡三座の一つ「出雲乃伊波比神社」の杜に至る。この南北線Aを南北の基準線とし参道Aが設定され、郡衙道

第60図　寺内廃寺周辺の地形

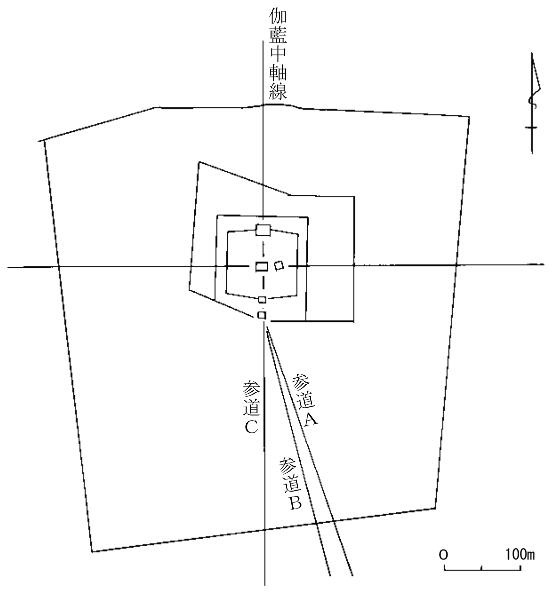
を踏襲したと考えられる江南本畠線の延長を東西の基準線としたものと思われる。これらの方格地割は条里のようにほぼ一辺130mを測るが、Ａ４，Ｂ４区画はＡ３，Ｂ３区画へ約10m程はみ出している。これは先に基準とした郡衙道の道路部分に相当するのではないかと予想される。参道ＡはＡ０からＡ３までで東西の郡衙道につながる。Ａ２の位置に参道口の施設があり参道Ｂ上には冠木門が建つ。

参道Ａに注意するとその方位は塔基壇の傾きに等しく、参道Ａの設定と同じ設計思想で塔の建築も進められた可能性がある。金堂・講堂などの伽藍建物の中軸線は、検出された北辺の寺地溝などのように南門以北の寺の敷地と、寺領地または俗地とも言える寺南面の方格地割と方位も尺度も異なっており、寺地の地割と生産域における地割の設計思想が異なっている。また現金堂・講堂・中門の主軸と異なる点については、明確な理由をまだ得ていないが、参道Ａ、塔が生産域の設計に倣っている点に注目すると、この差異は伽藍整備にかかる時期差と見ることも可能と思われる。金堂・講堂・中門等の伽藍が整備され一辺45mと推定される方格地割によって寺域溝、寺地溝などが設定されている点を見ると、塔は創建寺のままか再建時も旧基壇を踏襲したといえる。すると、金堂・講堂・中門などの前身建物は塔と同じ軸線を持っていたのかどうか今後の課題となる。また、再建期とする伽藍中軸線上のＡ－２～Ａ－３区画に、主軸を同じくする道がある。湿地の前面で途切れており、参道Ｃである可能性もある。さらにこの延長は区画Ｂ線と区画３の交点に一致するなど、計画性を持って設定されているようである。現時点では３時期の参道遺構が存在する可能性を想定するにとどめる。

なお、寺領と耕地の問題に関係するが板井地区では戦後に山王用水土地改良区によって荒川の用水が引かれるまで、水田は和田川流域の谷津田と寺内の湿地しか存在しなかった。明治14年に完成した「埼玉県郡村誌」によると当地板井村の田は約８町４反、



第61図　武蔵国分寺の地割（文献４）

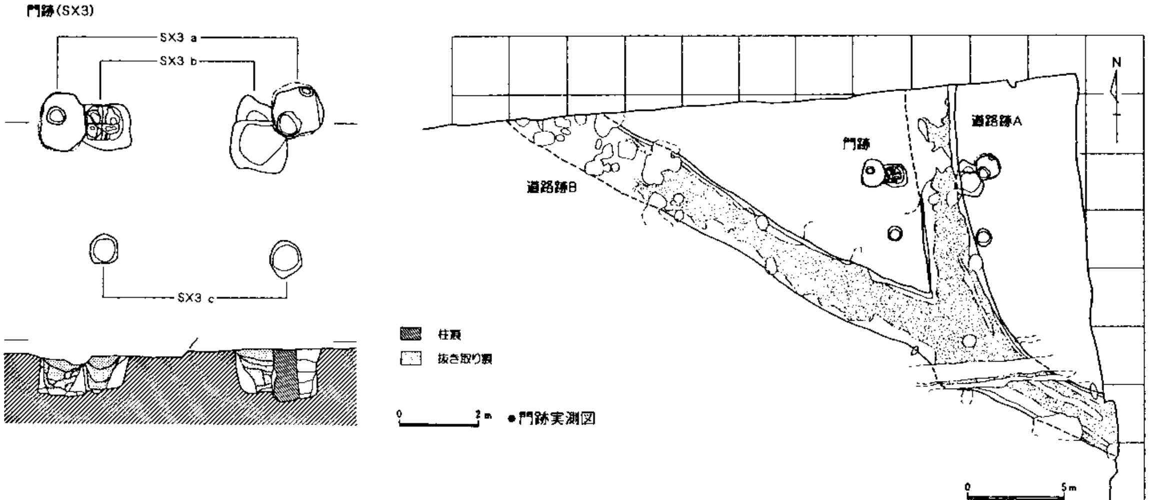


第62図　寺内廃寺の地割

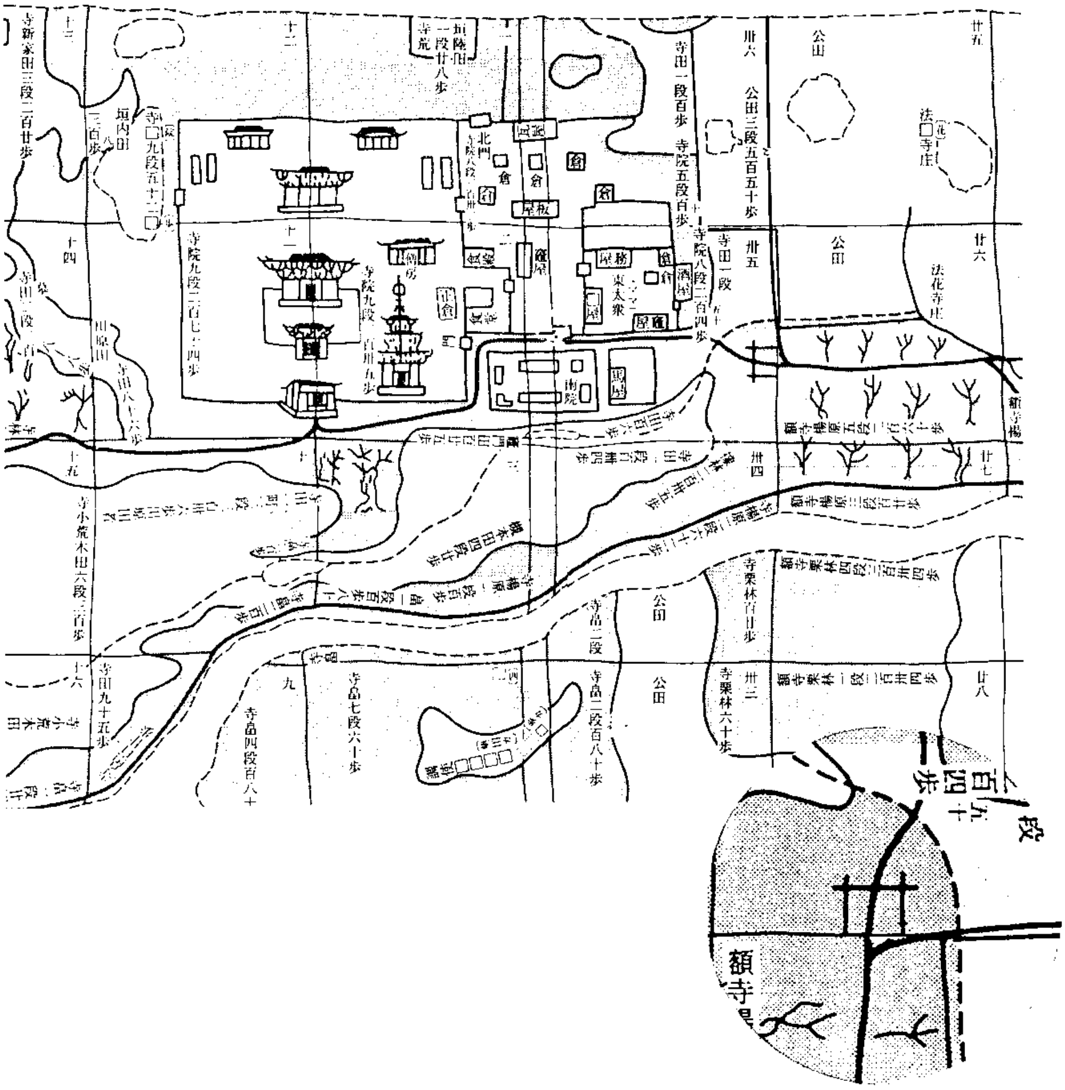
畑は約77町と畑のみといっても良く、乾燥台地上に展開する林野と畠地帯の卓越する風土であった。古代においては、寺の周辺はわずかな谷津田しか存在せず、寺領のほとんどは畠であったと思われる。私寺の寺田は領有制限があるが、畠地については良くわかっていない。寺院から離れて寺田が存在したかもしれないが可能性は少ない。谷津田を上回る畠地帯の卓越は男衾郡の領域景観に通有であろう。「額田寺伽藍並条里図」中には「寺畠」があり、当時一般的に寺領に畠が含まれていたことが窺えるので、寺内廃寺の場合も寺領の大半は畠であり、さらに「寺山、寺原、寺岡、寺沼」などのように周辺の生産域を広範に取り込んでいたと想像される。それはとりもなおさず、檀越である豪族の領地と表裏一体であろう。

3　参道口の調査　96年第1･2調査地点で、南門前から連続する側溝を有する道跡が二本検出されている。東側を参道Aとする。主軸方向N－15°－W、 幅6m。西側を参道Bとする。 主軸方向N－18°－W　幅6mである。一部分の調査のため遺構の切りあいは確認できていないが参道Aから参道Bへの作り変えが想定される。これは寺院南面の方格地割に関して参道Aが基準線として設定されたためと推定される。参道Bは路肩に二箇所柱痕があり、第2号柱穴は96×70cmの隅丸方形の掘方をしており、底面には基礎硬めに入れられた瓦が出土している。第1号柱穴はやや寺内に後退して位置するが、両柱穴とも調査区外に対向する柱穴をもち、同じ機能を有した遺構で建替により前後関係を持つと考えられる。この柱痕は参道上に配置された門の遺構であると考えている。

また、この門跡の部分から南側では側溝が狭まり、直前に東西溝も取り付く。この門跡の位置は中門想定地より300mの場所で、寺内廃寺の参道口に当たるものと考える。同様な調査例に武蔵国分寺の南前面で検出された参道口跡遺構がある。武蔵国分寺の参道口跡は講堂・金堂の中軸線上で、中門より約400m南方に位置し、国分尼寺方向へ道



第63図　武蔵国分寺参道口遺構（文献４）



第64図　額田寺伽藍並条里図より「冠木門」（文献５）

が分岐する部分で確認されている。ここに建てられていた門跡SX3は、２個の柱穴を一対とし二回の建替が認められ、SX3b－SX3a－SX3cの変遷が推定される。柱穴の芯芯距離は実測図によるとSX3bとSX3cは4.5～4.7m、SX3aは約６mを測るようである。このような道を跨ぐ遺構は寺内廃寺の例と同様で、参道口に立てられていた「冠木門」の遺構であると考えられる。その類証となるものは奈良時代の荘園図で国宝に指定されている「額田寺伽藍並条里図」がある。古代豪族額田部氏の氏寺でもあり、八世紀後半の額田寺の構造と建物配置などを忠実に表現していると推定されており、古代寺院の空間構成を知る最適の史料される。この絵図の読み解きが黒田日出男氏により試みられている。以下は同氏の論文を参照している。この絵図中には十条三里廿六坪と同三十五坪の境界線上に道を跨ぐ門の表現がある。縦柱と横木を高架させた冠木門風の表現から「仮称冠木門」とされるが、まさに冠木門であり、武蔵国分寺・寺内廃寺の遺構で実際に確かめられたというべきだろう。絵図では寺の東側より来る道が冠木門の前で分れ一つは北上し、今

ひとつは直進して冠木門を入り「東大衆」と「南院」・「馬屋」の間をとおり伽藍地の「東門」に前で南に折れ、さらに西に折れ伽藍区画沿いに進み「南門」に続き、さらに「古堤」方面へに至る。寺に至る主要道であることが寺に付属する施設馬屋の前を通っていることからも首肯される。冠木門の位置は前述の坪境にあたり、寺領地との境界線上にも当っている。冠木門の内側は寺の中、寺領地内であり、額田部氏の支配領域の内との性格をも有している。さらに境界線を支える「傍示、墓、道、池と堤、樹木表現、河川」諸表現を抽出し、寺領と非寺領地の検証をしている。参道Ｃは伽藍中軸線上に位置するので寺の廃絶時まで使われた参道であろうか、航空写真では約100m確認される。

寺内廃寺においては参道の入口部分に武蔵国分寺と同様に冠木門が建てられていた時期があったと考えられるが､やはり寺の範囲を明示するための施設であり寺院には通例の施設であろうと思われる｡さらに絵図中におけるこの冠木門の意義が寺領を考える上で重要であり､額田寺が豪族の私寺であるだけに遺跡での確認とともに同荘園図の研究の進展を望みたい｡

4　寺地区画の概略　寺内廃寺はその敷地がおよそ600m四方に及ぶ広大な空間を占めている。東西に侵入する開析谷に南面するほか、北，東西ともほとんどは平坦な江南台地上に展開している。確認調査は開発に伴う発掘調査に加え、隣接地についても調査を行っており，寺地の範囲についてほぼ確認するに至った。これらの遺構には、伽藍基壇跡、建物跡、溝，築地などの区画施設、道、工房跡などがあり、既報告のとおりである。寺域、寺地の区画施設については何度か報告しているが、南辺区画施設については判明していなかった。今回参道入口部に取り付く東西溝が確認されたことにより、これが南辺区画に相当する可能性が高くなった。この溝は96年調査第１地点２号溝で参道Ｂに直交しており、西辺区画延長と直交する交点となり参道口より西側へ約300mを測る。東側へは東辺区画延長との交点とすると約150mを測るが、直交しない。南辺区画が定まることにより、西辺・東辺区画の規模も推定可能となる。改めてこの区画施設の全体を見直すと、これらの区画施設は寺地区画のために掘削された大溝で、四周を囲尭していると推定されていた。北辺は西側で折れがあるものの約540m、直角に折れ西辺に連続し、西辺は約550mを測る。北辺から東辺へも直角に折れ、東辺長約560mを測る。南辺は西辺、東辺との直線延長上を交点とすると約450mを測る。全体として寺地の北半については明瞭だが、南半部分については、湿地を取り込んでいることや南東部の歪が大きく、この部分は広く敷地を取れる余地があることから疑問が残る。この東南部分では発掘が進んでいないので想定の域をでないが、大衆院などの寺務機関、または檀越の居宅を想定することも可能と思われるので、寺地区画の設定とともに今後の解明すべき課題である。

5　寺辺の様相　寺内廃寺では、寺院中心に金堂などの仏の空間を区画する第一区画、寺の事務施設などを含む第二区画、寺の日常維持・生産施設を取り込む第三区画がある。さらに寺周辺の遺構があり、これらは明確に区画を持たず東側では一般集落の中に混ざり込む。寺辺地北面は台地北縁まで当時の集落は作られず山林が広がり、寺付属の須恵器窯や鍛冶

遺跡が分布するなど寺の付属の山野であったと考えられる。また、この山野中には寺僧等の修行場としても使われていた。寺内廃寺では僧坊などの寺僧の生活した空間が明らかになっていないが、複数の僧がいたと思われる。但し、彼らは正式に得度し、度牒を得た僧侶ばかりでなく私度の優婆夷・優婆塞も加わっていたかもしれない。官寺では制約多く、私寺ではそれほど喧しくは無かったのかもしれないが日本霊異記などによると、当時の僧侶の生活の様子が活写される一方、僧尼令などを規範として細かく行動が定められていた。集落は東院地を含め寺外の東方にひろがる。また南は寺と社の間に集落がやはり展開する。檀越の居所はいまだ明らかではないが、寺の南あるいは、東側に絞られるのではないか。寺内廃寺周辺の空間構成は寺地の占地、条理的地割、道などに見られる直線、均整の取れた区画、高層の建物、色彩など人工の景観を眼前に示すことで、律令施策の現出を意図していたかの感がある。これらのことについては、別稿にて考えをまとめたい。（新井）

註

註１　江南町の寺内廃寺は周知の遺跡として知られていたが、正式な発掘調査は1991年から実施した。そのため、同一遺跡名が鳥取県鹿野町に所在する白鳳期の古代寺院ですでに使われ、1982年には調査報告もなされていたので、（1994新井）の文献では江南町の寺内廃寺については「武蔵寺内廃寺」としておいた。

現在、江南町の「寺内廃寺」は一部を町指定史跡にしているが、指定名称は「寺内古代寺院跡」の名称で呼んでいる。寺名を記した墨書土器が多数出土しているので、将来的に寺名をいれた遺跡名を採りたいと考えている。

註２　男衾郡の領域については、古代史の立場から多くの比定案が出されているが、大方の了承を得るまでにいたっていない。おそらく考古学的な調査から結論を出すしかないと思われるが、十分な考古学的成果が出揃っているともいいがたい。領域とは人民の集住地、五十戸を一郷とした統治の及ぶ範囲と考えるので、当時において厳密に郷、郡界が定まってはいなかったと思う。ただおおよそ、古代の人々の意識の上では、基準となるランドマークを一応の境界としてある地域を○○郡と認識していたのではないか、またどちらの郡にも属さないあるいは属した中間地帯もあったと想像している。古代のランドマークには自然的なもの、人工的な施設などが想定されるが、河川、山嶺、道路、条里などを考えている。

郡領域については、およそ次のような東西南北の境界に囲完された範囲との見通しを持っている。

幡羅郡	東	東山道武蔵支路	西	上つ道の路線（郡衙間の道）	南	荒川	北	利根川
男衾郡	東	東山道武蔵支路	西	外秩父山地	南	都幾川	北	荒川
大里郡	東	荒川	西	東山道武蔵支路	南	吉野川	北	星川・忍川
比企郡	東	市ノ川	西	東山道武蔵支路	南	越辺川・入間川	北	市ノ川
横見郡	東	荒川	西	東山道武蔵支路	南	市ノ川	北	―

註３　弘仁九年の地震断層については、埼玉県下ではまた認められて無いようだが、深谷市城北遺跡では噴

砂跡が確認されており、深谷断層に起因するものと想定されるが成因の時期は確かめられていない。荒川右岸では、地震の報告すらない現状である。江南断層上には沖積地はあまり発達していないが、鹿島古墳群をはじめ多くの古墳群があるので、石室のずれや崩壊についての所見に地震の影響が認められるかどうかが、調査時に必要な視点のひとつとなるだろう。

註４　方格地割の検出と認定については、どこまでが合理的なのか問題となるであろう。宮都の条坊ですら、やっと考古学的に検証されている現状なので、まして江南町に残る方格地割が古代のものを継承しているのか不明である。本論は、一つの試論として批判を仰ぎたい。また、今後も発掘調査による検証を進めたい。

註５　東辺溝に接して西遺跡の集落が展開し、この集落の一角に小字元八幡という地名の場所がある。寺内廃寺の伽藍地の真東に位置する。現在の柴地区に所在する八幡神社の旧在地とされる。八幡神社は東大寺の創建に際し宇佐八幡より手向山八幡に分祀した仏教的においのある神として崇敬されていた。寺辺の景観として寺内廃寺の創建とともに鎮座していたかもしれない。

註６　参道口の柱穴については、本遺跡では冠木門との見方をしているが、同様な門遺構であってもやや性格の異なる遺跡も知られる。上植木廃寺（群馬県伊勢崎市）では、伽藍中軸線上に位置し南辺溝の取り付く内側に二個の柱穴が確認されている。柱穴芯々の距離は2.4mで参道上にあることから「棟門」状の南門跡と想定されている。棟門・冠木門の判断の差異は意見の分かれるところであろうが、額田寺の場合を敷延すると寺領の内外を明示する性格の門に冠木門が建てられる場合があったとしたい。

引用参考文献

１．新井　端　1993 「埼玉県大里郡江南町寺内廃寺」『日本考古学年報　45』
２．新井　端　1994 「武蔵寺内廃寺の発掘調査」『渡来人と仏教信仰』所収　雄山閣出版
３．新井　端　1995 「寺内廃寺跡」『江南町史　資料編１　考古』江南町役場
４．府中市教育委員会　2001 「武蔵国分寺関連遺跡　推定武蔵国分寺参道口跡の調査」
５．黒田日出男　2001　古代荘園絵図読解の試み「古代荘園絵図と在地社会についての史的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告第88集』
６．金田章裕　1996 「日本古代荘園図」東大出版会
７．関西大学・鹿野町教育委員会　1982 「寺内廃寺発掘調査概報Ⅰ～Ⅲ」
８．須長泰一　1988 「上植木廃寺　昭和六十二年度発掘調査概報」伊勢崎市教育委員会
９．須長泰一　1994 「上植木廃寺　平成四・五年度発掘調査概報」伊勢崎市教育委員会
10. 江南町教育委員会　1997 「丸山遺跡」江南町文化財調査報告書　第11集

第Ⅴ章　付編

第１節　寺内遺跡大溝地下レーダー探査　　平成９年９月　応用地質株式会社

1. はじめに　本調査は、埼玉県江南町教育委員会のご依頼により、応用地質株式会社が実施した「測量委託（寺内遺跡大溝地下レーダー探査）」の結果についてまとめたものである。

以下にその概要を示す。

調査件名　測量委託（寺内遺跡大溝地下レーダー探査）

調査地　埼玉県大里郡江南町　寺内遺跡（第66・67図）

調査期間　平成９年５月19日〜平成９年９月30日

調査目的　寺内廃寺は、奈良平安期の寺院跡である。金堂跡、講堂跡、中門跡、塔跡など寺院の中枢部分については、江南町教育委員会による発掘調査により、すでに明らかにされている。

本調査の目的は、地下レーダー探査を用いて、寺院地を区画していた溝を検出することにより、寺内遺跡の範囲確定のための基礎資料を得ることにある。

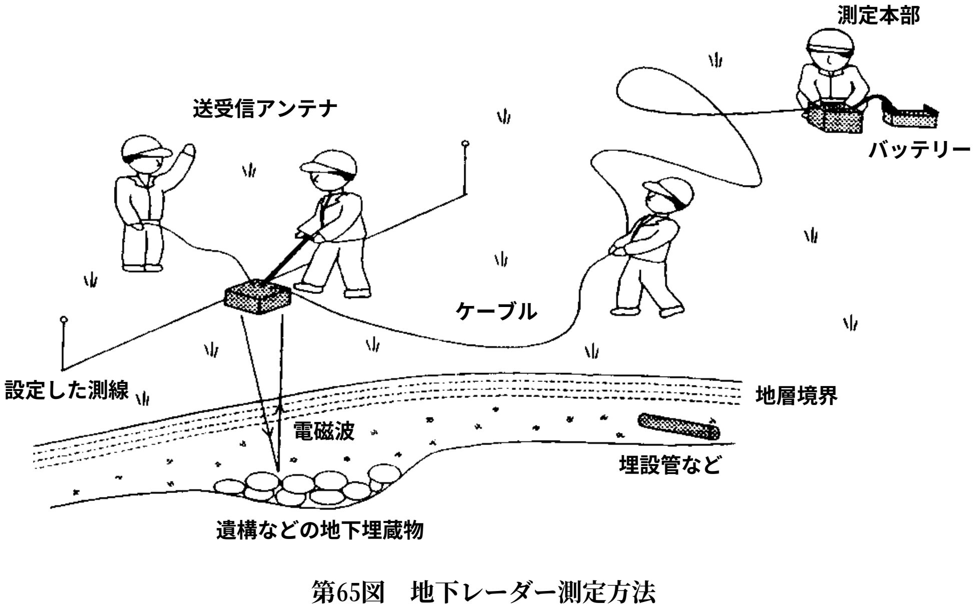
調査数量　地下レーダー探査1,492m（第３表）

担当者　軽部　文旗、小林　恵、竹島　淳也

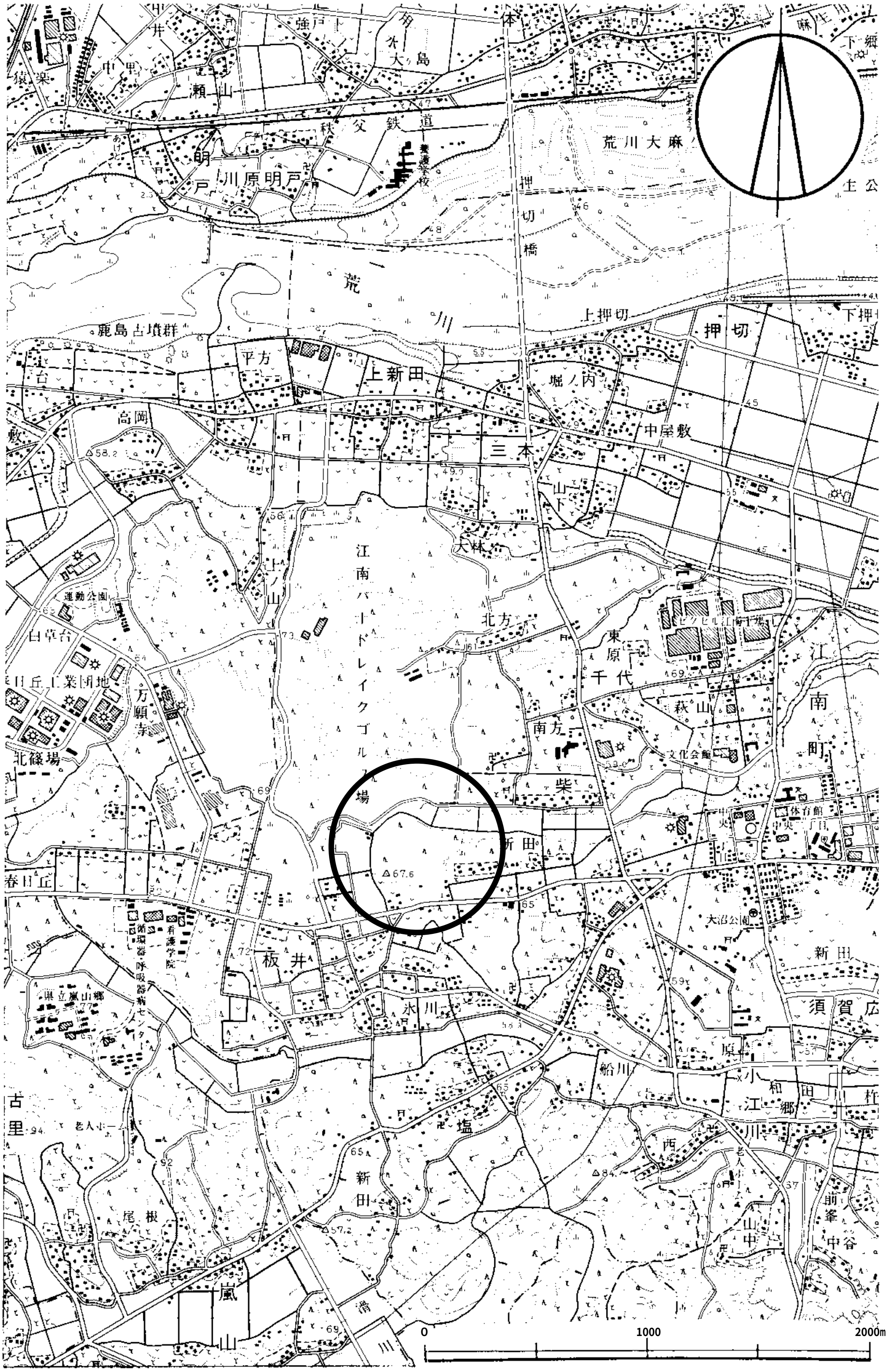
2. 測定方法

原　理　本調査において使用する地下レーダーシステムは、地表に送・受信アンテナを設置して地中に電磁波を放射し、この電磁波の反射を捉えることにより、地中浅部の地下構造、または空洞、埋設物などの存在を非破壊的に探査する装置である。（第65図）

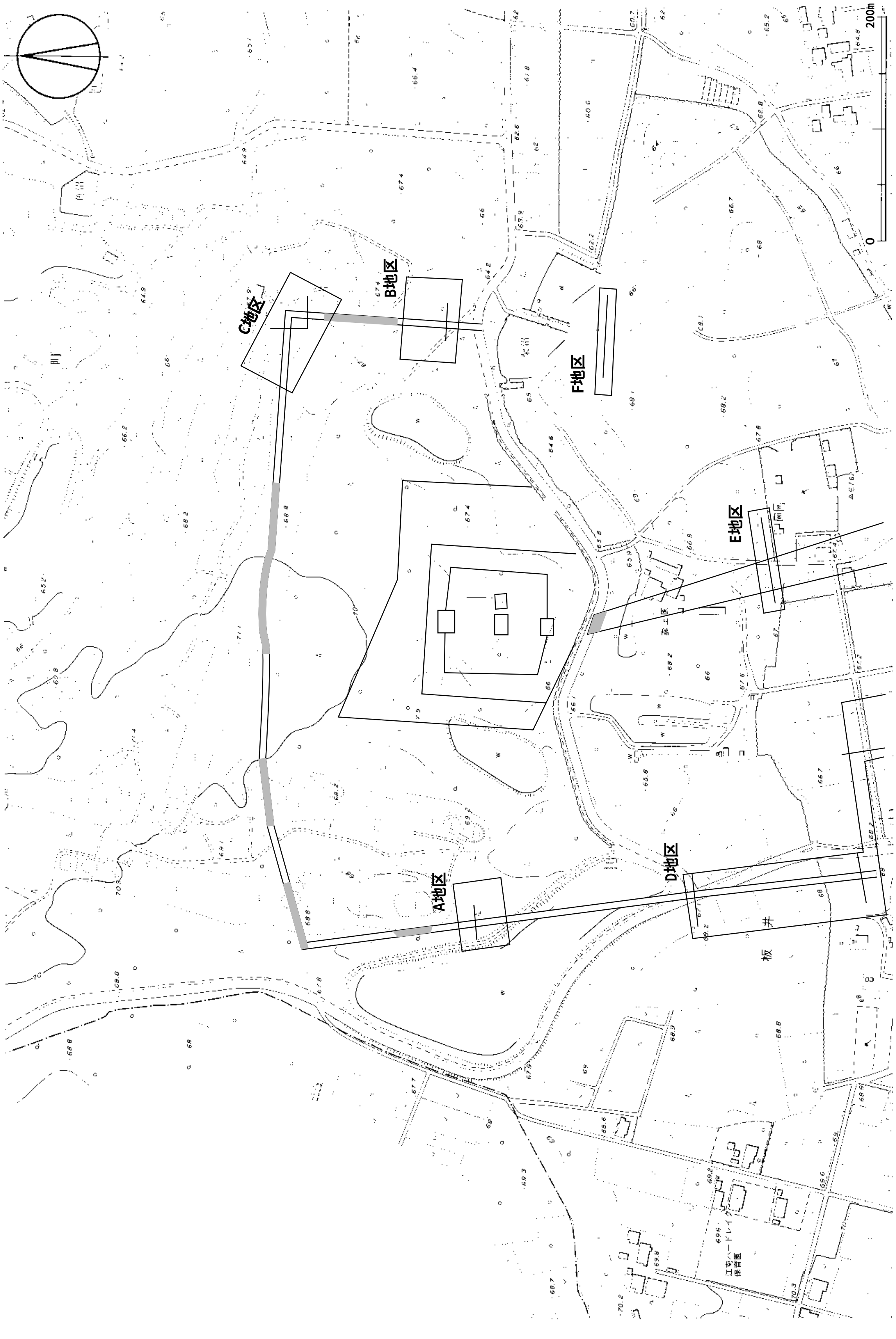
一般に媒質内を伝播する電磁波は、媒質での誘電率や導電率の異なる境界面において反射、屈折、透過する。実際の地盤においては、地層境界、締め固め状態の急変面等が反射面となる。地下に埋蔵されている遺跡の場合には、旧生活面、旧地表面が地層境界



第65図　地下レーダー測定方法


秩　父　鉄　道
荒川大麻
荒
川
上押切
押　切
鹿島古墳群
平方
上新田
堀ノ内
高岡
中屋敷
三　本
北方
東
原
千　代
萩　山
南方
柴
新田
文化会館
体育館
大沼公園
春日丘
白草台
運動公園
万
願
寺
北篠場
板　井
氷　川
船川
須賀広
小
江
川
塩
新
田
西
尾　根
嵐
山
古
里
滑
川
0
1000
2000m

第66図　調査地案内図



第67図　調査範囲一覧

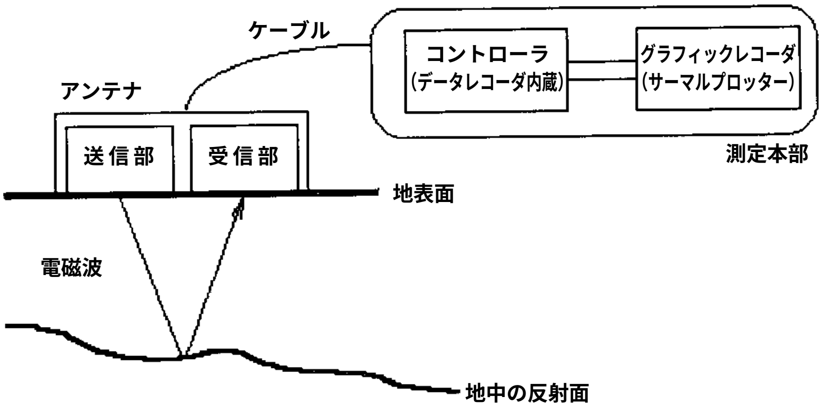
を形成しており、そこにみられる地層の凹凸や連続性が地下レーダー探査によって把握されることになる。したがって、竪穴式住居や堀跡などの遺構は旧地表面における反射面のくぼみとして、また、空洞、礎石、貝塚などの異質物が地盤中に埋まっている場合には局所的な反射体として記録上に現れる。

測定装置

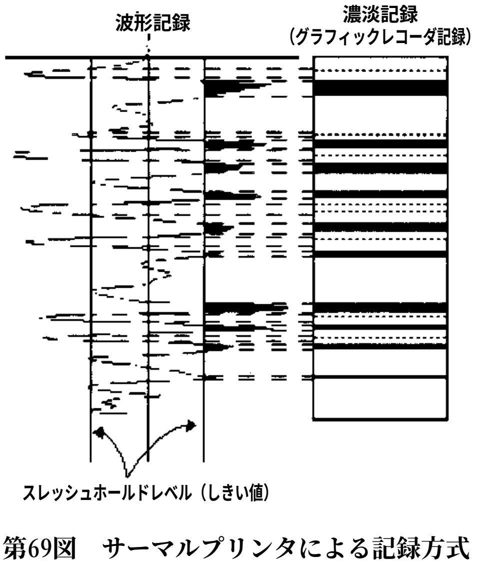
装置は第68図に示すように、電磁波を送信あるいは受信するためのアンテナ、送信アンテナにエネルギーを供給したり、受信アンテナが捉えた信号の増幅、フィルター処理などを行い、得られた記録をその場でカラーモニターに出力するコントロールユニット（本体)、測定記録を記録紙に出力するためのサーマルプリンタから構成されている。また、記録を何度でも出力できるよう、得られた信号はコントローラー部で処理された後、磁気テープに収録される。

サーマルプリンタによる記録方法は第69図に示すように、得られる反射波形の振幅にしきい値（スレツシュホールドレベルと呼ぶ）を設け、濃淡表示として記録する方法である。

装置の仕様を第２表に示す。



第68図　地下レーダーシステム



第69図　サーマルプリンタによる記録方式

第２表　地下レーダー探査装置仕様　　　　　GSSI社（アメリカ）製

名　　称	仕　　様	
地下レーダーシステム ＳＲＩ－10A	コントロールユニット	フルデジタルコントロール チャンネル：最大4ch送受信可能 時間レンジ：０～20,000nsec データ保存：８㎜カセットテープ 分解能：16ビット モニター：19㎝カラーモニター
	サーマルプリンタ	記録方式：サーマル方式1,680ドット／scan インターフェイス：８ビットパラレル ドットサイズ：0.09×0.17㎜
	アンテナ	中心周波数：500MHz ２アンテナ１体型 電磁シールドタイプ

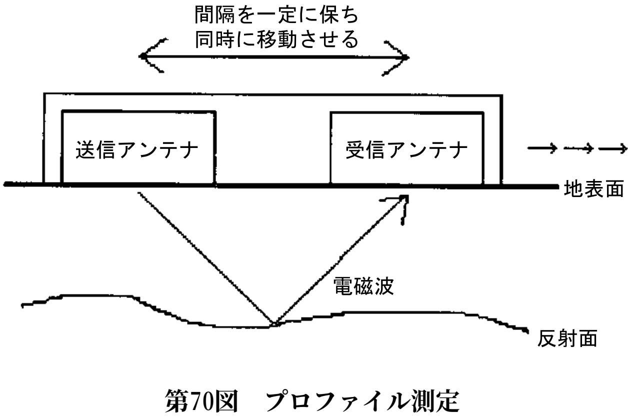
測定方法　　測定方法にはアンテナの操作方法によって、プロファイル測定とワイドアングル測定の２種類がある。

プロファイル測定　　プロファイル測定は、第70図のように送・受信アンテナの間隔を一定に保ったまま測線に沿ってアンテナをほぼ一定速度で移動させながら測定する方法である。この方法により得られる記録は、横軸が水平距離、縦軸が反射時間である。反射時間は深度に換算できるので測線下の地下の断面に対応した記録となる。 反射面までの深度をＤ、送･受信アンテナ間隔をＸ０、地中における電磁波伝播速度をＶとすると、反射時間（往復走時）Ｔは次のようになる。

$$T = \frac{1}{V}\sqrt{X_0^2 + 4D^2}$$

$$\therefore D = \frac{1}{2}\sqrt{(T^* V)^2 + X^2}$$

ここでＴは記録から読みとることができ、Ｘ０は既知であるから、Ｖがわかれば反射面の深度Ｄが求められる。電磁波速度Ｖは､次のワイドアングル測定により求められる。



第70図　プロファイル測定

ワイドアングル測定

ワイドアングル測定では、第71図に示すように送信アンテナを固定し、受信アンテナだけを一定速度で移動させながら測定する方法である。この時、反射時間Tはプロファイル測定と同様に次のようになる。

$$T=\frac{1}{V}\sqrt{X^2+4D^2}$$

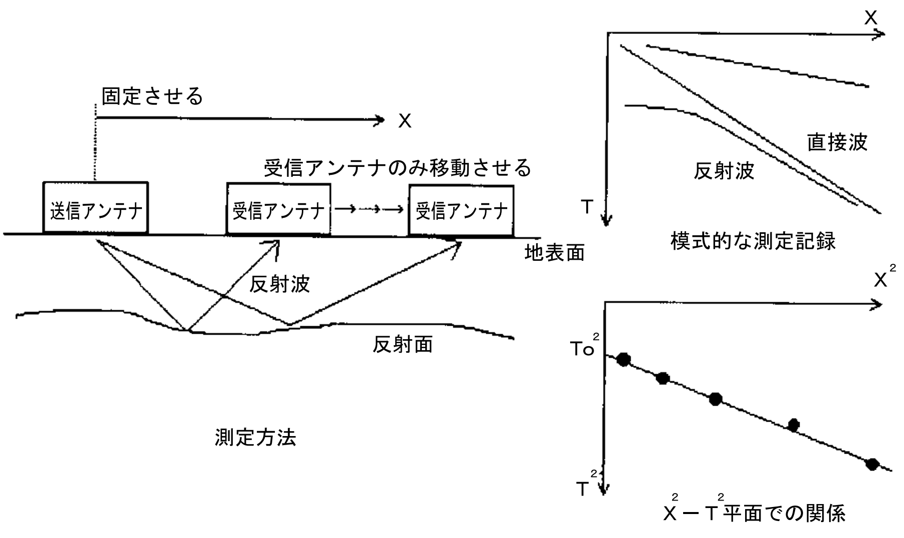
ただし、この場合アンテナ間隔Vは変数である。この式より、

$$T^2=\frac{1}{V^2}(X^2+4D^2)$$

となり、X＾2－T＾2平面上で直線関係となる。したがって、記録から読み取ったT、XをX＾2－T＾2平面上にプロットし、直線近似してその傾きmを求めれば、反射面までの平均的な電磁波速度は、

$$V=\frac{1}{\sqrt{m}}$$

として求められる。また、直線の零点走時T０（X＝０の時のTの値）から反射面の深度Dが求められる。



第71図ワイドアングル測定

解析方法

プロファイル測定により得られる記録は、横軸が水平距離、縦軸が反射時間（往復走時）であるが、反射時間Tはワイドアングル測定により求められる地盤の電磁波伝播速度Vを用いて、

$$D=\frac{1}{2}\sqrt{(T^{*}V)-X_0^2}$$

により反射面の深度Dに換算できる。つまり､深部の反射体ほど反射時間は大きくなる。したがって、プロファイル測定によって得られる記録は、一種の深度断面表示となる。

反射波は３～４波を１組としてその連続性を追跡する。連続した反射波の現れるところを地層や構造物の境界面（反射面）と解釈することができる。また、埋蔵物などの異質物が地中に存在すると、この連続した反射波が途切れて双曲線型などの強い反射パターン（アノマリー）となることが多い。遺跡調査では解析の際に、特に反射波の連続性、反射記録の形状に着目して記録を判読し、反射面の起伏や反射体の分布を断面図や平面図に整理して遺跡の埋蔵状況を推定する。

3. 測線配置

第67図　調査範囲一覧にあるように、調査地をＡ地区からＦ地区に分け、その範囲内の測線について、頭に地区名を付けた測線名を設定した。例えば、Ａ地区の１本目はＡ－１測線、Ａ地区の２本目はＡ－２測線というようにである。測線は基本的に江南町教育委員会に設定していただき、測定の状況に応じて、随時追加測線を入れた。

測線数および測線長は、Ａ地区５本（計207m）、Ｂ地区７本（計390m）、Ｃ地区９本（359m）、Ｄ地区７本（計361m）、Ｅ地区２本（計100m）、Ｆ地区１本（76m）となり、総測線数は31本、総測線長は1,492mである。各測線についての詳細は、表３－１に示す。

各地区の測線配置図および遺構推定図を第72～77図に示す。今回の調査では、測線の位置の測量を行なっていないため、測線の正確な位置を地形図上に落とすことは難しい。そこで、測線配置図も誤解を避けるため、地形図上に落とすことは避けた。なお、現地で測線の位置を確かめられるように、基本となる測線の始まりと終わりに木杭を打った。

第３表　測線一覧表

１）Ａ地区

測線名	測定距離	測線長（m）	備　　考
Ａ－１	０～30m	30	始点、終点に杭
Ａ－２	０～30m	30	始点、28mに杭
Ａ－３	０～50m	50	始点、終点に杭
Ａ－４	０～57m	57	〃
Ａ－５	０～40m	40	〃
小　計		207	

２）Ｂ地区

測線名	測定距離	測線長（m）	備　　考
Ｂ－１	－20～50m	70	Ｂ－３測線の15m北側
Ｂ－２	－20～50m	70	Ｂ－３測線の５m北側
Ｂ－３	－20～50m	70	始点、０m、終点に杭
Ｂ－４	－20～50m	30	Ｂ－３測線の５m南側
Ｂ－５	０～50m	50	Ｂ－６測線の３m北側
３－６	０～50m	50	始点、終点に杭
Ｂ－７	０～50m	50	Ｂ－６測線の３m南側
小　計		390	

３）C地区

測線名	測定距離	測渦線長（m）	備　　　考
C－１	０～24m	24	C－２測線の３m北側
C－２	０～50m	50	始点、終点に杭
C－３	０～30m	30	C－２測線の４m南側
C－４	０～40m	40	始点、終点に杭
C－５	０～40m	40	〃
C－６	０～45m	45	C－９測線の９m西側
C－７	０～40m	40	C－９測線の６m西側
C－８	０～40m	40	C－９測線の３m西側
C－９	０～50m	50	始点、終点に杭
小　計		359	

４）D地区

測線名	測定距離	測線長（m）	備　　　考
D－１	０～55m	55	始点、終点に杭
D－２	０～26m	26	〃
D－３	０～22m	22	〃
D－４	０～80m	80	〃
D－５	０～69m	69	畑の区画に沿って側溝から1.5m東側
D－６	０～69m	69	知の区画に沿って畑境から3.7m西側
D－７	０～40m	40	畑の区画に沿って東側
小　計		361	

５）E地区

測線名	測定距離	測線長（m）	備　　　考
E－１	０～50m	50	始点、終点に杭
E－２	０～50m	50	E－１測線の３m南側
小　計		1000	

６）F地区

測線名	測定距離	測線長（m）	備　　　考
F－１	０～75m	75	始点、終点に杭
小　計		75	

総測線長　1,492m

探査結果

第78～83図に本調査地における代表的な測線のカラー記録を掲載する。記録は断面図で表され、横軸方向が測定距離（m）、縦軸方向が深度（m）を示している。ここでいう深度とは、F－1測線の41m地点で行なったワイドアングル測定により得られた電磁波伝播速度7．5m／nsecから算出した換算深度である。

参考資料として、C地区で試験的に行なった比抵抗映像法の記録を掲載する。ほぼC－4測線と同じ位置を測定した記録である。この記録も断面図で示されており、地下レーダー記録同様、横軸方向が測定距離（m）、縦軸方向が深度（m）である。比抵抗が低いほど電気が通りやすく、比抵抗が高いほど電気が通りにくい。

以下では、各地区の探査結果について説明する。

A地区

A－1測線、A－2測線の記録を第78図に掲載する。

A－1測線では、11～16m付近に深度約50cmからの落ち込み状反応が現れている。この落ち込みの深さは、記録から判断する限り、1m程度である。また、A－2測線の13～17m付近にも同じような落ち込み状の反応が捉えられている。この他の測線でも、落ち込みらしき反応が連続して捉えられていることから、この落ち込みが寺院地を区画する溝跡であると推定した。

A地区の遺構推定平面図を第72図に示す。今回の結果から、溝跡はほぼ南北に走っていることが考えられる。

なお、溝跡以外の遺構の可能性としては、A－1測線の終わり、A－2測線の20m以降、A－3測線の35m前後には、石などを捉えたと思われる局所的な反射が見られる。また、A－3測線の26～27mには落ち込みらしき反射が得られており、ピット状の遺構である可能性が考えられる。

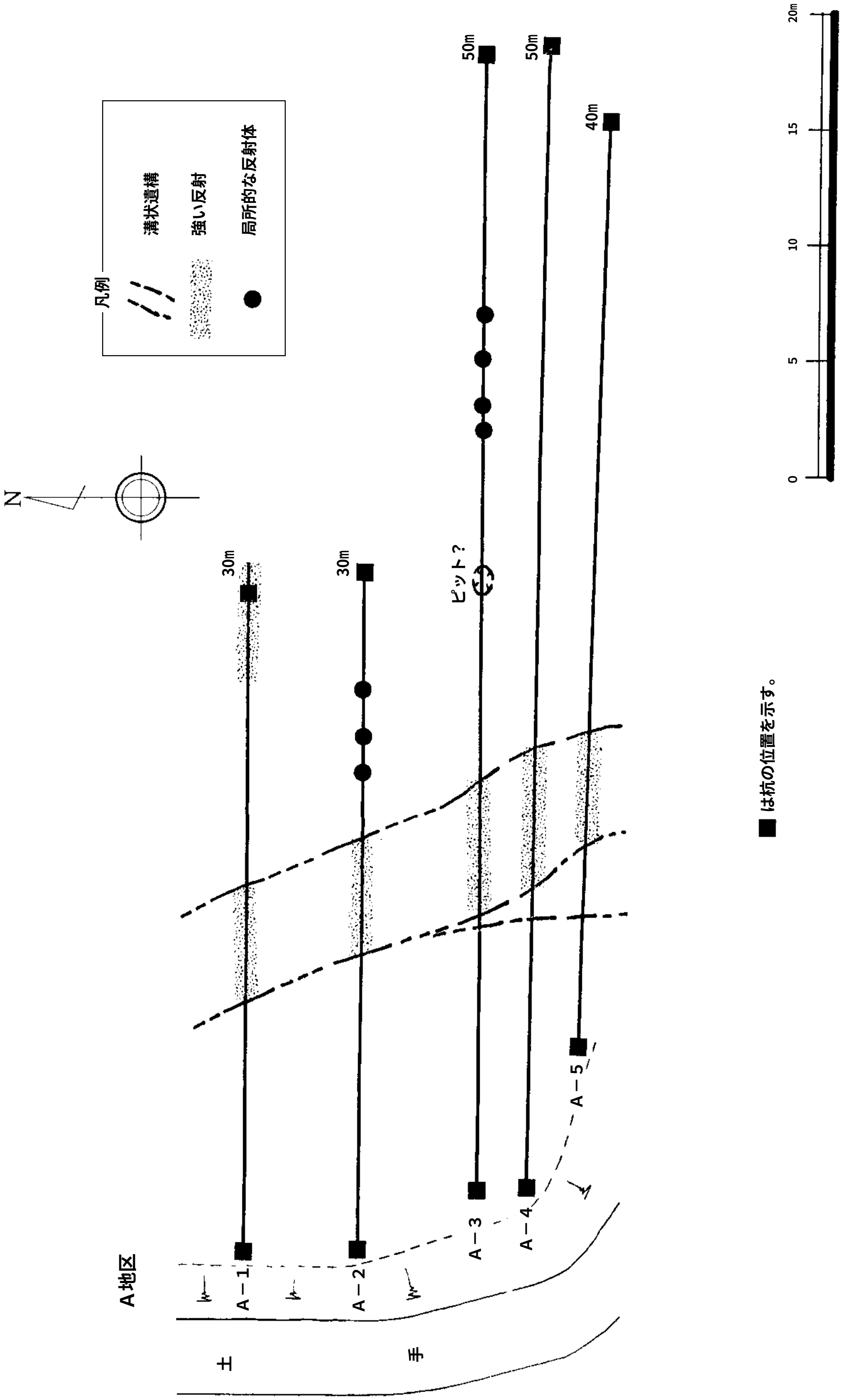
B地区

B－2測線、B－3測線の記録を第79図に掲載する。

3－2測線では、－5～0m付近に落ち込み状の反応が捉えられている。また、8～12m付近には地表面直下からの落ち込みらしき反応が捉えられている。これらの落ち込みは、B－3測線では、それぞれ－5～0m付近、4～10m付近に現れていることから、溝跡を捉えたものである可能性が考えられる。このような落ち込み状の反応は、他の測線においても捉えられている。

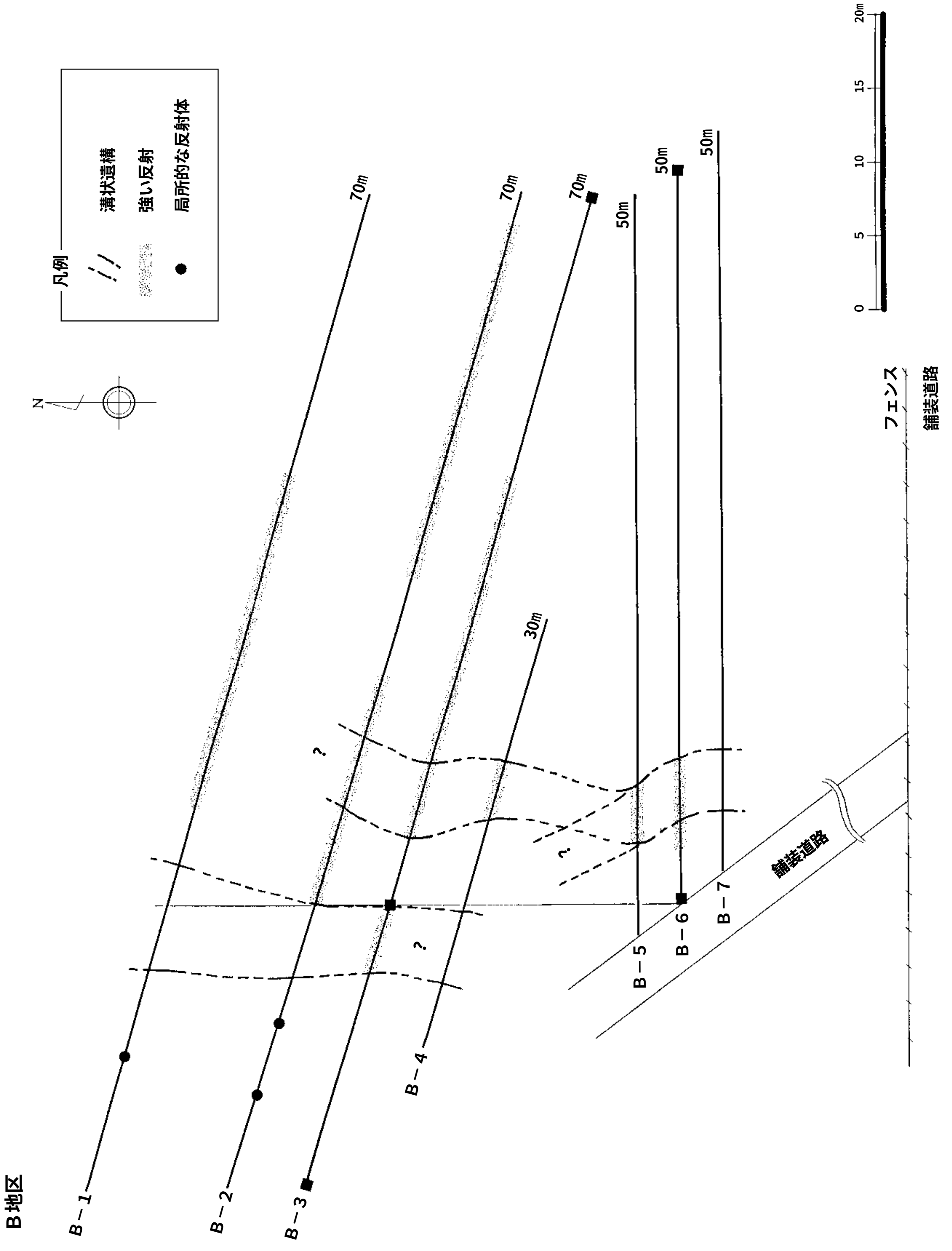
これらの反応箇所を平面図に落とすと、第73図のようになる。ここに示したように、B－1～B－4測線では溝跡が2本、B－6測線～B－7測線では1本捉えられており、ほぼ南北に分布している。ただし、これらの溝が、3－4測線とB－6測線の間でどのようにつながっているかを判断することは難しい。

また、B－1測線～B－3測線の0m以降では、浅い部分に石などが混じったようなやや強い反射が広範囲にわたって分布しており、後世の撹乱でないとすると、遺構である可能性も考えられる。



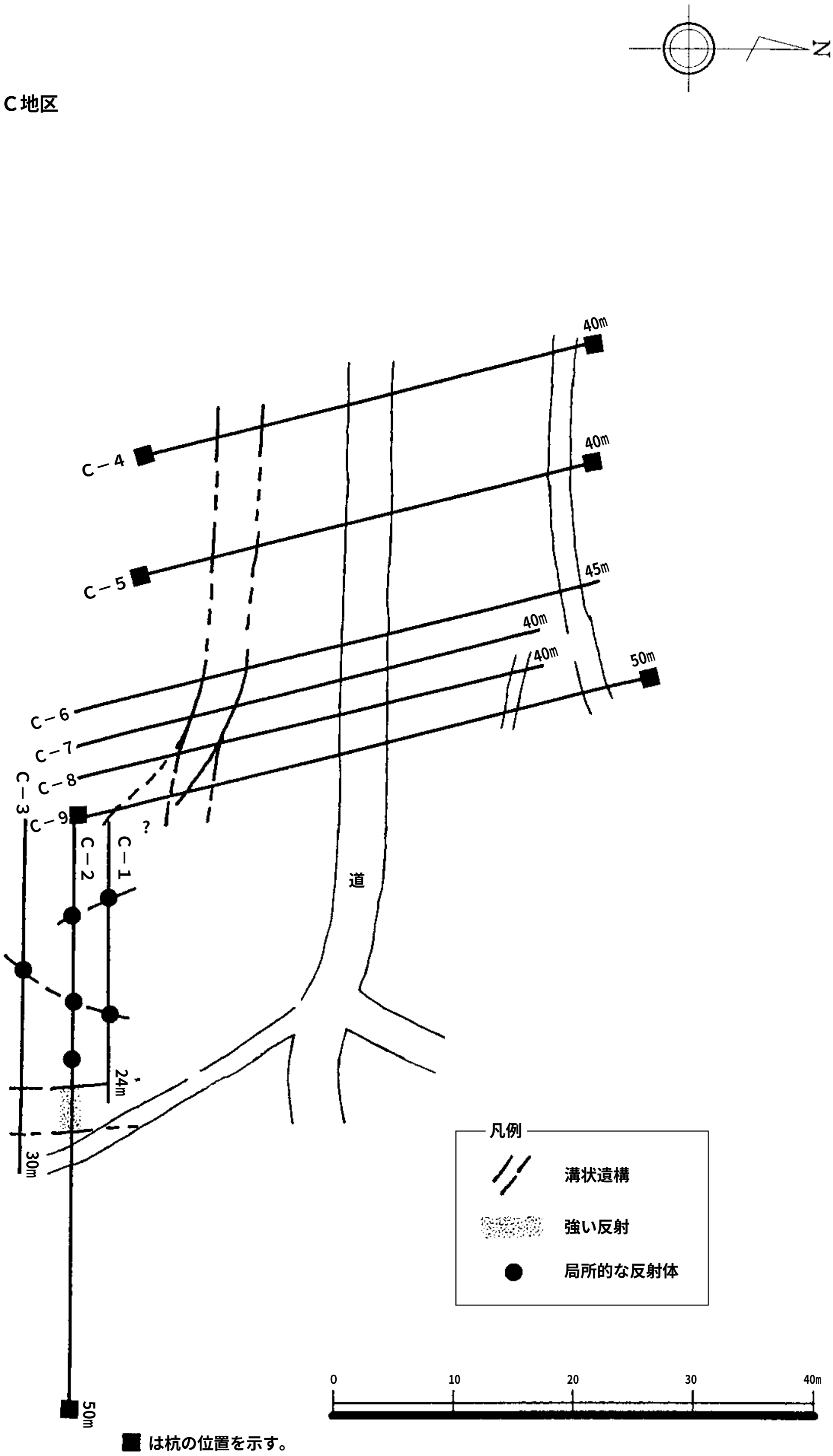
■は杭の位置を示す。

第72図　測線配置および遺構推定図（A地区）

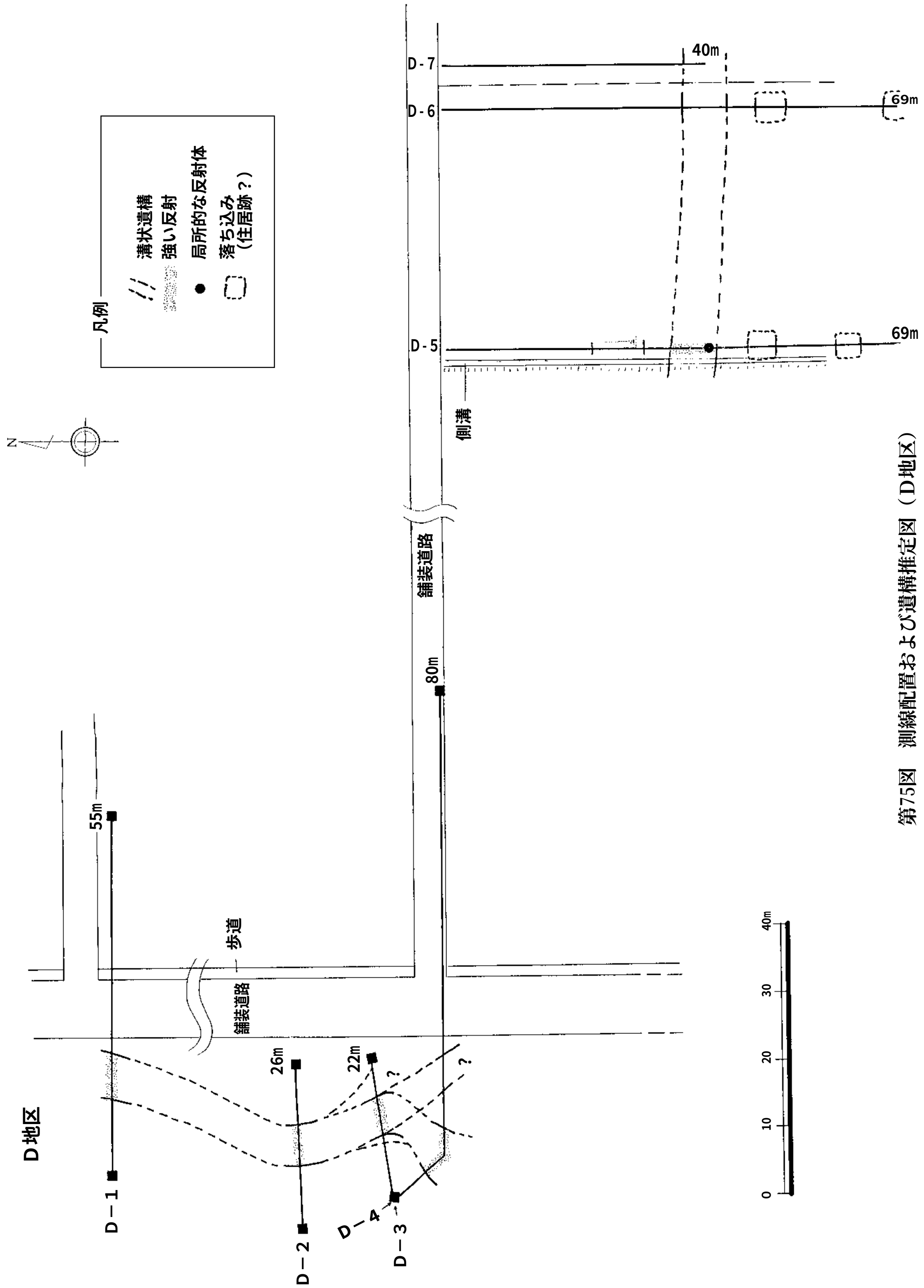


第73図　測線配置および遺構推定図（B地区）

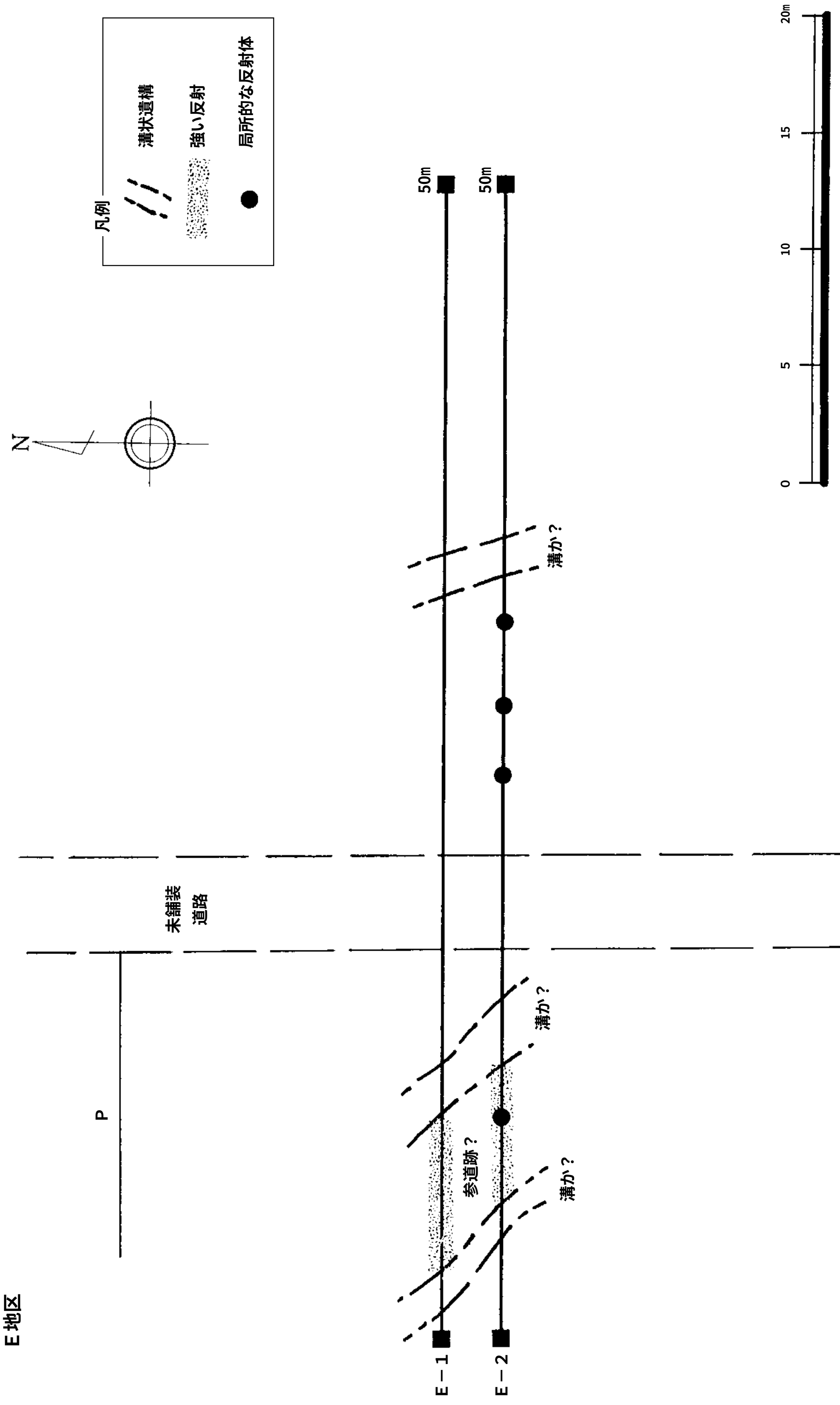
C地区



第74図　測線配置および遺構推定図（C地区）

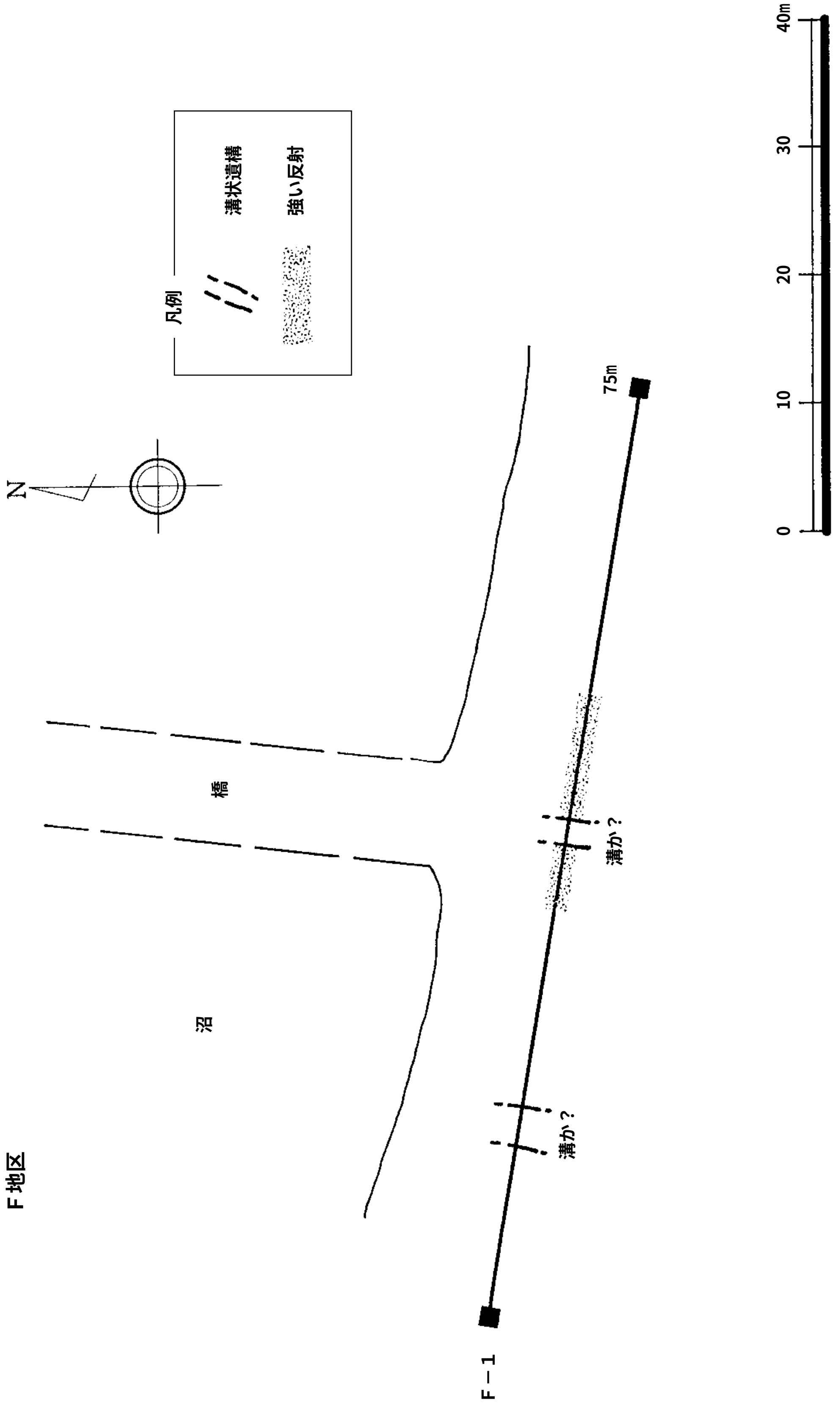


第75図　測線配置および遺構推定図（D地区）



■は杭の位置を示す。

第76図　測線配置および遺構推定図（E地区）



第77図　測線配置および遺構推定図（F地区）

C地区

C－２測線、C－３測線の記録を第80図に、C－４測線、C－５測線の記録を第81図に掲載する。

C－２測線の８m、15m、20m付近、C－３測線の12m付近にそれぞれ局所的な強い反射が得られており、遺構である可能性が考えられる。また、C－２測線、C－３測線の終わりには、幅２m程度（C－３測線では途中で切れてしまっているため、正確な幅はわからない)、深さ50cm程度の落ち込み状の反応が見られ、溝跡を捉えたものと考えられる。

また、C－４測線の７～11m付近、C－５測線の７～11m付近にも落ち込み状の反応が捉えられており、溝跡と推定される。これらの記録とほぼ同じ位置で測定を行なった、比抵抗映像法の結果でも、８～12m付近に落ち込み状の記録が得られており、地下レーダー探査の結果とほぼ一致している。

これらの異常箇所を測線配置図に落とすと、第74図のようになる。C－２測線で見られた局所的な強い反射は、あるいは図のようにつながっている可能性も考えられる。また、溝跡については、当初の予想通り、C地区において方向を変えていることが、今回の調査でも強く裏付けられる結果となった。ただし、折れ曲り点そのものは、今回の測線配置からははずれていたものと考えられる。

D地区

D－２測線、D－３測線の記録を第82図に示す。

D－２湘線の９～13m付近、D－３測線の11～15m付近に、落ち込みらしき反応が見られ、溝跡の可能性が考えられる。遺構面までの深さは１m弱で、落ち込みの探さは１m程度である。D－３測線に関しては、溝の幅が９～20m付近まで広がっている可能性も考えられる。

これらの異常箇所を測線配置図に示すと、第75図のようになる。D－１～D－４測線では、溝跡はぼ南北に続いており、南側では広がっている可能性が考えられる。また、寺院南側の区画については、D－５測線の34～40m、D－６測線の36～43m付近に、幅5m強の落ち込みが見られ、これらが東西に延びる溝跡と考えられる。さらに、D－５測線の45～60m、59～63m、D－６測線の47～52m、67m以降にも落ち込みらしき反応が見られる。溝である可能性も考えられるが、D－４測線の南側で以前行われた発掘調査の際に住居跡や貯蔵穴などが見つかっていること、D地区の東側で行われた発掘調査で確認された溝跡との位置関係などを考え合わせると、住居跡である可能性も考えられる。

この他に特筆すべき反射像は、D－５測線の30m前後に見られる地形の起伏である。手前22m付近から緩やかに上り始め、30～34m付近でもっとも高くなり、後ろはそのまま溝跡らしき落ち込みに続いている。これが単なる地形の変化か、土塁のような遺構であるかの判断は、今回の結果のみからでは難しいが、興味深い。

なお、今回の探査結果から、寺院地を区画する溝はD地区で折れ曲っていることはほぼ間違いないと考えられる。

E地区

E－１測線、E・２測線の記録を第83図に示す。E地区では、寺院の参道跡およびそれと平行に延びる側溝の位置を把握する目的で探査を実施した。

E－１測線の３～10m付近に強い反射が見られ、その両脇に幅が１～２m程度の落ち込

みらしき反応が捉えられている。同様にＥ－２測線でも、６～12m付近に強い反射、その両脇に落ち込み状の反応が見られることから、強い反射部分が参道跡、その両脇の落ち込みが側溝跡であると考えられる。また、測線の35m付近には、幅2m程の地表面直下からの落ち込みが見られ、溝状の遺構である可能性が考えられる。ただし、その脇に参道らしき強い反応が見られないため、側溝であるかどうかは判断しかねる。

これらの結果を、測線配置図に示したものが第76図である。探査の結果から、参道は北西一南東方向に延びていることが考えられる．また、Ｅ－２測線の25～30m付近には、局所的な反射体がいくつか見られ、遺構である可能性も考えられる。

F地区

Ｆ－１測線の14～17m付近では、深度2m付近に強い反射が見られ、落ち込みである可能性が考えられる。また、33～50m付近では、深度１～２m付近に強い反射像が現れており、大規模な造成の跡である可能性が考えられる。この造成が、寺院造営時のものであるとすれば、38～40m付近に見られるやや白く抜けた部分は溝跡である可能性が考えられる。

これらの異常箇所を、測線上に落としたものを第77図に示す。

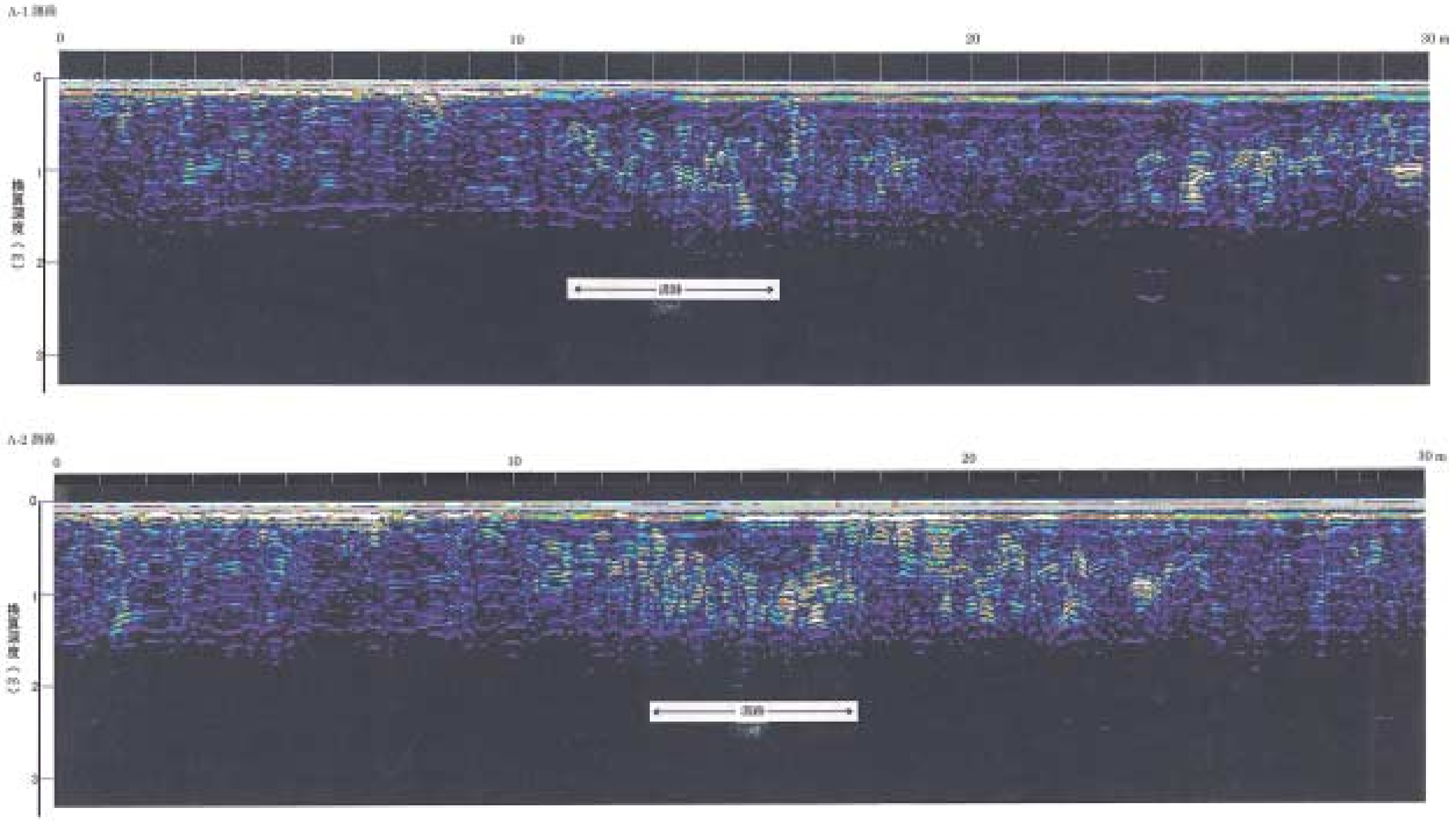
4. まとめ

今回の調査では、寺内遺跡内において寺内廃寺の周辺地域の地下レーダー探査を実施し、寺院地を区画する溝跡および参道跡の検出を試みた。

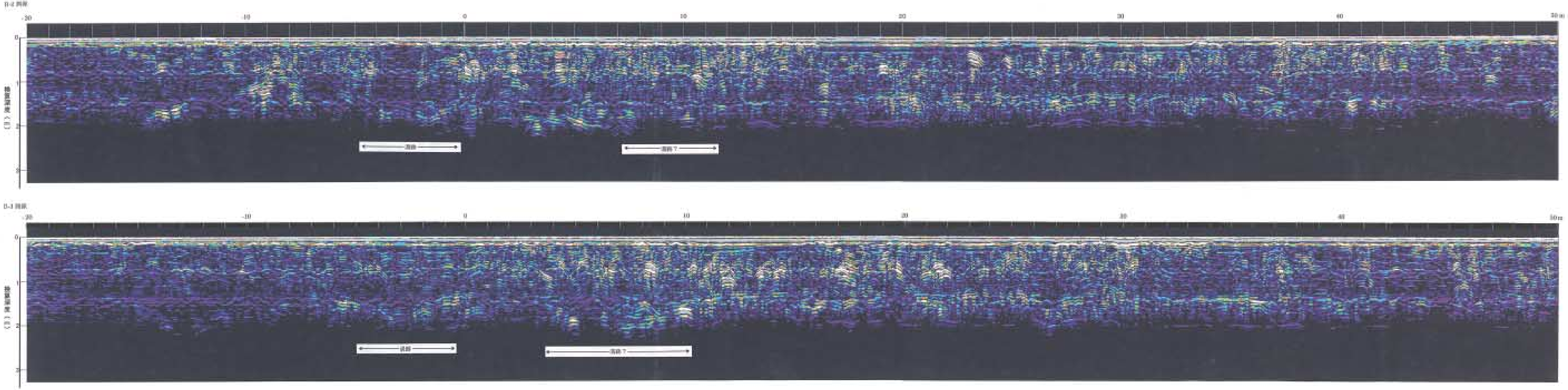
その結果、各地区において溝跡らしき反応を捉えることができ、おおよその溝跡の分布状況を把握することができた。溝の曲がり角にあたるＣ、Ｄ地区では、測線を曲がり角からはずれた位置に設定していたため､記録として捉えることはできなかったものの、溝の配置からおおよその位置を推定することはできるものと考える。

また、参道の推定地にあたるＥ地区では、側溝に挟まれた参道跡らしき反応を捉えることができた。また、その東側に地表面直下からの溝状の反応が検出されており、周囲での発掘結果と比較すると、もう１本の参道の溝跡を捉えたものと考えられる。

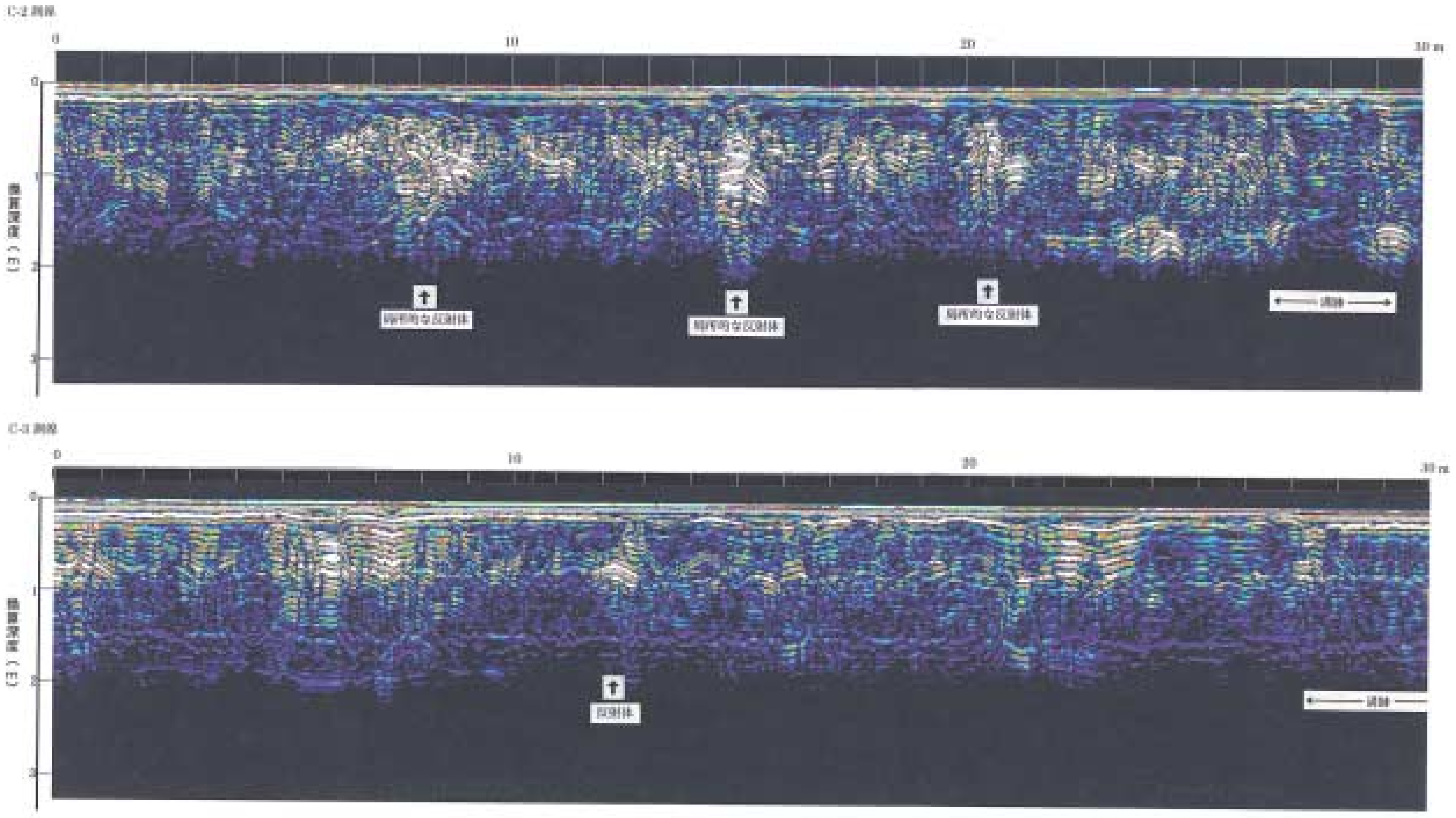
探査の結果、今回の調査地は地下レーダー記録の判読が難しく、寺院の溝跡や参道跡の位置は、記録中の強い部分や白く抜ける部分、わずかな落ち込みを読み取っている。したがって、試掘などによる探査結果の確認調査を実施することが望まれる。また、溝跡の検出には比抵抗映像法が有効であることから､今後も同様の探査を実施する際には、地下レーダー探査と比抵抗映像法を併用することにより、探査確度を上げることができるものと考える。



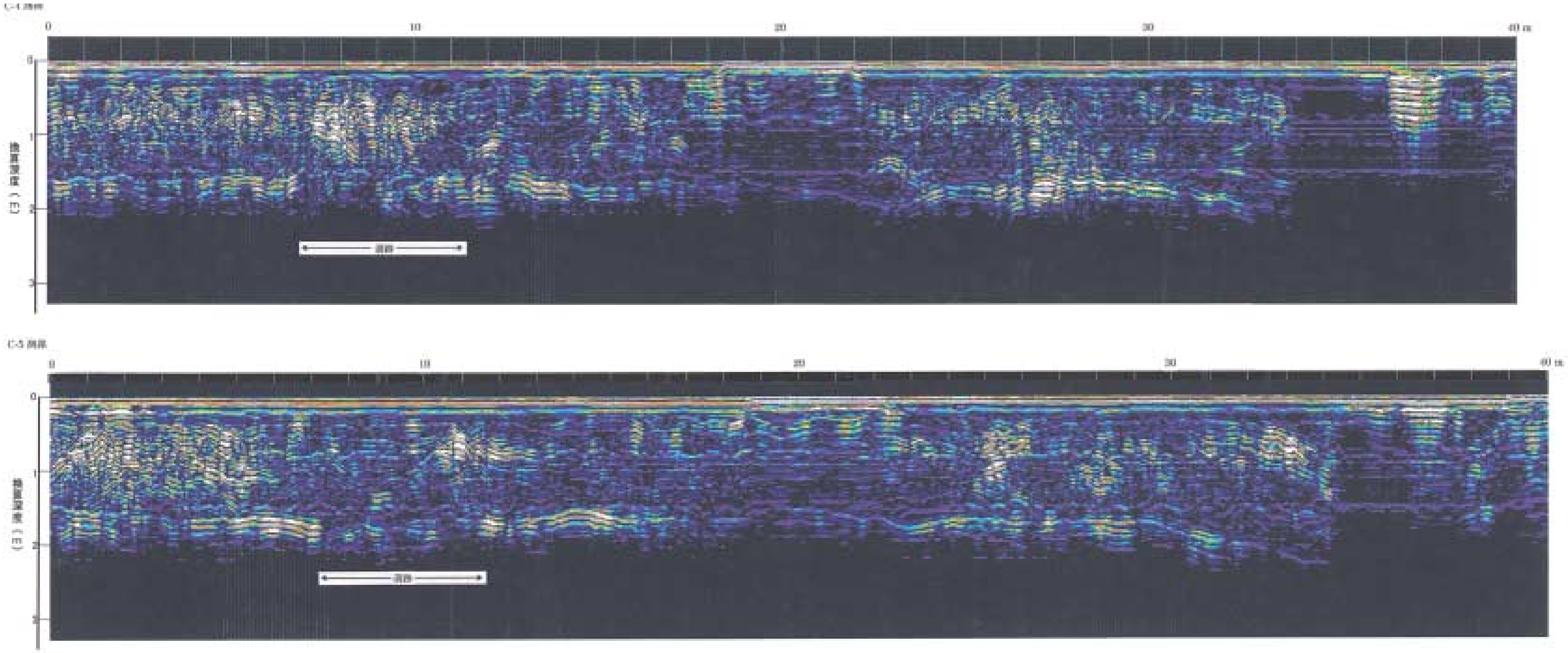
第78図　代表的な地下レーダー記録（A地区）



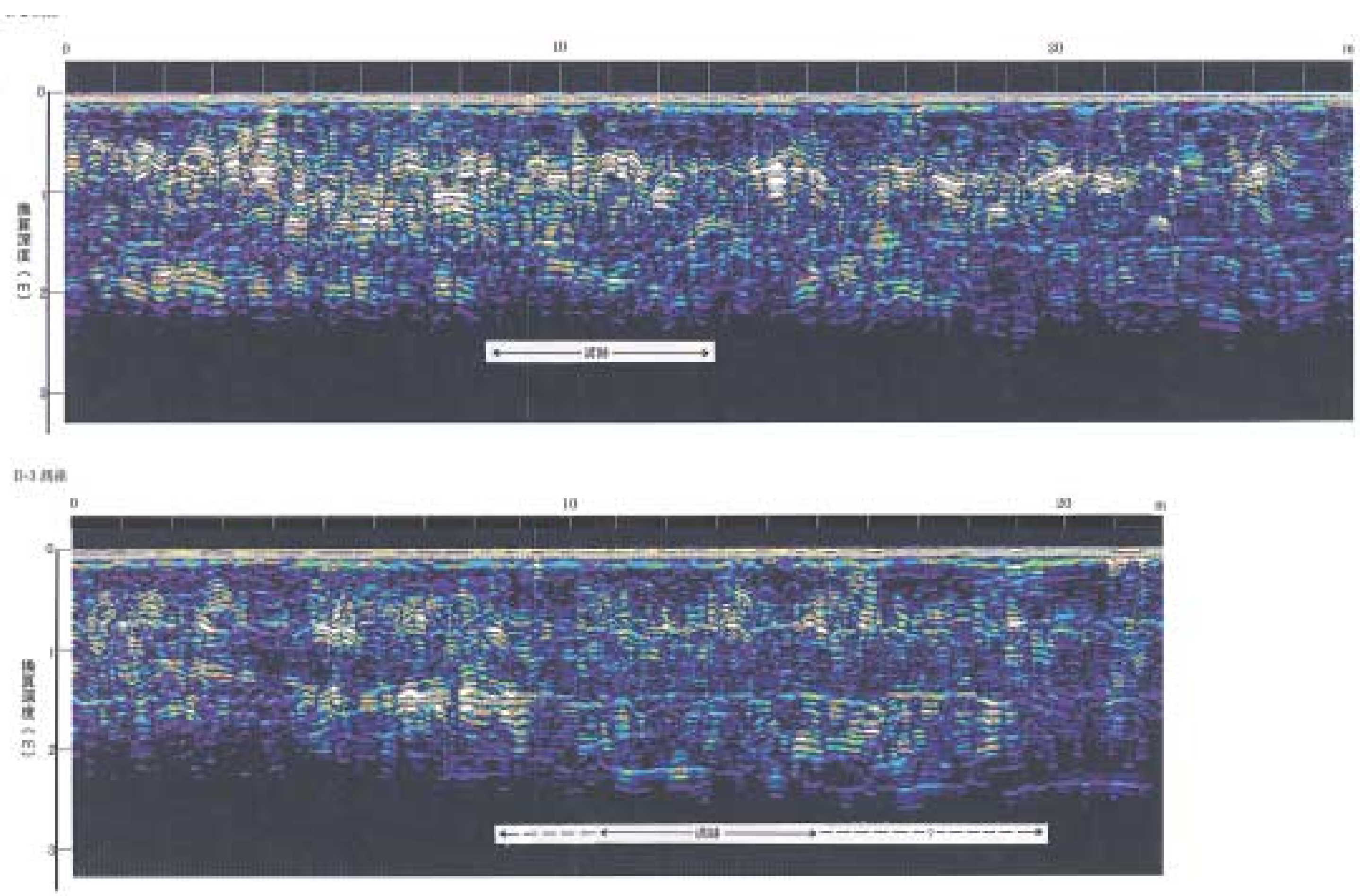
第79図　代表的な地下レーダー記録（B地区）



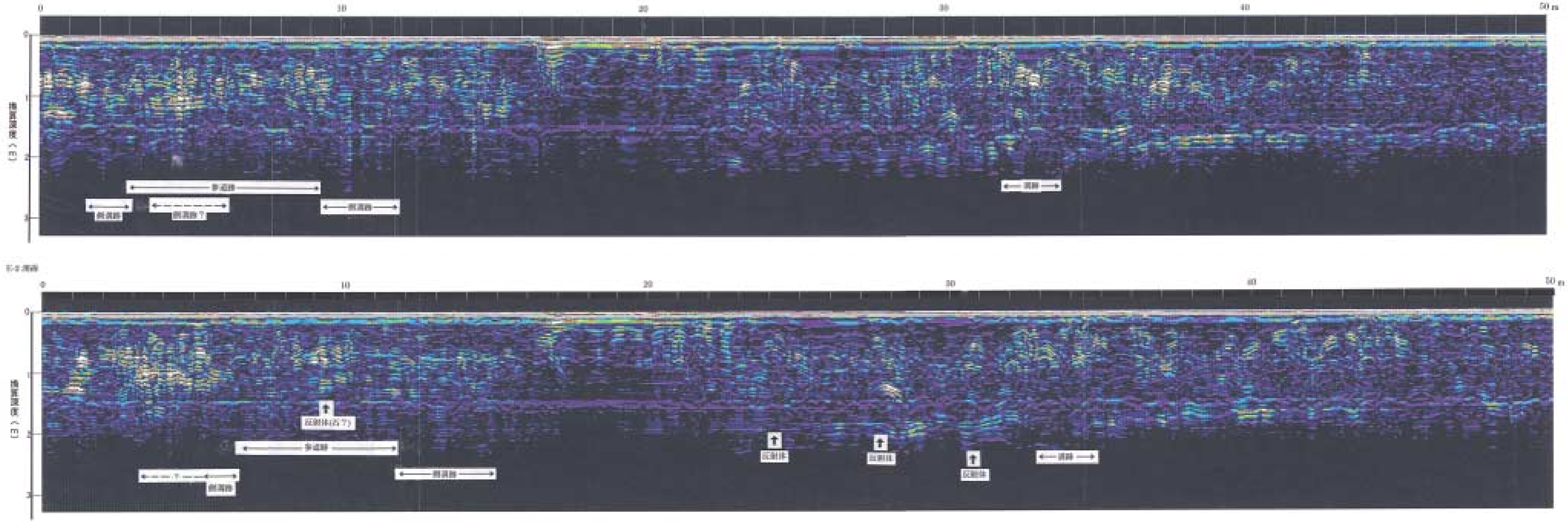
第80図　代表的な地下レーダー記録（C地区）



第81図　代表的な地下レーダー記録（C地区）



第82図　代表的な地下レーダー記録（D地区）



第83図　代表的な地下レーダー記録（E地区）

キャパシタ電極を用いた比抵抗探査方法

原理

地盤と接触していない平板電極に電圧を印可すると、地盤と平板電極の隙間に電荷が徐々に蓄えられ、キャパシタ（コンデンサー）になる。この現象はキャパシタが飽和するまで数ミリ秒続き、この間は地盤内に電流が流れる。そこでこのキャパシタが飽和る前に、極性が切り替わる交流電圧を１組のキャパシタの間に印可することにより、連続的に地盤内に交流電流を流すことができる。地盤内に流れた電流の大きさと、電位の大きさを測定することにより、地盤の比抵抗値が求められる。

第84図にキャパシタ電極の原理を示す。

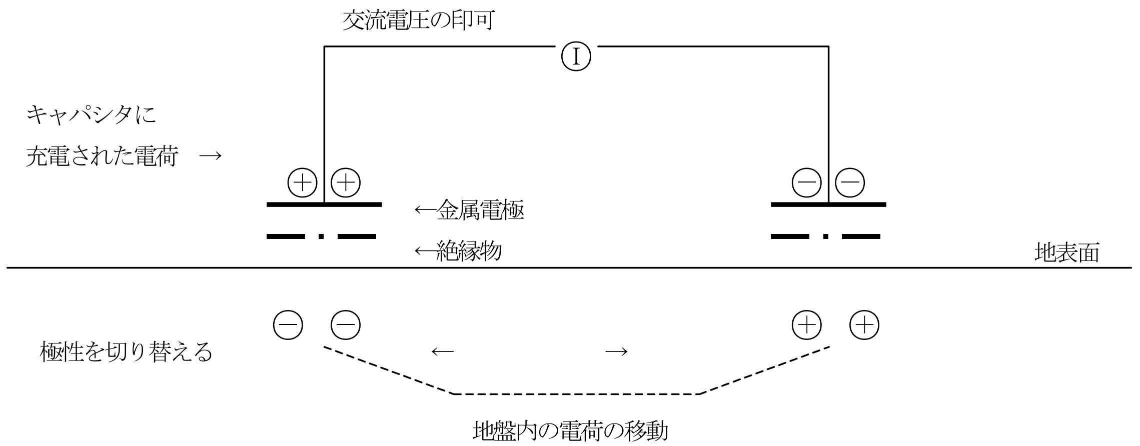
このキャパシタ電極には、相向型電極配置を使用している。

相向型電極配置の特徴は、狭い電極間隔で深い深度を探査することができることである。

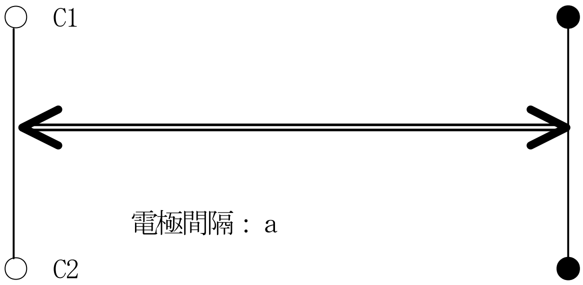
測定方法

キャパシタ電極を用いた比抵抗探査は、キャパシタ電極の原理を利用して、地盤に電極を打ち込むこと無しに電流電極間で地盤内に電流を流し、電位電極間で電流を流した際の電位差を測定し、地盤の比抵抗構造を調べる手法である。この方法は、これまでの電気探査と違い、電極を打設する必要がないため、効率よく迅速に測定することができる。なお、測定時の牽引速度は約１㎞/hである。また、電位電極を１枚から６枚と変更することにより探査深度を１ｍから６ｍに変更することが可能である。

測定記録は、リアルタイムで地盤の見掛け比抵抗断面を見ることができるほか、大型コンピューターで解析を行いその結果をカラーコンターで比抵抗断面として表示することができる。



第84図　キャパシタ電極の原理



第85図　相向型電極配置の模式図

相向型電極配置の場合、電流電極と電位電極の間隔が探査深度となる。また、電極には30㎝四方の銅板を使用している。

第85図に相向型電極配置を示す。

本システムの概略図を第86図に示す。

また、今回使用した機器の一覧を第４表に示す。

測定の手順

測定の手順を以下に示す。

①測線を設定する。

測定台車に接続してある距離計の確認のために測量を行い、100mおきに目印（木杭等）を設置する。

②本システムをセットアップする。

各カーペット、台車、牽引車を接続し、所定のケーブルを接続する。

③距離計のキャリブレーションを行う。

検縄等で距離を正確に計り、距離計の数値をあわせる。

④測定開始地点のキャリブレーションを行う。

電流を流さないときの初期電位を測定し、ノイズとなる自然電位を取り除く。

⑤牽引車両で本システムを牽引し測定を行う。

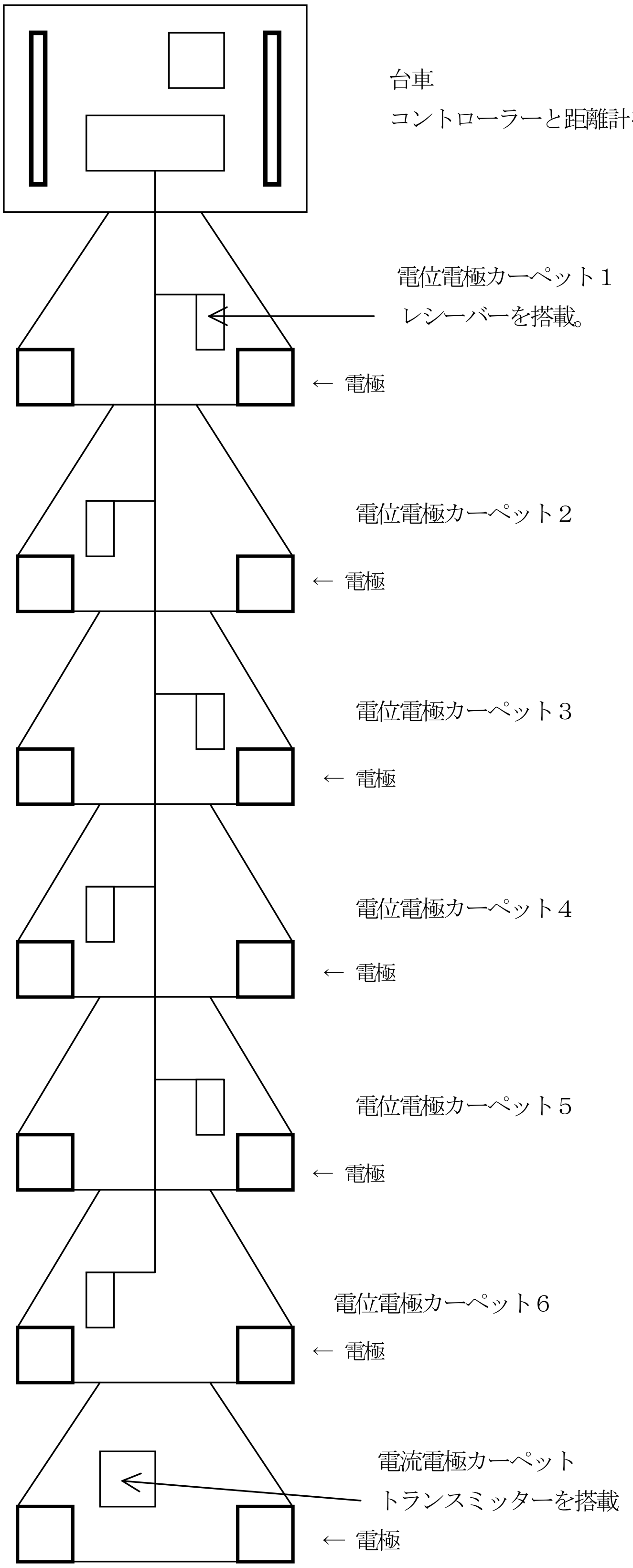
データ収録機であるパソコンでデータを確認しながら測定を行う。その際に注意することは以下のようである。

・測定中は牽引速度およびデータのチェックを行う。

・100mおきにキャリブレーションを行う。

・地盤の状態が変わっている地点では、再度キャリブレーションを行う。

⑥測定終了、撤収。



第86図　システムの概略図

第４表　使用機器の一覧表

名　　　称	仕　　　　　　　　様	数　量	製　作　所
アースグラフCAP６	送信部	１式	ＩＲＩＳ
システム	周波数：12kHz		（フランス）
	通電電流：1.25mA、2.5mA		
	出力電圧：100～1500Vrms		
	電源：12Ｖバッテリー		
	受信部	６式	
	ダイナミックレンジ：96dB		
	データ送信速度：2400Bps		
	分解能：１μVrms		
	電源：12Ｖ内蔵バッテリー		
	コントローラー	１式	
	電源：12Ｖバッテリー		
	距離計付き台車	１式	
	分解能：６㎜		
	制御部	１式	
	IBM　PC／AT互換パーソナルコンピュータ		
	キャリブレーション機能		
	３モード表示機能		
	速度計		
	電源容量表示機能		
	サンプリングレート：50ms		
	測定速度：0.5～２㎞/h		
	電流電極カーペット	１枚	
	電位電極カーペット	６枚	
	形状：１ｍ×１ｍノ台形状		
	材質：ポリカーボネイト		
	電極：銅平板、寸法30㎝×30㎝	１組	

＊今回は人力で牽引

解析方法　データ解析のフローチャートを第87図に示す。

START
↓
データの読み込み
↓
周波数補正
↓
最小二乗法による解析(リニアフィルター法)
↓
解析結果の図化
↓
END

第87図　解析のフローチャート

以下に、それぞれの処理内容について説明する。

周波数補正　キャパシタ電極による比抵抗探査では、12kHzの周波数の交流電流を用いるため、使用する周波数により比抵抗値が変化する周波数効果が測定記録に現れている。そこで、この周波数効果を補正する処理を行い、直流電流による比抵抗値に変換することにより、通常の直流電流を用いた電気探査と同様な解析が可能となる。

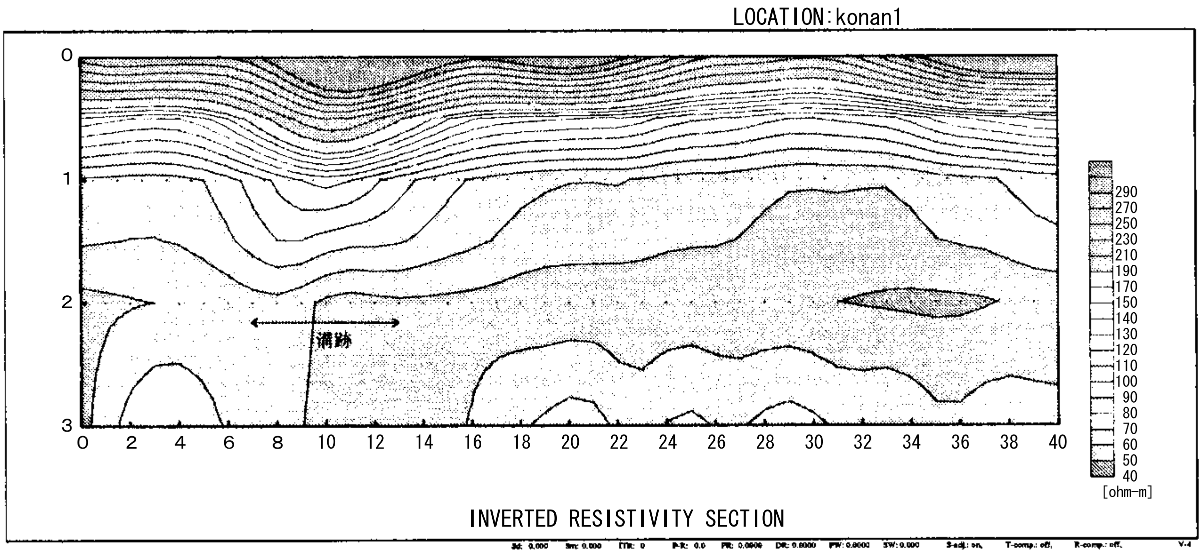
一次元解析　キャパシタ電極を用いた比抵抗探査では、相向型の電極配置を用いている。この相向型電極配置の感度は、垂直一次元探査であるシュランベルジャー型電極配置の感度と等価であり、解析にはシュランベルジャー型のリニアフィルターを用いたリニアフィルター法を用いる。このリニアフィルターを使用して解析することにより見掛比抵抗を真の比抵抗に変換することができる。

解析の方法は、測定により得られたデータに周波数補正を行い、交流比抵抗を直流比抵抗に変換する。次に最小二乗法を用いたリニアフィルター法解析を行う。この解析においては、測定された見掛比抵抗分布を初期モデルとして設定し、そのモデルに対して見掛比抵抗を理論的に計算し、実測値との比較を行う。この際、理論値と実測値とが大きく異なれば、初期モデルを修正し、再度計算を行う。この様な計算を、理論値と実測値の差が十分小さくなるまで繰り返す。理論値と実測値との差が十分小さいと判断された時点で計算を修了し、最終的に決定された比抵抗分布を図化・出力して、一連の解析を終了する。

調査結果

測定位置　測定位置は、地下レーダー探査測線C－４とC－５のほぼ中間である。始点はこれらの地下レーダー探査測線の始点と同じラインであり、総測線長は40mである。

測定結果　地下レーダー探査測線C－4、C－５で捉えられている落ち込み状の反応とほぼ同じ位置で、比抵抗が周囲よりもやや高い窪み状の形状が捉えられており、溝跡と推定される。



第88図　電気探査（比抵抗映像法）結果―比抵抗分布図―

第２節　寺内遺跡検出火山灰分析

平成13年12月　応用地質株式会社

1．調査概要　本調査は、埼玉県江南町の依頼により、応用地質株式会社が実施したものである。以下に調査の概要を述べる。

調 査 名　寺内遺跡等出土遺物化学分析委託業務

調 査 地　埼玉県大里郡江南町大字板井地内（第89図参照）

調査目的　寺内・中島遺跡で行われた調査の際に採取した土質試料（火山灰）を用いて、鉱物分析・屈折率測定を実施し、地層の年代を推定することを目的とする。

調査期間　平成13年６月22日～平成13年12月14日

調査内容　調査内容の概要を以下に述べる。

・鉱物分析　５試料

・屈折率測定　５試料

実施機関　応用地質株式会社　東京支社

住所：東京都文京区大塚3-2-1　文京ビル

TEL：03-3946-3111　FAX：03-3946-3118

担当技術者　早川　俊之（技術士　応用理学）

瀬戸　秀治（技術士補　応用理学）

2．試験方法

テフラの同定　関東地方の台地や丘陵には，テフラ（スコリア，軽石，火山灰などの降下火山砕屑物）を起源とするローム層や黒ボク土層のような風成堆積物が厚く堆積している。これらの地域での遺跡発掘の多くは、風成堆積物の中から出土、発掘される遺物や遺構を対象に実施されている。ここでの鉱物分析の目的は、鍵層となる指標テフラを遺跡内の堆積物を用いた鉱物分析により検出し、堆積物編年のための資料とすることである。

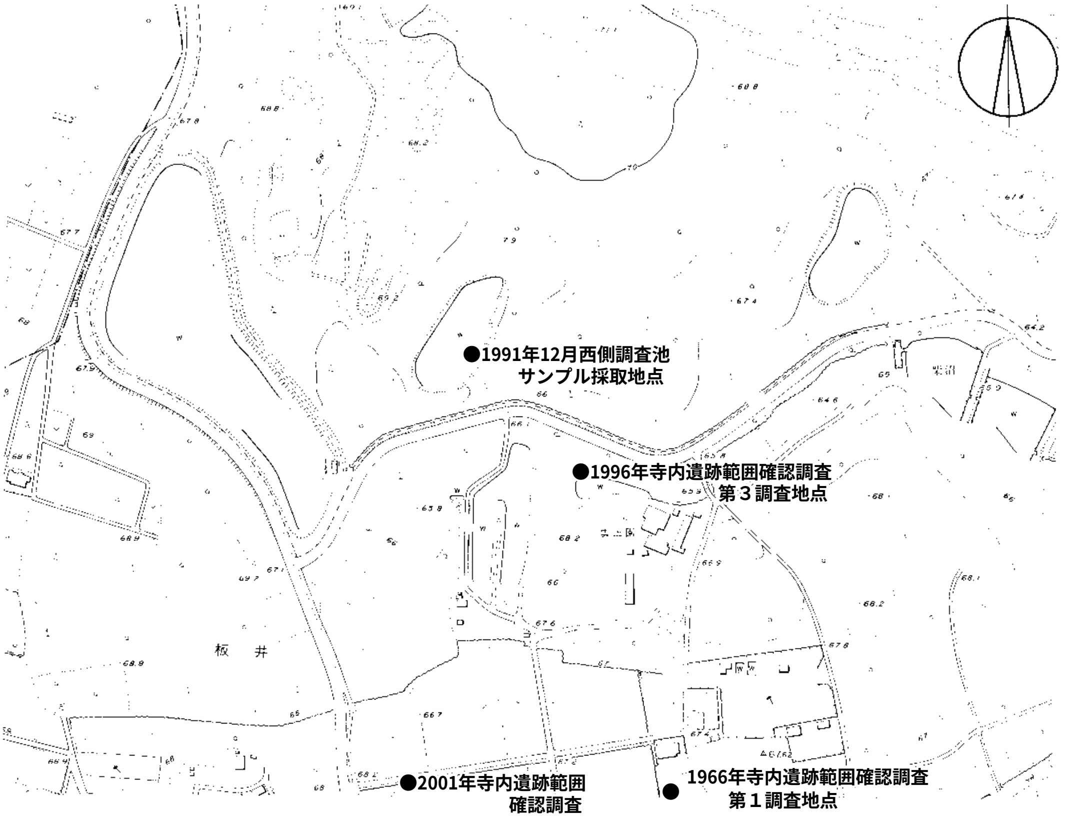
鉱物分析　埼玉県北部、江南町寺内遺跡の西側調整池、1996調査第１調査地点南北溝15層、1996年調査第１調査地点東西溝４層、1996調査第３調査地点４層、2001年調査１号溝４層の５地点より採取された計5試料を用いて、以下の分析をおこなった。以下に試験方法を示す。

①各試料について自然含水状態で30～35g程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。

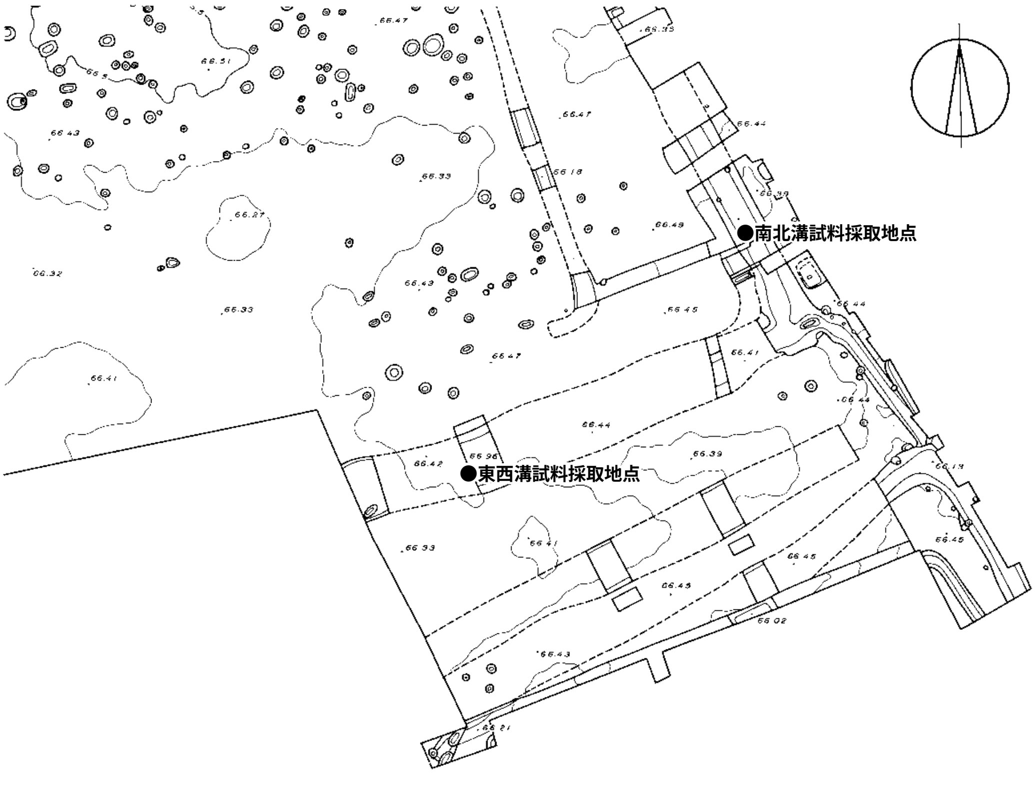
②１φ（0.5㎜：30メッシュ）、２φ（0.25㎜：60メッシュ）、３φ（0.125㎜：120メッュ）、４φ（0.063㎜：250メッシュ）、の４枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フルイ振とう機を用いて湿式ふるい分けを行った。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし、試料の乾燥重量中における粒径４φ以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。

③４φの残渣（粒径0.125～0.063㎜）については、重液（テトラブロモエタン：比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。

④分離した重鉱物、軽鉱物それぞれについて封入剤レークサイトセメントを用いてプレ



第89図　試料採取地点位置図（1）

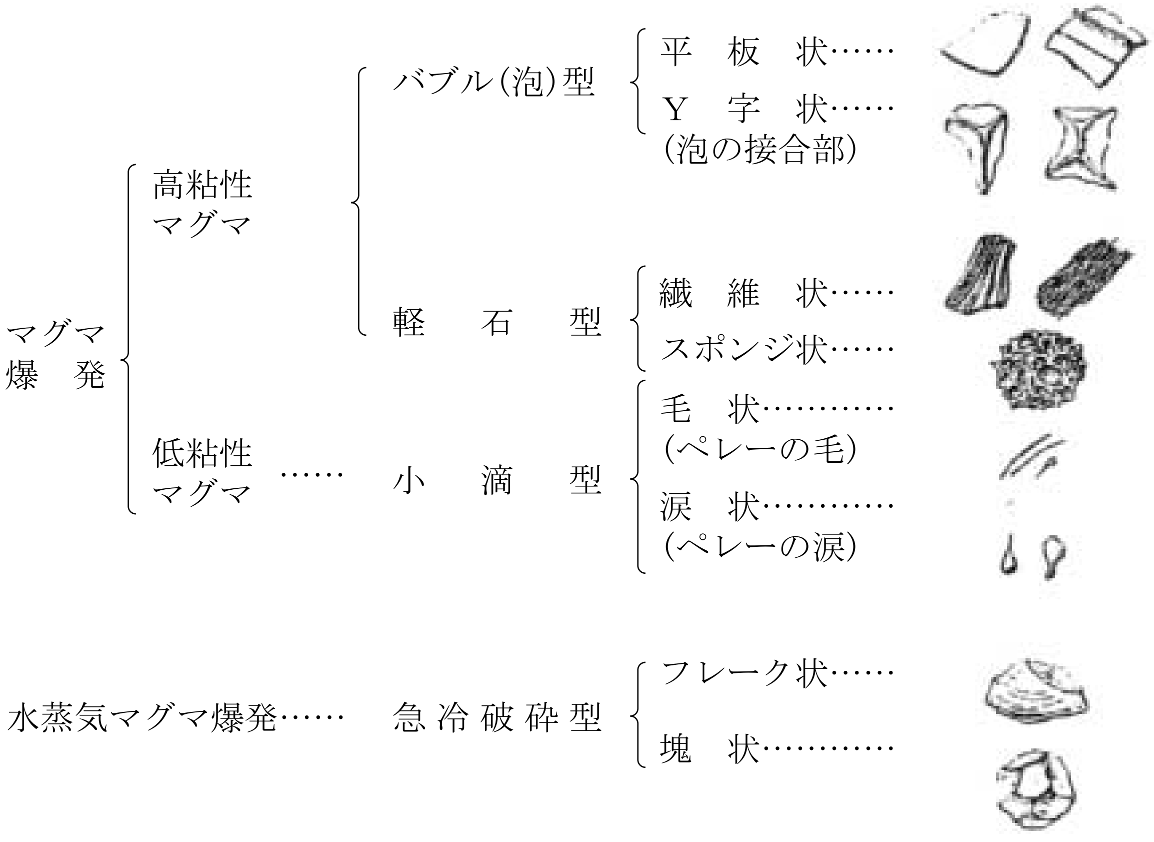


第90図　試料採取地点位置図（2）

パラートを作成した。それをそれぞれ偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、重鉱物、軽鉱物組成を求めた。重鉱物はカンラン石、カンラン石が水の影響をうけて変質した鉱物であるイディングサイト（町田ほか1983）、斜方輝石（主に紫蘇輝石）、単斜輝石（主に普通輝石）、角閃石（ホルンブレンド）、磁鉄鉱とチタン鉄鉱、不透明鉱物（その他の不透明粒子を含む）に分類し、軽鉱物は火山ガラスと長石、石英に分類した。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、軽鉱物中の火山ガラスの形態については、町田・新井（1992）の分類基準に従い形態分類をおこなった（第91図）。

第５表　重鉱物と軽鉱物の分類

重鉱物	かんらん石／イディングサイト／斜方輝石／単斜輝石／角閃石／磁鉄鉱／チタン鉄鉱／その他不透明鉱物
軽鉱物	石英／長石／火山ガラス



第91図　火山ガラスの形態分類

屈折率測定

ローム層に含まれるテフラを同定するために、火山ガラスの屈折率を測定した。測定方法を以下に示す。また、第６表に温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）の構成を示す。
①試料を３φ（0.125㎜：120メッシュ）と４φ（0.063㎜：250メッシュ）のふるいを用いてふるい分けし、４φ残渣を選別して、超音波洗浄を行い、乾燥させる。
②試料中の火山ガラスについて、横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RefractiveIndexMeasuringSystem,type86：RIMS86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）で表す。

第６表　RIMS86のシステム構成

	システム名称	主　要　構　成
Ⅰ	光学システム	・偏光顕微鏡 ・位相差装置 ・干渉フィルター ・顕微測光装置
Ⅱ	測定システム	・熱電式加熱冷却器（HeatStage） ・電子式プログラム温度制御器 ・熱電式加熱冷却器固定・微動装置 ・冷却用タンク付循環装置 ・装置組立用枠組み
Ⅲ	測定データ自動処理システム	・16ビットパーソナルコンピューター ・カラーモニター ・ドット（シリアル）プリンター ・XYプロッター ・A/Dコンバーター ・データ処理ソフトウェア
Ⅳ	補助システム	・浸液セット（Nd=1.46～1.75） ・浸液チェック用標準ガラスセット ・セル（測定用密閉容器）セット ・測定用小道具セット

3. 試験結果

テフラの同定

鉱物分析結果

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、15.9～66.2%の値となり，西側調整池では15.9%と低く、1996年調査第1調査地点南北溝15層と2001年調査１号溝４層では63%以上の高い値となる。

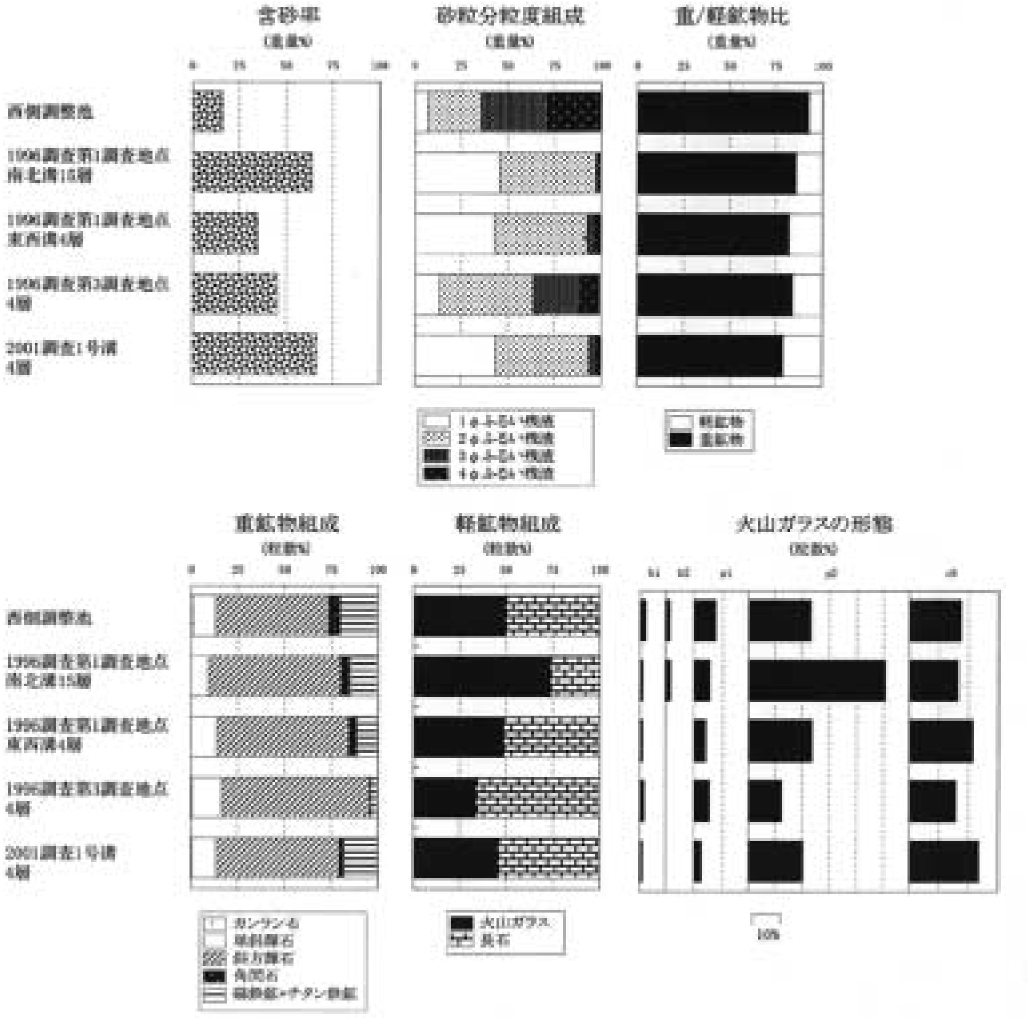
砂粒分の粒度組成は、1996年調査第１調査地点南北溝15層、1996年調査第１調査地点東西溝４層、2001年調査１号溝４層において径１㎜程度の軽石を含むことから１φ残渣が43%以上を占め、３φ残渣と４φ残渣は４%以下と低い値となる。逆に西側調整池では１φ残渣が7.0%となり、3φ残渣は34.8%、4φ残渣は29.8%と高い値を示す。また1996年調査第３調査地点４層は、２φ残渣が49.9%と高い値となる。

重・軽鉱物比は、全試料において軽鉱物が78.9%以上を占める。2001年調査1号溝4層において重鉱物がもっとも高い値となり21.1%となる。

重鉱物は、斜方輝石、磁鉄鉱とチタン鉄鉱、単斜輝石を主体とする組成である。斜方輝石の含有率は、全試料を通じて60.4%以上であり、最大78.6%の値を示す。磁鉄鉱とチタン鉄鉱は西側調整池において20.4%の高い値を示す。単斜輝石は、9.1～16.0%の含有量で、1996年調査第1調査地点南北溝15層において9.1%の低い値を示し、それ以外では12.0%以上となる。角閃石は1.6～6.4%で、西側調整池において6.4%と最も高い値を示す。カンラン石は0.8%以下の含有量となる。

軽鉱物組成は、ほとんどが長石と火山ガラスからなり、長石が26.3～66.1%を占める。火山ガラスは1996年調査第１調査地点南北溝15層において73.7%と最も高い値となる。

火山ガラスは、スポンジ状の軽石型が最大50.2%の含有量で最も多く、次いで破砕型が15.5～23.3%と多く含まれる。



第92図　寺内遺跡における堆積物中の鉱物組成

第７表　堆積物の鉱物分析結果一覧

試料名	含砂率（重量%）	砂粒分の粒度組成（重量%）				重・軽鉱物組成（重量%）	
		１φ	２φ	３φ	４φ	重鉱物	軽鉱物
西側調整池	15.9	7.0	28.4	34.8	29.8	92.5	7.5
1996年調査第１調査地点　南北溝15層	63.7	46.2	50.5	1.7	1.6	85.6	14.4
1996年調査第１調査地点　東西溝４層	34.4	43.1	49.1	4.0	3.9	82.2	17.8
1996年調査第３調査地点　４層	45.4	13.6	49.9	24.5	12.0	84.2	15.8
2001年調査１号溝　４層	66.2	43.8	49.6	3.8	2.8	78.9	21.1

試料名	重鉱物組成（粒数）					
	カンラン石 Ol	単斜輝石　Cpx	斜方輝石　Opx	角閃石 Hor	磁鉄鉱＋チタン鉄鉱	不明 Opq
西側調整池	2	30	151	16	51	22
1996年調査第１調査地点　南北溝15層	0	21	164	12	34	13
1996年調査第１調査地点　東西溝４層	0	36	188	13	30	5
1996年調査第３調査地点　４層	1	39	191	4	8	7
2001年調査１号溝４層	1	38	194	9	53	9

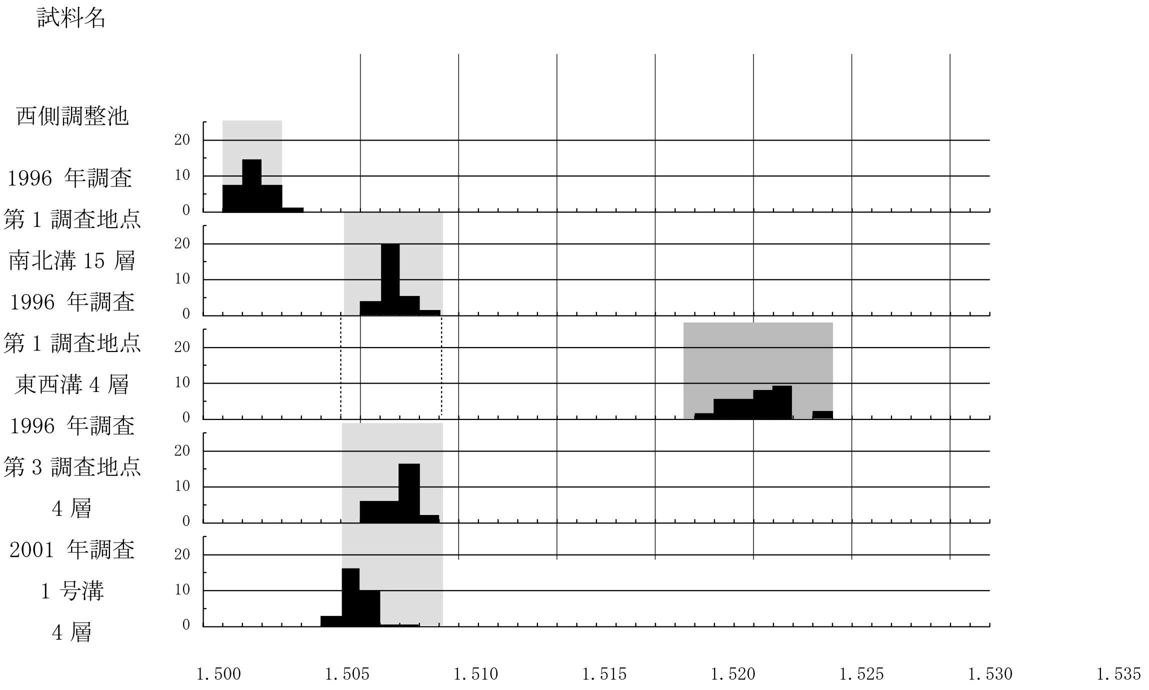
試料名	軽鉱物組成（粒数）		火山ガラス形態分類（粒数）				
	長石 Pl	火山ガラスVg	平板状 b1	Ｙ字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破砕型 c0
西側調整池	91	90	3	2	13	41	31
1996年調査第１調査地点　南北溝15層	55	154	1	3	11	105	34
1996年調査第１調査地点　東西溝４層	110	105	1	0	8	50	46
1996年調査第３調査地点　４層	115	59	2	0	9	21	27
2001年調査１号溝４層	116	99	1	0	5	43	50

屈折率測定結果　粒度組成から１φ残渣中に含まれる軽石を，乳鉢を用いて粉砕し、屈折率測定を実施した。なお、西側調整池の試料については軽石がほとんど含まれないため、スポンジ状火山ガラスを用いて屈折率の測定を実施した。（第８表，第93図）。

第８表　火山ガラスの屈折率測定

試料名	範囲（range）	平均（mean）
西側調整池	1.5008－1.5040	1.5024
1996年調査第１調査地点 南北溝15層	1.5081－1.5110	1.5095
1996年調査第１調査地点 東西溝４層	1.5259－1.5312	1.5284
1996年調査第３調査地点 ４層	1.5082－1.5111	1.5099
2001年調査１号溝 ４層	1.5066－1.5100	1.5079

Type-1 （range:1.500-1.505）（mean:1.5024）
Type-2 （range:1.506-1.512） （mean:1.5079-1.5099）
Type-3 （range:1.525-1.532）（mean:1.5284）



第93図　火山ガラスの屈折率とそのタイプ

4. テフラ同定の検討

今回の分析から、江南町寺内遺跡において浅間Ａと浅間Ｂ、榛名二ツ岳が検出された。それらの特徴と噴出起源及び年代について述べる。

【浅間A（As-A)】　1996調査第１調査地点南北溝15層、1996調査第３調査地点４層、2001年調査１号溝４層に認められる軽石を多く含む堆積物は、その軽石の特徴と火山ガラス屈折率から“浅間Ａ（As-A)”に同定・対比される。

浅間Ａの特徴は灰白～灰色の軽石を多く含み、その状態は未風化の状態で、比較的硬い。また、主要な構成鉱物は、斜方輝石と単斜輝石であり、スポンジ状火山ガラスを比較的多く含む。これらの特徴は浅間火山起源に共通の特徴である。軽石の火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.506-1.512，集中度のよい範囲1.507-1.511，平均1.5079-1.5099となり、従来の値（範囲1.507-1.512；町田・新井：1992）と重なることから、浅間Ａに同

定・対比されるといえる。

浅間Ａは群馬県西部の浅間火山を噴出源とし、関東北西部から東北南部にまで分布している。また、噴出年代は古文書記録等の検討から西暦1783年（天明３年）とされている（新井、1979）。

1996年調査第１調査地点東西溝４層に認められる軽石を含む堆積物は、その軽石の特徴と火山ガラス屈折率から“浅間Ｂ（As-B）”に同定・対比される。

【浅間Ｂ（As-B）】

浅間Ｂの特徴は淡灰褐色の軽石を含み、その状態は比較的新鮮な状態である。また、主要な構成鉱物は、斜方輝石と単斜輝石であり、スポンジ状火山ガラスを比較的多く含む。これらの特徴は浅間火山起源に共通の特徴である。軽石の火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.525-1.532，平均1.5284となり、従来の値（範囲1.524-1.532；町田・新井、1992）と重なることから、浅間Bに同定・対比されるといえる。

浅間Ｂは群馬県西部の浅間火山を噴出源とし、関東北西部から東北南部にまで分布し、完新世に噴出した浅間Ａ～Ｄの中でもっとも規模の大きな噴火である。また，噴出年代は古文書記録等の検討から西暦1108年（天仁元年）とされている（新井、1979）。また、この噴火により上州の田畠が全滅したという記録が残されるほど大災害であった（峰岸、1993）。

西側調整池に認められるスポンジ型火山ガラスは、その火山ガラス屈折率から新井（1979）の“榛名二ツ岳伊香保（Hr-FP）”の火山ガラスに同定・対比される。

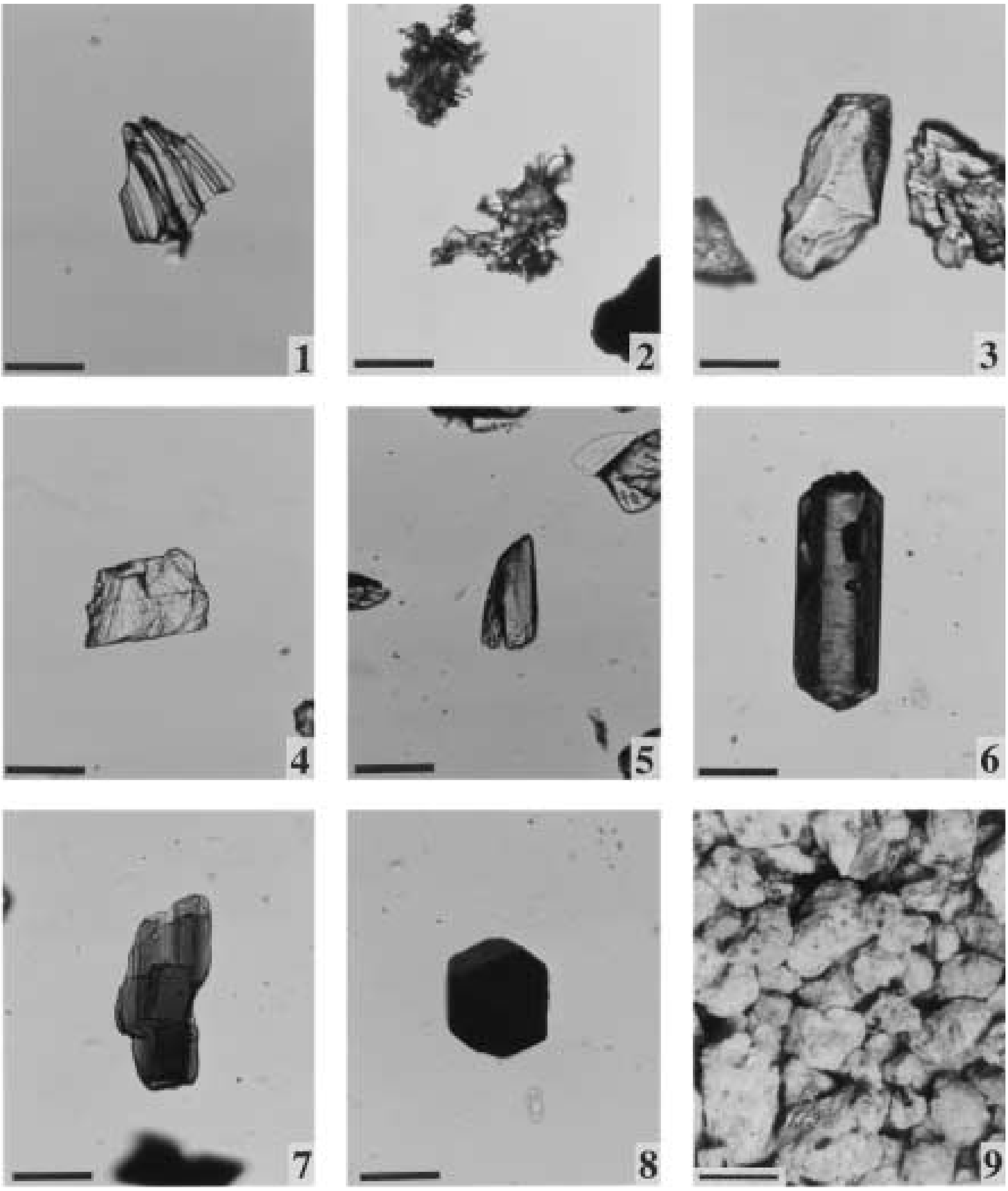
【榛名二ツ岳伊香保（Hr-FP）】

榛名二ツ岳伊香保の特徴は角閃石を多量に含むことであり、西側調整池には今回分析した試料中、比較的多く角閃石を含んでおり、また火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.500-1.505、も集中度の良い範囲1.501-1.504、平均1.5024となり，従来の値（範囲1.501-1.504；町田・新井：1992）と重なることから、榛名二ツ岳伊香保に同定・対比されるといえる。

榛名二ツ岳伊香保は群馬県中部の榛名山二ツ岳を噴出源とし、北東方向に広く分布し、宮城県の多賀城市まで達している。その噴出年代は考古遺物、遺跡との関係から古墳時代（６世紀中葉）とされている。

5．まとめ

本試料の鉱物分析および火山ガラス屈折率測定をおこなった結果、1996調査第１調査地点南北溝15層、1996調査第３調査地点４層、2001年調査１号溝４層に認められる灰白～灰色軽石を多く含む堆積物は浅間Ａ、1996年調査第１調査地点東西溝４層に認められる淡灰褐色の軽石を含む堆積物は浅間Ｂ、西側調整池に認められるスポンジ型火山ガラスは榛名二ツ岳伊香保（Hr-FP）に同定・対比される。それぞれの噴出年代は浅間Ａが西暦1783年（天明３年)、浅間Bが西暦1108年（天仁元年)、榛名二ツ岳伊香保が６世紀中葉の古墳時代である。



第94図　堆積物中の鉱物類

引用参考文献

新井　端　1983 「姥ヶ沢遺跡Ⅰ」 江南村文化財調査報告書第４集　江南村教育委員会
新井　端　1985 「江南遺跡群Ⅱ（宮下遺跡　元稲荷遺跡）」 江南村文化財調査報告第５集　江南村教育委員会
新井　端　1989 「本田・東台　上前原」 江南町文化財調査報告第８集　江南町教育委員会
新井房夫　1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』157.41－52
磯崎　一　1992 「白草遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
石毛彩子　2001 「平城京内寺院における雑舎群」『古代　第110号』早稲田大学考古学会
今井　宏　1985 「埼玉県の中世城館跡」 埼玉県立歴史資料館
金子直行　1993 「四反歩遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
川口　潤　1993 「白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
江南町　1995 「江南町史　資料編１　考古」 江南町史編さん委員会
江南町千代遺跡群発掘調査会　1993 「千代遺跡群発掘調査概報」江南町教育委員会　江南町千代遺跡群発掘調査会
江南町千代遺跡群発掘調査会　1996 「千代遺跡群―縄文時代編―」江南町教育委員会　江南町千代遺跡群発掘調査会
江南町千代遺跡群発掘調査会　1998 「千代遺跡群－弥生・古墳時代編－」江南町教育委員会　江南町千代遺跡群発掘調査会
小林　高　1997 「町内遺跡５」 寄居町文化財調査報告第19集　寄居町教育委員会
小林　高　1998 「町内遺跡６」 寄居町文化財調査報告第20集　寄居町教育委員会
駒宮史郎　1972 「鹿島古墳群」 埼玉県教育委員会
塩野　博　1972 「埋蔵文化財の発掘調査」 江南村文化財調査報告書第１集　江南村教育委員会
塩野　博　1980 「舟山遺跡」 埼玉県教育委員会
利根川章彦　1991 「竹之花・下大塚・円阿弥遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
町田　洋・新井房夫　1992 「火山灰アトラス」 東京大学出版会
町田　洋・村上雅博・斉藤幸治　1983 「南関東の火山灰中の変質鉱物“インディングサイト”について」『第四紀研究』22、69－76
比企団体研究グループ　1991 「比企丘陵および岩殿丘陵の構造発達概観」『地団研専報38号』
昼間孝志　2001 「武蔵寺内廃寺の空間構成」『古代　第110号』早稲田大学考古学会
松原典明　1995 「立正大学熊谷校地遺跡の調査（７）」『遺跡調査室年報Ⅶ』 立正大学熊谷校地遺跡調査室
峰岸純夫　1993 「東国古代を変えた浅間天仁の噴火」『火山灰考古学』古今書院
村松　篤　1991 「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」 川本町発掘調査報告書第５集　川本町教育委員会
村松　篤　1992 「箱崎古墳群第３号墳・淵ノ上遺跡発掘調査報告書」川本町発掘調査報告第６集　川本町教育委員会
村松　篤　1993 「川端遺跡第３次調査発掘報告書」 川本町発掘調査報告書第７集　川本町教育委員会
村松　篤　1994 「荷鞍ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書」川本町発掘調査報告書第８集　川本町教育委員会
村松　篤　1999 「畠山館跡」 川本町遺跡調査会報告書第４集　川本町遺跡調査会
村松　篤　2000 「上本田遺跡Ⅰ」川本町遺跡調査会報告書第５集　川本町遺跡調査会
村松　篤　2000 「百済木」川本町遺跡調査会
横山卓雄・檀原　徹・山下　透　1986 「温度変化型屈折率測定装置における火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25.21－30
若松良一　2001 「箱石遺跡Ⅱ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第267集　埼玉県　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写　真　図　版

第１次寺内遺跡範囲確認調査　第１調査区航空写真

第１次寺内遺跡範囲確認調査　第２調査区航空写真

▲中島遺跡第１次調査　下草刈作業風景

▲第１次寺内遺跡範囲確認調査　作業風景

▲第１次寺内遺跡範囲確認調査　作業風景

▲中島遺跡第１次調査　作業風景

▲第１次寺内遺跡範囲確認調査　作業風景

▲第２調査区　完掘状況

▲第１号溝　完掘状況

▲第２号ピット　半裁状況

▲第１調査区　作業風景

▲第１調査区　作業風景

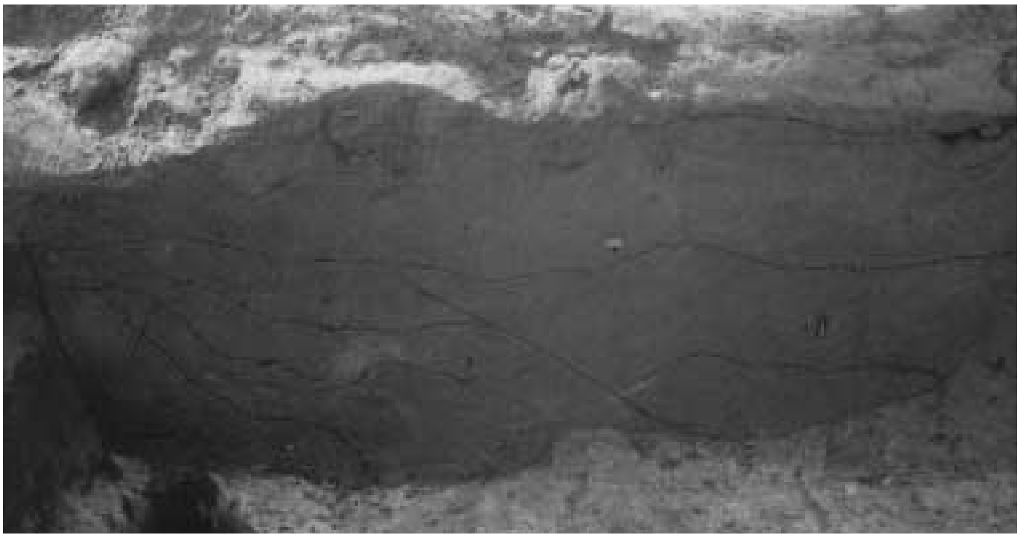
◀第１号溝

◀第１号溝　木杭確認状況

第１号溝　木杭近接写真

▲第１－２号溝　土層堆積状況

第１号溝　土層堆積状況



第１－２号溝　土層堆積状況

◀第１次寺内遺跡範囲確認調査
第３調査区航空写真

第１次寺内遺跡範囲確認調査
第３調査区完掘状況▶

中島遺跡第１次調査　航空写真

中島遺跡第１次調査　完掘状況

中島遺跡第１～５号溝

中島遺跡第１次調査　作業風景

▲第１号溝　完掘状況

▲第２号溝　完掘状況

▲第１号溝　土層堆積状況

▲第６号溝　完掘状況

▲第６号溝　土層堆積状況

◀調査区下草刈状況

◀土塁確認状況

◀トレンチ掘下げ作業風景

▲第１号住居跡

▲第１号住居跡　遺物出土状況

▲第２号住居跡

▲第２号住居跡　遺物出土状況

▲第４トレンチ　北側堀完掘状況

▲第４トレンチ　北側土塁土層堆積状況

▲第４トレンチ　南側堀完掘状況

▲第４トレンチ　溝完掘状況

▲第６トレンチ　堀完掘状況

▲第２号竪穴状遺構完掘

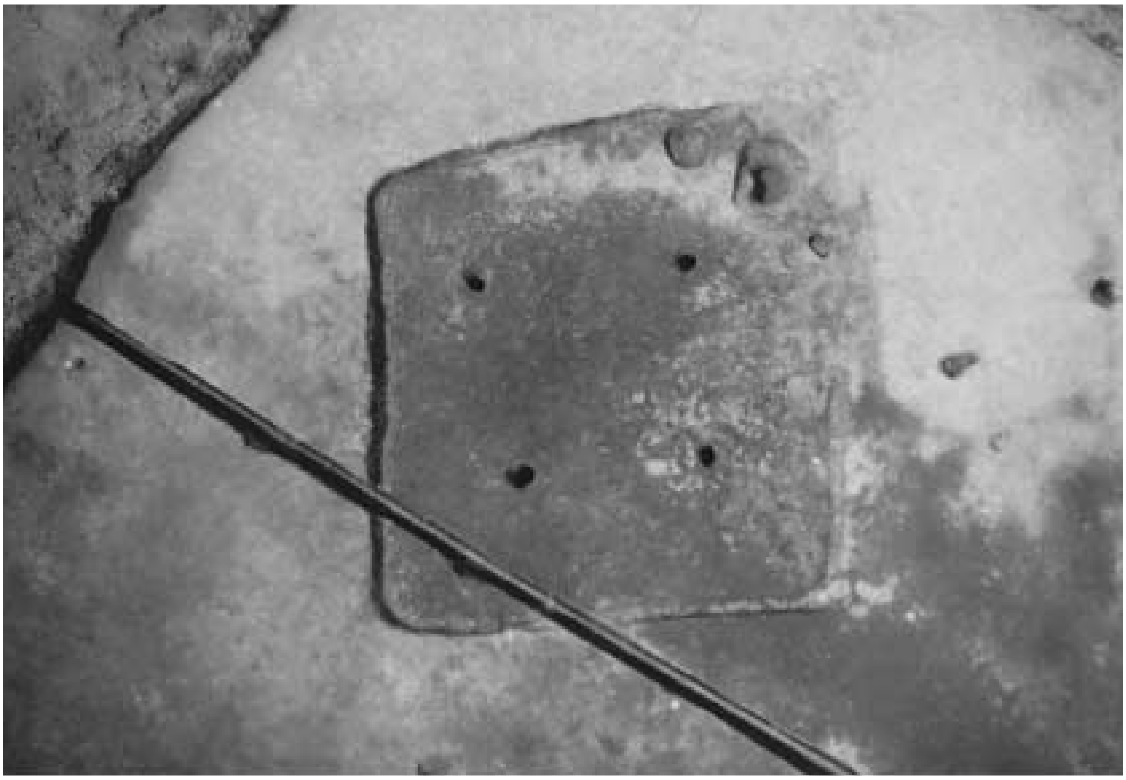
▲第１号竪穴状遺構完掘

▲第５トレンチ　板石塔婆出土状況

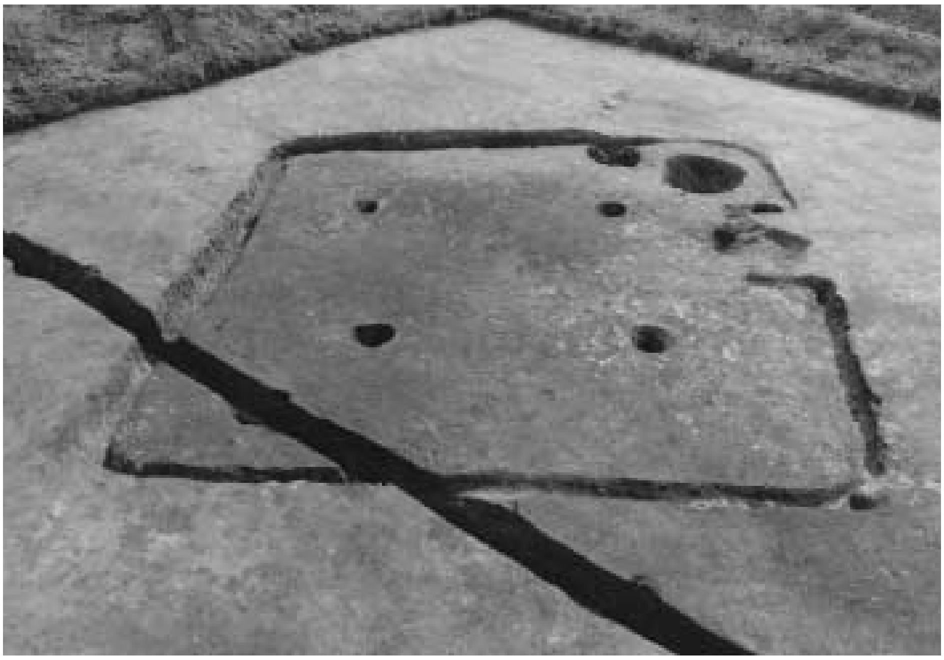
▲第４トレンチ　堀遺物出土状況

▲第１号井戸完掘状況

天神遺跡第２次調査　航空写真



天神遺跡1第２次調査　第１号住居跡航空写真



▲第１号住居跡　完掘

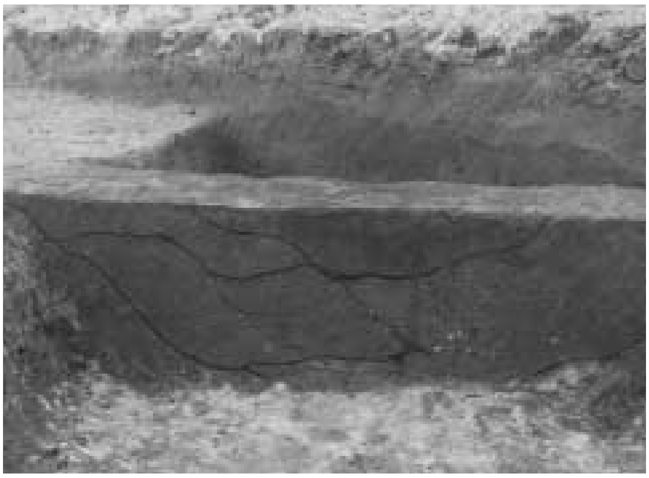
◀第１号住居跡　遺物出土状況

▲第１号住居跡出土炭化種子

◀第１号住居跡　遺物出土状況

▲天神遺跡第１号溝　完掘状況

▲天神遺跡第１号溝　作業風景



◀天神遺跡第１号溝　土層堆積状況

天神遺跡　作業状況▶

◀D調査区調査状況

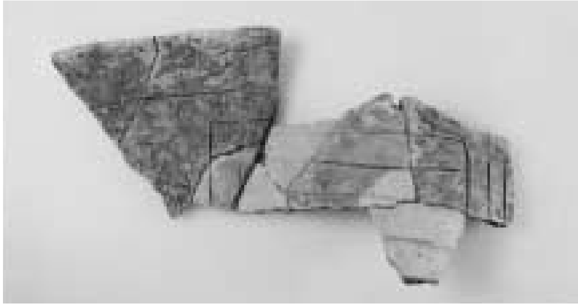
◀E調査区調査状況

◀E調査区調査状況（比抵抗映像法）

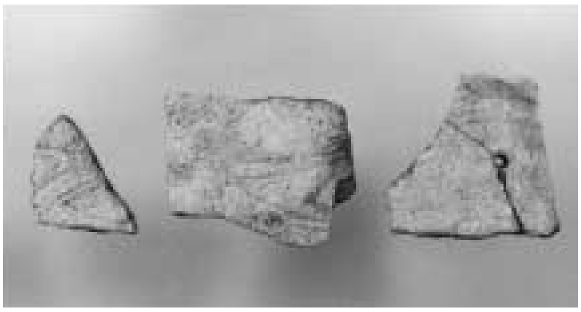
◀A調査地区データ解析状況

16－2

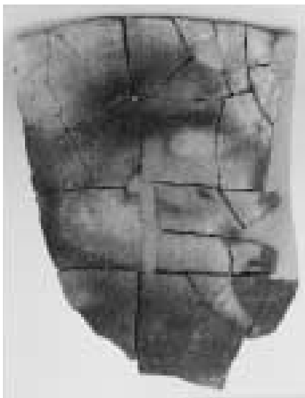
16－3



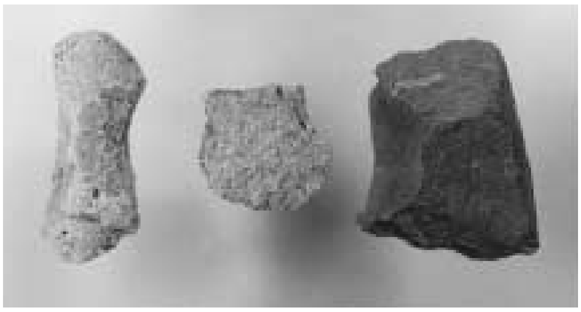
16－3



17－4・6・7

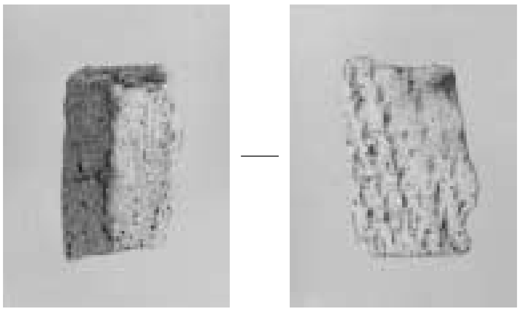


16－1

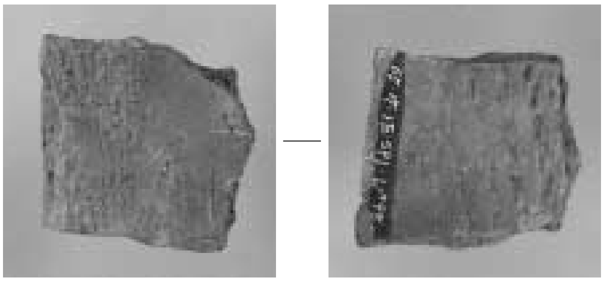


17－8～10

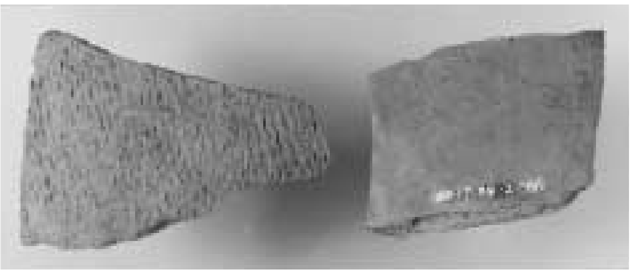
17－15



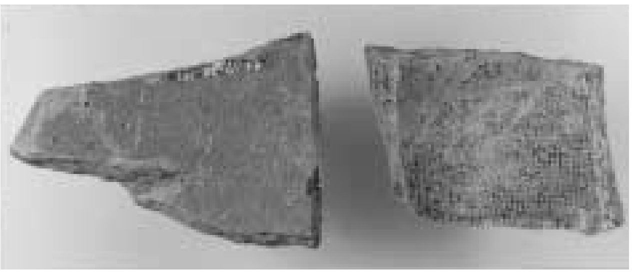
17－14



13－1



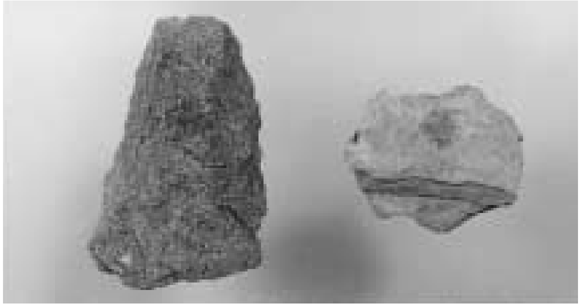
17—13



18—16・17

18—18

17—12



23—1・2

25—1

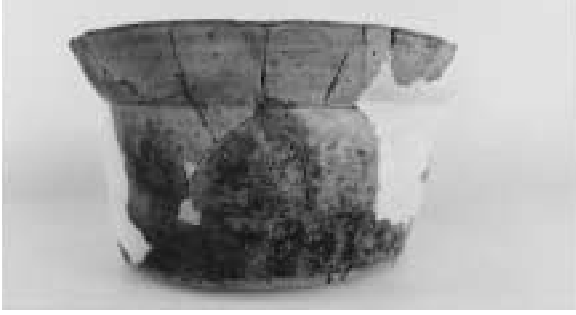
25—2

26—1

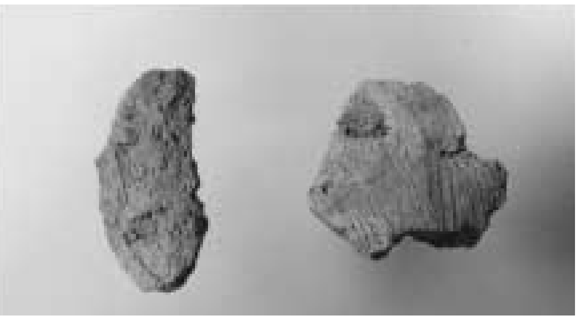
26—3

26－2

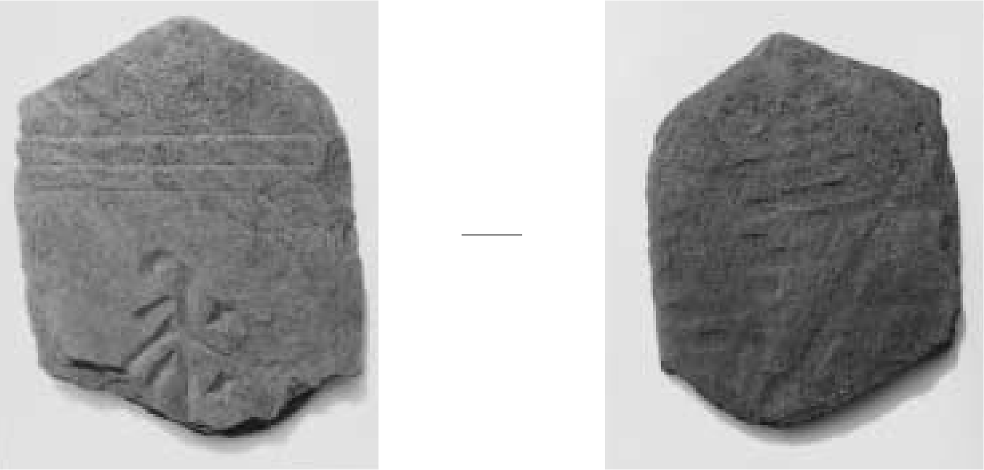
27－1



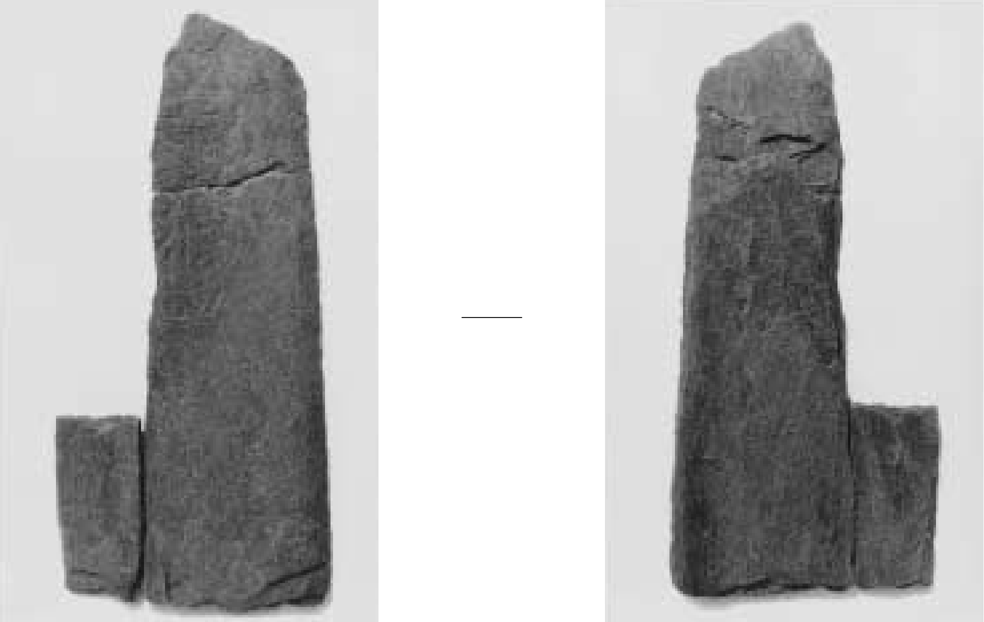
44－20



42－1・2

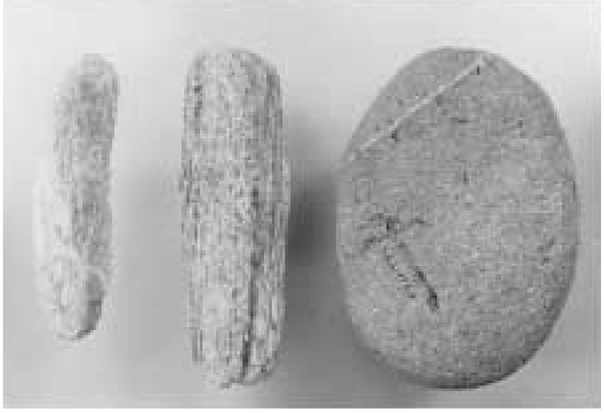


36－2



36－1

43－３～７



42－８～10

44－15

50－３

44－19

44－16

44－17

第１号住居跡出土
炭化桃核

50－１

50－２

報告書抄録

フリガナ	テラウチイセキハンイカクニンチョウサカンレンホウコクショ		
書　　名	寺内遺跡範囲確認調査関連報告書		
副書名			
シリーズ	江南町埋蔵文化財発掘調査報告書	巻　次	13
編著者名	新井　端　　森田安彦		
編集機関	江南町教育委員会		
所在地	〒360-0192　埼玉県大里郡江南町中央１－１		
発行日	2002（平成14）年３月20日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	（°′″）	（°′″）		（㎡）	
テラウチ 寺内遺跡	コウナンマチイタイ 江南町板井	11402	017	35 ° 34'59.1"	139 ° 58'07.5"	19960206～ 19960329	600	範囲確認
ナカジマ 中島遺跡	コウナンマチイタイ 江南町板井	11402	051	35 ° 34'58.2"	139 ° 58'07.1"	19970203～ 19970331	1,000	範囲確認
ナカジマ 中島遺跡	コウナンマチイタイ 江南町板井	11402	051	35 ° 34'59.1"	139 ° 58'13.2"	19981102～ 19981222	600	範囲確認
テンジン 天神遺跡	コウナンマチイタイ 江南町板井	11402	052	36 ° 06'31.6"	139 ° 19'04.0"	20000427～ 20000510	200	個人住宅
テラウチ 寺内遺跡	コウナンマチイタイ 江南町板井	11402	017	36 ° 06'34.9"	139 ° 18'58.4"	20010213～ 20010327	500	範囲確認

所収遺跡	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特記事項
寺内遺跡	散布地 寺院跡 散布地	縄文 平安 近世	道路跡・溝	土器・石器 土師器・須恵器 陶磁器	
中島遺跡	集落跡 散布地	平安 近世	溝	土師器・須恵器	
中島遺跡	集落跡 城館跡 散布地	平安 中世 近世	住居跡 土塁・堀・竪穴状遺構・井戸	土師器・須恵器 陶器・板石塔婆 陶磁器	
天神遺跡	集落跡	古墳	住居跡・溝	土師器・須恵器	
寺内遺跡	散布地 散布地	平安 近世	溝	土師器・須恵器 陶磁器	

江南町埋蔵文化財調査報告書　第13集

寺内遺跡範囲確認調査関連報告書

平成14年3月20日　印刷
平成14年3月20日　発行

発　行　埼玉県大里郡江南町教育委員会
〒360-0192
埼玉県大里郡江南町中央１－１
TEL048-588-0488
印　刷　朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社